愛知県埋蔵文化財センター調査報告書　第194集

加原遺跡（かはらいせき）

２０１５

公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター





加原遺跡 08B 区検 2 遺構面 全景

平成 20 年の加原遺跡全景。上写真は北からみた調査区と連吾川流域の谷平野。天正 3 年（1575）、設楽原合戦の激戦地である。調査区はるか南方には復元された馬防柵があり、織田・徳川連合軍陣地が丘陵東斜面に展開していたことを伝える。遠くかすむ船着山は豊川左岸のランドマークの 1 つである。下写真は調査区枢要部。小谷を埋めて中世の竪穴建物や溝が多数重複している。

加原遺跡



加原遺跡 08B 区検３遺構面全景

検２遺構面（前頁）の下位には、黒色土層を挟んでさらに遺構面が存在する。調査区西部の丘陵東端部には南側から小谷地形が入り込む。この谷地形は平安時代後期の造成によって埋め立てられている。



加原遺跡 08B 区谷地形土層断面

谷地形08B区で検出された谷地形に設定した、東西方向の土層横断面。下から半ばの黒色土層までが自然堆積で、そこから上位の暗褐色土層は埋め立てによる造成層。

序

新城市には、戦国時代の一大決戦が繰り広げられた設楽原合戦場の跡があり、現在は馬防柵が一部復元され、合戦場にちなんだ毎年の祭りも盛況のようです。

本書で報告する加原遺跡は、まさにその合戦場の一角を占めており、連吾川に面したその位置は、織田方の武将が陣を張っていたものと想定されていました。

ところが、実際に埋蔵文化財の発掘調査が開始されると、そこから検出された遺構や遺物は合戦をはるかさかのぼること約 400 年、平安時代から鎌倉時代の集落遺跡だったのです。それは荘園の時代、あるいはさらにさかのぼって設楽郡が建てられた時期に相当するものです。また、三河の中山間部地域で縄文時代に次いで遺跡数が増加することも知られており、それとの関連も注目されています。

本書では、遺跡から多数出土した土師器鍋の胎土分析を実施し、類似する粘土を用いた鍋が東海地域に広く分布していることを確認するとともに、山間部ではこれと違った特徴の一群も見出したことを報告しています。土器の流通について重要なデータが提供できたものと考えております。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行にいたるまで多大なご理解とご協力をいただきました地元新城市大宮地区の皆さまを始めとする関係各位に対し、厚くお礼申し上げますとともに、本書を通じて、遺跡に関する情報が地域の財産になっていくことを祈念いたしたいと思います。

公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団
理事長　伊藤克博

例言

(1)　本書は、愛知県新城市大宮に所在する加原遺跡（県遺跡番号 760282、県埋文遺跡記号 3SKH）の発掘調査報告書である。

(2)　発掘調査は、中日本高速道路株式会社による第二東海自動車横浜名古屋線建設工事に伴う事前調査で、愛知県教育委員会を通じた委託事業として財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター（当時、現：公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター）が実施した。

(3)　発掘調査期間は、平成 20 年 6 月～ 11 月である。

(4)　発掘調査面積は 2,000㎡である。

(5)　発掘調査は、酒井俊彦（調査研究専門員）、永井邦仁（調査研究主任）が担当し、本調査については国際文化財株式会社の支援を受けた。

(6)　発掘調査から報告書刊行までに、以下の諸機関・個人のご協力・ご指導をいただいた。記して感謝申し上げる。

中日本高速道路株式会社豊川工事事務所・愛知県教育委員会生涯学習課文化財保護室・愛知県埋蔵文化財調査センター・新城市教育委員会・新城市文高規格道路課・新城市大宮地区・一宮市教育委員会・稲沢市教育委員会・豊川市教育委員会・豊田市教育委員会・豊橋市文化財センター・静岡県埋蔵文化財センター・富士市立博物館・三重県埋蔵文化財センター・三重県立斎宮歴史博物館・鈴鹿市考古博物館・大垣市教育委員会・岩野見司・岩山欣司・及川司・北村和宏・鈴木元・城ヶ谷和広・新名強・都築暢也・中川律子・贊元洋・西村美幸・平松弘孝・藤村翔・北條献示・松本彩・安井充・山中由紀子・吉田真由美（敬称略、五十音順）

(7)　本書作成のための整理作業は永井が担当し、株式会社文化財サービス、有限会社写真工房・遊、国際文化財株式会社・株式会社パレオ・ラボの協力を得た。なお、石製品の石材鑑定は堀木真美子（調査研究専門員）による。

(8)　整理作業期間は平成 25 年 7 月～平成 26 年 3 月である。

(9)　本書の編集･執筆は主に永井邦仁がおこなったが、一部に堀木、藤根久･米田恭子（株式会社パレオ･ラボ）の執筆もある。

(10)　本書で提示した座標数値は、国土交通省で定められた世界測地系における平面直角座標第Ⅶ系（以下、国土座標Ⅶ系と呼ぶ）に準拠する。海抜表記は東京湾平均海面（T.P.）の数値である。

(11)　本書で提示する土層説明の色調表現は『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修）に準拠した。

(12)　その他の埋蔵文化財にかかわる学術用語については特に断らない限り『発掘調査のてびき』（文化庁）に準拠した。

(13)　遺構一覧および遺物一覧のデータは添付 CD-ROM に収録されている。

(14)　写真や図面などの調査記録は愛知県埋蔵文化財センターで保管している。

〒 498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方 802-24（TEL 0567-67-4161 / E-mail: doki@maibun.com）

(15)　出土遺物は愛知県埋蔵文化財調査センターで保管している。

〒 498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方 802-24（TEL 0567-67-4164）

目次

第１章　調査の概要

第１節　調査に至る経緯と調査工程　1
第２節　加原遺跡をめぐる地理的・歴史的環境　3

第２章　遺構

第１節　基本土層と谷地形　6
第２節　竪穴建物・竪穴状遺構　15
第３節　掘立柱建物　30
第４節　溝など　32

第３章　遺物

第１節　概要　41
第２節　土器・陶磁器と石器　41
第３節　金属製品　56

第４章　自然科学分析

第１節　古代土師器甕の胎土分析と年代測定　58
第２節　山茶碗等付着物の赤外分光分析　79
第３節　赤色顔料と黒色物質の蛍光Ｘ線分析　83

第５章　考察と総括

第１節　加原遺跡における集落景観の変遷　85
第２節　古代末期～中世初頭の土師器鍋　88
第３節　古代設楽郡の設置と荘園時代の開始　92

参考文献　94

写真図版　遺構　95
遺物　108
胎土分析顕微鏡写真　114

抄録　124

図版・表目次

図 1　愛知県および新城市の位置図　1
図 2　加原遺跡の位置図　1
図 3　加原遺跡の調査地点図　2
図 4　新東名高速道路関連の遺跡分布図　2
図 5　加原遺跡周辺の地籍図　3
図 6　長篠・設楽原合戦の織田・徳川軍配置想定図　4
図 7　加原遺跡周辺の遺跡分布図　5
図 8　基本土層断面配置図　6
図 9　基本土層断面図（08A 区西壁）　7
図 10　基本土層断面図（08A 区北壁・南壁）　8
図 11　基本土層断面図（08B 区北壁）　9
図 12　基本土層断面図（08B 区東壁・南壁）　10
図 13　08B 区谷地形 084SX・318SX 平面図　12
図 14　トレンチ 01（南北）・05・07 土層断面図　13
図 15　トレンチ 01（東西）・05・07 土層断面図　14
図 16　08B 区 036SI・037SI・038SI 遺構図　16
図 17　08B 区 039SI・153SD・271SI 遺構図　17
図 18　08B 区 055SI・056SI・057SI・058SI 遺構図　18
図 19　08B 区 059SI・147SI・155SI・173SX 遺構図　19
図 20　08B 区 113SI・114SI 遺構図　20
図 21　08 区 125SI 遺構図　21
図 22　08B 区 188SI・155SI 遺構図　22
図 23　08B 区 264SI・257SD 遺構図　23
図 24　08B 区 271SI・276SI 遺構図　24
図 25　08B 区 302SI・304SI 遺構図　25
図 26　08B 区 303SI・347SI 遺構図　26
図 27　08B 区 316SI・322SI 遺構図　27
図 28　08B 区 335SI・342SI・345SI 遺構図　28
図 29　08B 区 345SI 遺構図　29
図 30　08B 区 掘立柱建物遺構図 (1)　30
図 31　08B 区 掘立柱建物遺構図 (2)　31
図 32　08B 区 検 1 面遺構全体図　34
図 33　08A 区 検 1 面遺構全体図　35
図 34　08B 区 検 2 面遺構全体図（西半部）　36
図 35　08B 区 検 2 面遺構全体図（東半部）　37
図 36　08B 区 検 3 面遺構全体図（西半部）　38
図 37　08B 区 検 3 面遺構全体図（東半部）　39
図 38　08A 区 検 2 面遺構全体図　40
図 39　出土土器・石器実測図（08A 区）　45
図 40　出土土器実測図 (08B 区竪穴状遺構・土坑)　46
図 41　出土土器実測図（08B 区溝・土坑）　47
図 42　出土土器実測図（08B 区溝・谷地形）　48
図 43　出土土器実測図（08B 区谷地形）　49
図 44　出土土器実測図（08B 区谷地形）　50
図 45　出土土器実測図（08B 区谷地形）　51
図 46　出土土器実測図(08B 区土器集積・検 1・検 2)　52
図 47　出土土器実測図(08B 区検 3・表土・トレンチ・壁面)　53
図 48　出土石器実測図（08B 区）　54
図 49　出土石器実測図（08B 区）　55
図 50　出土金属製品と関連遺物実測図（08B 区）　57
図 51　胎土分析土器の実測図（1）　61
図 52　胎土分析土器の実測図（2）　62
図 53　幡豆 - 本宮山地域の地質図　76
図 54　土器付着炭化物と暦年較正結果　78
図 55　付着物の赤外分光スペクトル図　80
図 56　付着物の赤外分光スペクトル図　81
図 57　赤色顔料のスペクトル図（試料 :E-145）　83
図 58　赤色顔料のスペクトル図（試料 :E-351）　84
図 59　黒色物質のスペクトル図（試料 :E-305）　84
図 60　加原遺跡 08B 区谷地形の造成過程　85
図 61　谷地形堆積と造成の各段階区分図　86
図 62　加原遺跡 08B 区主要遺構図　87
図 63　三河型甕と清郷型鍋の口縁分類図　89
図 64　清郷型鍋の谷地形層位別出土分布図 (1)　90
図 65　清郷型鍋の谷地形層位別出土分布図 (2)　91
図 66　新城市・馬場遺跡の遺構・出土土器実測図　93

写真

写真 1　材質分析を行った土器とその付着物　82

表

表 1　出土遺物概要（1）　42
表 2　出土遺物概要（2）　43
表 3　出土遺物概要（3）　44
表 4　胎土分析を行った試料とその詳細（1）　59
表 5　胎土分析を行った試料とその詳細（2）　60
表 6　土器胎土中の微化石類と砂粒組成の特徴（1）　65
表 7　土器胎土中の微化石類と砂粒組成の特徴（2）　66
表 8　土器胎土中の微化石類と砂粒組成の特徴（3）　67
表 9　土器胎土中の微化石類と砂粒組成の特徴（4）　68
表 10　土器胎土中の粘土および砂粒の特徴（1）　69
表 11　土器胎土中の粘土および砂粒の特徴（2）　70
表 12　岩石片の起源と組み合わせ　71
表 13　各土師器の砂粒組成と粘土の種類　75
表 14　測定試料および処理　76
表 15　放射性炭素年代測定および暦年較正の結果　77
表 16　赤外分光分析を行った付着物とその詳細　79
表 17　生漆の赤外吸収位置とその強度　79
表 18　付着物の同定結果　81

第 1 章 調査の概要

第 1 節　調査に至る経緯と調査工程

遺跡の所在　愛知県新城市は、県東部に所在する人口約 4 万 7 千人（平成 26 年度）の市である。その市域は、作手村および鳳来町を平成 17 年（2005）に合併してからは、かつての南設楽郡に相当する範囲となっている。その南設楽郡は、明治 11 年（1878）に北設楽郡と分割されるまでは設楽郡の一部であり、それは延喜 3 年（902）の設置にまでさかのぼる。

加原遺跡の所在地は、平成合併前の旧新城市域北東部の大宮地区にある。同地区は新城市役所から北北東へ約 3.5km に位置する。概ね大宮川と連吾川に挟まれた旧大宮村に相当する。遺跡は、石座神社の北東方向､石座神社遺跡の東隣に位置する。当該地点は､歴史的に著名な天正 3 年（1575）の長篠・設楽原合戦の決戦場ともなった場所の一角でもある。

遺跡の座標位置は北緯 34 度 55 分 37 秒、東経 137 度 31 分 24 秒である。加原遺跡の県遺跡番号は 760282 で、後述するように最近になって存在が確認された遺跡でもある。

第二東海自動車道建設　旧・日本道路公団によって進められていた第二東海自動車道建設の事業は、21 世紀に入って (株）中日本高速道路に引き継がれ、東三河地域でも本格化した。新城市域では雁峰山地を抜け出た後、豊川を渡河して静岡県との県境に至るルートとなったが【図 4】、当該地域には埋蔵文化財が多数存在することもあって、同社は愛知県教育委員会とその扱いを協議してきた。そこで遺跡の存在が考えられる地点に関して同教育委員会が有無確認調査を実施し、しかる後に委託を受けた（財）愛知県教育･スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センターが平成 19 年年度から範囲確認調査を実施して、最終的な発掘調査の範囲を確定していった。



図1　愛知県および新城市の位置



図2　加原遺跡の位置

加原遺跡は、当初（仮称）設楽原決戦場跡儀徳地区として範囲確認調査を実施し、石座神社遺跡から東へ下った丘陵裾部から連吾川の氾濫原までが調査対象範囲（2,000㎡）となった。

発掘調査体制　当センターでは発掘調査の実施にあたって調査支援体制を設けている。今次発掘調査では（株）国際文化財の支援を受けて発掘調査業務を遂行した。その人的構成は以下のとおりである。

埋蔵文化財センター調査担当：
調査研究専門員 酒井俊彦・
調査研究主任 永井邦仁
（株）国際文化財 現場代理人：定水育久
（一級土木施工管理技師）
同調査補助員：石松直（学芸員）

同測量担当：星野賢一（測量士）

同発掘作業員：中野一徹ほか、新城市など在住の約 15 名

発掘調査工程　発掘調査は平成 20 年 6 月 23 日に開始した。調査区は南北にのびる現道を挟んで東に 08A 区、西に 08B 区とした。調査は 08A 区から着手したが、調査区の大半が洪水性堆積によって撹乱を受けていたことから、予想よりも少ない遺構・遺物に止まった。08A 区埋め戻し後、当該地点を排土置き場として 08B 区の調査を開始し、途中 11 月 15 日に地元大宮地区を対象とした現地説明会を開催した。雨天ながら 40 名の見学者があり、遺物を実見いただいて遺跡に関する中間的な評価を提示することができた。08B 区では、調査区の中央に大きな撹乱があったものの多数の竪穴建物や溝が残存しており、加えて谷地形の堆積からは多くの山茶碗や土師器甕が出土した。また遺構面も一部では 2 面あって当初より遺構検出の回数が多くなった。時期も平安〜鎌倉時代が中心であるものの、石器や弥生時代末〜古墳時代前期の土器も出土し、比較的濃密な複合遺跡の様相となった。その後 11 月 27 日に埋め戻しを完了し、加原遺跡における発掘調査を終了した。

室内整理調査工程　発掘調査終了後、諸データの整理と出土遺物の整理および報告書作成業務は平成 25 年度に実施した。遺物の接合・実測・製図業務は（株）文化財サービス（担当：古谷真由美）に委託し、写真撮影は（有）写真工房・遊（金子知久）の協力で実施した。また、加原遺跡や新城市・石岸遺跡をはじめとする東三河地域を中心として、愛知県下ならびに三重県・静岡県・岐阜県内出土の三河型・清郷型土師器甕について各所蔵機関のご協力によって試料を得て、胎土分析と炭素年代測定を（株）パレオ・ラボ（藤根久）に依頼して実施した。この過程で得られた新たなデータを加え、陶器に関して城ヶ谷和広氏（愛知県立旭丘高等学校）の指導を受け、永井が中心となって報告書を執筆・編集した。

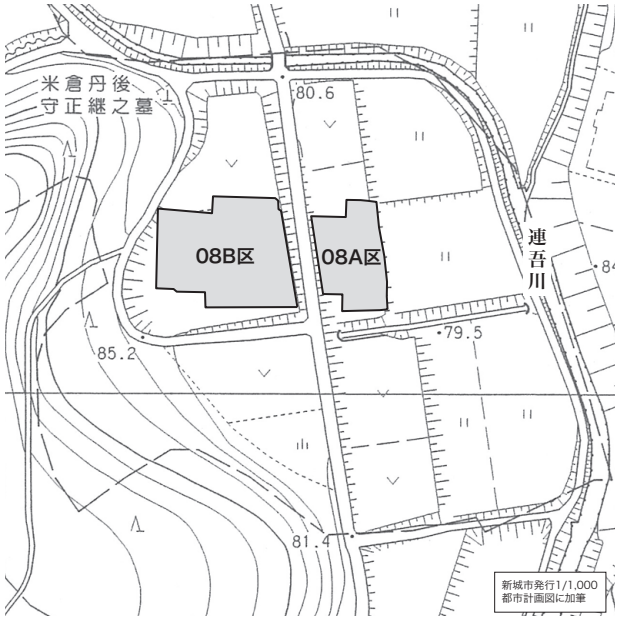


図3　加原遺跡の調査区配置図

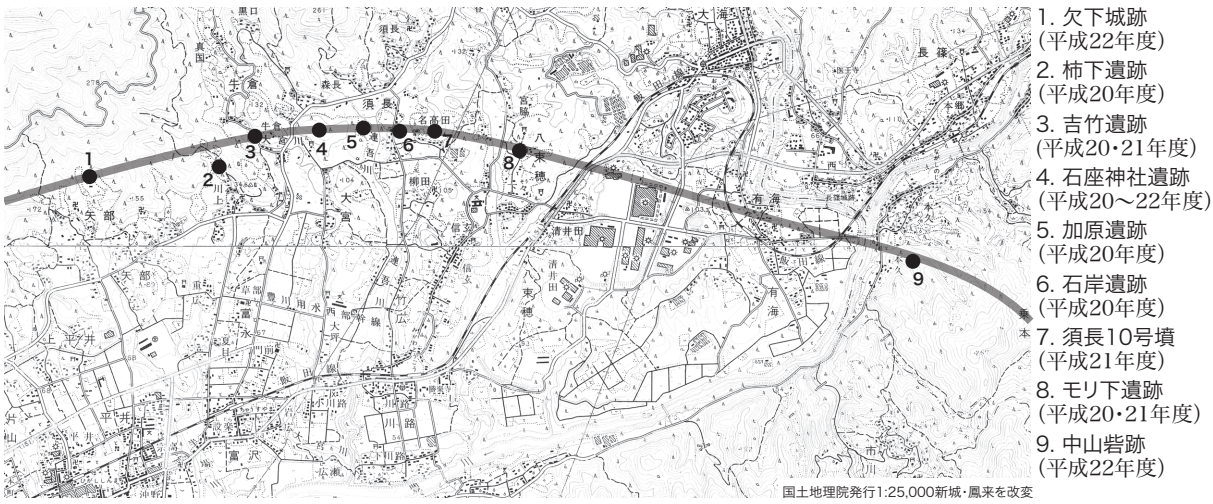


図4　新東名高速道路関連の遺跡位置図

第 2 節　加原遺跡をめぐる地理的・歴史的環境

地理的環境　加原遺跡に東接する連吾川は、雁峰山系から流下する豊川の一支流である。山地・丘陵地から豊川右岸の河岸段丘地帯へ流出した同川は、両岸に中・高位段丘を形成しながらほぼ南に向かって谷を形成する。同川の西方を南流する大宮川も同様であり、両河川によって南北に細長い形状の段丘となっている。段丘は岩盤と粘土主体であり、河川堆積ともども地表面近くは黒ボク化が進行している。

遺跡周辺は、1980 年代以降に広範な耕地整理がなされ、かつて存在した小区画の耕作地はかなり減少している。小さな耕作地はそこが複雑な凹凸のある立地であることの反映なのであるが、さらにさかのぼって遺跡の地形環境も暗示している。そこで (1) 明治時代作成の地籍図と、(2)1970 年代後半の航空写真（国土地理院電子国土 Web）を素材に遺跡周辺の地理的環境を俯瞰してみる。すると、(1) では連吾川流域に小区画の耕作地が多数存在していたことが読み取れる。加原遺跡の地点は大宮村と須長村の村域が鉤の手状にかみ合っており、両者に字賀原（大宮村）と字河原（須長村）がある。さらに南下した八束穂村には字瀬戸川がある。これらは連吾川の氾濫原に相当するものと思われる。次に (1) と (2) を重ねると、興味深いことに当該地域での土地区画はほとんど変化がみられない。そこで (1) に表れない地表面の高低を加えて検討すると、字賀原の中央でカーブする用水路がちょうど崖線に相当していることがわかる。この崖線の高低差は、別の写真［設楽原を守る会 1992］によると約 1m の高低差があり、08B 区相当地点は茶畑や野菜畑になっていた。このことから字賀原の東半部低地は、地籍図作成時点からそう古くない時期まで河道だったと推定され、連吾川は専ら谷地形の底を削り込むようにして流れていたとみられる。しかしながら遺跡の基本土層によれば【第 2 章第 1 節】、用水路西側高位に相当する 08A 区では砂礫の多い河川堆積が確認されており、高位部分にも河道（あるいは洪水）はおよんでいた時期のあったことが判明している。



図5　加原遺跡周辺の明治時代の地籍図

歴史的環境：長篠・設楽原合戦　連吾川流域の歴史的環境で最も特筆されるのは、天正 3 年（1575）の長篠・設楽原合戦である。この合戦は、武田勝頼による長篠城攻めを端緒に、長篠城救援のために出陣した織田信長と徳川家康の連合軍と武田軍が、連吾川を挟んで決戦に及んだものである。織田・徳川軍は馬防柵を構築して武田軍の進撃に対峙したが、合戦図でも表現されているように鉄砲が主戦力になったことでも名高い。現在馬防柵は加原遺跡の南、字宮ノ前付近に再現されているが、合戦図を参照すれば加原遺跡付近まで馬防柵が造られたようにもみえる。また、加原遺跡西側の石座神社遺跡（29）では 5 個の鉄砲玉が出土しており、当該地点まで戦闘地域になっていた可能性は高い。ここから八剣神社付近の徳川家康陣所までの細長い段丘上を占める横並びの陣形は、連吾川とその谷地形を防御線として設定したものであるが、高低差のある北部（字賀原・儀徳）と段丘間に距離があり高低差の少ない南部（字竹広など）では地形が戦闘に及ぼした影響に違いがあったとみられる。

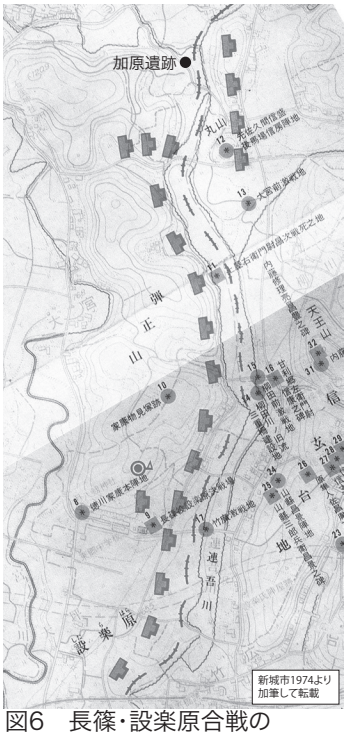


図6　長篠・設楽原合戦の
織田・徳川軍配置想定図

歴史的環境：断上山古墳群など　さて、織田・徳川軍の陣所となった段丘には断上山古墳群がある。中でも 10 号墳は全長約 50m の前方後方形であり、古墳時代前期の地域を代表する首長の墓であったと評価されている。その北側に位置する石座神社遺跡では多数の竪穴建物・棟持柱建物で構成されるこれも当該地域有数の弥生時代後期～古墳時代前期の集落であることが明らかにされた［愛知埋文セ 2015］。古墳時代後期には須長古墳群や茶臼山古墳群があり、ともに 7 世紀代の横穴式石室墳が確認されている［愛知埋文セ 2014 他］。そして奈良時代に入ると、大宮川周辺の神田遺跡（20）や塚田で古代瓦が出土していることから、古墳時代に続いて地域の中枢が存在した可能性が考えられる。また連吾川左岸の石岸遺跡では 6 世紀以降集落が継続し、8 世紀末には造成を伴った総柱の掘立柱建物がある［愛知埋文セ 2015b］。平安時代にかけて積極的な土地開発があったことをうかがわせる。

歴史的環境：設楽郡以降　ところで、新城市域を含む三河国北東部に設楽郡が建郡されたのは、延喜 3 年（903）のことである。それまで当該地域は国府所在郡である宝飫郡域にあったが、設楽郡は設楽・多原・黒瀬・賀茂の 4 郷からなり、加原遺跡などの地域は設楽郷に含まれていたとみられ、郷名から推定して郡の中枢であった可能性が高い。しかしながら当時の国家体制である律令制は衰退過程にあり、奈良時代の建郡とは状況が異なっていたと推測される。文献史料で知られるその後の設楽郡域は、建久 7 年（1196）の京都・松尾神社の文書に「設楽荘」がみえ、その末社である松尾神社はその後中世末まで「富永保」などの荘園名が知られている。遺跡では、八剣神社（広全寺跡）（35）や極楽寺跡（8）で 12 世紀後半、石座神社境内で 13 世紀代の中世瓦が出土しており、荘園の宗教的中枢である寺院や神宮寺が盛んに造立されたことが想像されよう。加えて楠遺跡（32）では多量の平安時代～鎌倉時代の土師器碗・皿が、北下遺跡（17）では、山茶碗や内耳鍋が出土している。さらに豊川近くまで下ると来迎松城跡（22）・川路端城跡（25）などの中世城館も存在し、こちらは特に中世後半になって発達した交通路に沿って展開していることがその位置から推定される。

このように、加原遺跡で主体的に検出された平安時代～鎌倉時代の遺構・遺物は、周辺の遺跡だけでなく文献史料や地名・地籍図といった歴史資料との関連を読み解いていくことによって、より地域史の素材として重要な位置づけが期待されるのである。



1. 欠下城跡　2. 谷下遺跡　3. ハマイバ遺跡　4. 古御堂遺跡　5. 夷城跡　6. 円の平遺跡　7. タイカ遺跡　8. 極楽寺跡　9. 上ノ川遺跡　10. 野辺神社遺跡
11. 東田遺跡　12. 向夏目遺跡　13. 屋川遺跡　14. 柿下遺跡　15. 城山経塚　16. 吉竹遺跡　17. 北下遺跡　18. 類石棒出土地点　19. 松尾遺跡　20. 神田遺跡
21. 増瑞寺屋敷跡　22. 来迎松城跡　23. 大平城跡　24. 川路市場城跡　25. 川路端城跡　26. 岩広城跡　27. 上ノ風呂遺跡　28. 石座神社遺跡　29. 古代瓦出土地点（塚田）
30. 大ノ木遺跡　31. 南貝津遺跡　32. 楠遺跡　33. 断上山10号墳　34. 断上山9号墳　35. 広全寺跡推定地　36.八剣遺跡　37. 馬場遺跡　38. 石岸遺跡　39. 須長10号墳
40. 宮脇遺跡　41. モリ下遺跡　42. 夜燈遺跡　43. 萩平上の段遺跡　44.加生沢遺跡　45. 萩平遺跡　46. 後藤貝津遺跡

図7　加原遺跡周辺の遺跡分布図

第２章 遺構

第１節　基本土層と谷地形

概要　加原遺跡は、丘陵部から連吾川の河川堆積へ移行する地帯に立地している。そのため西側の調査区（08B 区）での基盤層は、風化花崗岩由来の黄褐色～灰白色粘土層が連吾川方向へ落ち込み、その上位を黒褐色粘質シルトが覆っている。さらに東側の調査区（08A 区）は連吾川の旧河道にかかり、不安定な地層となっている。遺構の報告に先立って、本節では遺跡の基本土層について解説するが、各土層断面の位置は下図【図 8】のとおりである。

08A 区の土層と検出面　その 08A 区は 08B 区と幅員 3m の道路と両脇の法面を挟むだけであるが大きく様相が異なる。当該調査区西壁の土層断面図【図 9】によると、その南半部で幅 10m の粗粒砂堆積層 A が溝状に認められ（20・21 層）、北端にも同様の粗粒砂層 B（13・15・16・19 層）がある。それらに挟まれて畦畔状の粘土・シルト層（3・5・8・9・11・22 層）があり、さらにその中央にも溝状の粗粒砂層 C（10 層）がみられる。粗粒砂層 A・B は耕作土直下であることから、比較的新しい時期の河川堆積と考えられ、それは畦畔が機能していた時期でもある。ただしその畦畔自体は粗粒砂層 C を覆う粘土層【図 9 の 3 層】があることから、当初小溝を挟む 2 本だったものを 1 本の大畦畔に作り替えていることがわかる。以上の堆積順から、畦畔下位の粗粒砂層 D（12 層）が上記のいずれにも先行する堆積ということになる。当該層には径 1cm の小礫が含まれることから、洪水性堆積であると考えられる。

調査区北壁土層断面【図 10 上】も同様で、ほぼ全体が小礫含みの粗粒砂層（12 層）であり、当該地点を洪水が押し寄せたことを示している。一方、調査区南壁土層断面【図 10 下】では西端で比較的新しい溝状断面（7・8 層）がある以外は、西から東へ傾斜する粗粒砂と粘土・シルトの互層となっており、おそらくこれが本来の河川堆積の痕跡であり、上部は削平されつつも 08B 区からの傾斜地形に連続するものと考えられる。しかし掘削時の状況からも、当該互層の展開範囲は調査区南西隅に限られると考えられ、調査区大半は上記の洪水性堆積で撹拌されているとみてよいだろう。

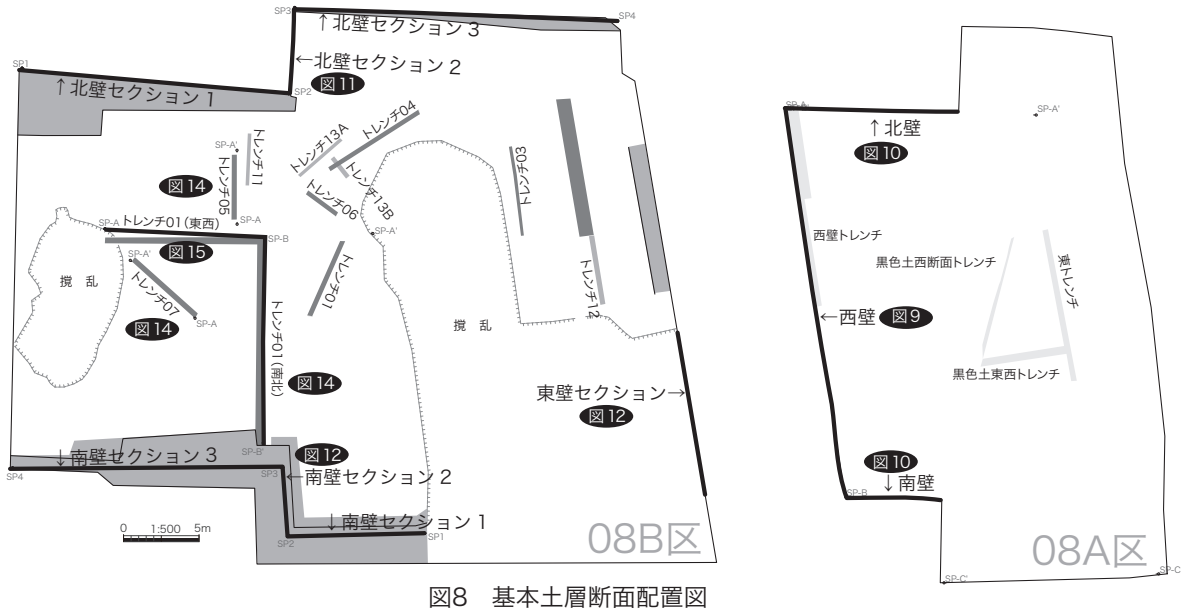


図8　基本土層断面配置図

08A 区の遺構　以上のように 08A 区では各期の洪水性粗粒砂堆積が顕著であり、安定的な遺構検出面がほとんど設定できなかった。粗粒砂層 A・B を除去し、同 D の上位で近時畦畔の一部と調査区東半の一部で黒褐色土の水平堆積（厚さ約 20cm、約 60㎡）を確認した。後者の層からは古墳時代前期を中心とする土師器が出土しており、時期的には比較的まとまっている。そのため、その下位（粗粒砂 D 上面）で遺構検出を実施し、掘立柱建物（1001SB）・土坑・溝状の落ち込みを複数検出した。

08B 区の土層と遺構検出面　08B 区では、調査区西端から東へ約 15m の範囲において、厚さ 20cm の表土直下で基盤の粘土層があらわれたため、その水平な上面で遺構検出を開始した（検 1 面）。結果、近代以降の不定形遺構を数基や溝を検出するにとどまり、この削平がきわめて最近のものであることが判明した。

一方そこから東側では元の傾斜が残存しており、連吾川方向へ下る基盤粘土層に対して黒褐色シルト層が徐々に厚みを増して堆積している。調査区北壁土層断面【図 11】によると、08B 区の東半部では 2 つの遺構面が認められる。表土は 1・6・57 層と耕地整理時の造成層（45 層）が相当し、これらの下位にある黒褐色粘質シルト層（2・28 層）の上面を検 2 面とした。検 3 面は同層下位の黒褐色粘質シルト（11・24・38・40 層）上面である。これらの黒褐色シルト層は粘質が強く、傾斜の緩い皿状を呈する 39 層上面に堆積している。

ところで 39 層では礫が多く混じり、さらにその下位（7・23・41 ～ 44 層）は傾斜が強くなっている。これらは基盤層の風化と流出が繰り返された時期に相当するものである。ここからの出土遺物はなく、形成時期については新城市・吉竹遺跡に

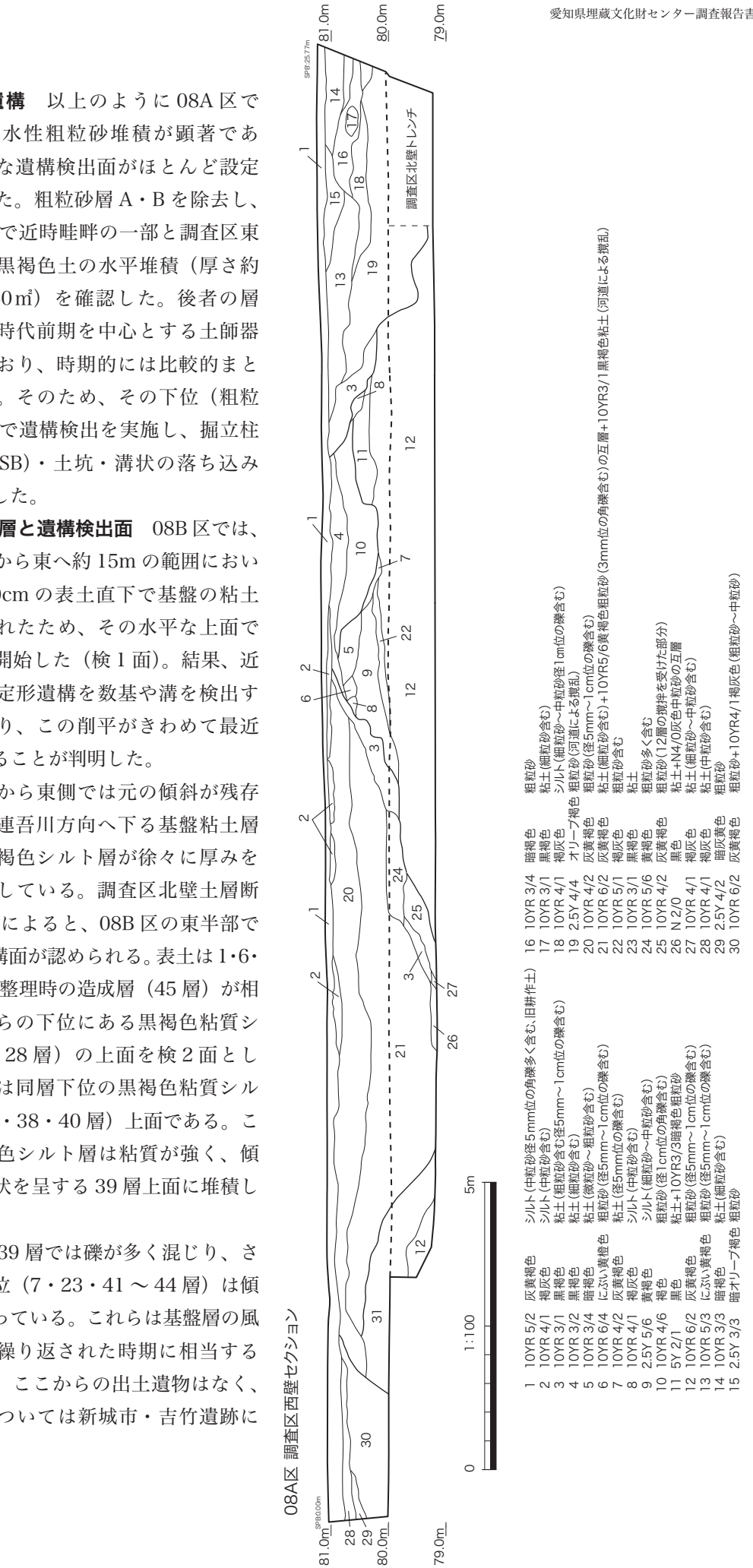
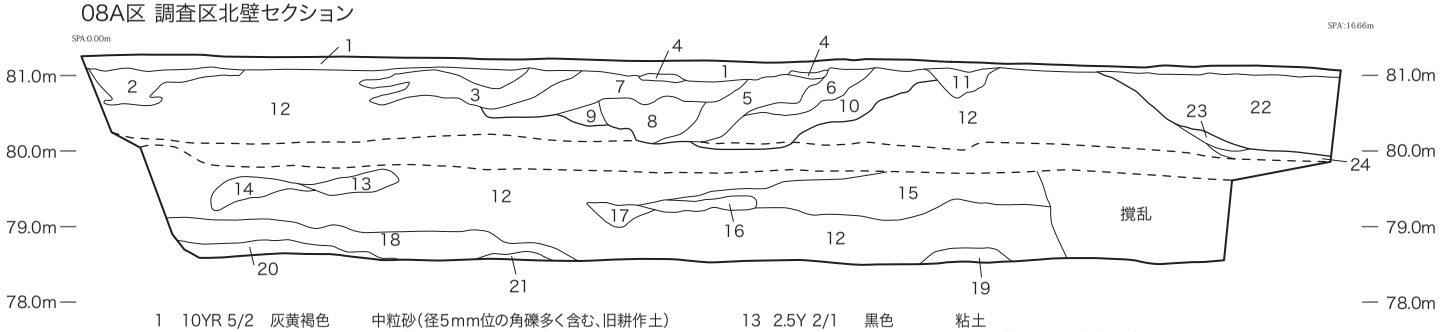


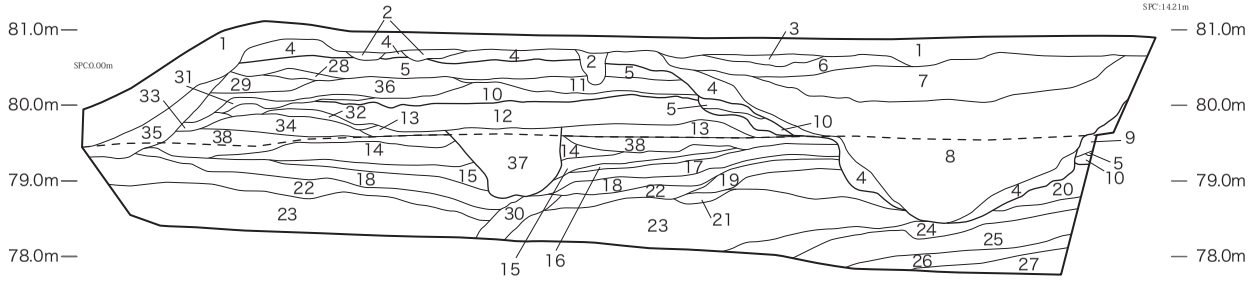
図9　基本土層断面図（08A区西壁）

08A区 調査区北壁セクション



1	10YR 5/2	灰黄褐色	中粒砂(径5mm位の角礫多く含む、旧耕作土)
2	10YR 3/1	黒褐色	粘土(細粒砂～中粒砂含む)
3	10YR 3/4	暗褐色	中粒砂
4	10YR 3/2	黒褐色	粘土(細砂含む)
5	2.5Y 4/4	オリーブ褐色	中粒砂
6	10YR 3/3	暗褐色	細砂(径5mm位の角礫含む)
7	10YR 3/2	黒褐色	細粒砂(径5mm位の角礫含む)
8	7.5YR 4/3	褐色	細粒砂～粗砂(ラミナ状に含む。河道による撹乱)
9	7.5YR 4/4	褐色	細粒砂
10	10YR 3/3	暗褐色	中粒砂(径5mm位角礫含む)
11	10YR 4/2	灰黄褐色	細粒砂～粗砂
12	2.5Y 3/3	暗オリーブ褐色	粗粒砂(径1cm位の角礫含む)
13	2.5Y 2/1	黒色	粘土
14	7.5YR 5/6	明褐色	中粒砂(径2cm位角礫含む)
15	10YR 4/2	灰黄褐色	粘土(10YR6/3 にぶい黄褐色粗粒砂含む)
16	7.5YR 3/1	黒褐色	粘土(細粒砂含む)
17	10YR 5/3	にぶい黄褐色	粘土(細粒砂含む)
18	N 4/0	灰色	粘土(細粒砂含む)
19	7.5YR 4/6	褐色	粗粒砂
20	7.5YR 4/1	褐灰色	粘土(細粒砂含む)
21	7.5YR 4/3	褐色	粘土(細粒砂含む)
22	10YR 2/2	黒褐色	粘土+2.5Y3/3暗オリーブ褐色細粒砂(雲母多く含む、黒褐色粘土と褐色細粒砂の互層がレンズ状堆積)
23	10YR 3/2	黒褐色	粗粒砂(径5mm～1cmの礫多く含む)
24	10YR 4/1	褐灰色	細粒砂

08A区 調査区南壁セクション

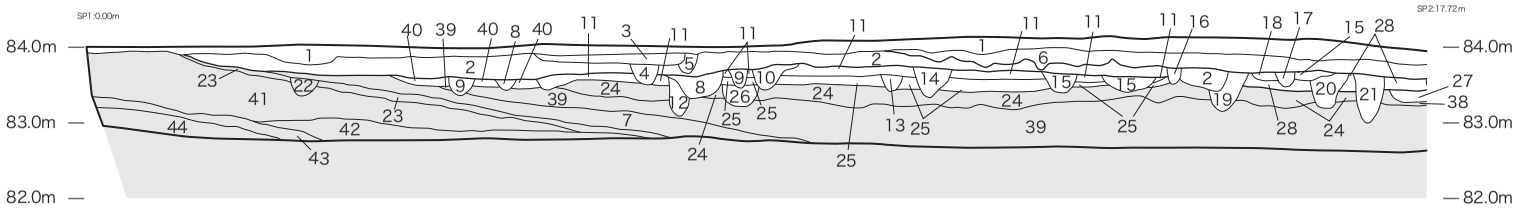


1	10YR 5/2	灰黄褐色	中粒砂(径5mm位の角礫多く含む・旧耕作土)
2	10YR 3/2	黒褐色	シルト(粗粒砂含む、旧耕作土)+10YR4/4褐色砂含む
3	10YR 4/4	褐色	細粒砂
4	10YR 1.7/1	黒色	中粒砂
5	10YR 2/2	黒褐色	粘土(細粒砂含む)
6	10YR 5/2	灰黄褐色	細粒砂
7	10YR 4/2	灰黄褐色	粗粒砂
8	10YR 5/3	にぶい黄褐色	細粒砂
9	2.5Y 4/2	暗灰黄色	粗粒砂
10	10YR 3/4	暗褐色	粗粒砂
11	10YR 3/2	黒褐色	中粒砂～粗砂
12	2.5Y 6/2	灰黄色	粗粒砂(細粒砂混じり、径5mm位の角礫含む)
13	2.5Y 4/4	オリーブ褐色	粗粒砂
14	2.5Y 6/2	灰黄色	粗粒砂
15	2.5Y 5/2	暗灰黄色	中粒砂
16	10YR 6/2	灰黄褐色	粘土
17	10YR 4/3	にぶい黄褐色	粗粒砂(径5mm位の角礫含む)
18	10YR 4/1	褐灰色	粘土(細粒砂含む)
19	10YR 5/6	黄褐色	シルト(細粒砂含む)
20	10YR 6/2	灰黄褐色	中粒砂～粗粒砂
21	10YR 6/3	にぶい黄橙色	中粒砂
22	10YR 5/2	灰黄褐色	中粒砂～粗砂(径5mm位の角礫含む)
23	5Y 5/2	灰オリーブ色	粗粒砂(径5mm位の角礫多く含む)
24	10YR 3/1	黒褐色	粘土(細粒砂含む)
25	5Y 5/2	灰オリーブ色	粗粒砂
26	5B 6/1	青灰色	中粒砂
27	2.5Y 2/1	黒色	粘土
28	10YR 5/2	灰黄褐色	シルト(径5mm位の角礫含む)
29	10YR 5/4	にぶい黄褐色	細粒砂
30	10YR 4/1	灰黄褐色	粗粒砂+10YR6/2灰黄褐色粘土混じる
31	2.5Y 5/4	黄褐色	中粒砂～粗粒砂
32	10YR 5/2	灰黄褐色	細粒砂
33	10YR 5/4	にぶい黄褐色	細粒砂
34	2.5Y 5/3	黄褐色	粗粒砂
35	10YR 4/1	褐灰色	粗粒砂+10YR3/2黒褐色粗粒砂+10YR6/2廃黄褐色粘土のブロック
36	10YR 5/2	灰黄褐色	シルト(径5mm位の角礫含む)
37	2.5Y6/2	灰黄色	極粗粒砂
38	2.5Y5/12	暗灰黄色	中粒砂

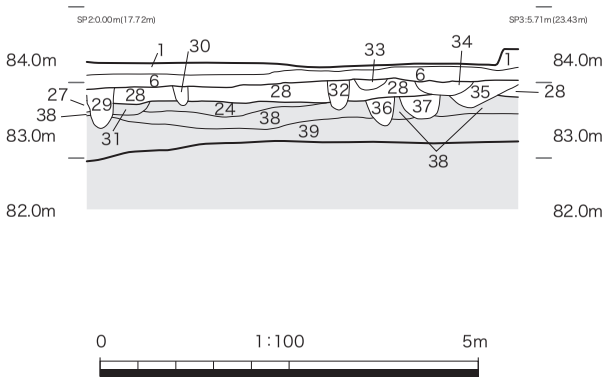


図10 基本土層断面図(08A区北壁・南壁)

調査区北壁セクション1



調査区北壁セクション2



1 10YR 3/2 黒褐色 粘性シルト(細粒砂含む、表土)
2 10YR 3/1 黒褐色 粘性シルト(細粒砂含む)
3 7.5YR 2/1 黒色 粘性シルト(細粒砂含む)
4 7.5YR 3/2 黒褐色 粘性シルト(細粒砂含む)
5 7.5YR 3/1 黒褐色 粘性シルト(細粒砂含む)に、10YR6/6明黄褐色粘性シルト混じる
6 7.5YR 3/3 暗褐色 シルト(細粒砂含み、焼土少量含む)
7 7.5YR 3/2 黒褐色 粘性シルト(微粒砂含む)
8 7.5YR 2/1 黒色 粘性シルト(細粒砂混じる)に、7.5YR5/4にぶい褐色、粘性シルト混じる
9 7.5YR 2/3 極暗褐色 粘性シルト(細粒砂含む)
10 7.5YR 2/1 黒色 粘性シルト(細粒砂含む)
11 7.5YR 3/1 黒褐色 粘性シルト(細粒砂含む)
12 10YR 2/1 黒色粘 性シルト(細粒砂含む)
13 7.5YR 3/2 黒褐色 粘性シルト(微粒砂含む)
14 10YR 2/2 黒褐色 粘性シルト(細粒砂含み、径3mm位の角礫含む)
15 10YR 3/2 黒褐色 粘性シルト(細粒砂含む)
16 10YR 3/2 黒褐色 粘性シルト(細粒砂含む)
17 10YR 2/2 黒褐色 粘性シルト(細粒砂含み、径3mm位の角礫混じる)
18 10YR 2/2 黒褐色 粘性シルト(細粒砂含み、径3mm位の角礫混じる)
19 10YR 2/3 黒褐色 シルト(中砂粒含む)
20 10YR 3/3 暗褐色 シルト(中粒砂含み、径3mm位の角礫混じる)
21 7.5YR 2/2 黒褐色 シルト(中粒砂含み、径3mm位の角礫混じる)
22 10YR 3/2 黒褐色 粘性シルト(細粒砂含む)
23 7.5YR 4/2 灰褐色 粘性シルト(細粒砂含む)
24 7.5YR 3/1 黒褐色 粘性シルト(細粒砂含む)
25 10YR 3/2 黒褐色 粘性シルト(細粒砂含む)
26 7.5YR 3/2 黒褐色 粘性シルト(細粒砂含み、径3mm～5mm位の小礫多く含む)
27 7.5YR 3/2 黒褐色 シルト(細粒砂含み、土器片含む)
28 7.5YR 3/1 黒褐色 粘性シルト(細粒砂含む)
29 7.5YR 3/2 黒褐色 シルト(細粒砂含む)
30 7.5YR 3/1 黒褐色 シルト(細粒砂含み、径2mm位の小礫混じる)
31 7.5YR 3/2 黒褐色 シルト(細粒砂含み、土器片含む)
32 7.5YR 2/2 黒褐色 シルト(細粒砂含み、径3mm～5mm位の角礫含む)
33 7.5YR 3/2 黒褐色 シルト(細粒砂含む)
34 7.5YR 3/1 黒褐色 シルト(細粒砂含む)
35 7.5YR 3/1 黒褐色 シルト(細粒砂含み、径3mm～5mm位の角礫多く含む)
36 10YR 3/2 黒褐色 シルト(細粒砂含み、径3mm位の小礫含む)
37 10YR 3/4 暗褐色 シルト(細粒砂含み、径3mm位の小礫含む)
38 10YR 3/1 黒褐色 シルト(細粒砂含み、径3mm位の小礫含む)
39 10YR 2/1 黒色 粘性シルト(細粒砂含み、径3mm～5mm位の小礫多く含む)
40 7.5YR 3/1 黒褐色 粘性シルト(細粒砂含み、径3mm位の小礫少量含む)
41 10YR 5/4 にぶい黄褐色 粘性シルト(微粒砂含む)
42 7.5YR 5/3 にぶい褐色 粘性シルト(細粒砂含む)
43 7.5YR 4/2 灰褐色 粘性シルト(細粒砂含む)
44 10YR 6/6 明黄褐色 粘性シルト(細粒砂含む)
45 10YR 5/6 黄褐色 シルト(中粒砂多く含み、径5mm位の小礫多く含む。耕地整理の盛土)
46 7.5YR 4/6 褐色 シルト(細粒砂含む)と、10YR5/4にぶい黄褐色シルトと、10YR2/1黒色粘性シルトのブロック土。撹乱)
47 10YR 4/2 灰黄褐色 シルト(細粒砂含む)
48 10YR 3/2 黒褐色 シルト(細粒砂含む)に、10YR5/4にぶい黄褐色シルト混じる
49 10YR 4/2 灰黄褐色 シルト(細粒砂含む)
50 10YR 3/1 黒褐色 シルト(細粒砂含み、径3mm位の角礫混じる)
51 10YR 3/4 暗褐色 シルト(細粒砂含み、径3mm位の小礫混じる)
52 10YR 3/2 黒褐色 シルト(細粒砂含む)(径5mm位の角礫混じる)
53 10YR 2/3 黒褐色 シルト(細粒砂含む)(径3mm～5mm位の小礫混じる)
54 10YR 3/2 黒褐色 シルト(細粒砂含む)(径3mm位の小礫含む)
55 10YR 3/2 黒褐色 シルト(細粒砂含む、径3mm位の角礫混じる)
56 10YR 3/2 黒褐色 シルト(細粒砂含む、径3mm位の角礫混じる)
57 10YR 5/4 にぶい黄褐色 シルト(細粒砂含む)

調査区北壁セクション3

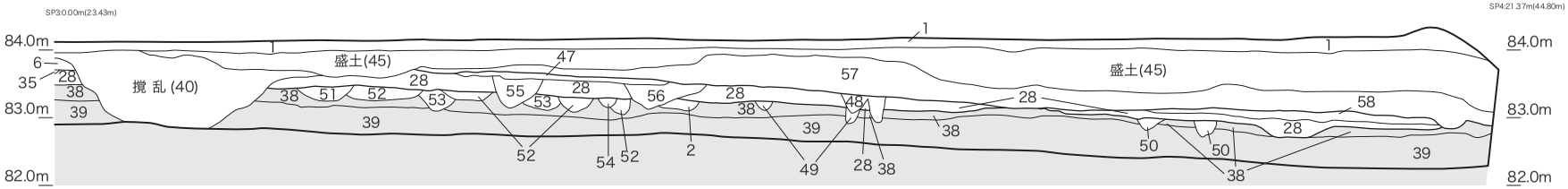
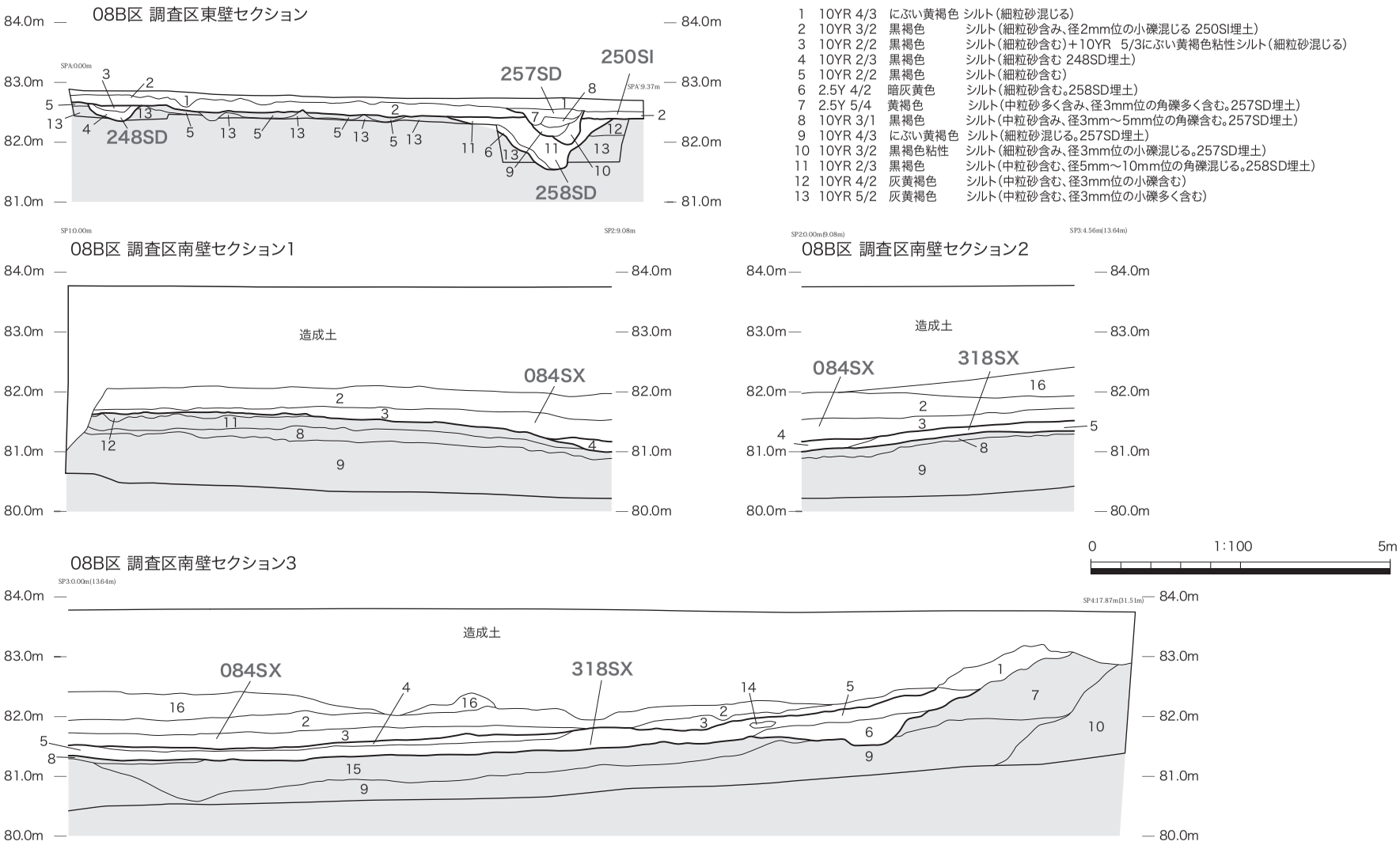


図11　基本土層断面図(08B区調査区北壁)



1	10YR 4/3	にぶい黄褐色	シルト(細粒砂混じる)
2	10YR 3/2	黒褐色	シルト(細粒砂含み、径2mm位の小礫混じる 250SI埋土)
3	10YR 2/2	黒褐色	シルト(細粒砂含む)+10YR 5/3にぶい黄褐色粘性シルト(細粒砂混じる)
4	10YR 2/3	黒褐色	シルト(細粒砂含む 248SD埋土)
5	10YR 2/2	黒褐色	シルト(細粒砂含む)
6	2.5Y 4/2	暗灰黄色	シルト(細粒砂含む。258SD埋土)
7	2.5Y 5/4	黄褐色	シルト(中粒砂多く含み、径3mm位の角礫多く含む。257SD埋土)
8	10YR 3/1	黒褐色	シルト(中粒砂含み、径3mm～5mm位の角礫含む。257SD埋土)
9	10YR 4/3	にぶい黄褐色	シルト(細粒砂混じる。257SD埋土)
10	10YR 3/2	黒褐色粘性	シルト(細粒砂含み、径3mm位の小礫混じる。257SD埋土)
11	10YR 2/3	黒褐色	シルト(中粒砂含む、径5mm～10mm位の角礫混じる。258SD埋土)
12	10YR 4/2	灰黄褐色	シルト(中粒砂含む、径3mm位の小礫含む)
13	10YR 5/2	灰黄褐色	シルト(中粒砂含む、径3mm位の小礫多く含む)

1	7.5YR 5/3	にぶい黄褐色	粘性シルト(径3mm位の小礫含み、こぶし大の円礫混じる)
2	7.5YR 4/3	褐色	粘性シルト(径2mm位の小礫多く含む)
3	7.5YR 3/2	黒褐色	粘性シルト(細粒砂混じり、径2cm位の礫含む 318SX埋土)
4	7.5YR 4/1	褐灰色	粘性シルト(径2mm位の小礫多く含む)
5	10YR 3/4	暗褐色	粘性シルト(細粒砂含み、径2mm位の小礫混じる 318SX埋土)
6	7.5YR 5/3	にぶい黄褐色	粘性シルト(径3mm位の小礫含み、こぶし大の円礫混じる 318SX埋土)
7	10YR 5/8	黄褐色	粘性シルト(径2mm～5mm位の角礫含み、クサリ礫含む)
8	10YR 2/1	黒色	シルト(細粒砂多く含む)
9	10YR 5/6	黄橙色	シルト(中粒砂含む、径5mm位の角礫多く含み、10YR3/2黒褐色粘性シルト混じる)
10	10YR 5/4	にぶい黄褐色	シルト(中粒砂含み、径5mm位の角礫含む)
11	10YR 4/1	褐灰色	粘性シルト(細粒砂多く含み、径2mm位の角礫混じる)
12	10YR 5/3	にぶい黄褐色	粘性シルト(細粒砂混じる)
13	2.5Y 6/2	灰黄色	粘性シルト(細粒砂混じる)
14	10YR 3/2	黒褐色	シルト(中粒砂含み、径2mm～5mm位の角礫含む)
15	7.5YR 2/1	黒色	粘性シルト(中粒砂含み、径2mm～5mm位の角礫含む)
16	2.5Y 4/3	オリーブ褐色	粘性シルト(細粒砂多く含み、径2mm位の角礫多く含む)

図12 基本土層断面図(08B区東壁・南壁)

おける地質構造解析［愛知県埋文セ 2015b］を参照されたい。

また、検 2・3 面とした黒褐色粘質シルト層は、調査区南側に向かっても傾斜しており、155SI・188SI 遺構断面図【図 22】を参照すると、検 2 面の当該遺構の下位にある図 22 の 4 層は遺物を包含し、さらにその下面（検 3 面相当）で遺構（062SK）がみられる。また同図の 7 層はトレンチ 09 の南端へ向かって傾斜しており、これが谷地形 318SX に対応するもので、4 層についても位置関係からその上層部分相当するものとみることができる。318SX は後述するように 12 世紀代の堆積層であるが、この状況から判断すると、検 2 面と検 3 面の間層はこの延長部分と理解するのが自然で、各面の遺構で時期差がほとんどみられない点も符合する。少なくとも谷地形を中心とする 08B 区の西半部は当該時期に広範な造成がなされたと考えられる。

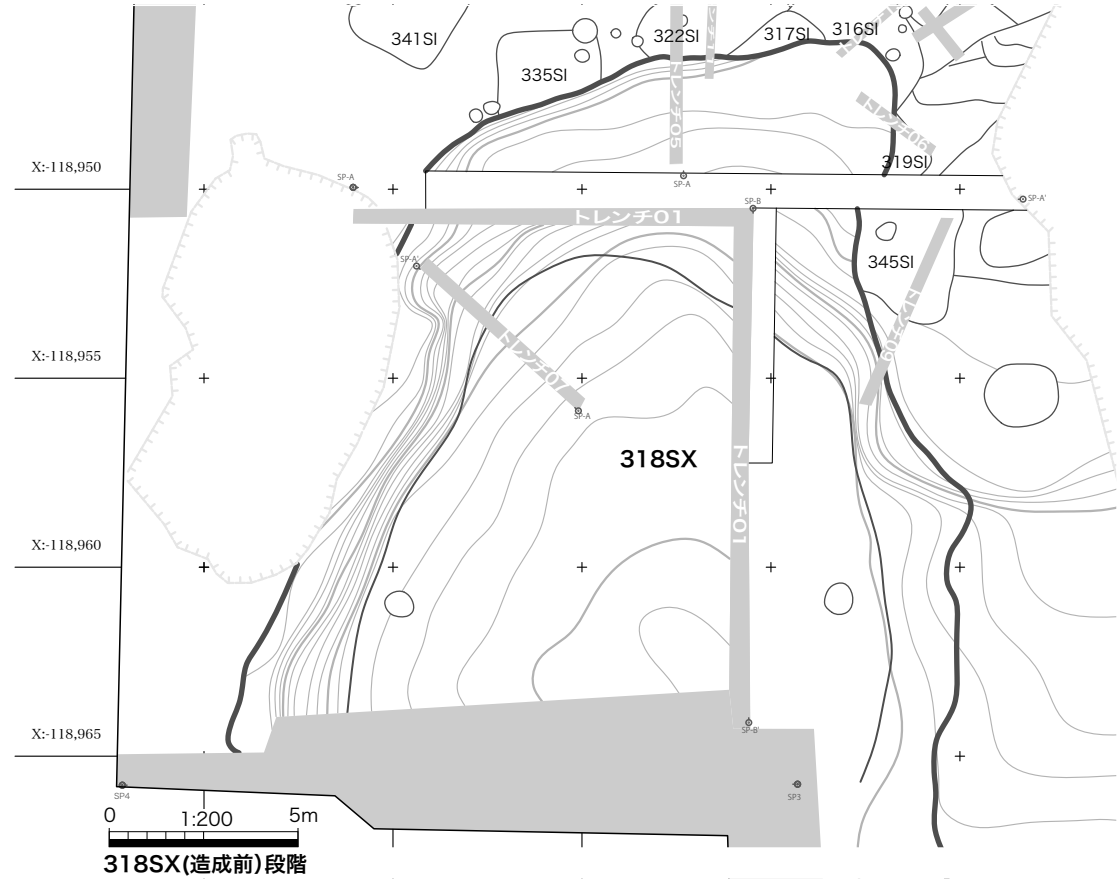
谷地形遺構　08B 区南西部を中心に広がる自然地形およびそれを埋め立て造成した範囲を指す。具体的には、検 2 面で傾斜堆積 084SX とその基底部 170SX、検 3 面で傾斜堆積および埋め立て造成層 318SX、と 2 段階に分けて検出されたもので、巨視的には一連のものといえるが、両者の間に人為的な造成層（切り出しと埋め立て）を挟んでいることから、本書では遺構・遺物の記述にあたっても区分して扱い、検出順（時期的に後の方から）で提示する【図 13】。

084SX　検 2 面において、調査区南部の広範囲を占める堆積層として検出された。その東半部は撹乱によって大きく滅失しているが、南西部では約 100㎡以上が残存している。検出された遺構上端は、調査区南西隅から弧状に北東方向へ進み、トレンチ 01（南北）と交差する付近からは若干南へ振れた東方向へ緩い弧状に延びている。その延長は撹乱で不明であるものの、調査区南東隅方向へ抜けているものと考えられる。上端での標高は 83.0 ～ 83.5m で、そこから擂鉢状に緩い斜面が南側にみられる。斜面の角度は約 12° で、約 5m 下ったあたりで平坦面に達する。発掘調査ではこの平坦面の縁を遺構の下端としているが、概ね上端と平行に延びている。平坦面での標高は 81.4 ～ 81.6m である。

緩斜面では、上端付近で不定形な溝状の段切り遺構（西から 083SX・062SD・072SD）がみられる。これらは 084SX 上端と平行に展開していることや、斜面に対し抉ったような断面形状になっていることから緩斜面形成後の遺構であると考えられるが、トレンチ 01 南北土層断面【図 14】でも明らかなように 084SX がかなり進んでからの掘り込みであることがわかる。一方、やや下位ではやや直線的な暖段切り遺構（161SD）や、擂鉢状地形の東方では、斜面の下方にて竪穴状遺構 2 棟（113SI・114SI）が検出された。これらも斜面を抉って立地しているが、斜面下方に向かって平場を作っており（平面図に示したように下位側に壁面の立ち上がりがない）、この点で前者の段切り遺構とは異なっている。また、161SD は 084SX の堆積層下に位置しており【図 14】、084SX が埋没する以前の遺構であることがあきらかである。土層断面における 084SX と 113SI・114SI の関係は不明であるが、発掘調査でも 084SX 掘削後に平面が検出されまとまった遺物が出土していることは先後関係を示しているといえる。（詳細は後述）。ともあれ、このような居住関連の遺構が斜面下位に存在することから、084SX の段階では集落域が調査区南端にまで達していたことが明らかである。

170SX　084SX を掘削後にその底面を検出した際に調査区南壁近くで確認できた遺構である。東西に 4.6m 南北に 7.8m の長方形である。深さは 6cm と浅く皿状を呈している。084SX と土層の差異はほとんどなく、その一部であるとも考えられるが、直線的な上端があるために別遺構として扱っている。なお、より下層の 318SX との関係では 170SX 西端が若干かかるのみでその先後関係が明瞭であるとは言いがたい。出土遺物は、灰釉陶器、山茶碗、土師器鍋・皿が出土している。

318SX（148SX）　検 2 面検出時に 084SX の北側で溝などに先行する大規模な不明遺構 148SX が検出された。この時点では 084SX との関係を明らかにすることができなかったが、その掘削後検 3 面で検出を行ったところ、148SX とほぼ同一の上端ラインとその延長で構成される谷地形 318SX が検出さ



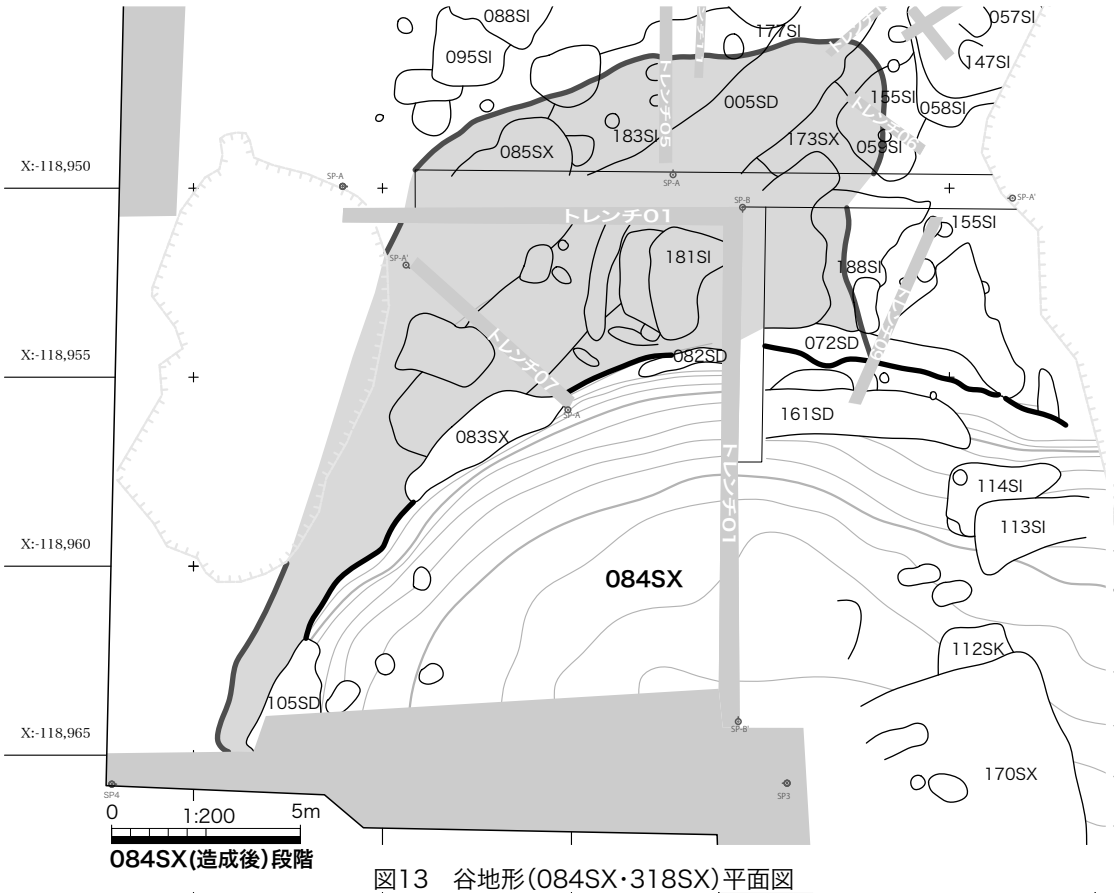
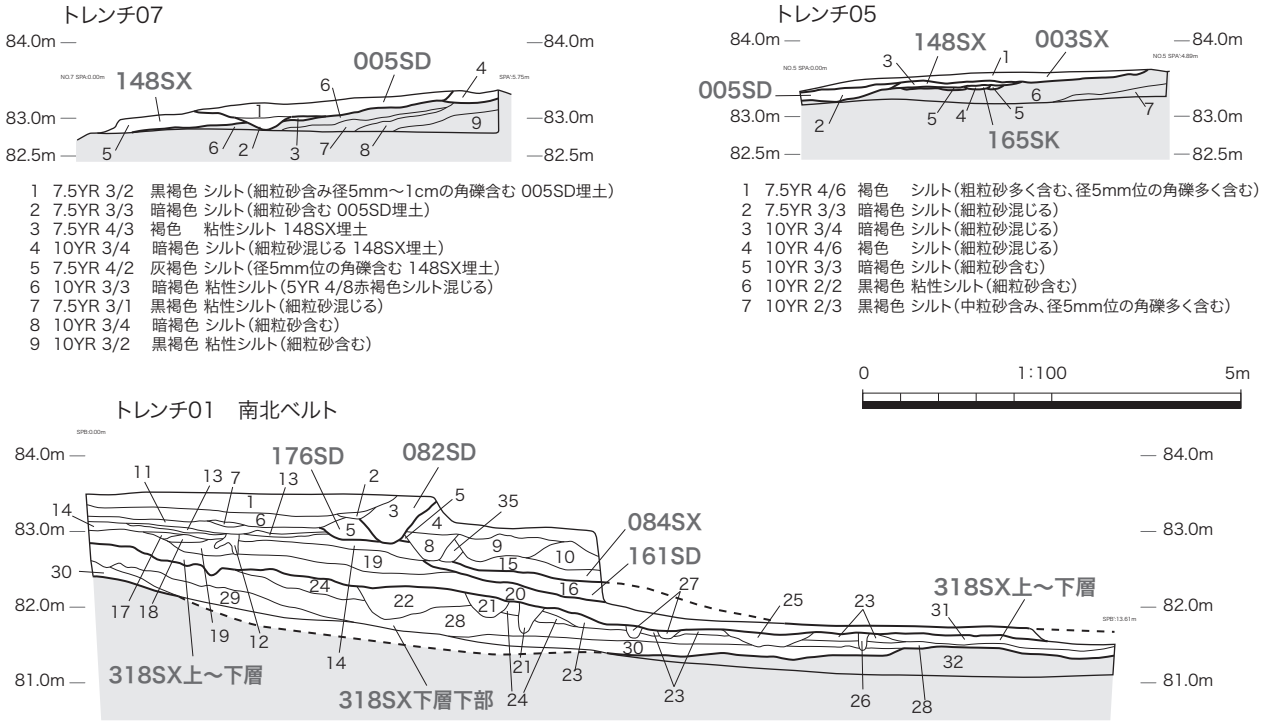


図13　谷地形（084SX・318SX）平面図

れた。具体的にはその西側はより西・北西方向へ拡大する一方、東側では 113SI などが立地する小平場の西側に上端が南北方向に延びている。したがってその形状は 084SX をスケール・ダウンした下層遺構ではなく、全く形状の違うものとなっている。調査区南壁における幅は約 15m で、そこから北へ約 19m の小判形をしている。上端での標高は 82.9m で、擂鉢状に傾斜していった先の調査区南壁付近では平場になっており標高は 81.3m である。ただしこれは発掘調査時の層区分で 318SX 底と呼称した黒褐色～暗オリーブ色粘性シルト層下面での状況である。「318SX 底」層は 10 ～ 11 世紀代の遺物を含むが、当該層より下層は無遺物層であった。発掘調査ではこれをもって遺構 318SX としての谷地形を完掘したことになっているが、自然地形としてはここからさらに黒色・褐灰色などのシルト層（調査区南壁の 8・11・12・15 層）堆積が続き、基盤層が風化した粘土の流れ込みとみられる同壁の 9 層が確認できた最下層がある。これらは調査過程において「地山」としているが、9 層上面の時点で緩い擂鉢状地形が完成したとみてよいであろう。

堆積層は、3 層に大区分された。すなわち（1）318SX 上～下層と（2）318SX 下層下部と（3）318SX 底である【図 14、トレンチ 01 南北ベルト】。

（1）は古代～中世の土器・陶器片や鉄滓などの遺物や焼土・炭化物が多く含まれる黒褐色粘性シルト



トレンチ07
1 7.5YR 3/2 黒褐色 シルト（細粒砂含み径5mm～1cmの角礫含む 005SD埋土）
2 7.5YR 3/3 暗褐色 シルト（細粒砂含む 005SD埋土）
3 7.5YR 4/3 褐色 粘性シルト 148SX埋土
4 10YR 3/4 暗褐色 シルト（細粒砂混じる 148SX埋土）
5 7.5YR 4/2 灰褐色 シルト（径5mm位の角礫含む 148SX埋土）
6 10YR 3/3 暗褐色 粘性シルト（5YR 4/8赤褐色シルト混じる）
7 7.5YR 3/1 黒褐色 粘性シルト（細粒砂混じる）
8 10YR 3/4 暗褐色 シルト（細粒砂含む）
9 10YR 3/2 黒褐色 粘性シルト（細粒砂含む）

トレンチ05
1 7.5YR 4/6 褐色 シルト（粗粒砂多く含む、径5mm位の角礫多く含む）
2 7.5YR 3/3 暗褐色 シルト（細粒砂混じる）
3 10YR 3/4 暗褐色 シルト（細粒砂混じる）
4 10YR 4/6 褐色 シルト（細粒砂混じる）
5 10YR 3/3 暗褐色 シルト（細粒砂含む）
6 10YR 2/2 黒褐色 粘性シルト（細粒砂含む）
7 10YR 2/3 黒褐色 シルト（中粒砂含み、径5mm位の角礫多く含む）

1 7.5YR 6/6 橙色 シルト（中粒砂混じり、径2mm～5mm位の角礫含む）
2 7.5YR 4/3 褐色 シルト（細粒砂含む）
3 7.5YR 4/6 褐色 シルト（中粒砂含む、径2mm～5mm位の角礫含む 082SD埋土）
4 7.5YR 4/6 褐色 シルト（細粒砂混じる）
5 7.5YR 4/4 褐色 シルト（細粒砂混じる。畦畔。下部は176SD）
6 7.5YR 3/3 暗褐色 シルト（径2mm～5mm位の角礫含む）
7 7.5YR 3/3 暗褐色 シルト（径2mm～5mm位の角礫含む、遺物細片含む）
8 7.5YR 4/2 灰褐色 シルト（径5mm位の角礫含む）
9 10YR 3/4 暗褐色 シルト（径2mm位の小礫混じる）
10 10YR 4/4 褐色 シルト（径2mm位の小礫混じる。畦畔）
11 10YR 3/2 黒褐色 シルト（中粒砂含む）
12 10YR 5/4 にぶい黄褐色 粘性シルト（木根・撹乱）
13 10YR 4/3 にぶい黄褐色 シルト（中粒砂混じり、径5mm位の角礫混じる）
14 10YR 2/2 黒褐色 粘性シルト（径3mm～5mmの角礫混じる、遺物含む）
15 10YR 4/4 褐色 シルト（中粒砂混じる）
16 10YR 3/2 黒褐色 粘性シルト（遺物・炭化物少量含む 161SD埋土）
17 10YR 2/3 黒褐色 シルト（遺物含む）
18 10YR 2/3 黒褐色 シルト（遺物含む）
19 10YR 2/2 黒褐色 粘性シルト（径5mm位の角礫を含み、炭化物・土器片少量含む）
20 7.5YR 3/2 黒褐色 粘性シルト（細粒砂混じり、径5mm位の角礫少量含む。土器片混じる）
21 7.5YR 2/2 黒褐色 粘性シルト（径5mm位の角礫含む。土器片少量混じる）
22 7.5YR 2/2 黒褐色 粘性シルト（炭化物少量含む）
23 7.5YR 4/2 灰褐色 粘性シルト（土器片含む、細粒砂）
24 7.5YR 3/1 黒褐色 粘性シルト（土器片含む、細粒砂）+7.5YR4/4褐色シルトブロック（1～3cm）混じる
25 10YR 2/1 黒色 粘性シルト（径2mm位の小礫含む）
26 10YR 3/2 黒褐色 粘性シルト
27 10YR 2/3 黒褐色 粘性シルト（径2mm位の小礫）
28 7.5YR 2/3 極暗褐色 粘性シルト（径2mm～5mmの小礫混じる）+7.5YR4/4褐色シルトブロック（1～3cm）混じる
29 10YR 2/2 黒褐色 粘性シルト（径2mm～5mmの小礫混じる）
30 5Y 2/2 オリーブ黒色 シルト
31 10YR 2/3 黒褐色 粘性シルト
32 10YR 3/2 黒褐色 粘性シルト

図14　08B区 トレンチ01（南北ベルト）・05・07土層断面図

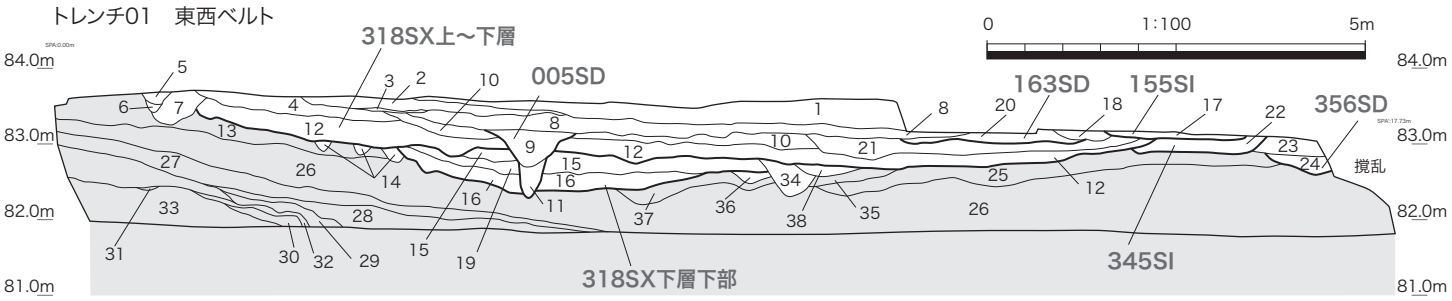
を主体とする。トレンチ 01 東西ベルトのある北側から約 7m までの範囲で特に厚く堆積し含有物が目立つことから、谷の上位より廃棄されたものが累積したものと考えられる。ただしそれも粘性の強い上層（14・19 層）と砂粒が混じる下層（20 層）に区分される。なお、(1) は土層断面では 161SD よりも下位にあることが確認できるが、113SI・114SI と 170SX との関係は、この地点ではみることができない。ただし（1）の落ち込みになる範囲からは外れているので、厳密には先後関係が存在しないことになる。

(2) は (1) と同じく黒褐色粘性シルトを主体としているが、焼土・炭化物の含有は少なく、反対に黄褐色粘性シルトのブロック（径 1 ～ 3cm 大）がひじょうに多く含まれている。このシルトブロックは基盤の粘土層に由来し、それが層中に含まれる要因として基盤層の掘削がなされ、地表面の黒色土とともに流し込まれた状況が考えられる。また、当該層の上面は北端から約 2m 傾斜があってそこから約 3m は平坦になっており、さらにその南側で緩斜面で下った先に平坦面となっている。見かけ上 2 段の小平場ということになる。単なる土砂の流し込みであれば（1）のように全体に傾斜しているはずであるが、一部で層厚が 1m を超えるなど極端な状態がうかがえる。このことから同層は高位側の基盤層切り出しとそれで生じた土砂で谷地形を埋めたてる造成に関わるものと考えることができる。

また造成層とする根拠には同層上位から掘り込まれた土坑（21・25 層など）がみられる点も上げられる。すなわち造成後にしばらく地表面として利用されていた時期があったことを裏付けるものである。しかし確実な地表面相当の層位はみられなかったことから、その後（1）の堆積時には一旦（2）の上部が削平された可能性もある。

(3) は造成直前までの自然堆積状況を示している。オリーブ黒色粘性シルトが主体で若干の遺物が含まれるものの、焼土や地山粘土ブロックなどはない。

以上に関わる遺物の大半は（1）から出土しているが、(3) まで通してみても山茶碗 1b 期［愛知県史編さん委員会 2012］時期に大差はなく、以上の堆積は、概ね 12 世紀代半ばからその後半にかけての時期に形成されたものと考えられる。



1	7.5YR6/6	橙色	シルト（中粒砂混じり、径2mm～5mm位の角礫含む）
2	7.5YR3/2	黒褐色	シルト（細粒砂含む）
3	7.5YR4/3	褐色	シルト
4	7.5YR4/4	褐色	シルト（248SX埋土）
5	7.5YR3/2	黒褐色	シルト（径3mm位の角礫含む、土器片含む）
6	7.5YR2/2	黒褐色	シルト（細粒砂含む）
7	7.5YR2/2	黒褐色	シルト（細粒砂混じり、径5mm位の角礫含む）
8	7.5YR4/3	褐色	シルト（細粒砂含み、土器片・焼土少量含む）
9	7.5YR3/1	黒褐色	シルト（径3mm位の角礫含む。005SD埋土）
10	10YR3/2	黒褐色	シルト（中粒砂含む。下部に炭化物の集積あり、土器片多い、005SDの一部の可能性あり）
11	7.5YR3/1	黒褐色	粘性シルト（細粒砂含む）
12	7.5YR3/2	黒褐色	粘性シルト（細粒砂混じり、径5mm位の角礫少量含む、土器片混じる。318SX上～下層）
13	10YR3/1	黒褐色	シルト（径3mm位の角礫少量含む）
14	7.5YR4/2	灰褐色	粘性シルト（細粒砂混じる）
15	7.5YR3/2	黒褐色	粘性シルト（径2mm位の小礫含み、炭化物・焼土多く含む 318SX下層下部（整地土上層））
16	7.5YR3/2	黒褐色	粘性シルト（細粒砂混じる 318SX下層下部（整地土下層））
17	7.5YR4/1	褐灰色	シルト（細粒砂含む）
18	7.5YR4/2	灰褐色	シルト（中粒砂含み、径3mm位の角礫混じる）
19	7.5YR3/2	黒褐色	シルト（中粒砂混じる 318SX下層下部（整地土上層（2）））
20	7.5YR3/2	黒褐色	シルト（細粒砂含み、径3mm位の角礫混じる。163SD埋土）
21	7.5YR4/2	灰褐色	シルト（細粒砂含み、径3mm位の角礫混じる）
22	10YR3/2	黒褐色	シルト（径3mm位の角礫・灰釉陶器片含む。345SI埋土）
23	10YR3/2	黒褐色	シルト（径3mm位の角礫含み、炭化物混じる）
24	2.5Y3/2	黒褐色	シルト（細粒砂多く含む。356SD埋土）
25	10YR5/4	にぶい黄褐色	粘性シルト（細粒砂含む）
26	2.5Y2/3	暗オリーブ褐色	シルト（中粒砂多く含み、径3mm位の角礫多く含む）
27	10YR3/1	黒褐色	粘性シルト（細粒砂含む）
28	10YR3/2	黒褐色	シルト（中粒砂多く含み、5YR4/3赤褐色粘性シルト含む）
29	7.5YR3/2	黒褐色	シルト（中粒砂含む）
30	10YR5/3	にぶい黄褐色	粘性シルト（細粒砂含む）
31	7.5YR4/1	褐灰色	粘性シルト（中粒砂含む）
32	7.5YR5/2	灰褐色	粘性シルト（細粒砂混じる）
33	10YR6/2	灰黄褐色	シルト（細粒砂含み、径3mm～5mm位の角礫多く含む）
34	10YR2/3	黒褐色	シルト（中粒砂含み、径2mm位の角礫多く含む）
35	7.5YR3/1	黒褐色	粘性シルト（細粒砂含む）
36	7.5YR2/2	黒褐色	粘性シルト（炭化物含む）
37	10YR3/1	黒褐色	シルト（細粒砂含み、径2mm位の小礫含む）
38	7.5YR3/1	黒褐色	粘性シルト（中粒砂混じる）

図15　08B区トレンチ01(東西ベルト)土層断面図

第２節　竪穴建物・竪穴状遺構

概要　本節では、検出された遺構のうち竪穴建物・竪穴状遺構と区分されるものについて解説する。該当する遺構は 43 基あり、全て 08B 区にあって特にその北部の高所に集中する傾向にある。ところで竪穴建物の遺構種別「SI」を付してあるが、大半は数 m 四方の方形で平らな底面を持つ竪穴状遺構と呼称すべきもので、平面規模や内部施設（竈・主柱穴・壁溝）の存在するものだけを個別に竪穴建物と呼んでいる。また遺構の時期については、出土遺物の編年に基づき示すが、灰釉陶器（猿投窯 H-72 号窯期・（百代寺窯期）10 世紀後半～ 11 世紀後半［愛知県史編さん委員会 2010］）までを古代とし、山茶碗（渥美窯Ⅰ a 期、12 世紀前半［愛知県史編さん委員会 2012］）以降を中世としている。

036SI・037・038SI　調査区北東部の検２面で検出された竪穴状遺構である【図 16】。一辺が約 2.5m ～ 3.2m の隅丸方形で 037・038SI はわずかに東西に長くなる。深さは４～ 7cm と浅く、壁面の立ち上がりは緩やかなカーブとなっている。底面がほぼ床面となっていたと推定されるが、そこで柱穴・炉・壁溝ともに検出されていない。遺物は、いずれも遺構でも灰釉陶器の小片が出土しているほか、037SI では山茶碗や土師器甕の口縁が出土している。038SI からは須恵器・中世の土師質土器片が出土している。遺構の重複関係から 036SI・038SI → 037SI の順に造られたものと考えられるが、いずれも遺物から中世前半と判断される。

039SI　調査区北東部の検２面で検出された竪穴状遺構である。036 ～ 038SI と同規模で明確な床面施設や遺物は検出されていない。当該遺構の土層断面図【図 17】によると、直接重複関係にあるのは先行する溝 153SD と後続する形状の不整形な不明遺構 043SX であり、間層（２層）を挟んで検３面の遺構群である 154SK および 271SI が所在する。出土遺物は古墳時代の土師器、古代の灰釉陶器、中世の土師質土器の小片が出土しており、遺構の時期は中世以降と考えられる。

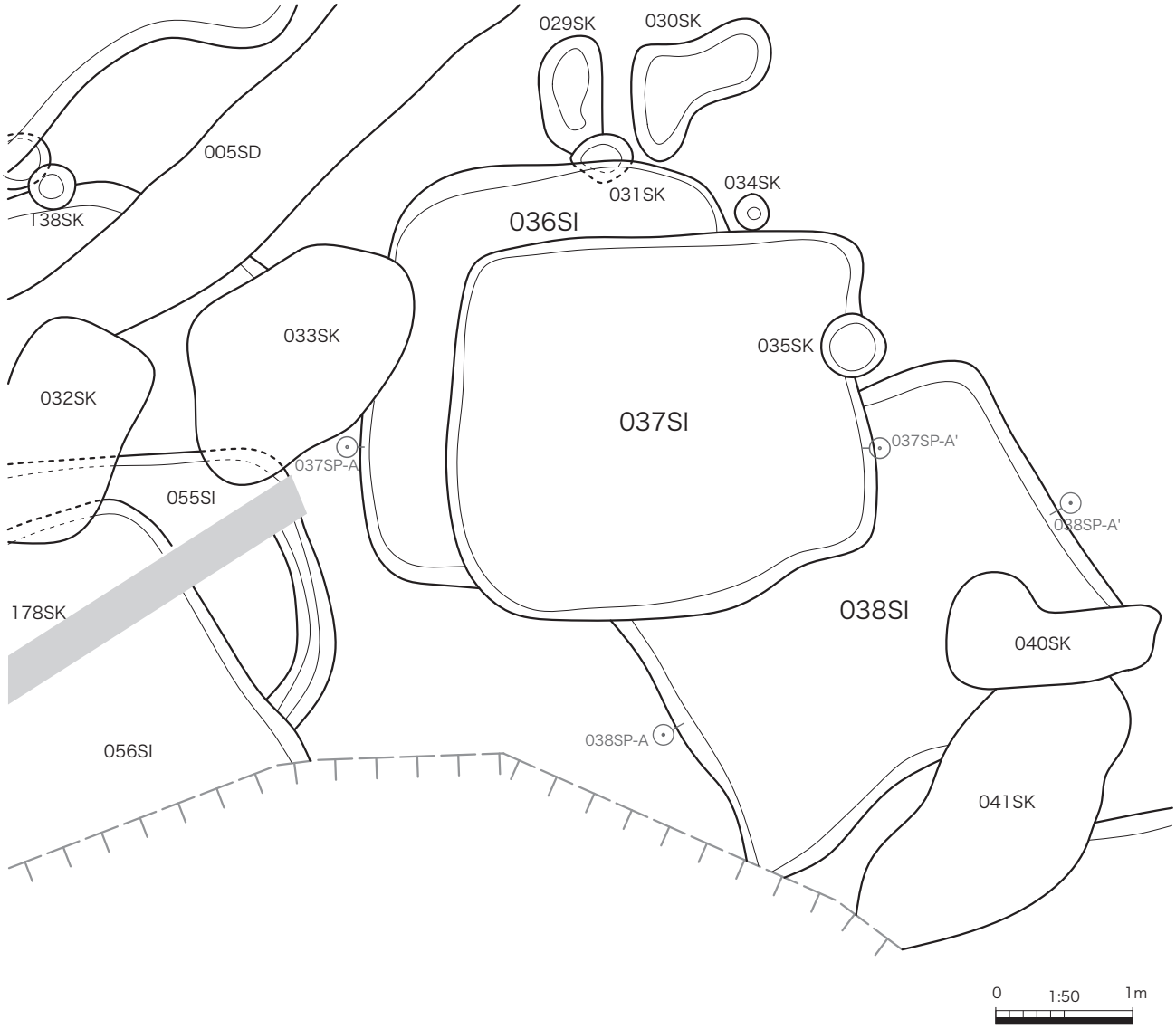
055SI　調査区中央部の検２面で検出された竪穴状遺構である【図 18】。056SI と大きく重複しこれに先行する。長軸 3.3m、短軸 2.2m の長方形になると推定される。壁面の立ち上がりは緩く皿状の断面である。南東側で壁溝とみられる小溝が検出されている。出土遺物は古墳時代初頭の土師器壺口縁があり、他に中世までの土師質土器小片が含まれているので、遺構の時期は中世以降となる。

056SI　055SI と重複しこれに後続する竪穴状遺構である。南側は撹乱で滅失しているが一辺 3.1m の正方形と推定される。土層断面によると壁溝に相当する凹みがみられる。出土遺物は端面の面取りがなされた土錘が出土している。他は古墳時代～中世の土師質土器片と灰釉陶器片が出土しており、遺構の時期は中世以降と考えられる。

057SI　調査区中央部の検２面で検出された竪穴状遺構である。同 056SI の一部と 058SI の大半に重複しこれらに後続する。平面形は一辺 3.1m のやや崩れた正方形である。底面では大小の土坑が検出されているが当該遺構に直接関わるものはなさそうである。出土遺物は山茶碗の小碗がある他は古墳時代から中世の土師質土器片がある。遺構の時期は山茶碗から中世前半と考えられる。

059SI　調査区中央部の検２面で検出された。複数の竪穴建物と重複関係にあり、173SI・155SI → 059SI → 147SI の順に造られている。短軸 2.4m のくずれた長方形をしている。壁面の立ち上がりは緩く皿状の断面をしている。出土遺物は灰釉陶器碗がある。東山 72 号窯期に相当すると考えられる。

113SI・114SI　谷地形 084SX の黒色粘土層下の黒褐色細粒砂層の上面で検出された【図 20】。谷地形 318SX の項でもふれたように、当該遺構は 318SX の埋め立て造成後につくられた可能性が高い。113SI と 114SI は重複関係にあって、114SI → 113SI の順である。ともに南半部が削平されていて全形を知ることができないが、残存する北辺はともに約 3.0m あり、おそらく他の竪穴状遺構に近い規模



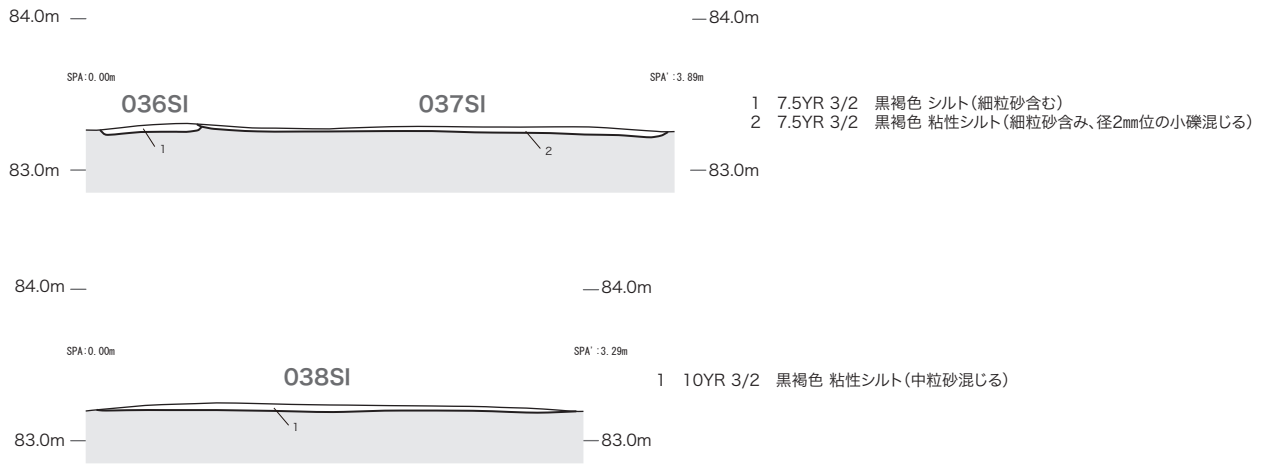
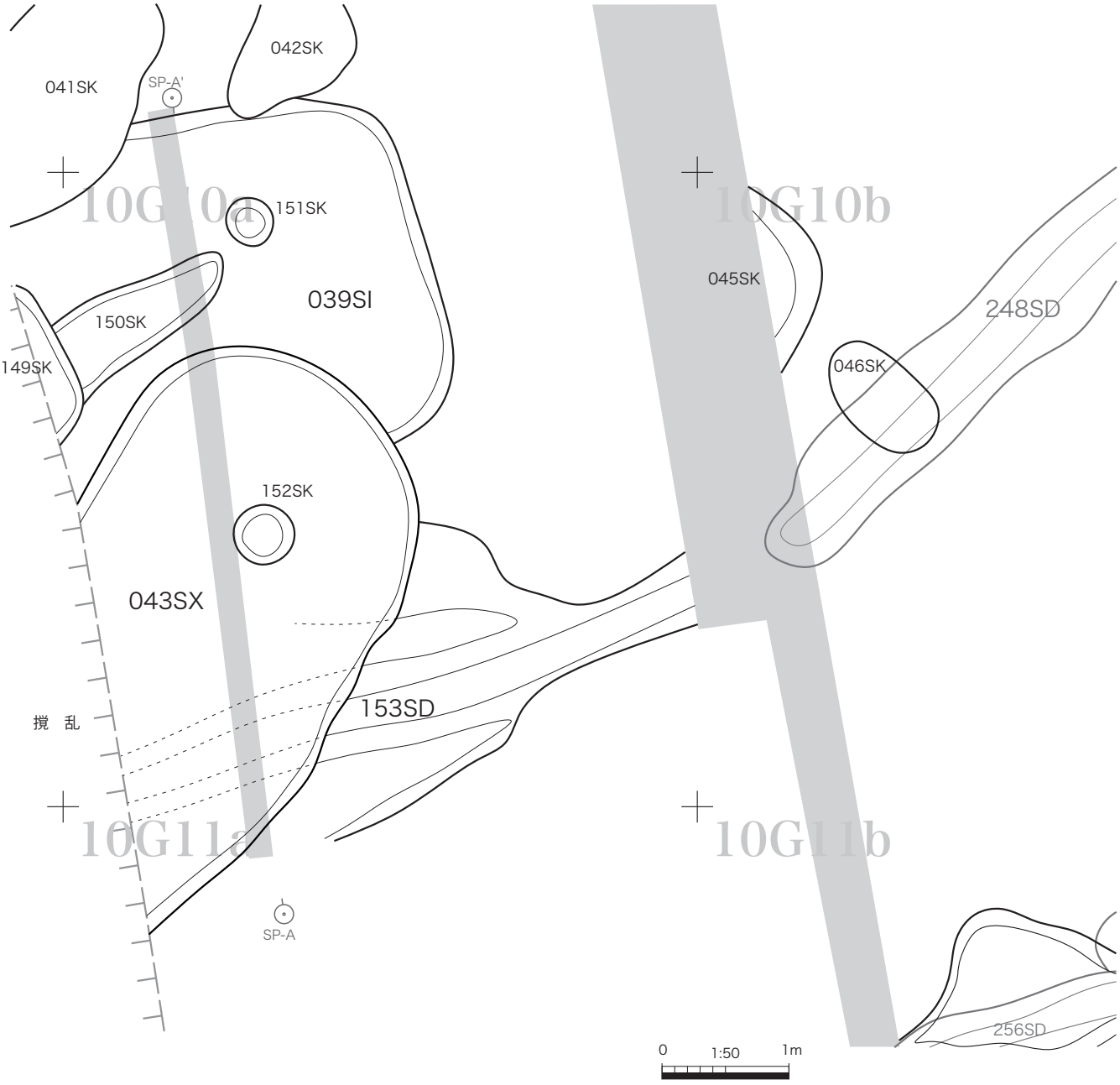
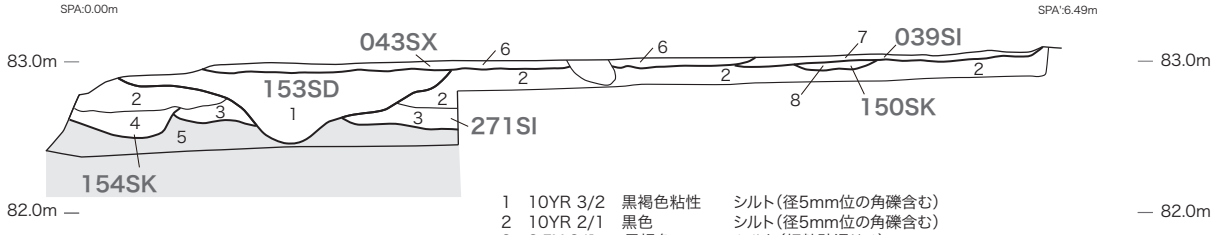


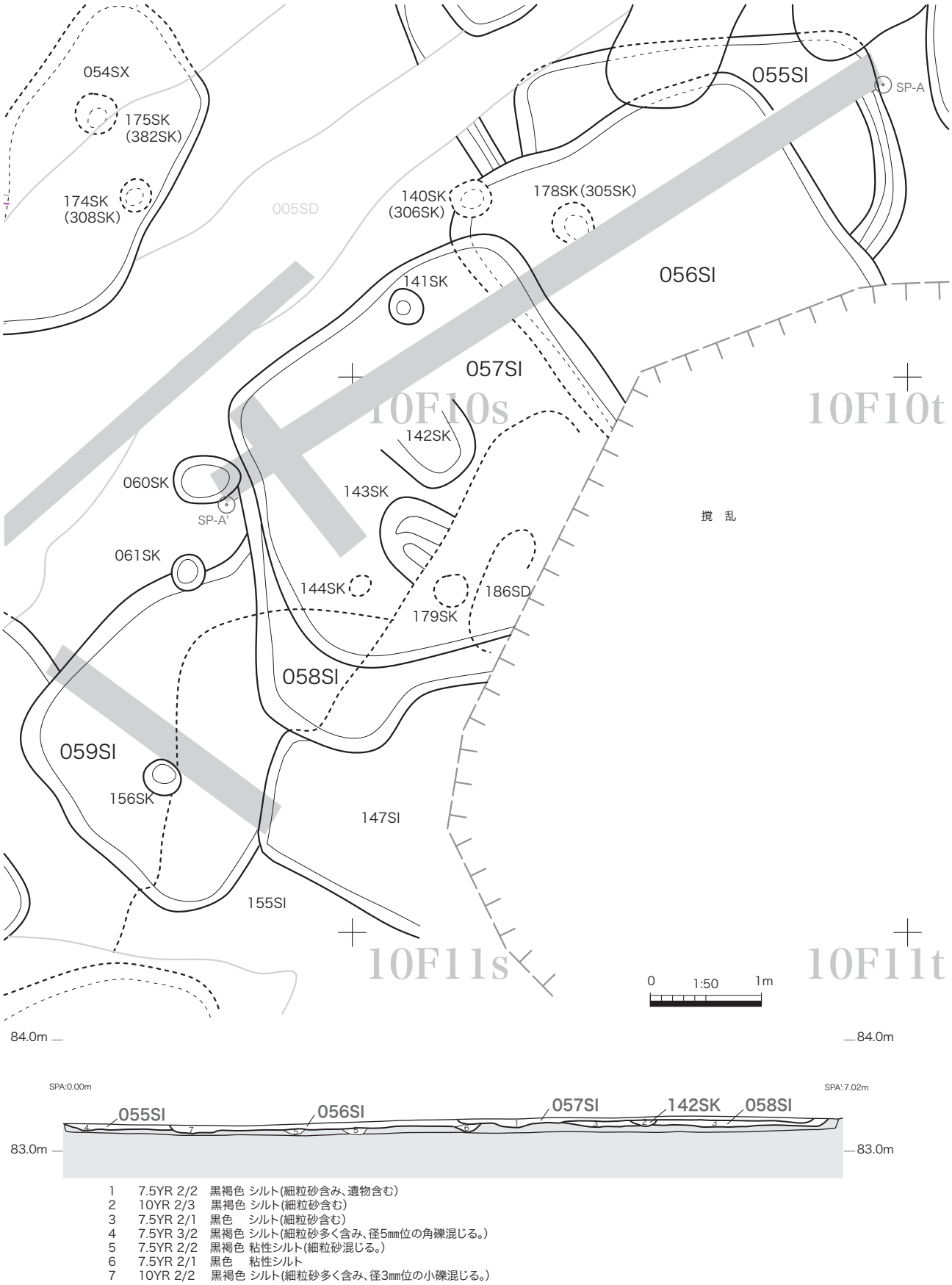
図16　08B区 036SI･037SI･038SI遺構図





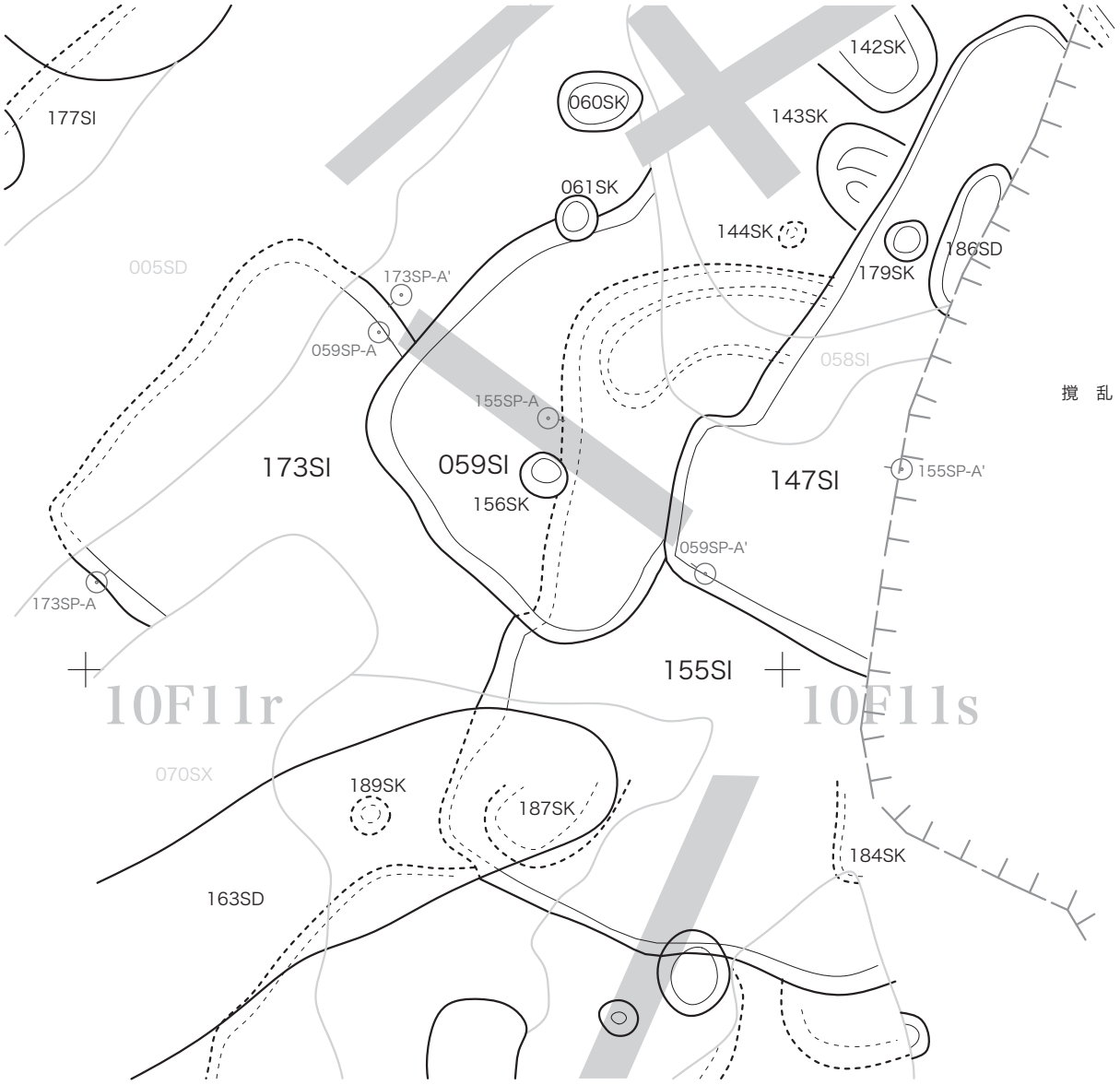
1　10YR 3/2　黒褐色粘性　シルト（径5mm位の角礫含む）
2　10YR 2/1　黒色　シルト（径5mm位の角礫含む）
3　2.5Y 3/1　黒褐色　シルト（細粒砂混じる）
4　10YR 3/4　暗褐色　シルト（中粒砂含む、径5mm位の角礫含む）
5　2.5Y 3/3　暗オリーブ褐色　シルト（中粒砂多く含む、径5mm位の角礫多く含む）
6　7.5YR 2/2　黒褐色粘性　シルト（細粒砂混じり、径5mm位の角礫含む）
7　10YR 4/3　にぶい黄褐色　シルト（細粒砂混じり、径5mm位の角礫含む）
8　7.5YR 2/2　黒褐色　シルト（中粒砂含む）

図17　08B区 039SI・271SI・153SD遺構図



1　7.5YR 2/2　黒褐色 シルト(細粒砂含み、遺物含む)
2　10YR 2/3　黒褐色 シルト(細粒砂含む)
3　7.5YR 2/1　黒色　シルト(細粒砂含む)
4　7.5YR 3/2　黒褐色 シルト(細粒砂多く含み、径5㎜位の角礫混じる。)
5　7.5YR 2/2　黒褐色 粘性シルト(細粒砂混じる。)
6　7.5YR 2/1　黒色　粘性シルト
7　10YR 2/2　黒褐色 シルト(細粒砂多く含み、径3㎜位の小礫混じる。)

図18　08B区 055SI・056SI・057SI・058SI遺構図



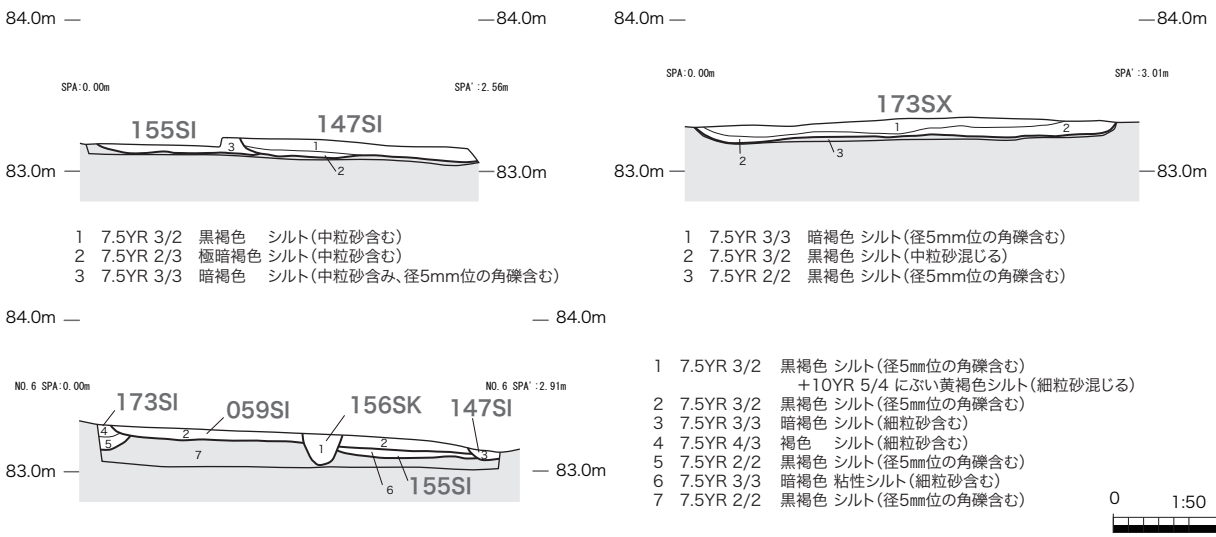


図19　08B区 059SI･147SI･155SI･173SX遺構図

であると推測される。北辺上端からの深さは 113SI で 36cm あり、斜面にかかる分他の竪穴状遺構より深くなっている。そして 113Si ではその下端で壁溝と考えられる小溝が東西方向に延びている。一方 114SI では該当する溝はなく、北西隅で直径約 40cm の小土坑が検出されたのみである。出土遺物はともに古代から中世の土師器片が主体であるが、113SI では埋土が比較的残存していた分、山茶碗と土師器鍋がやや大きめの破片で出土した。山茶碗は 1b 期に相当し、12 世紀後半代と考えられる。

125SI　調査区北東部の検 2 面で検出された竪穴建物である。溝 004SD・005SD や竪穴状遺構 055SI・056SI などと重複し、いずれの遺構にも先行する。したがって大部分を削平されているため残存状況は良くない。しかしながら北辺を中心に検出することができた。北西辺長は 3.6m で、平面形は隅丸方形になると考えられる。一方、幾度か検出を試みたものの南辺は検出できず、規模が正方形に近いものであるならば055SI東側あたりにくるものと想定される。壁溝は西辺の一部で検出できたものの、全周している可能性は低い。壁面の立ち上がりは緩く、土層断面では皿状となっている。

北辺では加原遺跡で唯一の造り付け竈の痕跡を確認することができた。それは 004SD の下位にあって著しく削平されていたが、壁面から約 60cm 突出する竈の煙道に相当する部分が残っており、その範囲では焼土や竈の構築材と考えられる黄褐色土のブロックが多く含まれている【写真図版 7】。これ以外に竈の袖部分などの凹凸は検出できなかったが、竈の可能性がきわめて高い。

出土遺物は古代の須恵器・土師器と灰釉陶器である。灰釉陶器（E-46・47）は O-53 号窯期～ H-72 号窯期に相当する。E-48 は山茶碗の底部で、12 世紀代以降となる。当該遺物だけが中世に下る可能性

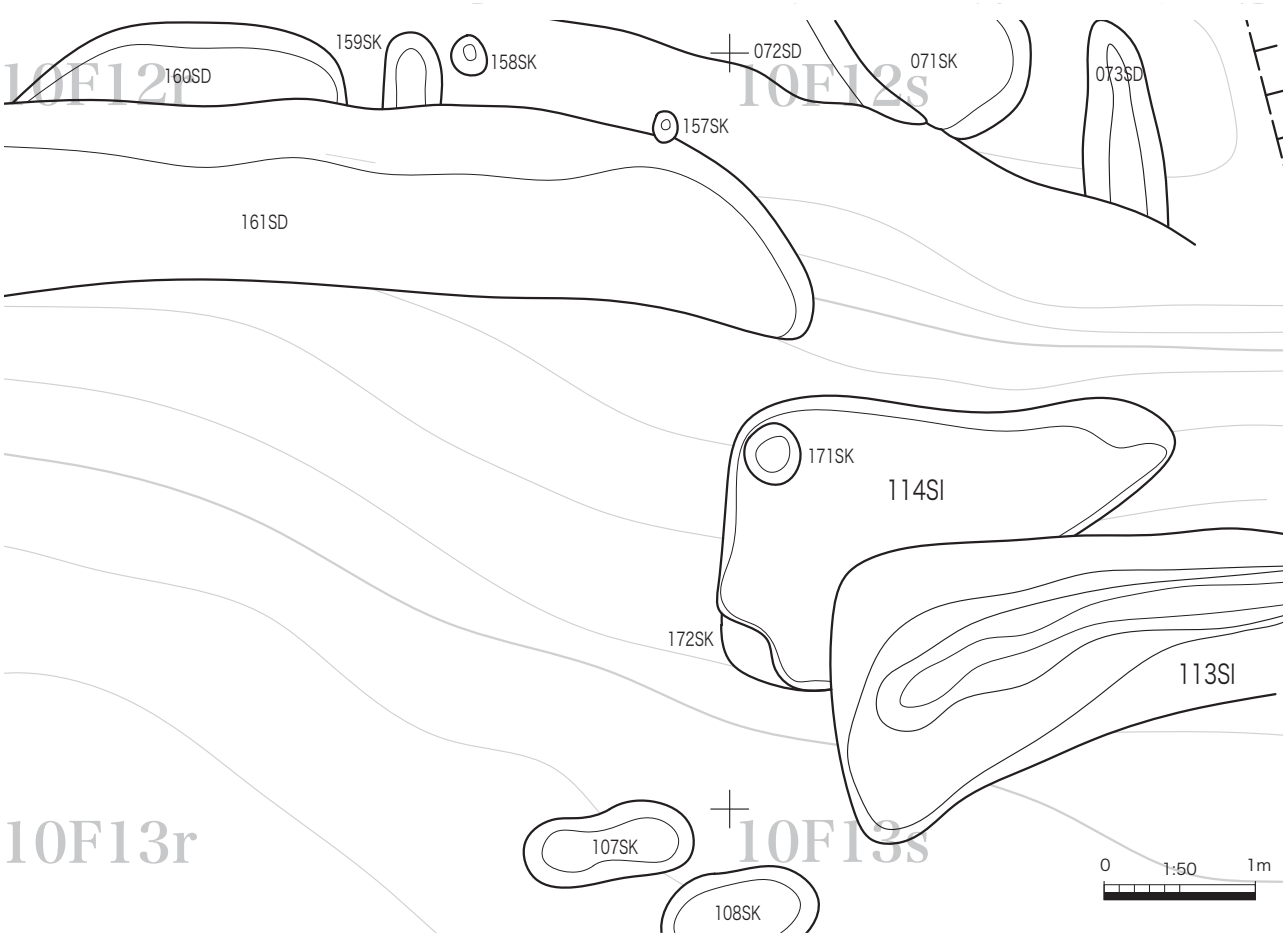


図20　08B区 113SI･114SI遺構図

が高く、遺構の状況から混入の可能性も考えられるが、検２面で検出できた事実と合わせると竈がありながら 12 世紀代まで下るものとみる。

147SI　東半部は撹乱で滅失しているが南北 4.7m の長軸となる長方形と推定される【図 19】。059SI や 155SI などと重複し、155SI → 059SI → 147SI の順に造られている。147SI の底面は水平であるが付属施設は検出されなかった。出土遺物は灰釉陶器の碗（E-51）と白磁に似た厚い口縁の山茶碗の小碗（E-49）がある。灰釉陶器は東山 72 号窯期と推定されるが、他にも山茶碗片が含まれているため、遺構の時期は 11 世紀後半以降となる。

155SI　059SI・147SI と重複し、これに先行する。切り合い関係にあるため形状が崩れているが南北 4.8m の長軸となる長方形となる。壁面の立ち上がりは緩く皿状の断面である。北壁付近に幅広溝状の落ち込み認められ、掘り方になるものと考えられる。それ以外に底面で施設は検出されなかった。

173SI　調査区中央部の検２面で検出された。059SI と重複しこれに先行する。南東側は残存していないが、一辺 2.9m の正方形になると推定される。壁面の立ち上がりは緩く皿状の断面である。出土遺物は灰釉陶器と山茶碗があり、東山 72 号窯期～渥美窯 1 期に相当する。

188SI　調査区中央部の検２面で検出された。155SI とわずかに重複し、これに先行する。形状は切り合い関係があるため崩れた長方形となっている。底面はほぼ水平で、付属施設は検出されなかった。出土遺物は灰釉陶器と山茶碗があり、百代寺窯期から渥美窯 1 期に相当する。

263SI・264SI　調査区東部の検２面で検出された【図 23】。東西方向の溝 258SD に先行すする 264SI の南側に重複して 263SI がある。いずれも一辺 2.7m 以上の隅丸方形と推定されるが全形は不明である。底面で付属施設は検出されなかった。出土遺物は 264SI で土師器壺の胴部片があるが、他に中世までの土師質土器片が含まれているので、遺構の時期は中世以降となる。

271SI・272SI　調査区北東部の検３面で検出された、複数の竪穴状遺構が重複している。築造順序

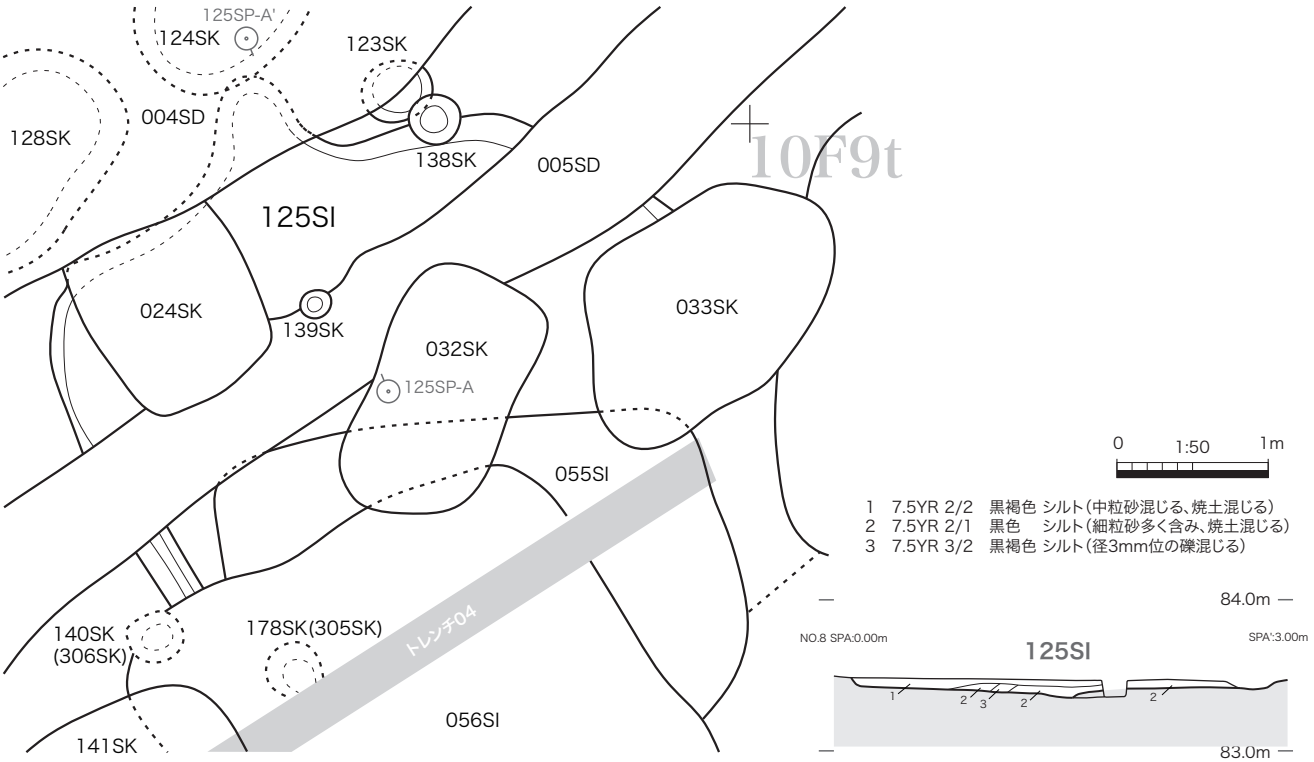
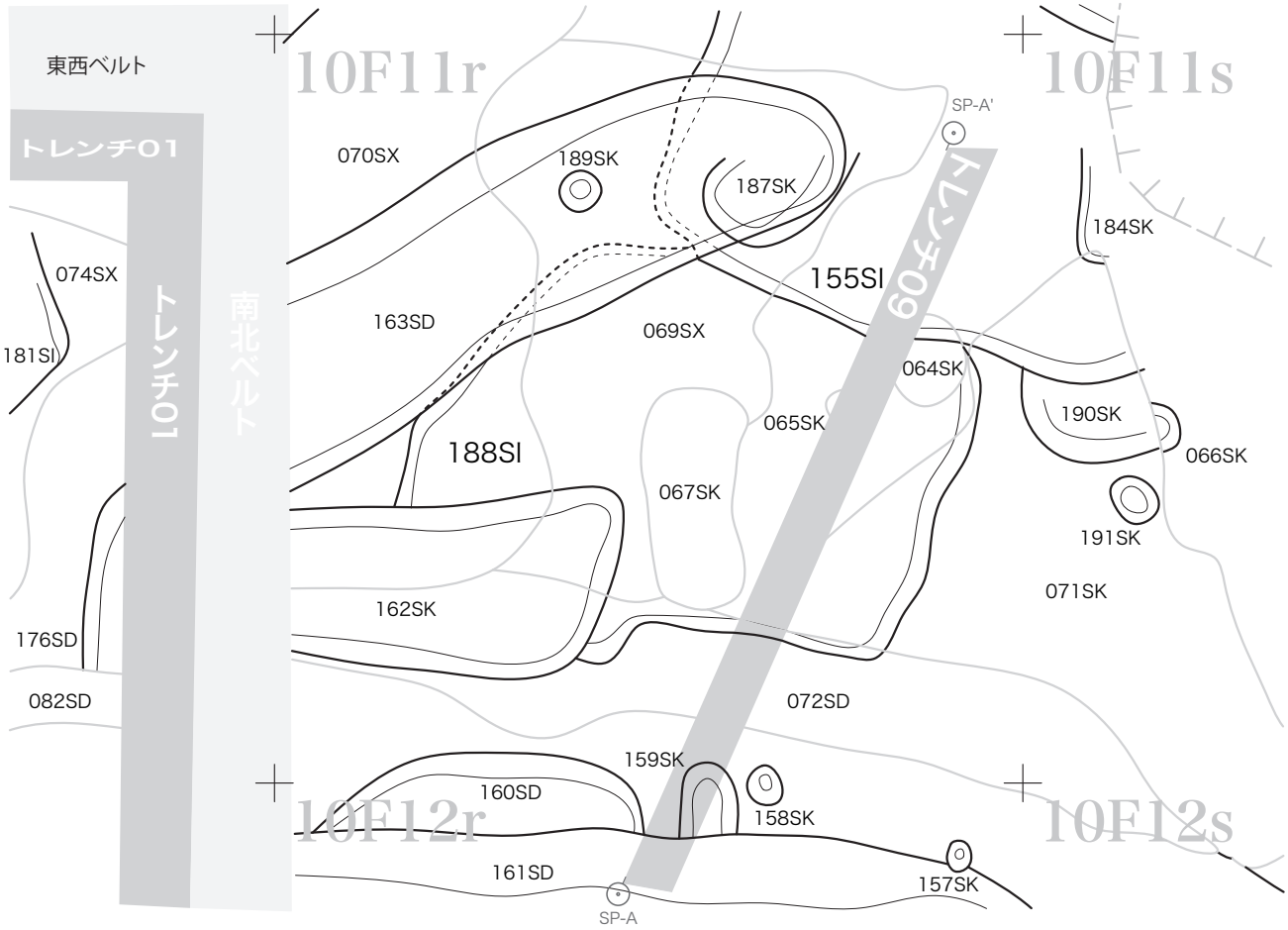


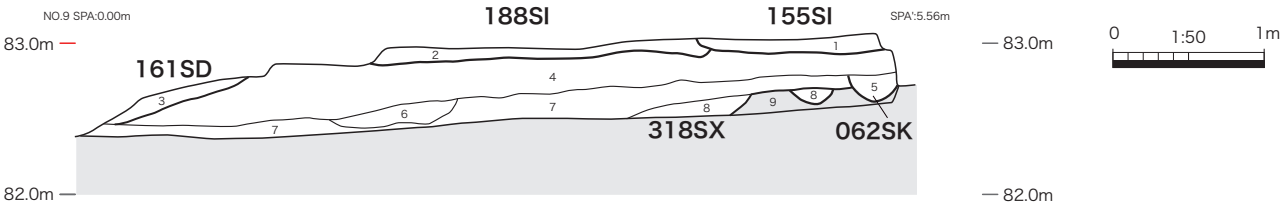
図21　08B区 125SI遺構図

は 271SI → 272SI → 277SI → 276SI となる。うち 271SI と 272SI は撹乱などで滅失した部分も多く形状も不明瞭である。さらにもう 1 棟分の重複があったのかもしれない。壁面の立ち上がりは緩く皿状の断面をしている。底面で付属施設の検出はない。271SI からは古代土師器甕の小片が出土している。

276SI・277SI　271SI・272SI に後続する竪穴建物である。277SI は 276SI に先行する。276SI はほぼ全形が検出されており、北東から南西に若干長軸となる 3.6m×3.0m の長方形である壁面の立ち上がりは緩く皿状の断面をしている。底面で付属施設は検出されなかった。顕著な出土遺物はなく時期不詳である。277SI はごくわずかに検出され、276SI と若干規模が異なる竪穴状遺構である。こちらも出土遺物はなかった。

302SI・304SI　調査区北東部の検 3 面で検出された。ともに 303SI と重複関係にあるが、302SI が同遺構を明瞭に切り込んでいるのに対し、304SI は不明瞭なうえそもそも全形が確定的ではない。一方



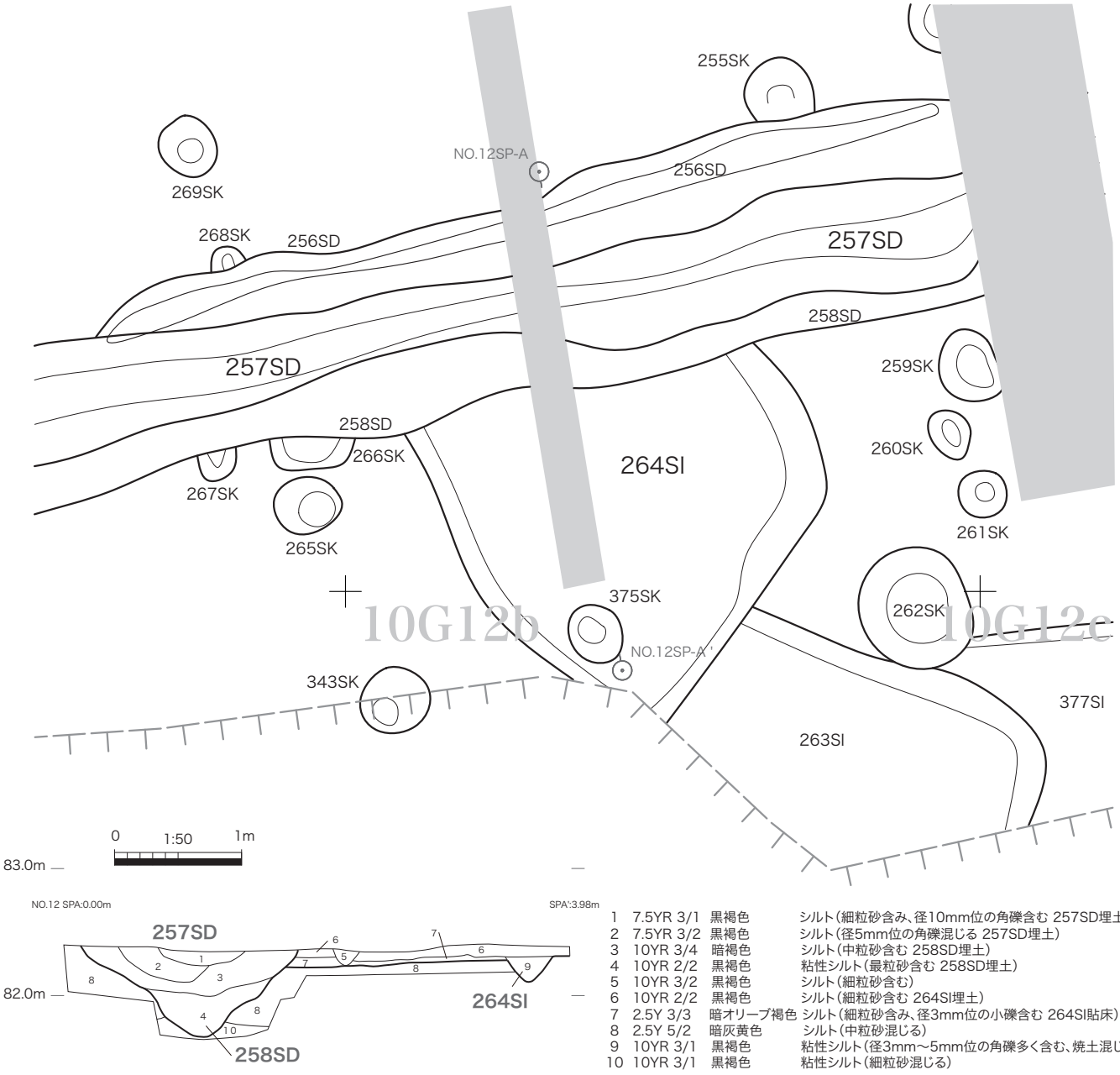


1	7.5YR 3/2	黒褐色	シルト（中粒砂含み、径5mm位の角礫混じる 155SI埋土）		
2	7.5YR 3/3	暗褐色	シルト（中粒砂含み、径5mm位の角礫混じる 188SI埋土）		
3	10YR 3/3	暗褐色	シルト（中粒砂含み、径5mm位の角礫混じる）		
4	7.5YR 3/2	黒褐色	シルト（中粒砂多く含み、径5mm位の角礫混じる 遺物含む）		
5	7.5YR 3/1	黒褐色	シルト（中粒砂含み、径5mm位の角礫混じる）		
6	10YR 2/3	黒褐色	シルト（細粒砂含む）		
7	10YR 3/1	黒褐色	シルト（細粒砂含む）		
8	2.5Y 3/3	暗オリーブ褐色	シルト（中粒砂含み、径5mm位の角礫多く混じる）		
9	2.5Y 3/2	黒褐色	シルト（細粒砂含み、径5mm位の角礫混じる）		

図22　08B区 188SI･155SI遺構図

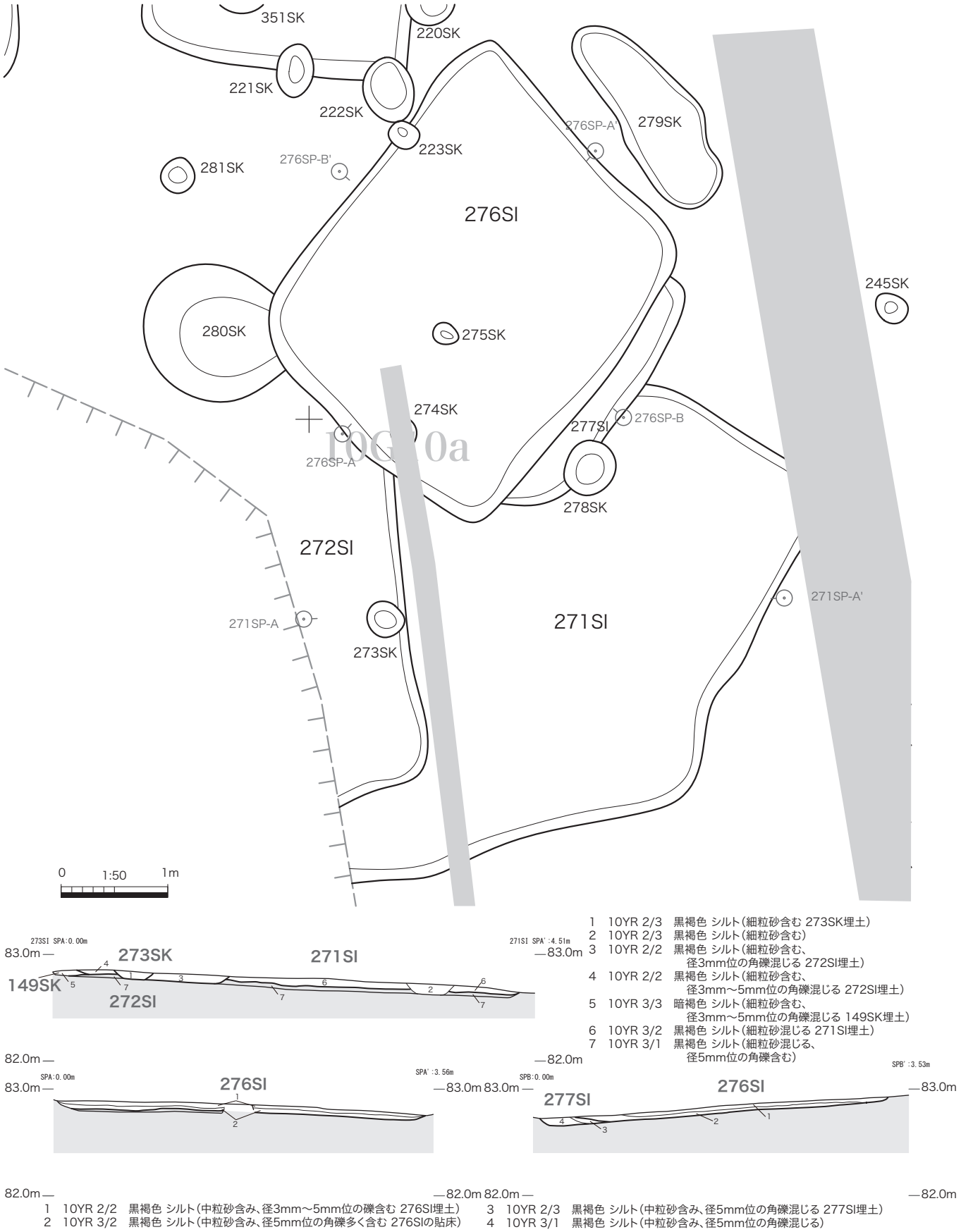
302SI は、2.2m の東辺のみが隅が確認できそれ以外は不整形であり竪穴建物とするにはやや疑問があろう。なお深さは 15cm であり、303SI も 1 層を切り込んでいるため平安時代以降と考えられる。さて 304SI は一辺約 5.2m 以上もある大型建物の平面形としているが、その規模は 303SI も凌駕している。深さは 10cm である。出土遺物は初期段階の伊勢型鍋口縁があるが、遺構の先後関係からすると問題が生じる。調査時は同一と判断したものの、西隅中心の部分と東隅の部分が別の建物である可能性が高いといえよう。

303SI　調査区北東部の検 3 面で検出された。本調査区ではもっとも明瞭に細部が観察できた事例である。南西隅で 302SI と一部重複しこれに先行する。平面形はやや台形に近い隅丸正方形で、北辺 4.4m に対し東辺 4.4m、西辺 5.2m である。検出面からの深さは最深で 30cm である。以上の規模は加原遺跡中でも最大級であり、集落内で主要な施設であった可能性が高い。土層断面によると、床面は



1	7.5YR 3/1	黒褐色	シルト（細粒砂含み、径10mm位の角礫含む 257SD埋土）
2	7.5YR 3/2	黒褐色	シルト（径5mm位の角礫混じる 257SD埋土）
3	10YR 3/4	暗褐色	シルト（中粒砂含む 258SD埋土）
4	10YR 2/2	黒褐色	粘性シルト（最粒砂含む 258SD埋土）
5	10YR 3/2	黒褐色	シルト（細粒砂含む）
6	10YR 2/2	黒褐色	シルト（細粒砂含む 264SI埋土）
7	2.5Y 3/3	暗オリーブ褐色	シルト（細粒砂含み、径3mm位の小礫含む 264SI貼床）
8	2.5Y 5/2	暗灰黄色	シルト（中粒砂混じる）
9	10YR 3/1	黒褐色	粘性シルト（径3mm～5mm位の角礫多く含む、焼土混じる）
10	10YR 3/1	黒褐色	粘性シルト（細粒砂混じる）

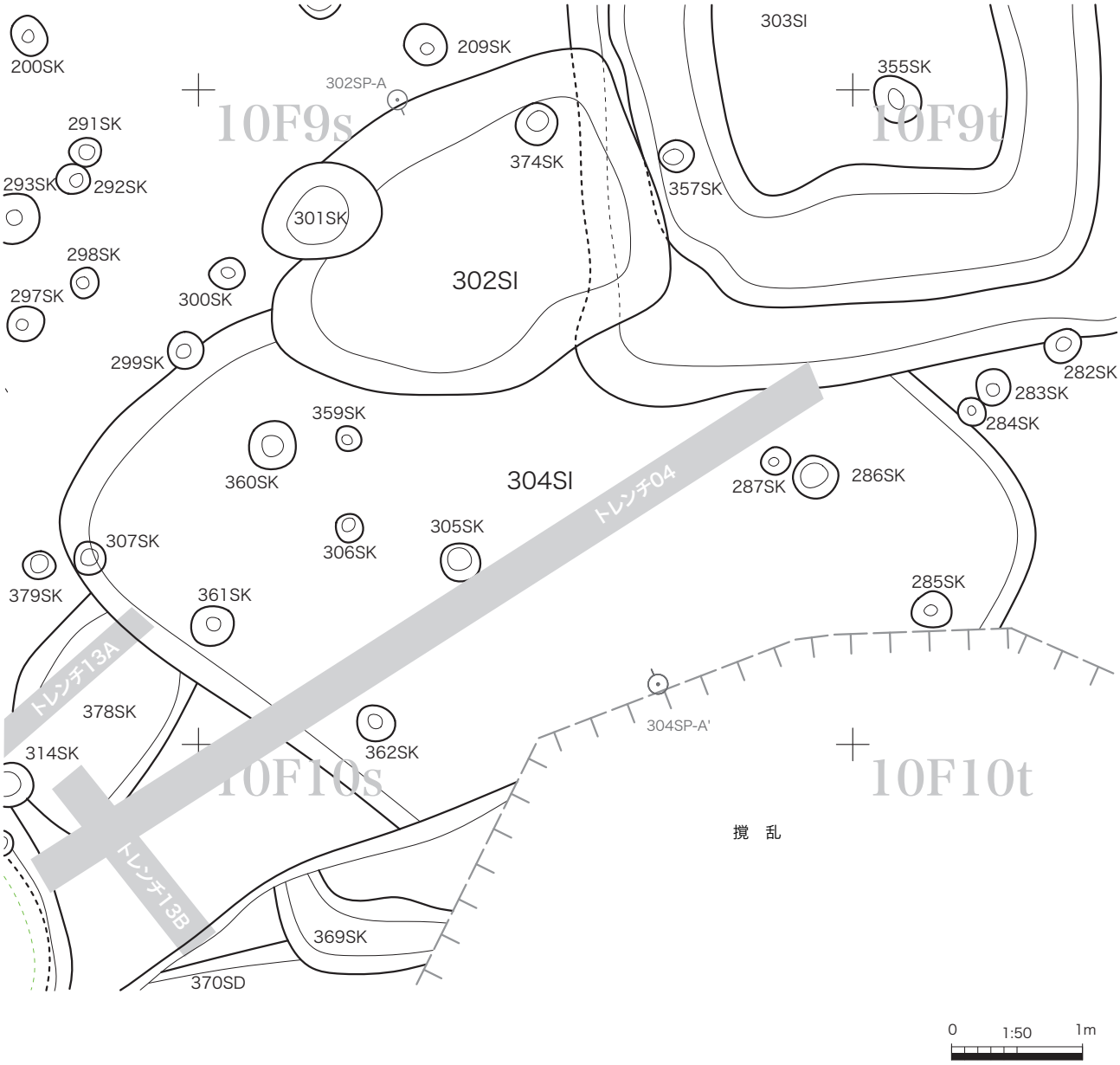
図23　08B区 264SI・257SD遺構図

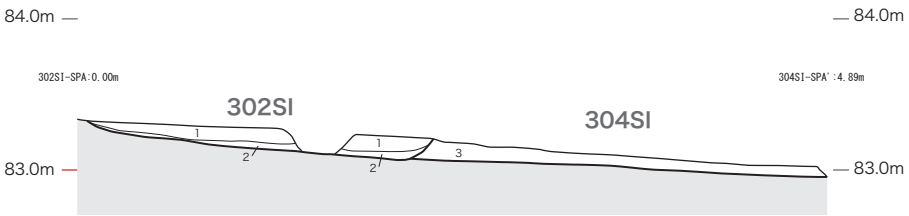


1　10YR 2/3　黒褐色 シルト（細粒砂含む 273SK埋土）
2　10YR 2/3　黒褐色 シルト（細粒砂含む）
3　10YR 2/2　黒褐色 シルト（細粒砂含む、径3mm～5mm位の角礫混じる 272SI埋土）
4　10YR 2/2　黒褐色 シルト（細粒砂含む、径3mm～5mm位の角礫混じる 272SI埋土）
5　10YR 3/3　暗褐色 シルト（細粒砂含む、径3mm～5mm位の角礫混じる 149SK埋土）
6　10YR 3/2　黒褐色 シルト（細粒砂混じる 271SI埋土）
7　10YR 3/1　黒褐色 シルト（細粒砂混じる、径5mm位の角礫含む）

1　10YR 2/2　黒褐色 シルト（中粒砂含み、径3mm～5mm位の礫含む 276SI埋土）
2　10YR 3/2　黒褐色 シルト（中粒砂含み、径5mm位の角礫多く含む 276SIの貼床）
3　10YR 2/3　黒褐色 シルト（中粒砂含み、径5mm位の角礫混じる 277SI埋土）
4　10YR 3/1　黒褐色 シルト（中粒砂含み、径5mm位の角礫混じる）

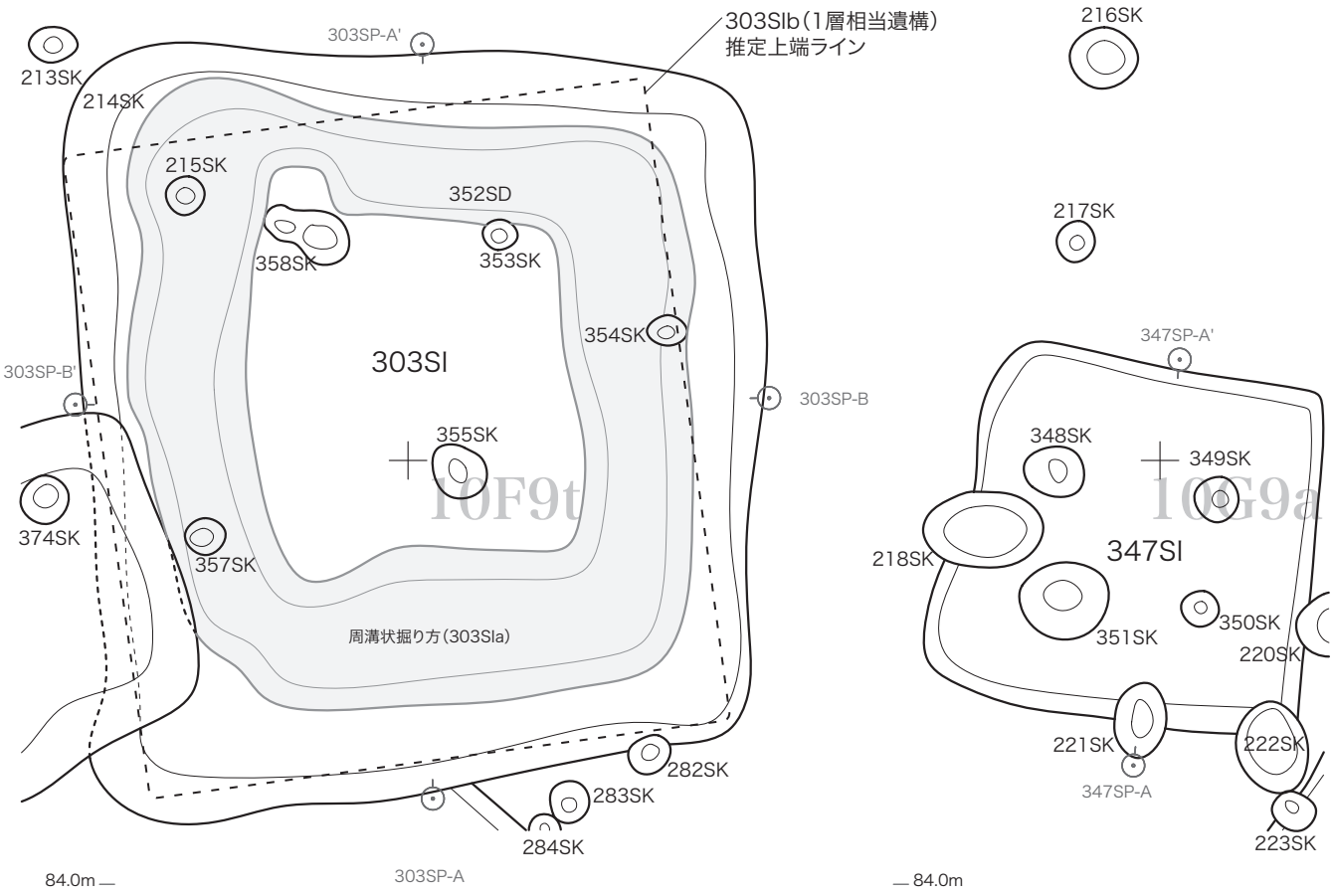
図24　08B区 271SI・276SI遺構図



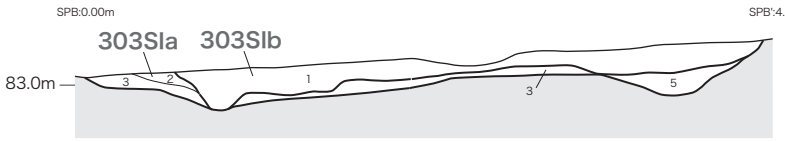


1　7.5YR 2/2　黒褐色 粘性シルト（5mm位の小礫混じる 302SI埋土）
2　10YR 2/3　黒褐色 シルト（細粒砂含む 302SI埋土）
3　10YR 2/2　黒褐色 粘性シルト（細粒砂含み、径3mm位の角礫混じる 304SI埋土）

図25　08B区 302SI・304SI遺構図



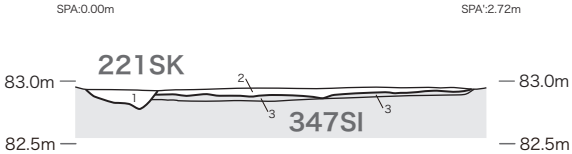






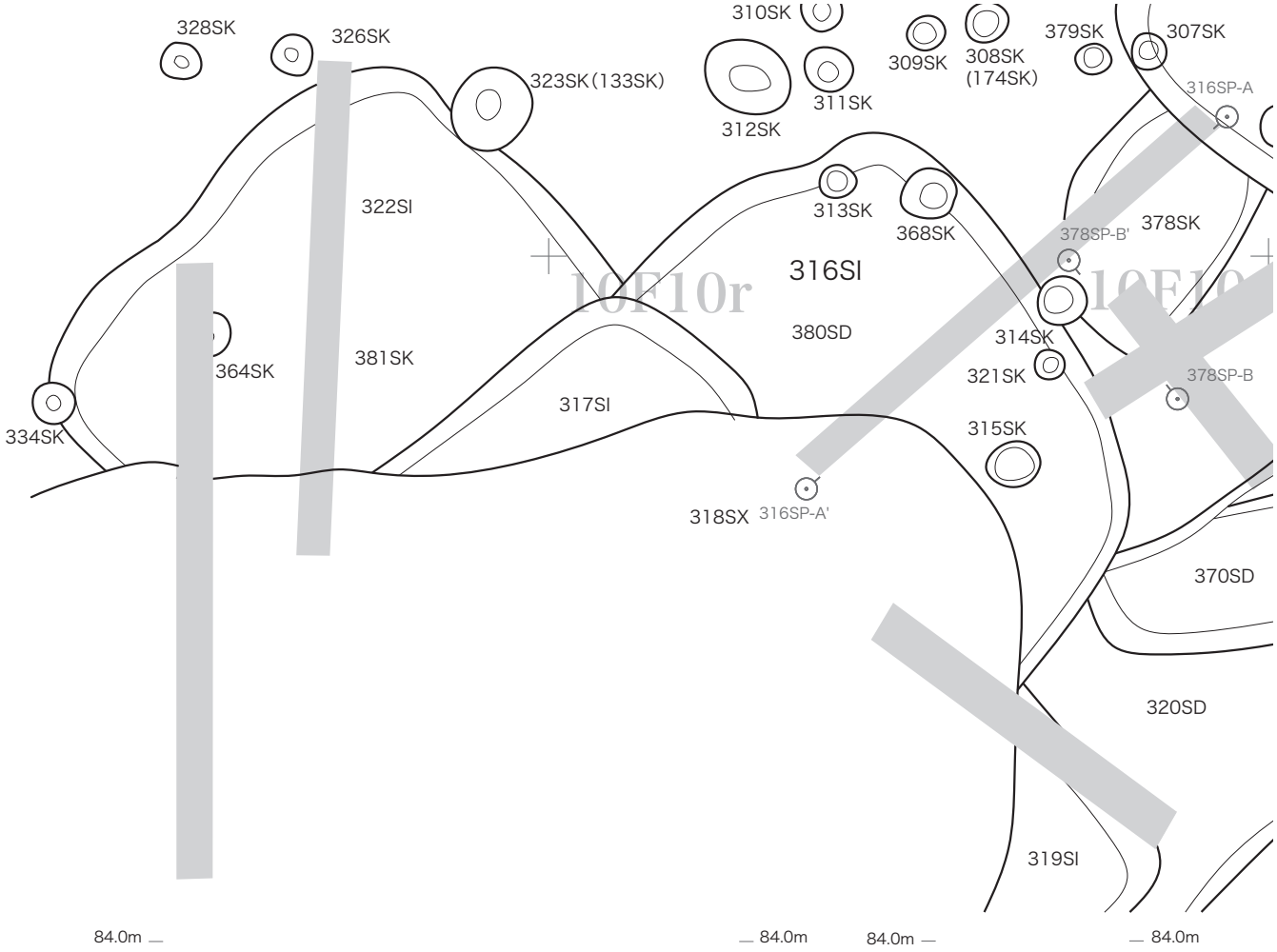
1　10YR 2/2　黒褐色 シルト（中粒砂含む、10YR5/6黄褐色粘性シルト混じる）
2　10YR 2/3　黒褐色 シルト（中粒砂含む）
3　10YR 2/3　黒褐色 シルト（中粒砂含む）
4　10YR 3/2　黒褐色 シルト（中粒砂含む）
5　7.5YR 2/2　黒褐色 粘性シルト

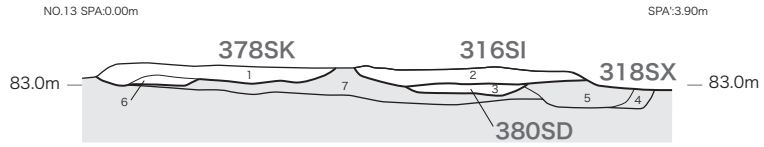
84.0m　84.0m

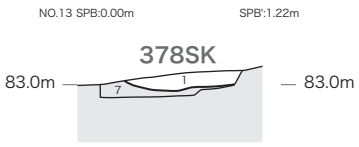


1　10YR 2/2　黒褐色 シルト（細粒砂、径3mm位の小礫含む 221SK埋土）
2　10YR 2/2　黒褐色 粘性シルト（細粒砂、径3mm位の小礫含む 347SI埋土）
3　10YR 3/2　黒褐色 シルト（細粒砂、径3mm位の小礫含む、径3mm～5mm位の角礫多く含む）

図26　08B区 303SI・347SI遺構図

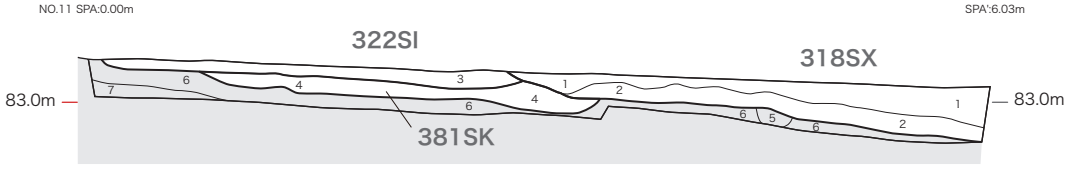






1　10YR 2/2　黒褐色　シルト(細粒砂含む 径2mm位の角礫含む 378SK埋土)
2　10YR 3/2　黒褐色　粘性シルト(細粒砂含む 316SI埋土)
3　10YR 3/2　黒褐色　粘性シルト(細粒砂含む 380SD(316SI周溝状掘り方)の埋土)
4　2.5Y 5/2　暗灰黄色 シルト(中粒砂含む、径2mm～5mm位の角礫含む)
5　10YR 3/2　黒褐色　粘性シルト(細粒砂混じる)
6　10YR 3/2　黒褐色　シルト(中粒砂含む)
7　10YR 2/3　黒褐色　粘性シルト(細粒砂含む)

0　1:50　1m

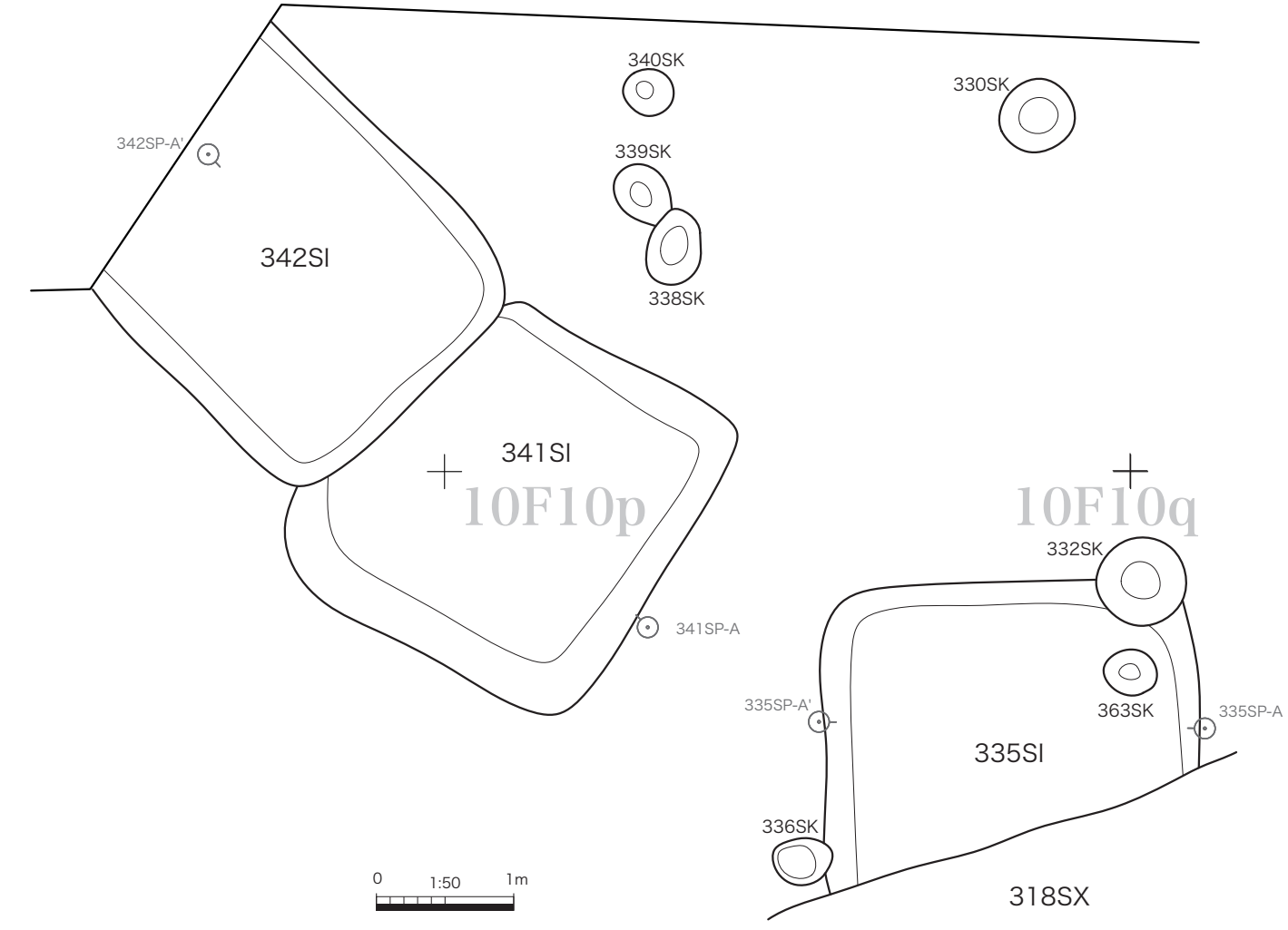


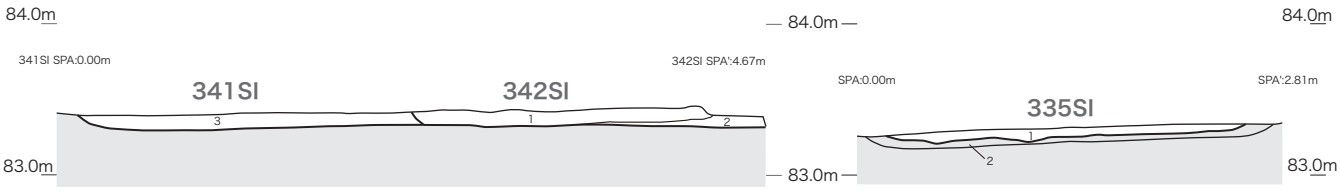
1　10YR 3/2　黒褐色　　シルト(細粒砂含む、径3mm位の角礫混じる 318SX埋土)
2　10YR 2/3　黒褐色　　粘性シルト(中粒砂混じる 318SX埋土)
3　10YR 2/2　黒褐色　　シルト(中粒砂混じる 322SI埋土)
4　10YR 3/4　暗褐色　　粘性シルト(中粒砂混じる、径3mm位の角礫混じる 381SK埋土)
5　10YR 4/2　灰黄褐色　粘性シルト(中粒砂混じる、径3mm位の角礫混じる)
6　10YR 2/3　黒褐色　　粘性シルト(径3mm～5mm位の角礫含む)
7　2.5Y 4/3　オリーブ褐色 シルト(中粒砂含み、径3mm～5mm位の角礫多く含む)

図27　08B区 316SI･322SI遺構図

4・5 層上面とみられる。特に 5 層は掘り方（貼床）に相当し、その掘り方 (352SD) は幅 0.8m で床面からの深さ 5 ～ 15cm の周溝状をしており、壁面の立ち上がりからさらに 10 ～ 20cm 内側に位置している。その後 1 ～ 3 層が堆積しているが、1 層については東西土層ベルト (B-B') で壁溝状の凹みから急な立ち上がりをしているため、この箇所から掘り返しがなされていた可能性が考えられる。するといびつな平面形について理解が可能となり（図 26 の推定線）、2 棟の重複（下層が 303SIa、上層が同 b）を可能性として提示しておく。その場合上層は一辺 3.9m の正方形になると推定される。

床面では 6 つのピットが検出されている。しかしながら北西隅の 215SK は検 2 面の 121SK の下部であり、303SI に関わらないと判断される。一方 358SK と 353SK は掘り方の隅に対応しており、それぞれ深さが 16cm と 7cm あることから、303SI の主柱掘り方にふさわしいといえる。上記以外に竈や





1　10YR 2/2　黒褐色 粘性シルト（細粒砂含み、径3mm～5mm位の小礫含む 342SI埋土）
2　10YR 2/1　黒色　粘性シルト（径5mm位の小礫含む）
3　10YR 2/2　黒褐色 粘性シルト（細粒砂含み、径3mm位の角礫含む 341SI埋土）

1　10YR 2/2　黒褐色 粘性シルト（径5mm～1cm位の角礫含む 335SI埋土）
2　10YR 2/1　黒色　粘性シルト（径5mm位の角礫含む）

図28　08B区 335SI・342SI・341SI遺構図

炉などの火処は検出されておらず、下層建物（303SIa）でも顕著な壁溝はなく壁面は緩やかな立ち上がりである。出土遺物は少なく、土師器小片が主である。高杯や加飾壺は欠山式期であり、加えて灰釉陶器碗も出土している。このことから、古墳時代初頭の下層建物（303SIa）が埋没後、平安時代（10 世紀以降）に一部を掘り返しさらに西壁から南西隅を拡張するかたちで上層建物（303SIb）を建てたものと考えられる。

316SI・317SI・322SI　調査区北東部の検 3 面で検出された【図 27】。いずれも南半部が撹乱によって滅失しているため、316SI の北東辺が約 3.8m とわかる以外全形は不明であるが、概ね同規模の隅丸方形と考えられる。先後関係は 322SI → 316SI → 317SI である。いずれも壁面の立ち上がりは緩やかで皿状の断面である。底面で若干のピットが検出されているが、関係は不明である。なお、322SI は床面で皿状の断面となる土坑 381SK が検出されている。出土遺物は 316SI で灰釉陶器と土製の竈支脚底部が出土している。竈支脚の所属時期は明確にしがたいが、当該遺構の時期が概ね平安時代 10 世紀以降であると推測できる。

335SI　調査区北西部の検 3 面で検出された竪穴状遺構である。南半部は谷地形 318SX の切り出し造成によって滅失している。北辺 2.8m で、平面形は隅丸正方形と推定される。壁面の立ち上がりは緩やかで皿状をしている。底面で付属施設は検出されなかった。出土遺物は灰釉陶器の小片が出土している。

341SI・342SI　調査区北西隅の検 3 面で検出された【図 28】。341Si は一辺 2.6m の隅丸正方形でその北西辺を切り込んで 342SI がある。342SI も南東辺 2.4m で隅丸正方形と推定される。壁面の立ち上がりは緩やかで皿状の断面をしている。出土遺物はなかった。

345SI　調査区中央部の検 3 面で検出された【図 29】。東西方向のトレンチにかかっており全形を知ることができないが、南東隅を中心に一辺 2.7m 以上の隅丸方形になると考えられる。壁面の立ち上がりは緩やかで皿状の断面をしている。底面で付属施設は検出されなかった。出土遺物は古代の須恵器・土師器･灰釉陶器と中世の山茶碗の小片が出土しているしたがって遺構の時期は中世以降と考えられる。

347SI　303SI の東側で検出された竪穴状遺構である【図 25】。両者は約 1m 離れている。一辺が 2.6m の正方形、深さ 5cm ときわめて小型である。壁溝や火処は検出されなかったが、348SK ～ 351SK という 4 つのピットが 1m 間隔で検出された。通常規模の竪穴建物であれば主柱とみなすところであるが、あまりに狭小となるため、建物の構造や性格をそれとは異なるもので考えておく必要があ

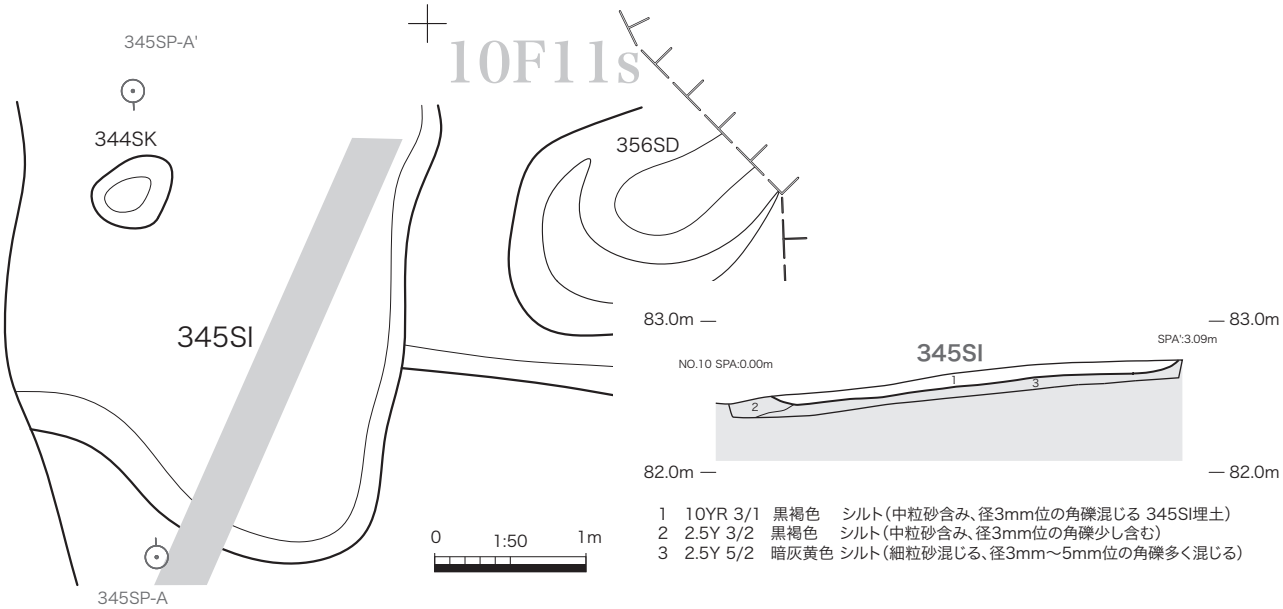


図29　08B区 345SI遺構図

る。347SI からはの出土遺物はなかったが、348SK から土師器直口壺の口縁が出土しており、303SIa と近い時期となる。したがって 303SIa と 347SI が一組の建物群を構成していた可能性が指摘される。

第 3 節　掘立柱建物

概要　本節では、掘立柱建物について提示する。調査時点では明らかにできなかったが、その後遺構平面図を精査していくつかの建物を想定することができた。1001SB のみ 08A 区に位置し、1002SB ～ 1011SB は 08B 区に位置する。後者のうち、1002SB ～ 1004SB は調査区東半部で分散して立地しているが、1005SB ～ 1011SB は調査区北部の竪穴状遺構などの遺構集中域で一部重複関係になって立地している。ただしいずれも平面規模は 1.2 ～ 9.0㎡と小さく、かつ柱通りは良くないが、特徴として、東側の 1001SB ～ 1004SB は南北方向の長軸というまとまりがうかがえる。

1001SB　08A 区検 2 面で検出された。当該検出面は、河川氾濫による撹乱などからからろうじて残存した調査区東端の黒色土層帯を掘削した下面に相当する。黒色土層は弥生～古墳時代前期までの土器を包含している。さて想定される建物は、017SK・008SK・005SK・004SK と 002SD 底部の凹みで構成される。017SK から 008SK へ 2.5m、北へ屈曲して 6.6m の南北に細長い形状である。南北線を軸線としてグリッド北から西へ 8° 振れている。

1002SB　調査区東部に位置する。検 2・3 面で検出された、254SK・255SK・253SK・251SK・047SK で構成される 1 間×2 間規模である。長軸 3.3m、短軸 1.5m で長軸はグリッド北から西へ 18° 振れている。柱穴掘り方（含、抜きとり穴）はいずれも直径 50cm 以上あり今回検出された掘立柱建物の中では最大である。出土遺物は

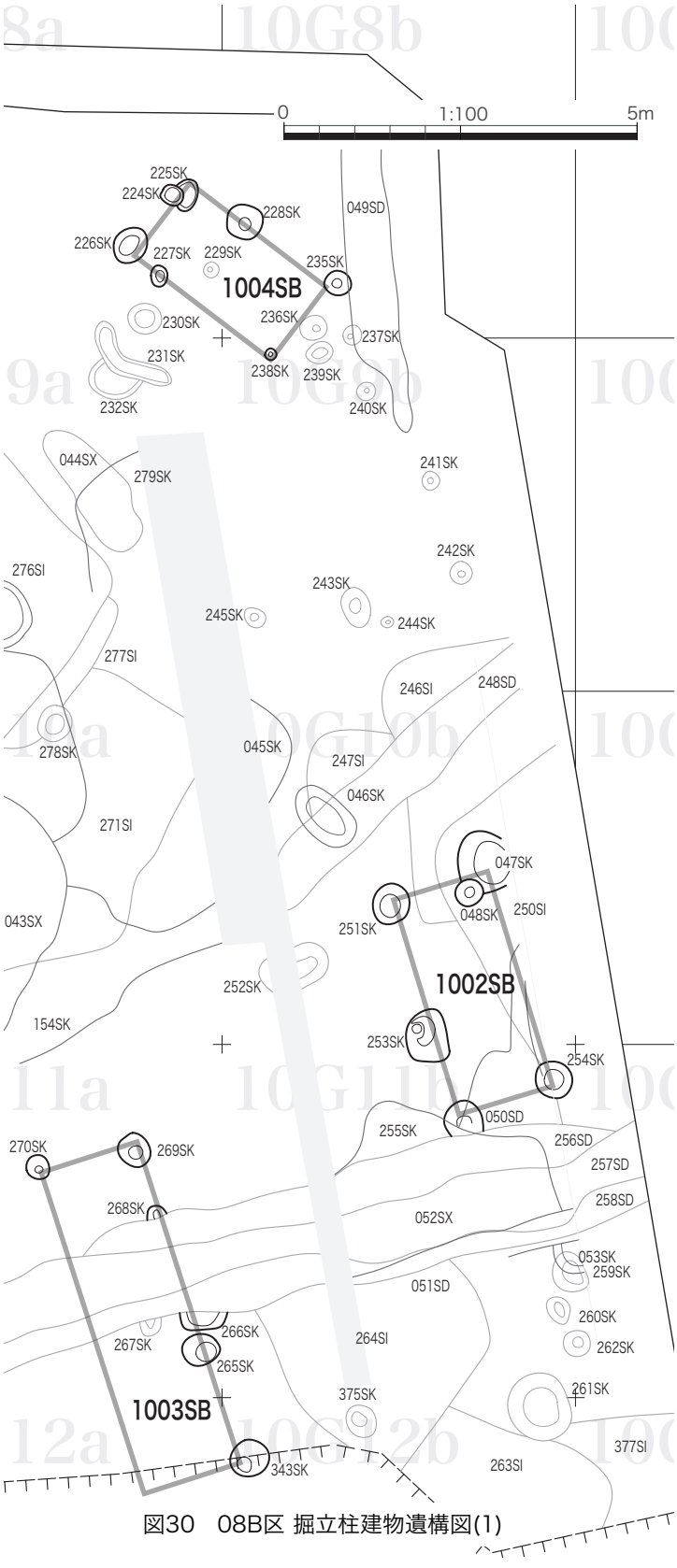


図30　08B区 掘立柱建物遺構図(1)

251SK から古墳時代前期の土師器片が出土しているのみである。

1003SB　調査区東部に位置する。検 3 面で検出された、270SK・269SK・268SK・265SK・343SK で構成される柱列である。1 か所で屈曲し対称位置で柱穴が検出されていないが 1002SB や 1004Sb の事例を参照すると 1 間 ×3 間規模の可能性がある。長軸 4.9m、短軸 1.5m でグリッド北から西へ 18° 振れている。出土遺物は、269SK から平安時代とみられる土師器片、265SK からはそれに加えて山茶碗片が出土している。343SK からは古墳時代前期の土師器が出土している。

1004SB　調査区北東部に位置する。検 3 面で検出された、226SK・225SK・228SK・235SK・238SK で構成される 1 間 ×2 間規模である。長軸 2.5m、短軸 1.3m で長軸はグリッド北から西へ 50° 振れている。北東辺の柱間間隔は 225SK・228SK 間で 1.0m、228SK・235SK 間で 1.5m である。該当する遺構からの出土遺物はなかった。

1005SB　調査区北部に位置する。検 2 面で検出された。007SK・009SK・012SK（検 3 面 197SK）・137SK で構成される 1 間 ×1 間規模で、平面形は一辺 1.1m の正方形である。1006SB と重複関係にあり、011SK と 012SK の切り合いから 1006SB → 1005SB という順であると考えられる。方位軸はグリッド北から西へ 5° 振れている。012SK からは土師器の清郷型鍋、137SK からは古代の土師器・灰釉陶器と山茶碗片が出土している。12 世紀代以降の時期と思われる。

1006SB　1005SB と重複して位置する。一部が調査区北壁にかかっているため全形は確定していないが、006SK・008SK・011SK・015SK・(014SK) で構成される 1 間 ×2 間規模と推定される。長軸 2.4m で 006SK・008SK 間は 1.0m、008SK・011SK 間は 1.4m の柱間間隔、一方短軸は 1.5m である。出土遺物は 008SK から山茶碗片、011SK からは土師器清郷型鍋片が出土している。切り合いから 1006SB が 1005SB に先行すると考えられ、山茶碗が含まれることから 12 世紀以降と推測される。

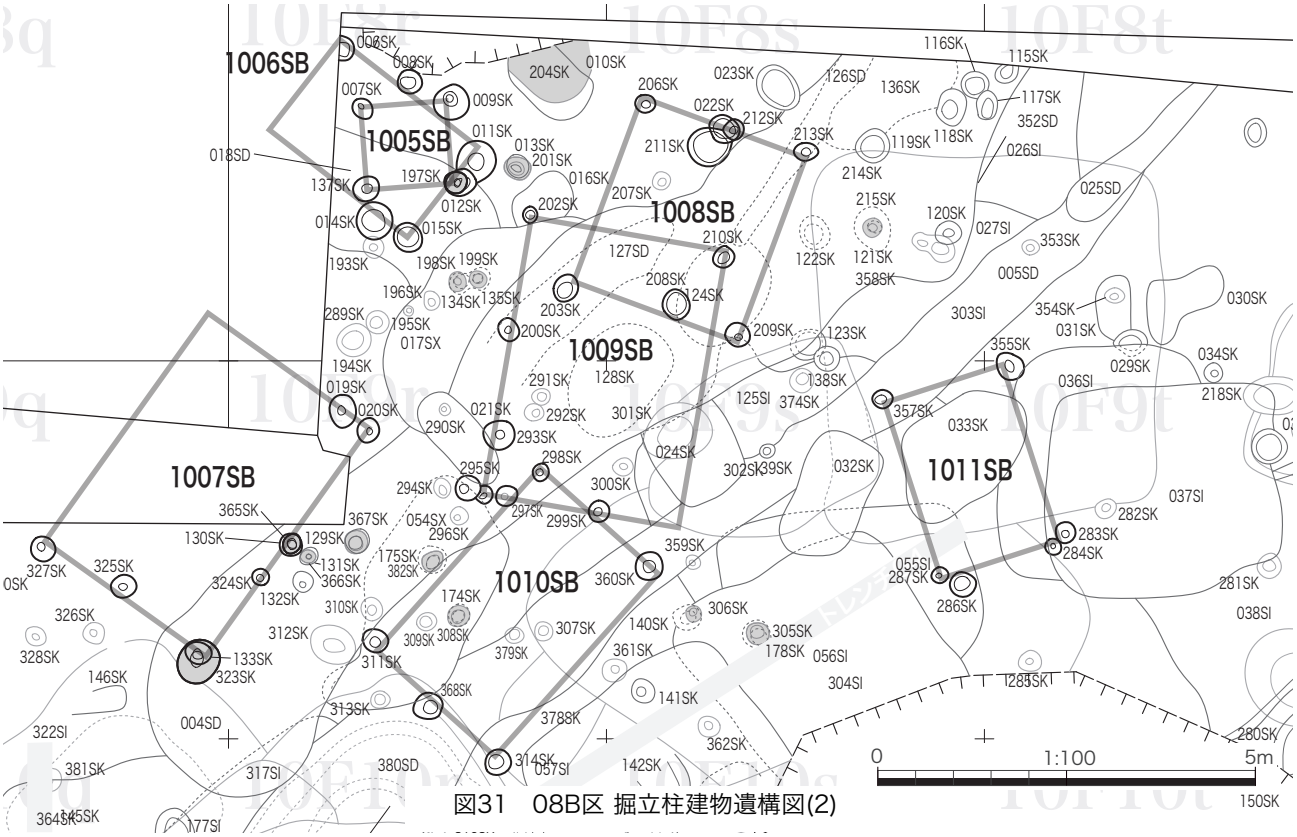


図31　08B区 掘立柱建物遺構図(2)

1007SB　調査区北部に位置する。検 2・3 面のそれぞれで検出された遺構であるが、325SK・327SK は検 2 面で検出できていなかった可能性が高く、実質検 2 面の遺構と判断される。南西隅から 327SK・325SK・133SK（検 3 面 323SK）・324SK・130SK（検 3 面 365SK）・020SK・（019SK）で構成される。東西方向が短軸（m）で 2 間、南北方向が長軸（3.7m）で 3 間の規模である。327SK・325SK 間が 1.2m、325SK・133SK 間が 1.4m だが長軸は等間隔でない。長軸を軸線とするとその方位はグリッド北から東へ 35° 振れている。出土遺物は 020SK から古代の土師器片、130SK（365SK）からは灰釉陶器・山茶碗など、133SK からは灰釉陶器が出土している。時期は 12 世紀代以降と考えられる。

1008SB　調査区北部に位置する。検 2・3 面で検出された、206SK・022SK（検 3 面 212SK）・231SK・209SK・208SK・203SK で構成される 2 間 ×1 間規模である。ただし長軸側が 1 間規模で疑問なしとしない。022SK のみが検 2 面で検出されたが、他の遺構もほぼ検 2 面相当と考えられる。長軸 2.6m、短軸 2.4m で、北辺の柱間間隔は 1.2m の等間隔である。長軸はグリッド北から東へ 21° 振れている。

1009SB　調査区北部に位置する。検 3 面で検出された 295SK・293SK・200SK・202SK・210SK で構成される 3 間 ×1 間規模である。西辺を長軸として 3.8m、北辺 2.6m で短軸となる。西辺はグリッド北から東へ 8° 振れている。実質西辺が検出されただけでしかも柱間間隔が一定していないことからも、掘立柱建物の想定として不安定な印象を受けるが、想定の 1 つとして提示する。このように 08B 区では多数ピットが分布しているが、明確な柱列を構成しうるものは少ない。出土遺物は 295Sk から古代の土師器片が出土している。

1010SB　調査区北部に位置する。検 3 面で検出された 298SK・300SK・360SK・314SK・368SK・311SK で構成される 2 間 ×1 間規模である。1009Sb と同様に長軸が 1 間しかない点がやや不審であるが、短軸側がともに柱間が 0.9m 等間隔になっていることから未検出の可能性も含めて想定しておきたい。長軸 3.3m、短軸 2.1m で長軸はグリッド北から東へ 42° 振れている。各ピットからは出土遺物があり、298SK で須恵器片、299SK・314SK で古代の土師器と山茶碗、311SK で古代土師器が出土している。したがって遺構の時期としては 12 世紀代以降と考えられる。

1011SB　調査区北部に位置する。検 3 面で検出された 357SK・355SK・283SK・287SK で構成される 1 間 ×1 間規模である。南北に長軸となるが、長さ 2.5m に対して 1 間しかなくやや不安定な印象がある。一方短軸は 1.7m である。長軸はグリッド北から西へ 18° 振れる。出土遺物はなかった。

第 4 節　溝など

08A 区 002SD　検 2 面の黒色土層下で検出された遺構群の 1 で、わずかな検出区域の北端にある東西方向の溝である。幅 2.2m で皿状の断面を呈する。全形は不明であるが、その南西で溝 011SD があり屈曲してこれに続く可能性が高い。出土遺物は古墳時代初頭壺の口縁が出土している（E-001）。

08A 区 010SD　002SD 同様の検出状況であるが、こちらはその南端で検出された。幅 1.3m で皿状の断面と呈しているが、ひじょうに不定形でもある。当該溝の西側に 013SD があり、これに続く可能性が高い。なお、011SD と 013SD は検出区域の西端で 012SX と重複しつつ接点をもっており、実質一連のものである可能性が考えられる。この想定によれば、002SD・011SD・013SD・010SD と周溝状に延びることになる。周溝で囲まれる範囲は南北に約 10m の崩れた方形となる。墳墓などの可能性も考慮すべきなのかもしれない。なお 010SD からは施文された弥生土器片が出土している。

08B 区 004SD　08B 区調査区北壁から南西方向に延びる不定形な溝である。北壁から調査区外へ延びており、確認された全長は 15m、幅 1.6 ～ 1.9m、深さ 13cm と浅い皿状の断面形をしている。検 2

面で比較的早い段階で検出された遺構であり、その下位から柱穴などの遺構が検出されている。また南隣に平行する溝 005SD と南端付近でわずかに接するものの、先後関係が明瞭な切り合いではなく、判断できていない埋土は褐色シルト層である。遺物は須恵器・灰釉陶器・山茶碗が小片となって出土し、緑釉陶器も含まれている。

08B 区 005SD　08B 区調査区北壁から南西方向に延び谷地形 084SX に至る溝である。北は重複関係にある溝 025SD が調査区外へ延びているが、方向や規模からみてほぼ同一遺構の層が異なるものと考えられる。両者を合わせた全長は約 33m 以上である。断面は中央部で極端に深くＶ字形となり両枠が浅い特徴がある。出土遺物は、004SD と同様に古墳時代～中世の土師器・須恵器・灰釉陶器・山茶碗のいずれもが混在しており、時期の下限から類推して中世の溝と考えられる。

08B 区 049SD　調査区北東隅の検２面で検出された南北方向の溝である。南端から調査区北壁までの検出長は 4.4m で延長は調査区北壁から外にある。方位はグリッド北からわずかに西へ振れており南方の 257・258SD と直角の関係にある。両者の関係をうかがわせるものである。

08B 区 153SD　調査区東部の検２面で検出された東西方向に延びる溝である。遺構は不明遺構 043SX の下位にある【図 17】。断面は緩いＶ字形となっており上幅 2.2m 深さ 45cm である。トレンチを挟んだ東側で検３面にて 248SD があり、これを連続している可能性が高い。248SD では近代の磁器が出土しているので、かなり新しい遺構であるといえる。またこれに伴って 043SX も新しい掘り込みと判断されることになる。

08B 区 248SD　08B 区調査区東端にある溝で、検３面で検出された。しかし時期的な点あらみて実質検２面相当である。長さ 4.8m、幅 0.7m、深さ 18cm で調査区東壁からさらに東方へ延びている。方位はグリッド北から東へ 45° 振れている。トレンチをはさんで 153SD と接点があり、同一のものがちょうど屈曲していると考えられる。出土遺物は山茶碗片などがみられるが、近代の磁器も含まれており、比較的近年のの地割に伴う遺構と考えられる。明治時代の地籍図との対照が必要である。

08B 区 256・257・258SD　調査区東部の検３面で検出された東西方向にのびる溝群である【図 23】。検３面であるが当該地点では検２面が撹乱で削平されており、調査区東壁土層断面【図 12 上】を参照すれば、表土直下の比較的新しい掘削であることが判明する。溝群は同一の溝を掘り返しなどの単位ごとに遺構番号が付したものである。具体的には上層（257SD）に対して下層（256・258SD）が当初の掘削によるものと判断される。その断面はＶ字形であり幅 1.7m 深さ 65cm である。堆積層は黒褐色の細粒砂混じりのシルトであり、若干の水流があったものと考えられる。これに対して上層は幅 2.7m の浅い皿状をしている。堆積層は小角礫の混じるシルトであり、下層とは様相が異なる。出土遺物は山茶碗と土師器清郷型甕が多数あるが、谷地形 318SX などから流出したものと考えられる。

08B 区 376SU　発掘調査最終段階で検出された古墳時代前期土師器の土器集積遺構である。検出地点は谷地形 318SX 東側斜面にかかっており、造成時の削平を一部で受けていたものの自然地形段階の斜面にその上方から廃棄された土片器群が、長さ 3.3m 幅 3.2m にわたって分布していた【写真図版 12】。土器群は大型の壺（E-350）と小型壺（E-349）の２個体分に相当する。他に炭化物などの検出はなく、また周辺の斜面地形を精査し断割トレンチを入れてみたが他に当該時期の遺構は検出されなかった。ただし、土器群の下方の 318SX 下端付近で縄文時代晩期の浅鉢が出土し、仮に 376SU に含めて取り上げたが、これは時期も包含される層も異なるものである。いずれの時期の土器も加原遺跡に該当する時期の集落のあることを示すもので、 特に縄文時代晩期に関しては特定可能な遺構が検出されていないことから、石器とともに重要である。

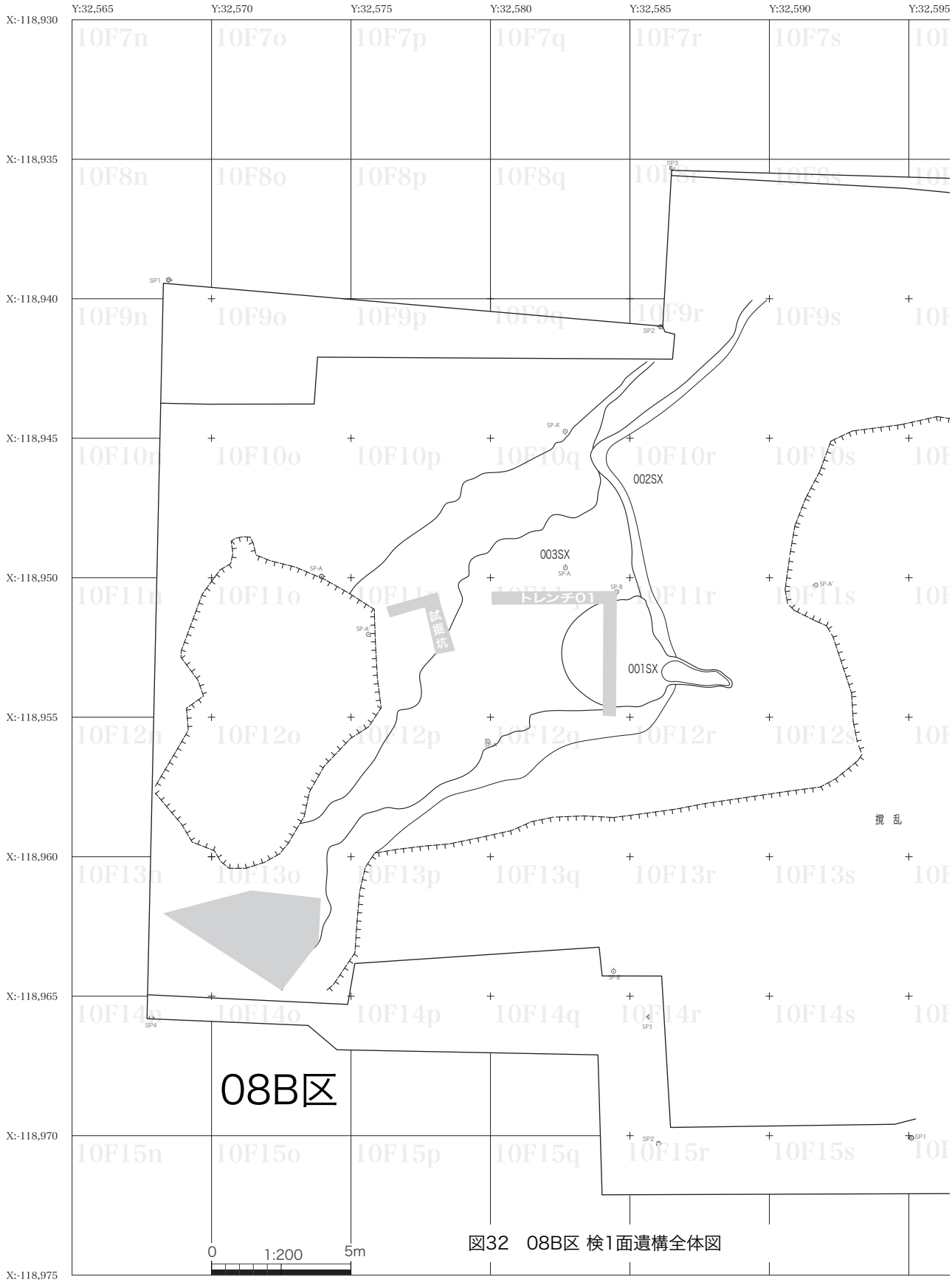


図32　08B区 検1面遺構全体図

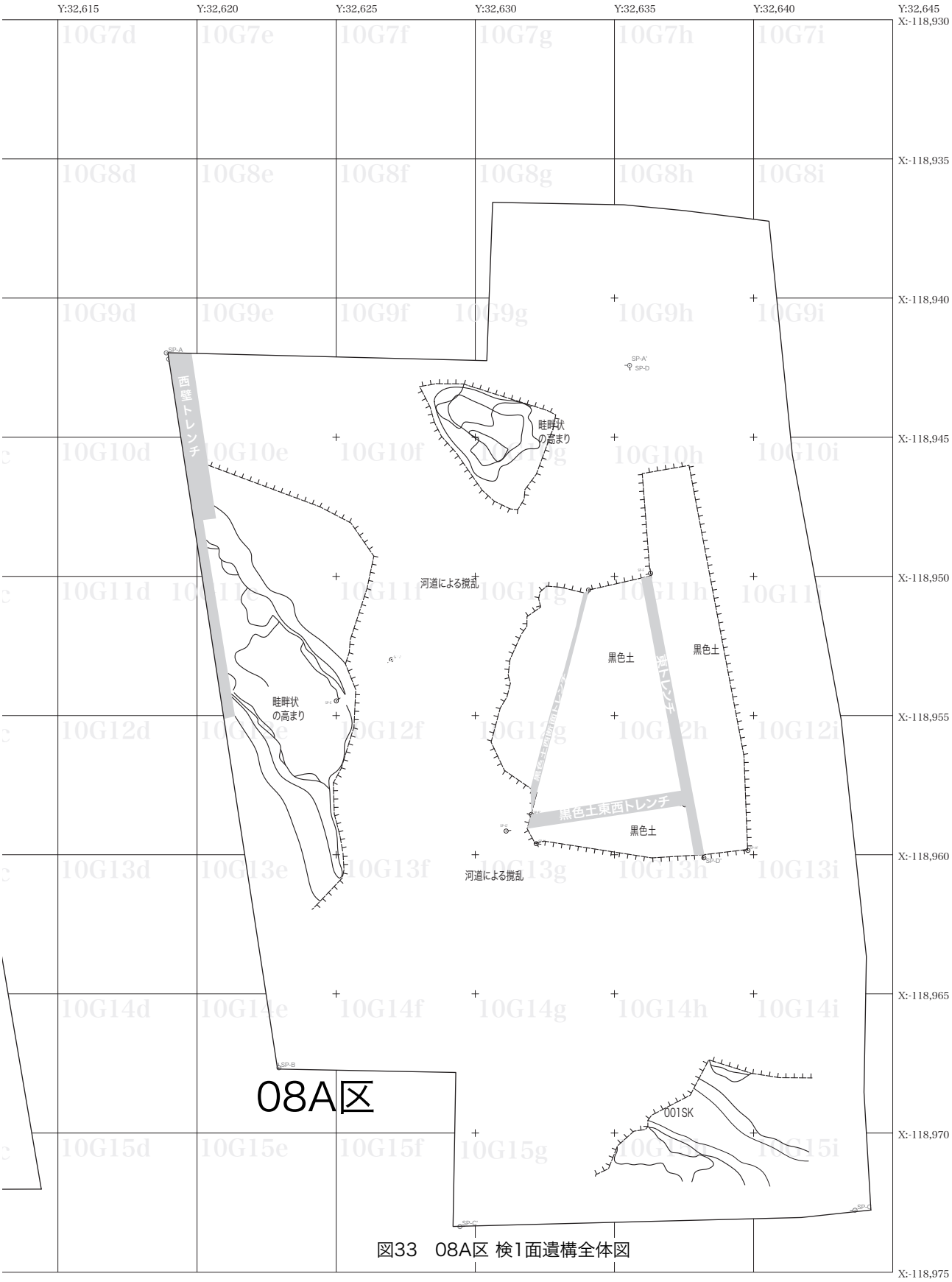


図33　08A区 検1面遺構全体図

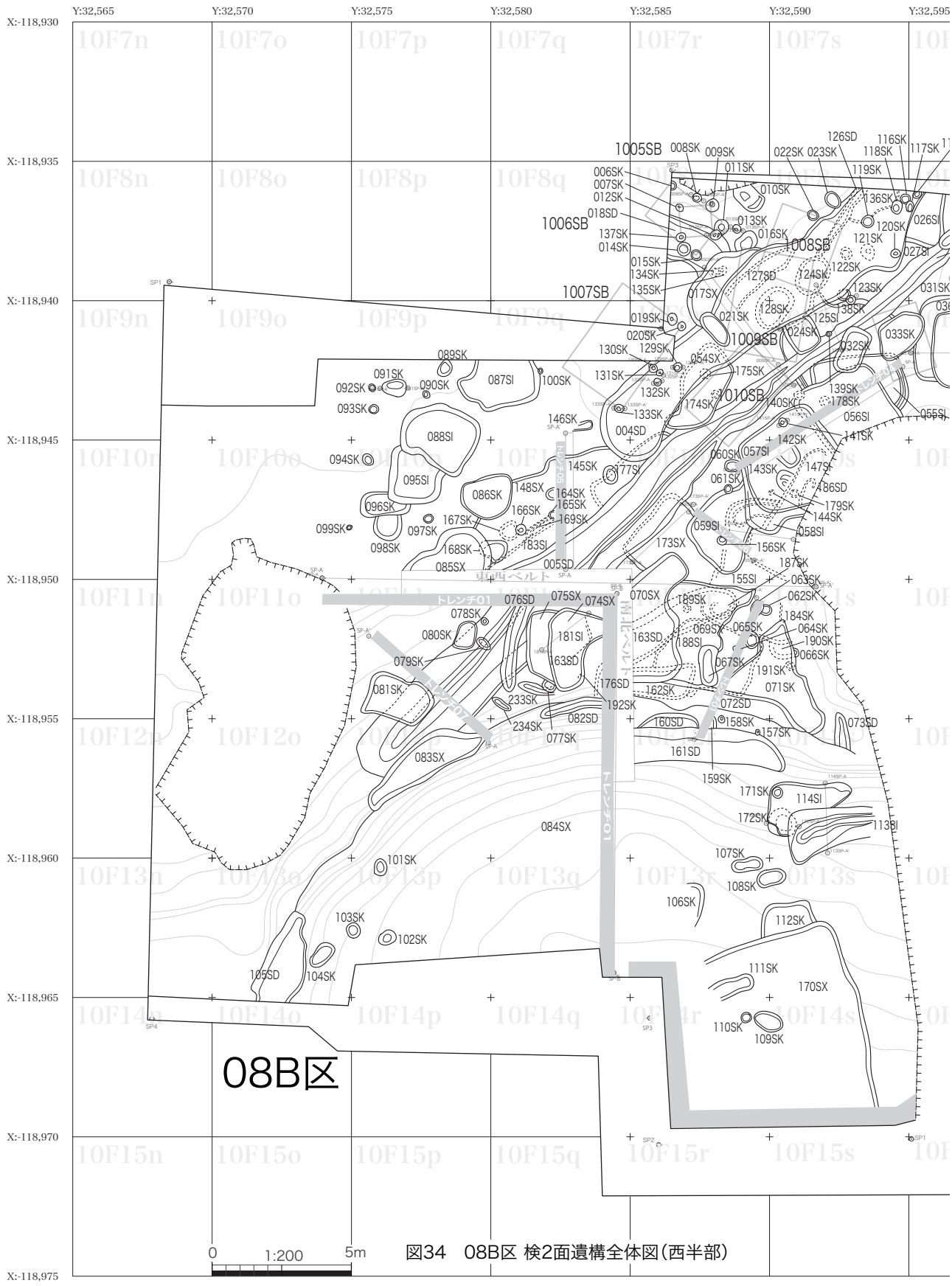


図34　08B区 検2面遺構全体図(西半部)

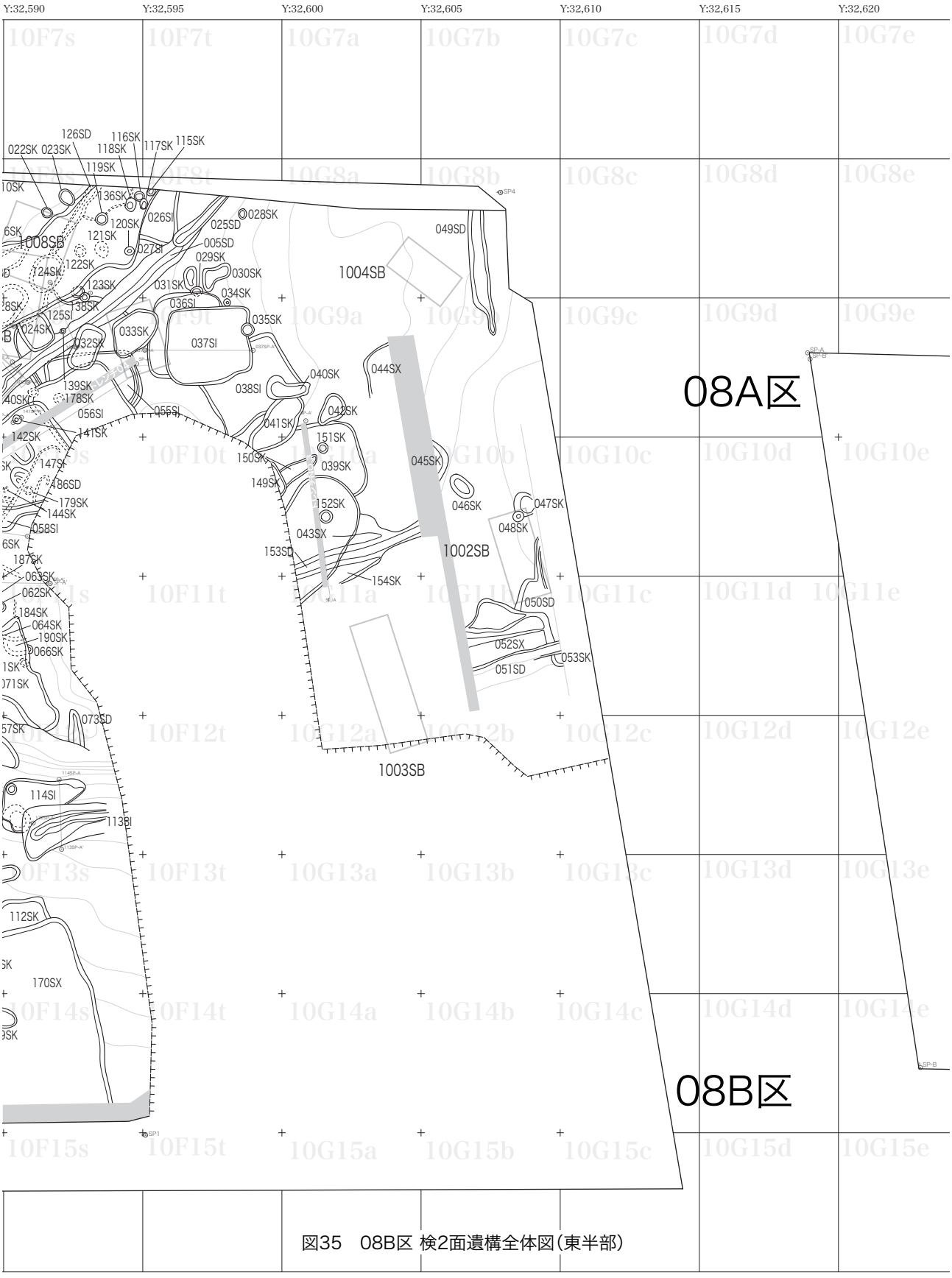


図35　08B区 検2面遺構全体図(東半部)

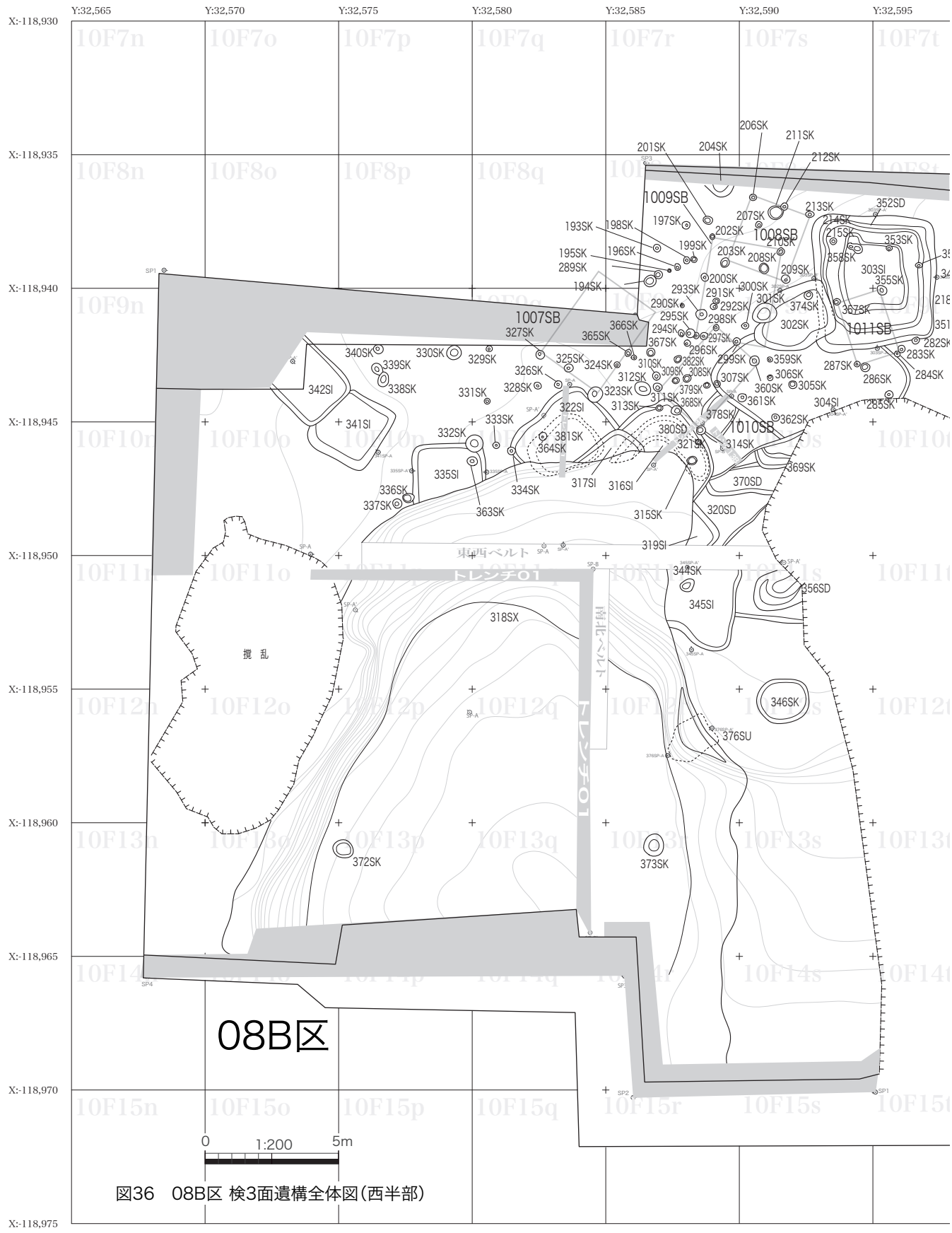


図36　08B区 検3面遺構全体図（西半部）

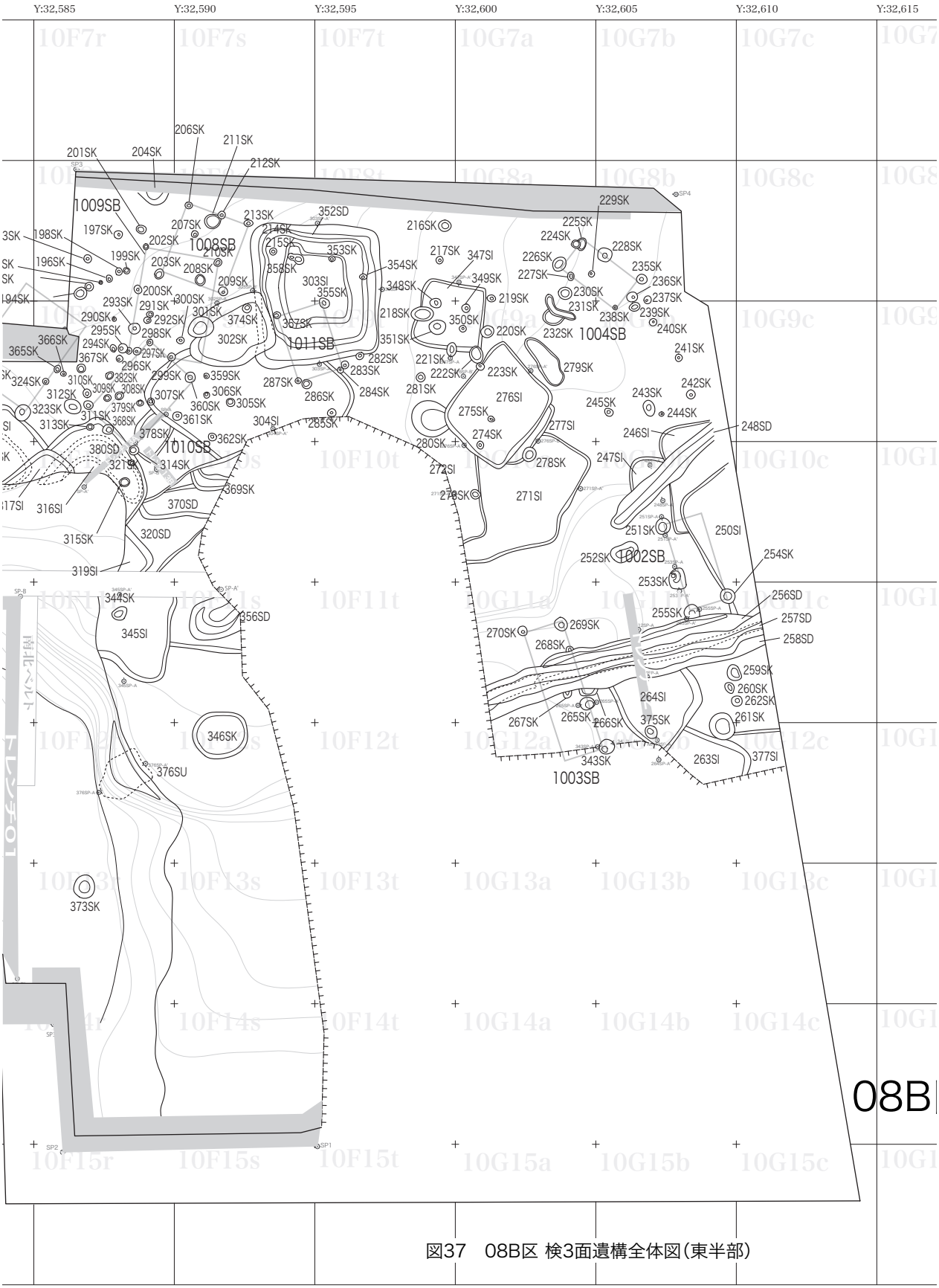


図37　08B区 検3面遺構全体図（東半部）

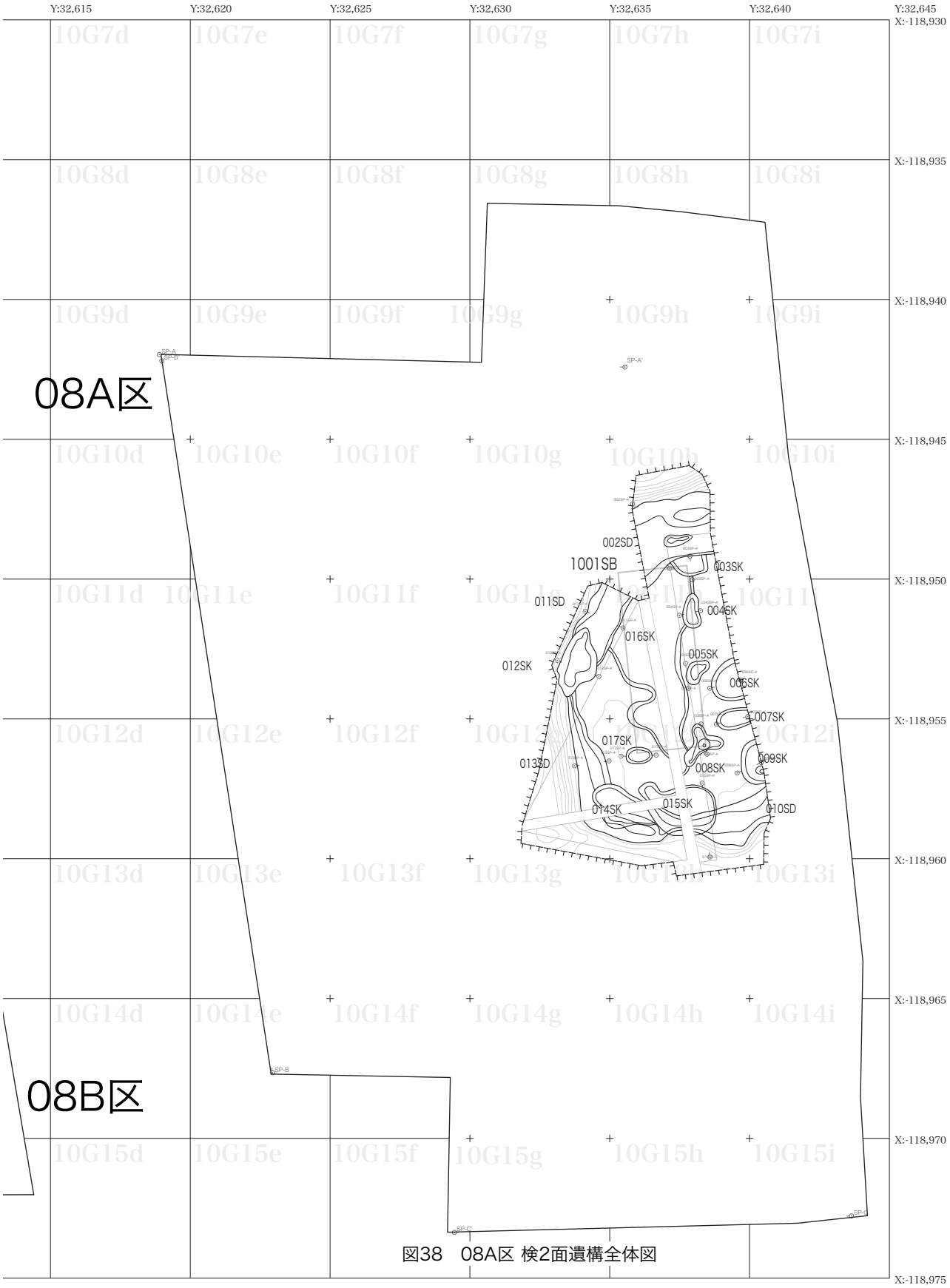


図38　08A区 検2面遺構全体図

第 3 章 遺物

第 1 節　概要

加原遺跡における今次発掘調査で出土した遺物の総量は､27 リットルコンテナで換算して 23 箱となる。その内訳は素材で分類すると土器・陶磁器と石製品・石器、鉄製品・鉄滓である。ただし石・鉄の出土比率はごくわずかであり、出土遺物の大半を実測図で提示したが、それらを合わせても上記コンテナ半分にも満たない。

次に遺物の主体のなる土器･陶磁器の内訳であるが、時期の古い順に縄文土器、弥生土器、土師器（古墳時代前期・奈良時代～鎌倉時代)、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、山茶碗、近世磁器がある。そのうち灰釉陶器・山茶碗が最多で同上コンテナで 20 箱である。またこれと時期が平行する平安時代の土師器である清郷型鍋も多くみられる。これらの遺物は竪穴建物などの遺構出土でも目立つことから、検出遺構の多くが当該遺物の時期に相当すると考えられる。

第 2 節　土器・陶磁器と石器

08A 区の概要　08A 区は調査区の大半が河川氾濫に伴う堆積という状況であったため、遺構出土遺物はおろか河川堆積中の遺物もひじょうに少なかった。しかし特筆されるのは、遺構出土土器は弥生時代中期から古墳時代初頭に限定され、遺構が検出できた黒色土層残存部分でも出土したのは古墳時代前期の土器が比較的まとまっていたことである。残念ながら洪水性堆積は黒色土（黒ボク化）層の上にも下にもある状態で、特に石器（S-1 ～ 7）の多くは当該層から出土しているのであるが、その層位的関係は明確でない。しかし剥片（S-4 ～ 7）は 08B 区のそれとは形状に違いがみられることから、これらは上流の遺跡から押し流されてきた可能性も考えられる。

08B 区の概要　08B 区の出土遺物はまず土器について、竪穴状遺構（027SI ～ 322SI)、土坑・溝など(009SK ～ 107SK)、谷地形（084SX ～ 318SX 底部)、土器群（376SU）包含層の順で配列した。一見して明らかなように谷地形出土遺物が大半である。次に石器･石製品、鉄製品でそれぞれ一括してある。ここでは遺構ごとに様相をみておく。

竪穴建物・竪穴状遺構　各遺構の出土点数は少なくかつ小片が大半である。その中から実測図提示が有効なものを選択すると 1 ～数点という状況である。それらは出土位置の詳細を斟酌していないので重複の激しい遺構に関しては、本来的に伴うものかどうか確定的でない。ただし灰釉陶器から山茶碗が混在している状況は変わらず､当該遺構群の機能した時期からその下限を山茶碗が示していることになる。なかでも 113SI では山茶碗輪花碗（E-36）と土師器小皿（E-37）に土師器甕（E-39 ～ 43）の共伴関係が明らかで、12 世紀後半段階の様相を示す比較的良好な土器群といえる。一方で、303SI では O-53 号窯期の灰釉陶器碗（E-59）だけでなく古墳時代初頭の土器（E-60・61）も比較的大きな破片で出土しており、当初の竪穴建物の構築は古墳時代になると考えられ、前者は掘り返し層位に伴うものと判断される。

また、時期不詳ながら土製の竈支脚が注目される（E-64)。またやや粗雑なつくりながら 318SX からも出土している（E-327)。このように生業に関わるものとして管状土錘（E-24・69・133・138 など）が各遺構で出土する点も注意しておきたい。管状土錘は河での刺し網漁に使われたと考えられ、古墳時代後期～平安時代の集落で出土するが、本遺跡の場合、出土遺構からみて平安時代中～後期のものと考えられる。

表 1　出土遺物概要（1）

遺構	遺物概要（番号順）
002SD	1 :土師器長頸壷。内外面に精緻な縦方向ミガキ。
010SD	2〜5 :外面のほぼ全面に棒状工具で凹線文が施された弥生土器、壷か。5は横方向の凹線文に加えて棒状先端を押し当てたものか。
黒色土ほか	7 :弥生後期の有段高杯口縁部。外反し波状文あり。8 :古墳時代初頭の深い杯部となる有段高杯。内外面に疎らなヘラミガキ。9,10 :古墳前期の土師器屈折脚高杯。11,12 :弥生時代後期の壷。11は口縁凹線文と波状文。12は連続刺突文。13 :古墳時代前期末の土師器小型壷。14 :13と同じく前期の直口壷。15 :壷の底。16,17 :弥生後期〜古墳前期壷の施文部分。18,19 :土師器台付甕の口縁と台部。20 :古墳前期土師器屈折脚高杯。21,22 :同土師器壷の口縁。23 :弥生後期の有段高杯。内外面に精緻なヘラミガキ。
08A区石器	S-1：砥石、石材は凝灰岩。S-2：石鏃、上端は使用により欠けている。石材は下呂石。S-3〜5：剥片、石材は溶結凝灰岩。S-6：剥片、石材は流紋岩。S-7：剥片、石材は安山岩。
027SI	24 :土師質の管状土錘。直径2.6cmで太め、かつやや面取りあり。
036SI	25 :灰釉陶器碗、口縁部。
037SI	26,27 :灰釉陶器（末期）の底部。28 :山茶碗で高台欠損。
038SI	30 :灰釉陶器（末期）
055SI	31 :古墳時代の土師器直口壷頸部。口縁外反。
056SI	32 :土師質の管状土錘。
057SI	33 :山茶碗類の小碗。
059SI	34 :灰釉陶器碗、O-53号窯期。
086SI	35 :縄文土器、深鉢の口縁。渦巻き状の凹線文。
113SI	36 :山茶碗類輪花碗。37 :土師器小皿、下半部は手持ちヘラ削り。38 :土師器碗。ロクロ成形。39〜43 :土師器清郷型鍋、39・40：
114SI	44：灰釉陶器碗、K-90号窯期〜O-53号窯期。45：山茶碗の口縁。
125SI	46〜47 :灰釉陶器碗、O-53号窯期か。48 :山茶碗類で尾張産。
147SI	49 :山茶碗類の小碗で口縁が玉縁。51 :灰釉陶器碗でH-72号窯期。
173SX	52 :山茶碗類。53 :灰釉陶器碗、O-53号窯期。
177SI	54 :灰釉陶器で、O-53号窯期。
181SI	55 :山茶碗の口縁。
188SI	56 :山茶碗。57 :灰釉陶器碗、K-90号窯期。
264SI	58 :古墳時代前期の土師器壷類の胴部片。
303SI	59 :灰釉陶器碗、O-53号窯期。60 :古墳時代初頭の土師器屈折高杯。横方向のハケの後縦方向に疎らなヘラミガキ。61 :60と併行期の加飾壷口縁。内面に羽状文、外面凹線3条に棒状浮文、古墳時代初頭。
304SI	62 :土師器鍋、中世伊勢型初期段階。厚手の口縁端部が内側に凸となる。
316SI	63 :灰陶陶器碗、H-72号窯期。64 :土製支脚。竈用と推測され、底面最大径7.1cmで高さ7cm以上。
322SI	65 :灰釉陶器碗、H-72号窯期。
009SK	66〜67 :灰釉陶器碗で、67はH-72号窯期。
012SK	68 :土師器清郷型鍋。口縁は面取りがなされる。
019SK	69 :土製管状土錘、全長3.4cm。
090SK	70 :緑釉陶器碗の小片。K-90号窯期〜O-53号窯期。
115SK	71 :灰釉陶器、H-72号窯期。
121SK	72 :山茶碗類、渥美産か。
215SK	73 :山茶碗類、渥美産か。
121SK	74 :土師器清郷型鍋。
129SK	75 :灰釉陶器碗、O-53号窯期。
144SK	76 :土師器三河型甕、面取りされた口縁が外傾する、9世紀代。
151SK	77 :山茶碗類、小皿、13世紀以降。
167SK	78 :山茶碗輪花碗。
348SK	79 :古墳時代前期の土師器壷の口縁部に2条の凹線あり。
359SK	80 :縄文土器、竹管状工具で施文。

表２　出土遺物概要（2）

遺構	遺物概要（番号順）
004SD	81 :緑釉陶器碗、K-90号窯期以降。82 :山茶碗類小碗。83～84 :土師器清郷型鍋、83は口縁貼付で羽釜ふう、84は折り曲げて面取りしたもの。85 :古墳時代前期末～中期前半の土師器小型壷。
005SD	86～88 :灰釉陶器、86は段皿でK-90号窯期、87は碗の底部内面に環状？の刻線あり、H-72号窯期、88は碗でK-90～O-53号窯期、猿投窯産。89は山茶碗。90 :土師器疑清郷型鍋、角形の口縁特徴。91 :土師器伊勢型鍋、口縁端部折り返し肥厚する段階。
076SD	92 :灰釉陶器碗、O-53号窯期。
153SD	93 :山茶碗、渥美窯2a～2b期（12世紀後半）。94 :土師器鍋、外反する口縁は伊勢型に近く、胴部はハケ調整。
154SK	95 :条痕文土器の口縁、縄文時代晩期～弥生時代前期。
163SD	96 :山茶碗、渥美窯2a～2b期（12世紀後半～13世紀初頭）。
257SD	97～98 :山茶碗、輪花碗、2a期。99 :灰釉陶器碗、O-53号窯期。100 :山茶碗、97～98にの底部になるとみられる。101 :同小碗。102 :同、小型の鉢。103～110 :土師器類、103は灰釉陶器を模したと思われる高台形状で、胎土も精良、104～105はロクロ成形の小皿で回転糸切痕あり、106から110は清郷型・疑似清郷鍋で108はやや大きめの口縁部内面は面取りがなされているが、109のように明瞭な屈曲部がないまま口縁部となる清郷型あり、L字形口縁の新しい段階のものか。
258SD	111～112 :灰釉陶器、O-53号窯期以降。113～115 :山茶碗、12世紀後半、115は猿投産。116 :同、渥美産、2a期。117 :土師器ロクロ成形小皿。118～120 :土師器清郷型鍋、119～120は口縁部の屈曲ほとんどなし。121 :土師質管状土錘、長さ3.6cm。122 :土師器壷類の胴部下半、焼成前の線刻があり、古墳時代前期か。
033SK	123 :須恵器杯、NN-32号窯期～O-10号窯期古段階、8世紀中葉、猿投産。
050SD	124 :土師器ロクロ成形小皿、外反口縁が特徴。125 :土師器清郷型鍋、ほぼ筒形の口縁。
052SX	126～128 :山茶碗、渥美産。129 :須恵器甕。130 :灰釉陶器瓶類、平底の底部。
054SX	131 :灰釉陶器、H-72号窯期。132 :山茶碗。
069SX	133 :土師質管状土錘。
070SX	134 :灰釉陶器碗、H-72号窯期。
071SK	135 :山茶碗、猿投産か。136 :土師器小皿、手捏ね成形。
081SK	137 :灰釉陶器口縁部。138 :土師質管状土錘、長さ3.5cm。
085SX	139 :山茶碗、渥美窯2b期（12世紀末～13世紀初頭）。
162SK	140 :土師器ロクロ成形小皿、底部。
185SK	141 :土師器清郷型鍋、面取りした三角形口縁部。
186SK	142 :灰釉陶器、H-72号窯期。143 :土師器小皿。
083SX	144 :山茶碗輪花碗、渥美窯2a期。145 :灰釉陶器碗、H-72号窯期、内面に赤色顔料（漆）が広範に付着。分析あり【第4章第2・3節】。
105SD	146 :灰釉陶器碗、H-72号窯期。147 :土師器碗、灰釉陶器（0-53号窯期～H-72号窯期）を模倣したもの。胎土は精良。148 :土師器三河型甕、面取りされ直線的に外傾する口縁、9世紀後半。
107SK	149 :灰釉陶器広口瓶、O-53号窯期を中心とする。
084SX	150 :須恵器杯身、最末期の様相でI-17号窯期。151 :灰釉陶器段皿、O-53号窯期。152 :同、H-72号窯期。153～179 :山茶碗、154～156は輪花碗。164は底部内面に環状の焼成前刻書あり。165・168・172は底部に籾殻痕圧痕。180～184 :山茶碗、小碗。185～186 :山茶碗、鉢。以上の山茶碗類は渥美窯1b期か。187～189 :土師器供膳具、187は灰釉陶器模倣碗、188～189はロクロ成形小皿。190～192 :土師器清郷型鍋、口縁内外面を面取りし羽釜ふうの三角形口縁とする。193～197 :土師器清郷型鍋。193は肥厚する口縁の内・外・上の3面面取り、194～195は同様の面取りをする四角形口縁で後者はその張り出しが顕著、196～197は胴部上半が少しずつ肥厚する筒形口縁、内面は面取り。
148SX	196 :須恵器かえり付き蓋、湖西産7世紀後半。199 :同須恵器盤、8世紀後半。200・202 :土師器壷底部および甕口縁部、202は甑底部でハケ調整。203～204 :山茶碗、204は輪花碗、渥美窯1a期。205～206 :灰釉陶器碗、H-72号窯期。207 :白色土器の可能性がある灰釉陶器碗、12世紀代。208 :山茶碗、渥美産。209 :灰釉陶器。210 :清郷型鍋。211 :伊勢型鍋初期段階、肥厚させた口縁端部を折り返し気味に押さえ込む。212～214 :土師質管状土錘。
170SX	215 :須恵器瓶類口縁、やや色調暗い。216～224 :山茶碗、220は輪花碗。225 :白磁碗、太宰府分類Ⅳ類で太い玉縁のもの、11世紀後半～12世紀前半。226～227 :土師器ロクロ成形小皿、226は体部が内湾し器高もあることからやや古相、いずれも底部回転糸切痕。228 :土師器甕口縁、8世紀代か。229～231 :土師器清郷型鍋、内外面を面取りし羽釜ふう三角形口縁とし、231は端部を若干つまみ上げるのが特徴。232～236 :土師器清郷型鍋の角形平縁のもの、ただし235～236はその端部面取りが甘く、上端へ向かってやや三角形に近くなる。237～238 :同鍋で明瞭な口縁をつくらないタイプ、237は上端平面で238は少しずつ肥厚させた口縁が緩く外反する。

表３　出土遺物概要（3）

遺構	遺物概要（番号順）
112SK	239 :灰釉陶器碗。240 :山茶碗。241 :土師器清郷型鍋、断面三角形口縁。
318SX・同上層	242～246 :須恵器、242はかえり付き蓋で湖西産、7世紀後葉、243は杯身、244は8世紀前半か、245は湖西産で8世紀後半、246は長頸瓶で8世紀代。247 :土師器長胴甕、口縁大きく外反しかつその内面がハケ調整、８世紀前葉～中葉。248～249 :灰釉陶器、248は段皿でH-72号窯期、249は輪花碗でO-53号窯期。250～253 :山茶碗輪花碗、渥美窯1a期か。254 :山茶碗内面上部に凹線廻る。255 :須恵器碗。256～257 :山茶碗。258 :山茶碗、底部内面に環状の焼成前刻書あり、白磁碗の模倣、玉縁口縁か。259～262 :灰釉陶器碗の底部、O-53号窯期～H-72号窯期。263 :山茶碗。264 :灰釉陶器平瓶の胴部。265 :土師器ロクロ成形碗、灰釉陶器碗の模倣か。266 :同碗、底部糸切痕、胎土は灰釉陶器模倣碗に比べて砂粒多い、ほぼ完形で出土。267 :同碗底部、回転糸切痕。
318SX下層	286 :須恵器、8世紀後半、猿投産とは異なるか。287 :灰釉陶器皿、O-53号窯期、底部外面に墨書「□」あり。288～289 :土師器長胴甕、口縁大きく外反する8世紀前半。290 :緑釉陶器碗、K-90号窯期～。291 :山茶碗、内面墨痕付着。292～295 :山茶碗。296 :灰釉陶器碗。297～299 :山茶碗。300～305 :灰釉陶器、O-53号窯期～H-72号窯期、305は底部外面に金属滓付着、分析あり【第4章第3節】。306 :山茶碗、渥美窯2期（13世紀初頭）。307～308 :土師器三河型甕、直線的に外反する口縁、9世紀後半。309～315 :土師器清郷型鍋、口縁上端の内外面を面取りし横方向へつまみ出し、特に311～313は断面三角形の羽釜ふう口縁、314～315はやや上方へつまみ上げ。316から318 :土師器清郷型鍋、317～318は外反口縁.319 :土師器甕胴部。320 :土師器
318SX下層下部	328 :須恵器無台杯。329～333 :山茶碗、331は輪花碗で渥美窯1b期。334～338 :清郷型鍋、貼付け口縁部をやや上方へつまみ上げている。339～343 :土師器清郷型鍋、339～340は角形もしくはそれに近い形状の貼付け口縁、341～343は肥厚する口縁部を指ナデ成形し角形を意識した形状とし、特に342～343は口縁下部に凹みが生じている。
318SX底	344～347 :清郷型鍋、344は内面面取りし貼付け口縁をやや上方へつまみあげており、345～347は同様の貼付け口縁ながら面取りは省略されている。348 :弥生時代後期～古墳時代前期の土器片、櫛状工具の刺突文、赤彩の区画か。
376SU	349 :土師器小型壷、古墳時代前期か。350 :土師器大型壷、胴部外面下半部はヘラ削り、半ばは指ナデおよび板ナデ、上半は縦～斜のヘラミガキ、同内面上端は板ナデ、外面上部に2条の刻線にによる絵画か。351 :縄文土器浅鉢、上部施文の凹部に赤色と黒色の付着物、分析あり【第4章第3節】。
002SX	352 :土師器甑もしくは土製竈の把手。353 :山茶碗。
003SX	354～355 :灰釉陶器段皿、K-90号窯期か。
検出1	356 :灰釉陶器、口縁が内湾する特異な器形。357 :磁器染付碗、江戸時代半ば以降。358 :須恵器杯蓋、7世紀後半。
検出2	359 :須恵器無台杯、8世紀後葉～9世紀中葉、底部外面に墨書あり。360～368 :灰釉陶器碗、H-72号窯期～百代寺窯期、365は底部内面に焼成前線刻あり。369～370 :山茶碗。371 :山茶碗類小皿。372～373 :山茶碗類片口鉢。374～377 :土師器供膳具、375は灰釉陶器模倣碗、376は同皿模倣か、377は小皿。378 :土師器三河型甕、9世紀後半。378～379 :土師器清郷型鍋、380は内面面取りを省略。
検出３・黒色土層	388～390 :古墳時代前期の土師器、388は縦方向ミガキのある高杯脚部、388は台付甕の台部、390は壷類の底部。391 :須恵器大型甕の頸部、7世紀代。392 :土師器長胴甕、口縁内面ハケ調整、8世紀前半。393～394 :山茶碗。395 :山茶碗類小碗（輪花碗）。396～398 :土師器小皿。399～401 :土師器清郷型鍋。
表土・トレンチ・ベルトほか・調査区南壁	402 :弥生土器壷、口縁に凹線文。403～405 :須恵器、403は蓋でC-2号窯期か、404は杯身でI-17号窯期、405は無台盤で8世紀後葉～９世紀前半。406～409 :灰釉陶器、406～408は碗で408底部内面に焼成前刻書あり、絵画の一部か、409は水瓶の下半部、9世紀代。410～416 :山茶碗、410は極めて簡略化された輪花表現あり、概ね12世紀台。417～418 :須恵器もしくは中世陶器甕、底部平底で胴部下端まで平行タタキなされる。419～422 :土師器碗もしくは小皿、419は底部糸切痕あり、碗の可能性。422～424 :土師器三河型甕もしくは鍋の口縁、424は口縁上端を面取り。425～427 :土師器清郷型鍋、貼付けた口縁を横方向につまみ出し、内面の面取りは省略。428～437 :疑似清郷型鍋、428～433は概ね口縁が角形、434～436はほぼ寸胴もしくは軽微な口縁外反、437は435～436の底部とみられ、部厚い丸底。438 :弥生後期～古墳時代初頭の壷底部、内外面ハケ調整。
08B区石器	S-8～S-10 :砥石、S-8は凝灰質砂岩、S-9は砂質凝灰岩、S-10は片麻岩。S-11 :摺石、ほぼ全面を使用、石材は砂岩、一部に敲打痕。S-12 :両刃の磨製石斧、変玄武岩。S-13～S-17 :打製石斧、S-13～15・17の石材は緑色片岩、S-16は変玄武岩。S-18～S-19は石鏃、S-18はチャート、S-19は黒曜石。S-20～21 :剥片、S-20はチャート、S-21は流紋岩。S-22～S-26 :石核。S-27～S-29はナイフ形石器か、S-27・28が黒曜石、S-29は溶結凝灰岩。

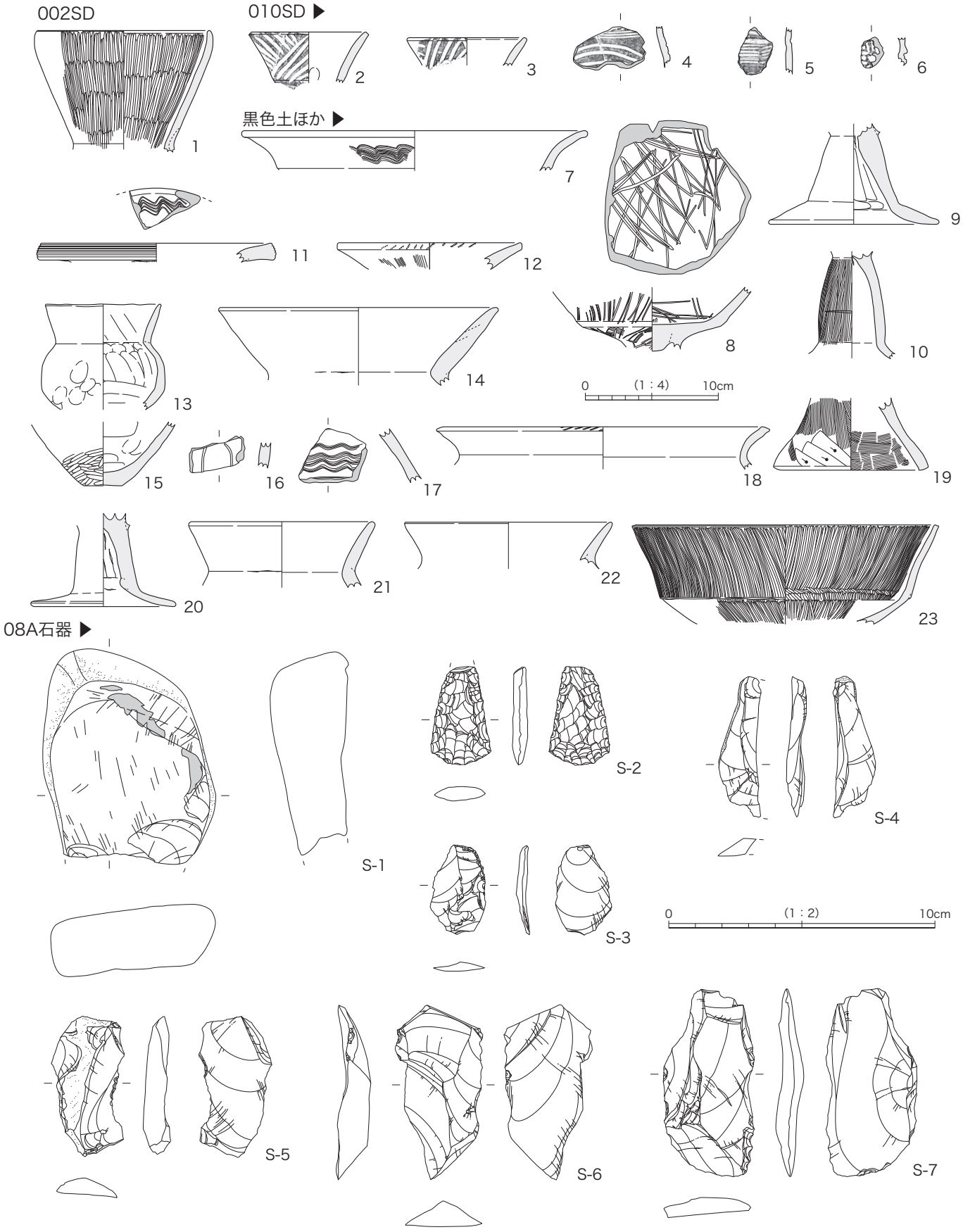


図 39　出土土器・石器実測図（08A 区）

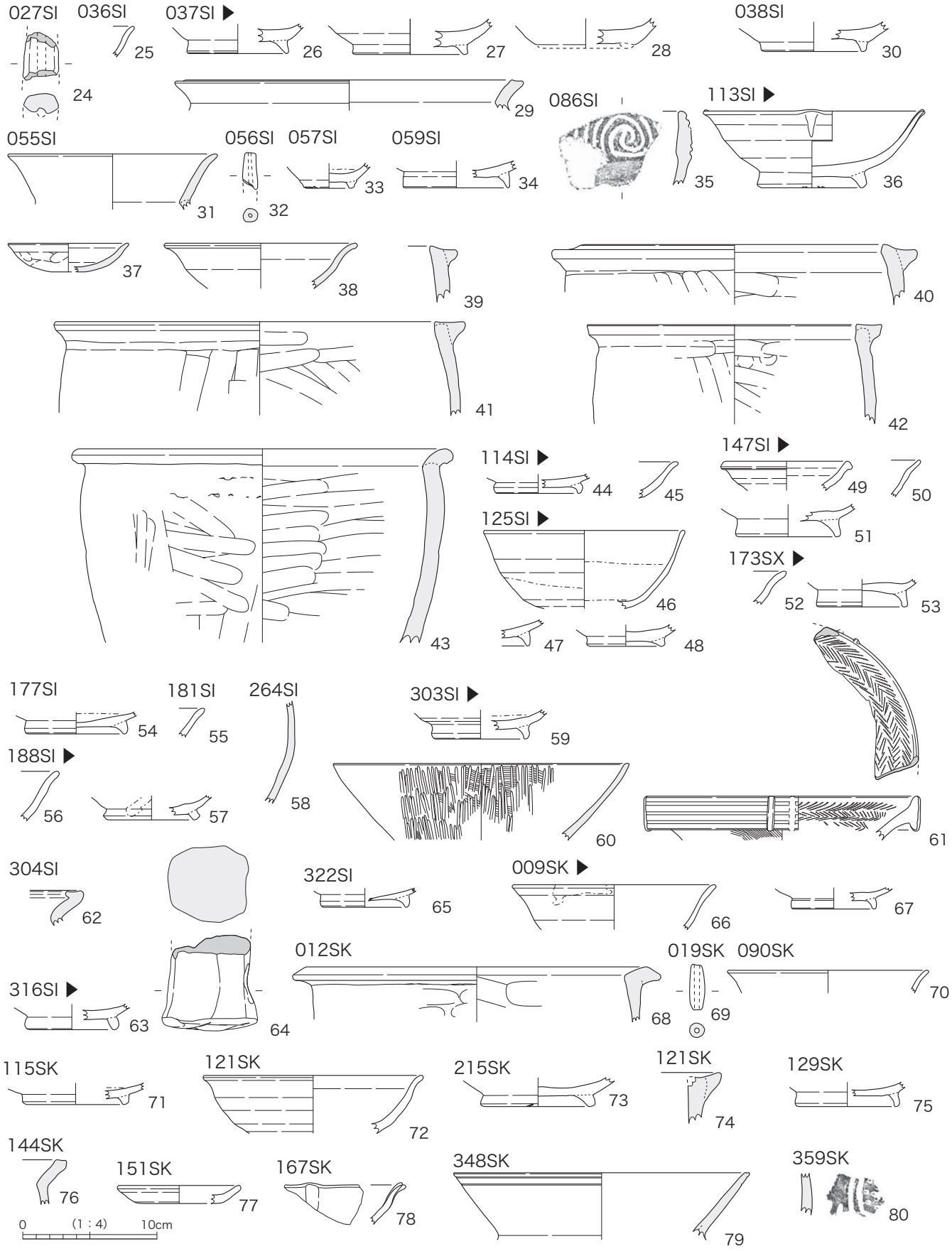


図 40　出土土器実測図（08B 区竪穴建物 SI、土坑 SK）

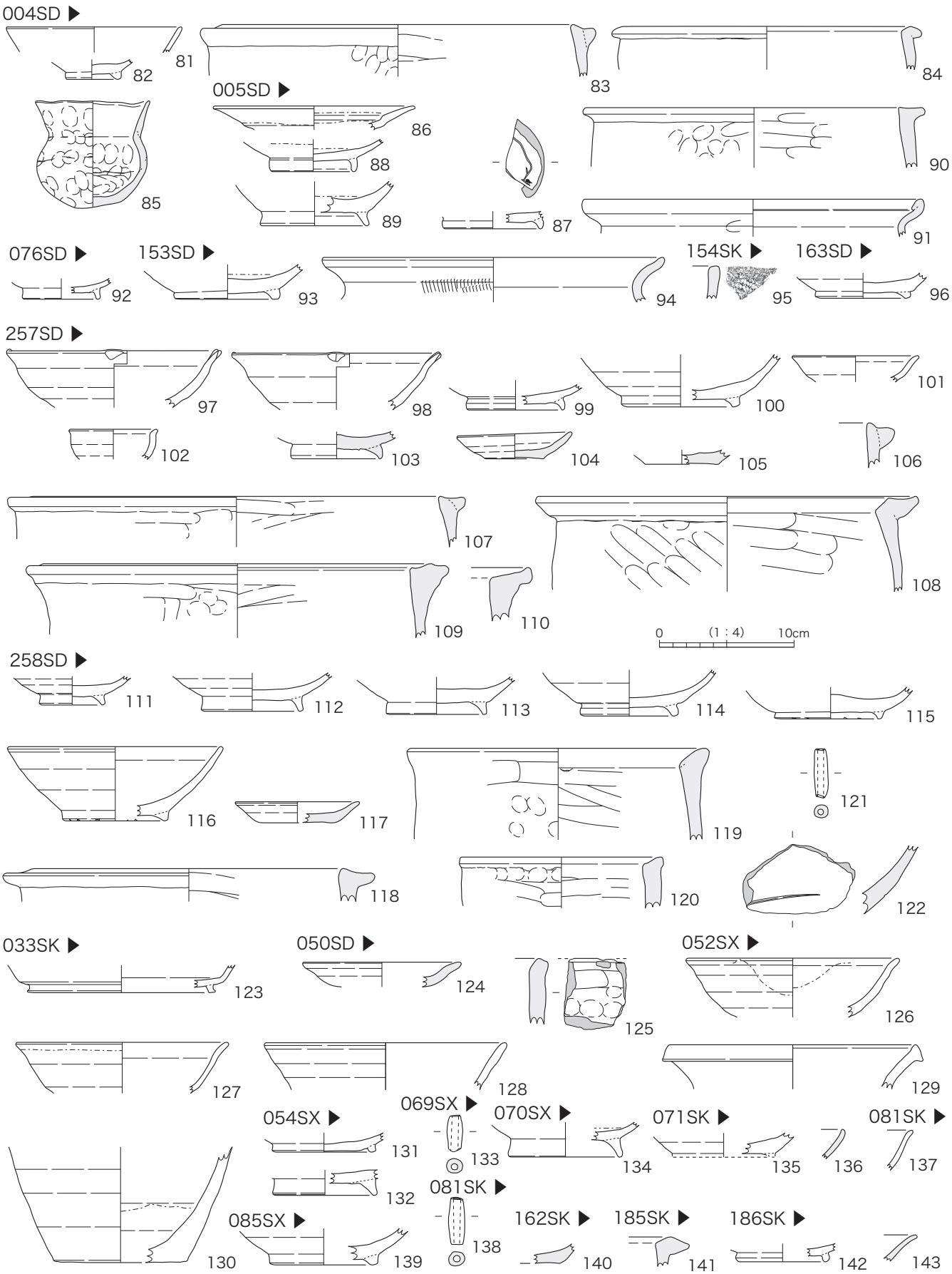


図 41　出土土器実測図（08B 区溝 SD、一部 SK）

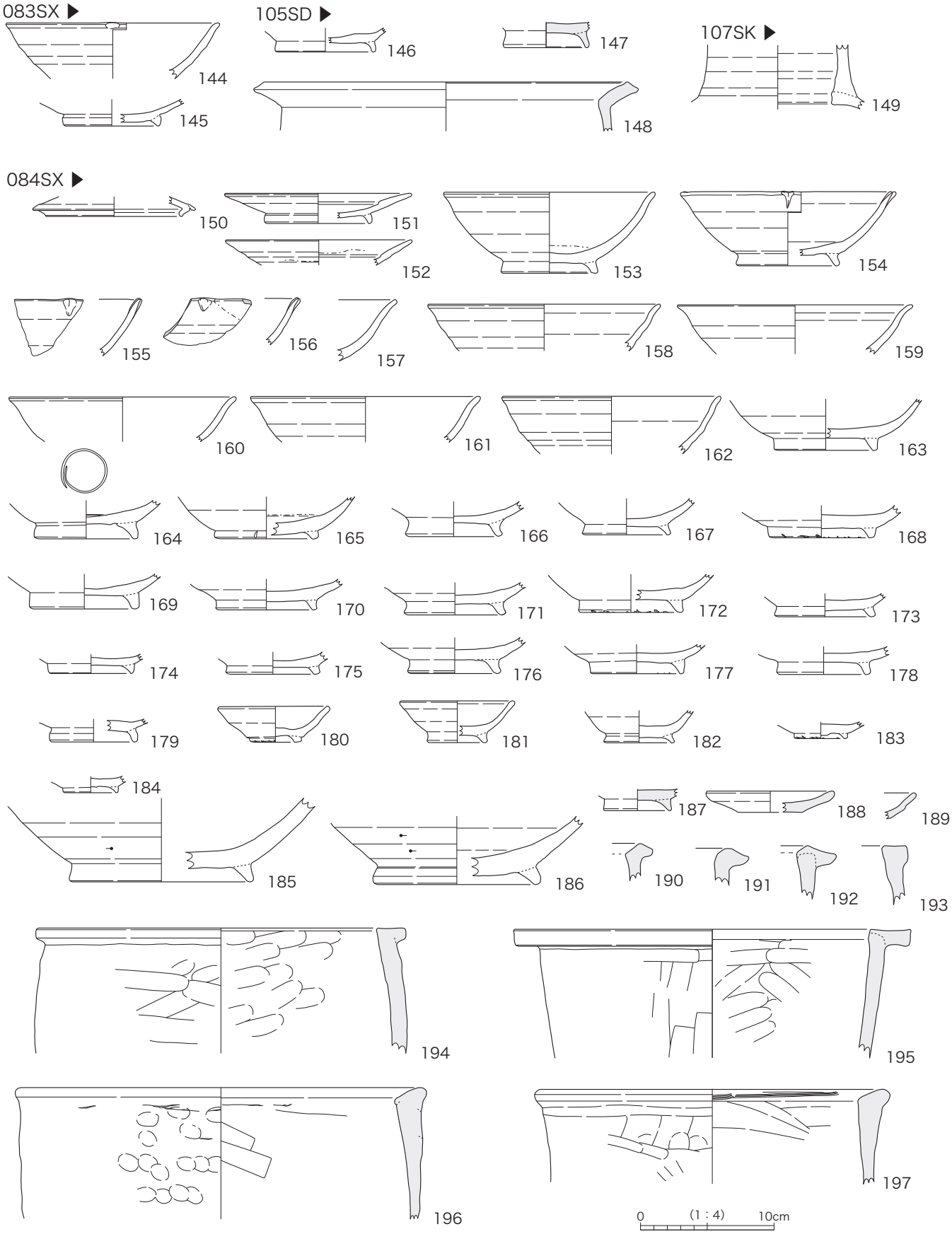


図 42　出土土器実測図（08B 区溝、谷地形上層 084SX）

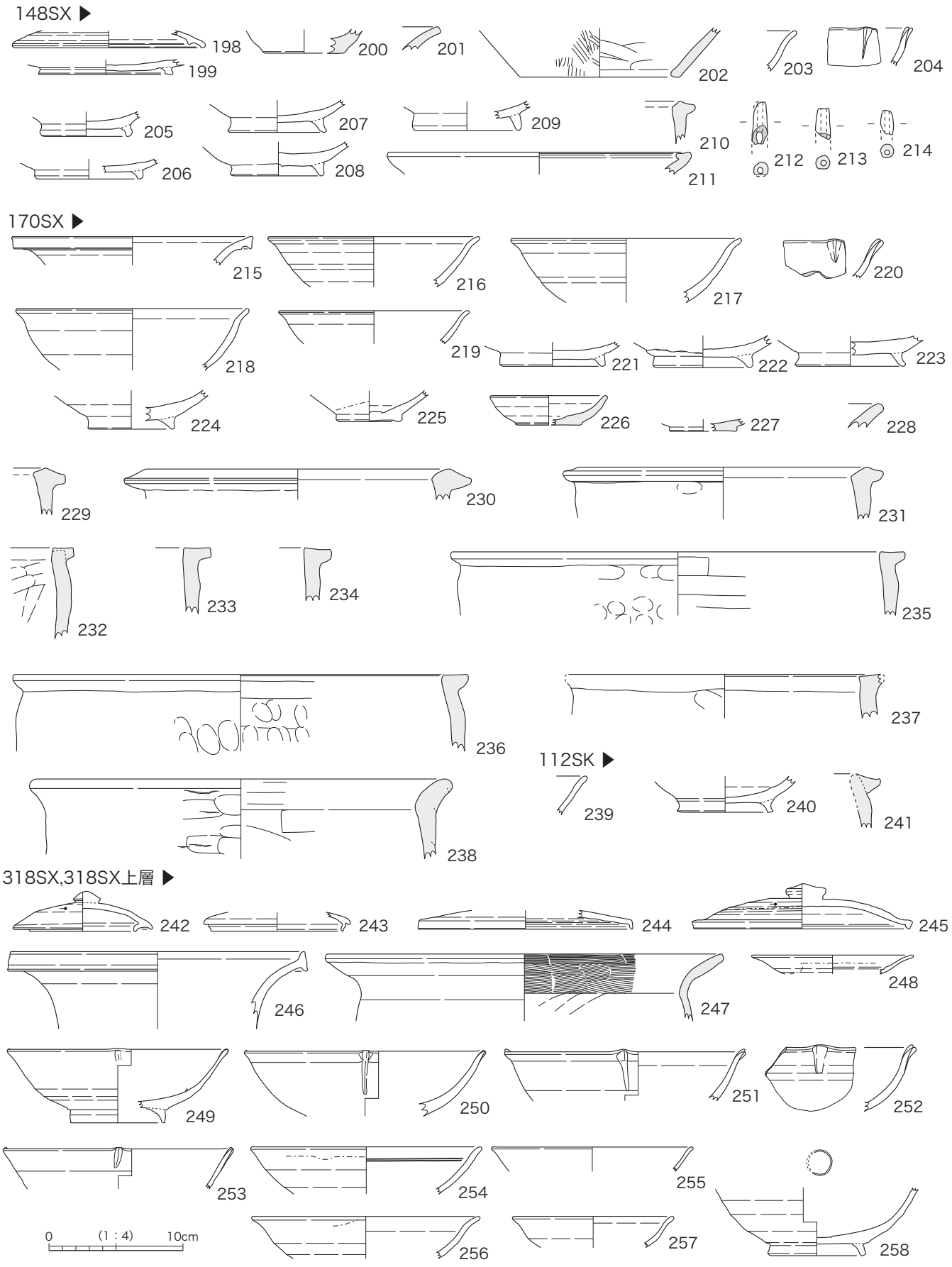


図 43　出土土器実測図（08B 区谷地形 148SX…上端・170SX…底）

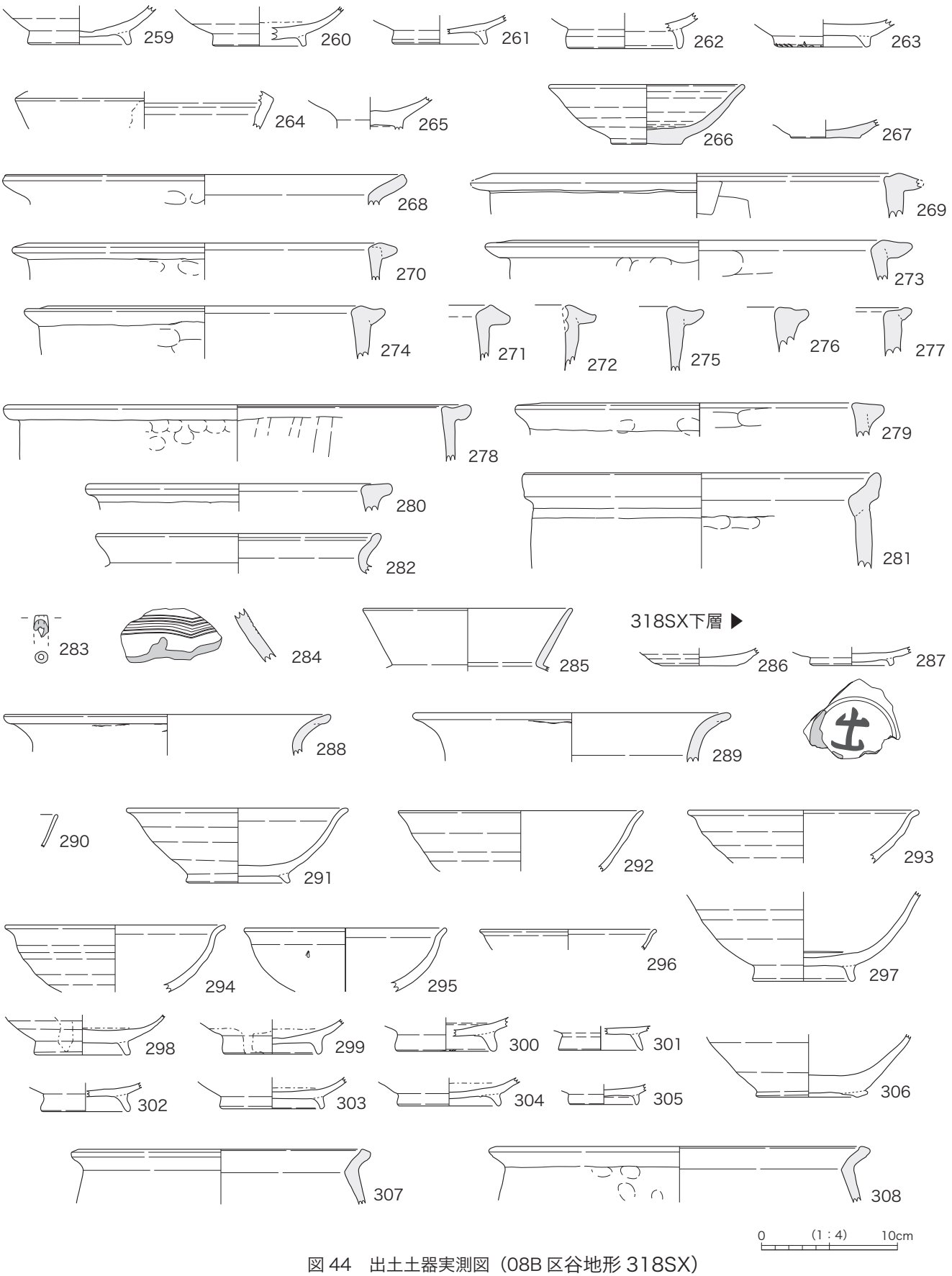


図 44　出土土器実測図（08B 区谷地形 318SX）

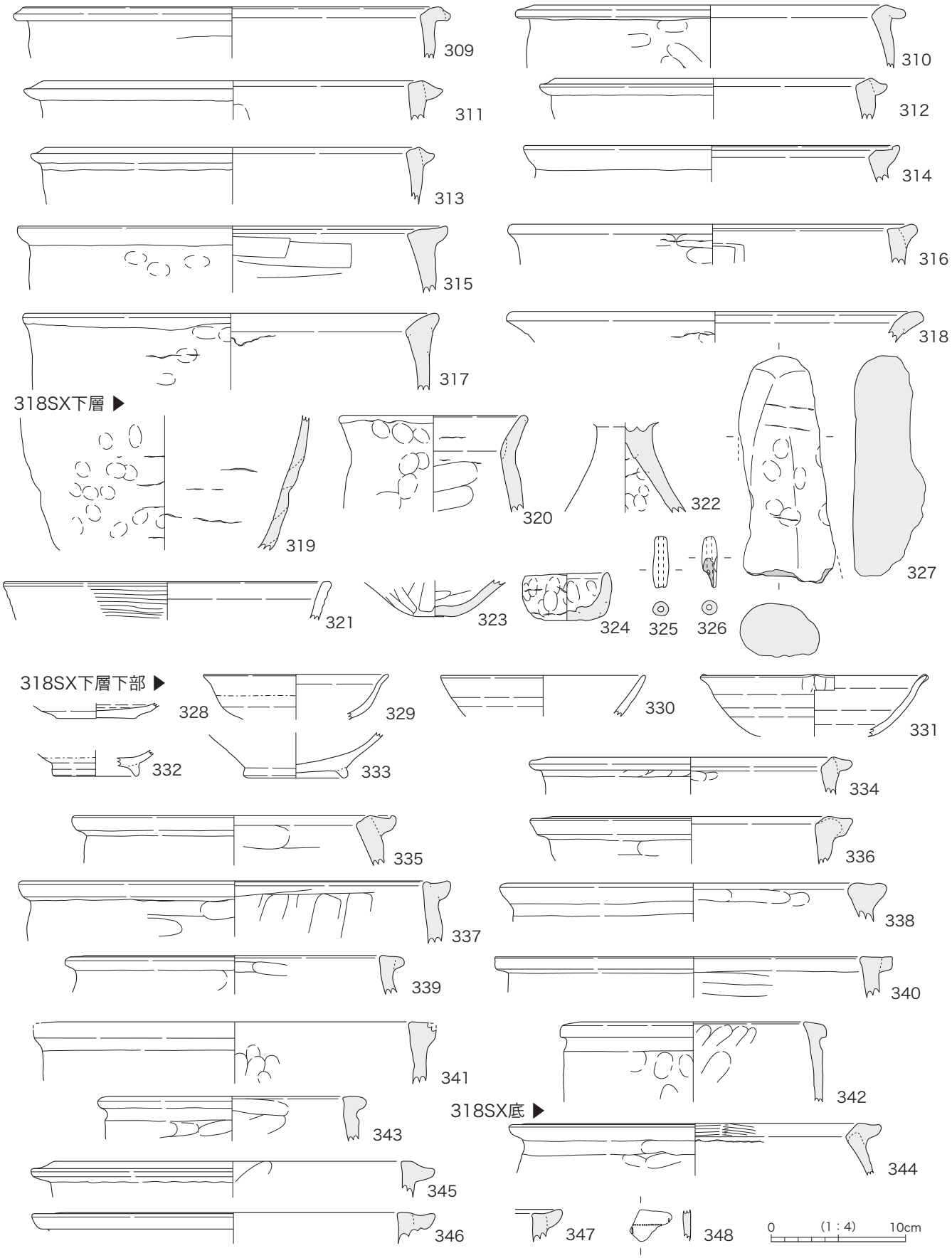


図 45　出土土器実測図（08B 区谷地形 318SX 下層および下層下部）

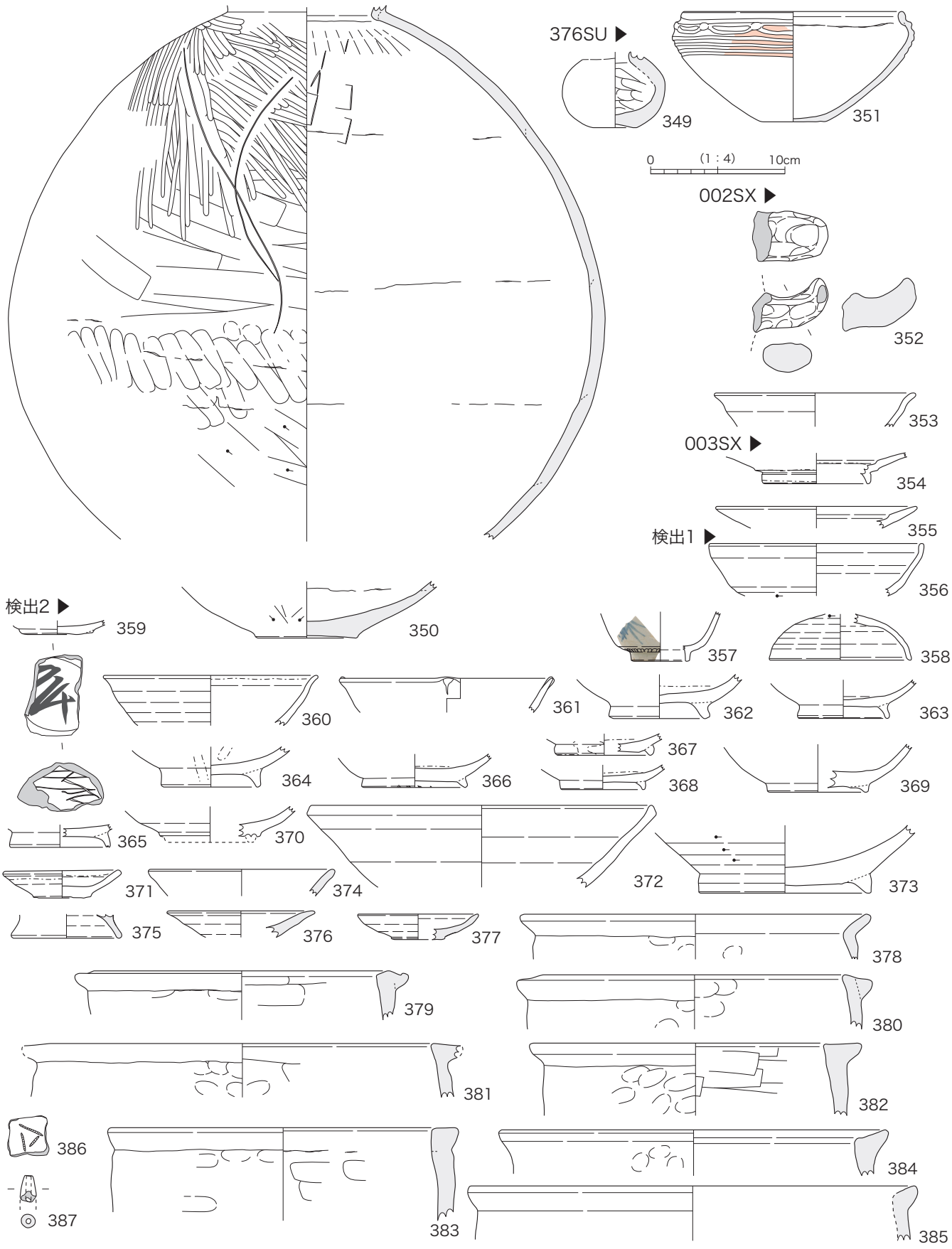


図 46　出土土器実測図（08B 区 376SU・検 1 とその遺構・検 2）

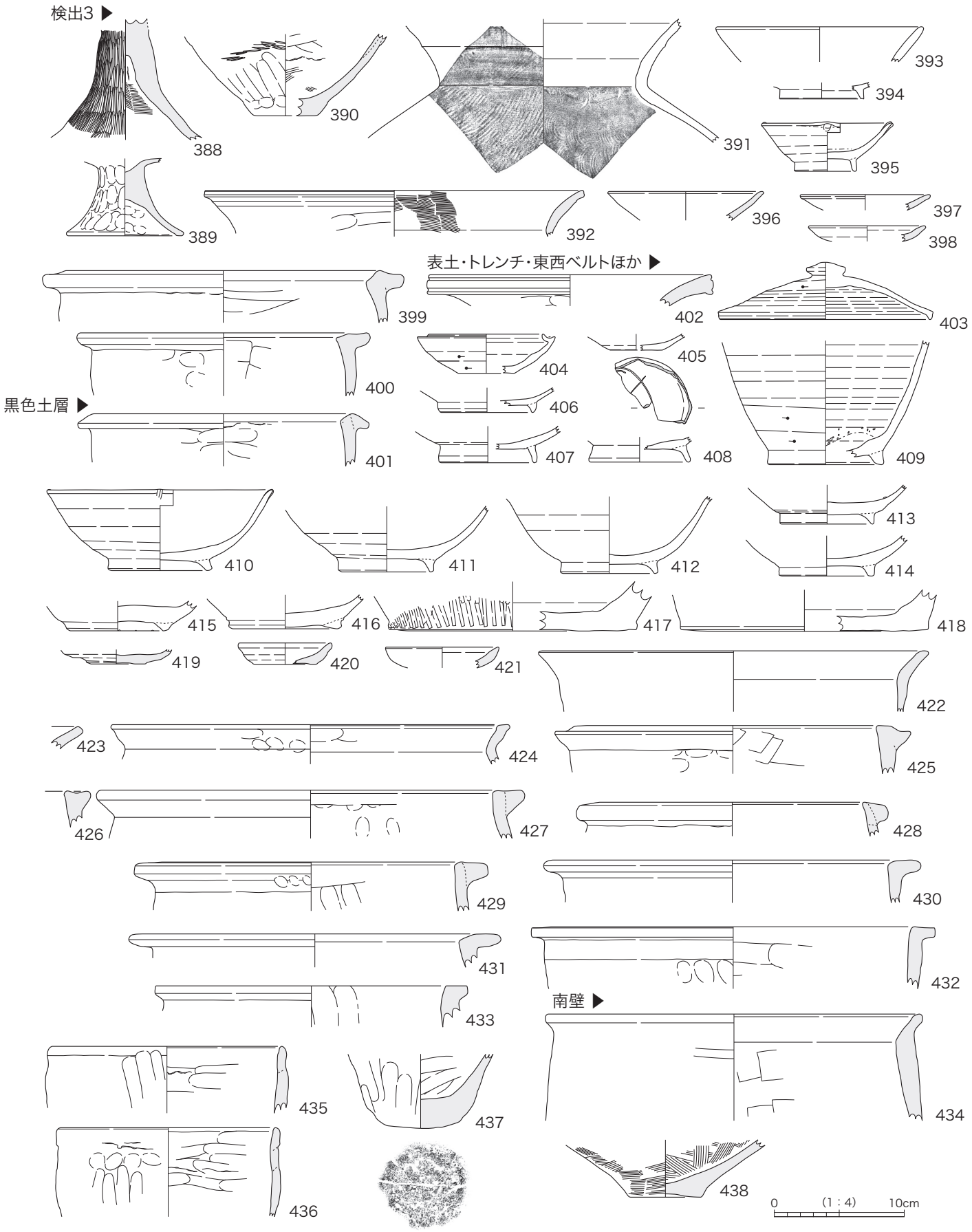


図 47　出土土器実測図（08B 区検 3～表土・トレンチ・調査区壁面）

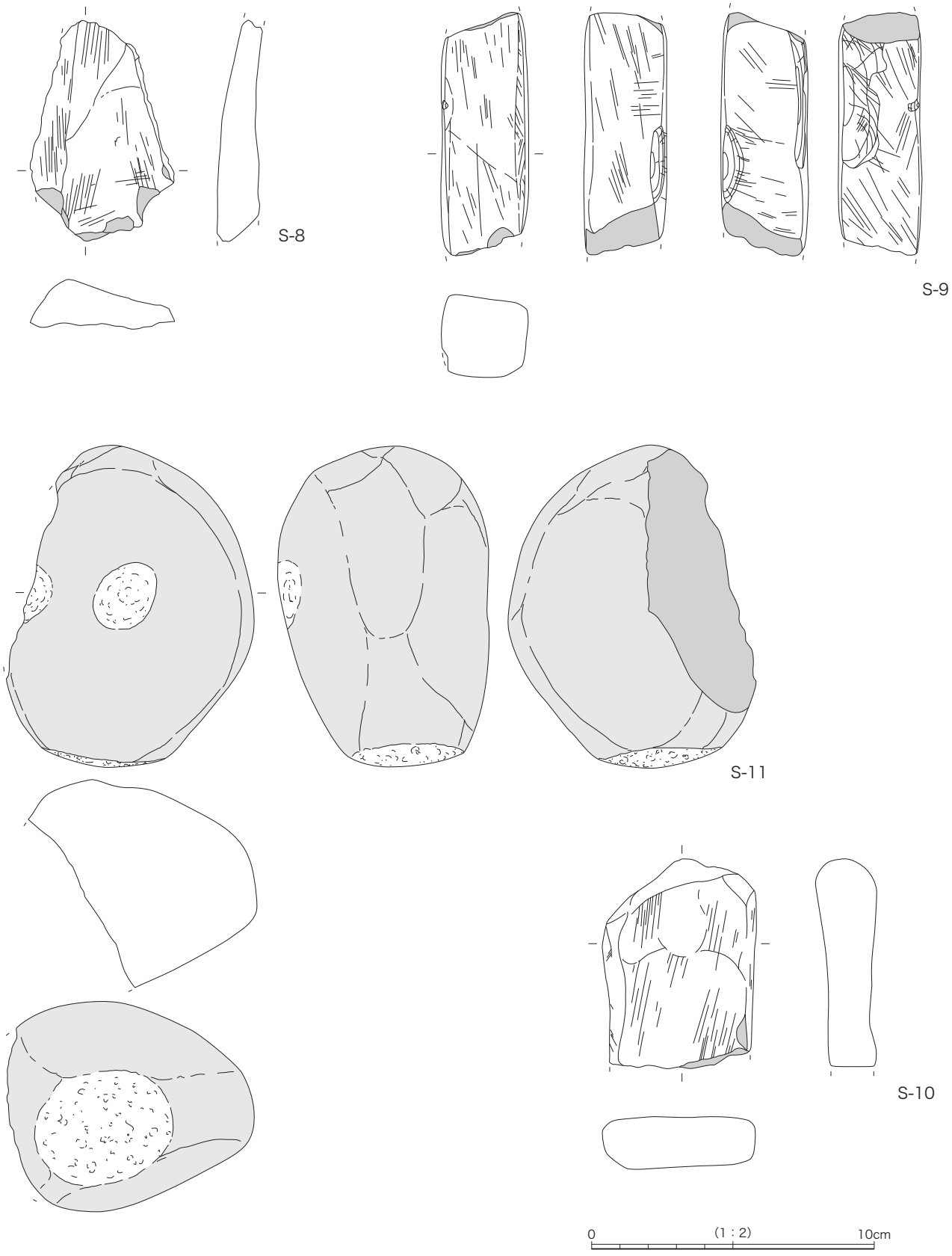


図 48　出土石器実測図（08B 区）

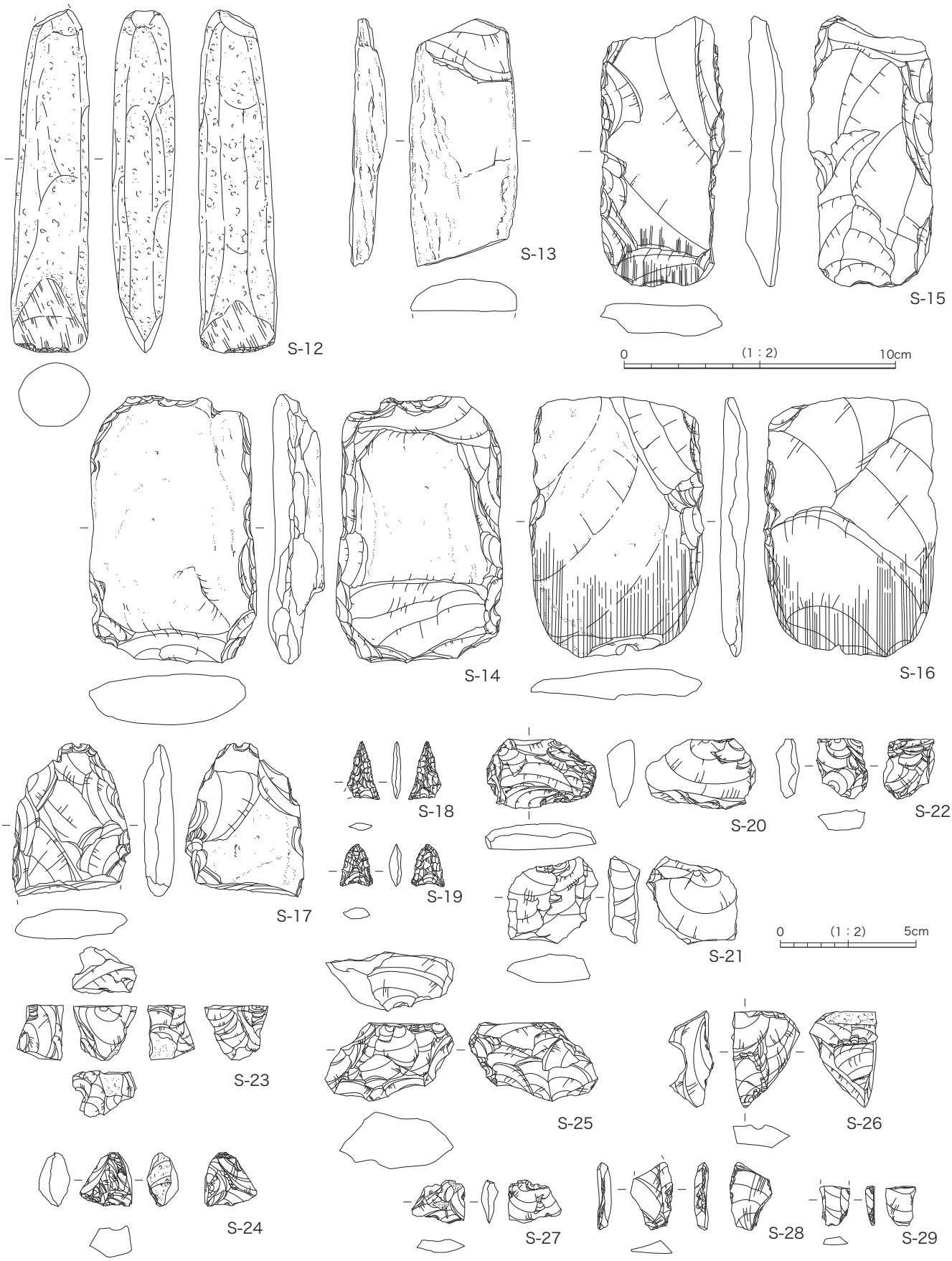


図 49　出土石器実測図（08B 区）

谷地形　最も遺物が多く出土したが谷地形であるが、遺構の記述【第 2 章第 1 節】で区分したように（1）（1）084SX、（2）318SX 上～下層、（3）318SX 下層下部、（4）318SX 底に区分した。なお、(2) には層位不明のものも含まれているため、山茶碗などではやや古相のものが提示されている。(1) では山茶碗類の碗・小碗と鉢、それに清郷型土師器鍋が主体である。まだ小皿が普及する以前と考えられるが、土師器の無台小皿（188）はある。(2) では山茶碗類に渥美窯編年 1a 類に相当する輪花碗がある（250・251）。(2) からはこれ以外にも 7 世紀末～ 8 世紀中葉の須恵器・土師器（242 から 247）があり、特に 242 と 244 は上層からの出土である。このように下層より古い時期の遺物が混入する契機としては、同層が単なる廃棄の連続の結果ではなく、周辺にある古い時期の遺構や包含層を切り崩している可能性が考えられる。次いで (3) では清郷型鍋がその大半でもある。口縁形状による分類では、くの字形（334 ～ 336）、L 字形（337 ～ 339）、平縁角形（340）、平縁（341 ～ 343）と多種類が存在する。しかしこの段階ではハの字形はみられない。最下層の (4) では清郷型鍋くの字形口縁（344）、羽釜形（345）、L 字形（346・347）がある。

土坑・溝　今次調査区では廃棄のために掘られた土坑は存在していない。したがって土坑・ピットからの出土遺物も少ない。状況として竪穴状遺構と変わらない。

ただし 318SX 谷地形の東脇で検出された土器集積 376SU は、古墳時代前期に相当し、中でも大型の壺（E-350）は胴部上半に焼成前の線刻があり注目される。同壺の上半部を横方向にヘラナデ、さらにヘラミガキの後 2 条の曲線が「Y」の字状に刻まれる。下端は彫りが浅く不明瞭である。線刻後に消す行為はなされていない。これに共伴するのが E-349 の小型壺である。出土地点が近いために土器集積に含まれている縄文時代晩期の浅鉢（E-351）は薄手精製されたもので上半部の文様帯にはベンガラによる赤色の装飾がなされている。漆を接着剤としている可能性もあるが、分析でウルシオールは検出されなかった【第 4 章第 2 節】。08B 区では磨製石斧（S-12）や打製石斧、石鏃が出土しており、当該期に含まれるものであろう。

第 3 節　金属製品

概観　出土した金属製品は浅いコンテナ 1 箱に収納できる量である。仮番号は m001 ～ 056 まであり、鉄滓と釘、鉄分を含む遺物が大半を占めている。また、その出土遺構は 002SX ～ 005SD といった中世以降と考えられるもので多く、これについては遺物の時期の決め手がない。次いで多い谷地形 318SX からの出土は、12 世紀代の土器・陶器と共伴していることや、出土層位が谷上からの残滓廃棄と考えられることから、時期や性格が比較的限定されるものと考える。この観点から金属製品について記述する。

刀子　M-1 は 318SX 出土の刀子である。全長 17.2cm で全体に錆化が著しい。M-2 は 005SD 出土で刀子の一部である。残存長は 2.4cm である。出土遺構からこれらは平安時代以降のものと思われる。

釘　M-3 ～ 12 は釘（和釘）である。いずれも一部が残存しているのみでまた出土遺構は 005SD や 258SD のような中世以降のものが多い。M-10 は唯一 318SX 下層からの出土であり、12 世紀代に関わる釘である。M-12 は一部に植物が付着していた痕跡が認められる。

鉄塊系遺物　形状は不明であるが鉄製品もしくはそれが融解したと考えられるものである。M-13 は棒状、M-14 は扁平なものと分けられる。ともに検 1 面の上位で出土したものである。

銅製品　M-15 は銅製品で、厚みが少ない扁平で残存部分は不整形な楕円形をしている。竪穴状遺構 056SI から出土。M-16 は薄い鉄の素地にこれも薄い銅が融着もしくは貼付けた製品である。竪穴状遺構 181SI から出土。M-15・16 ともにどのような製品の一部であるのか不明であるが、出土位置は比較

的近い関係にある。

鉄滓　出土量などからして小鍛冶工程の際に出る残滓と考えられる。M-17 ～ 24 は形状から椀型滓に分類されるもので、特に M-19 ～ 23 はほぼ全形が判明するものである。M-25 は流動滓で鍛冶炉などから流出した状態で固化したものである。M-26 は鞴（ふいご）の羽口という土製品である。流動滓が付着していることから鍛冶炉の一部として機能していたことが明らかである。M-27 も土製品であるが、炉壁の一部である。植物質痕が認められる。以上の実測図には、鉄製品としては除外されるべきものである白色石材の付着について注記してある。石材が流動滓と炉にも付着が認められることから、鍛冶炉での工程で必要な物質であるといえる。

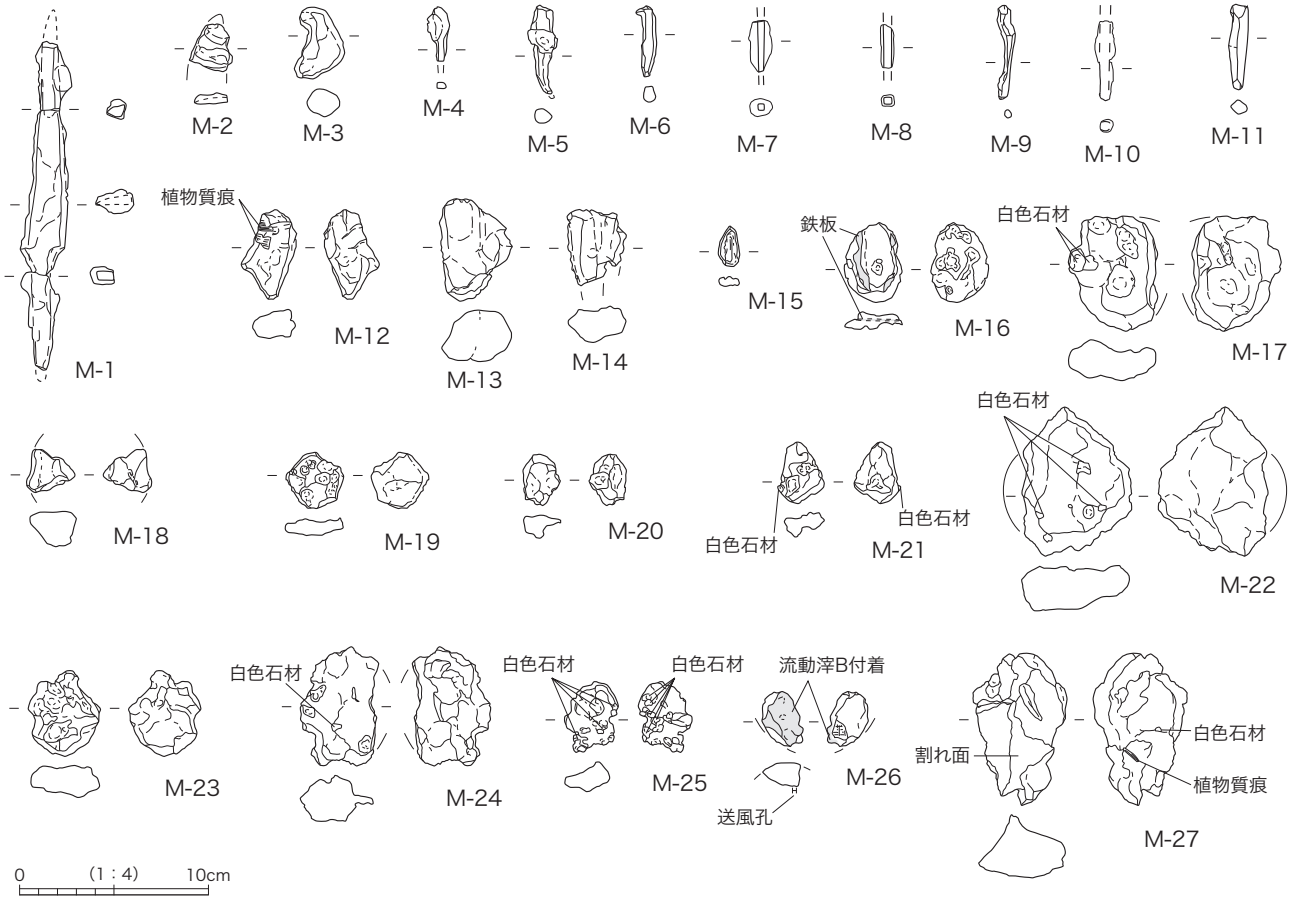


図50　出土金属製品・関連遺物実測図

第 4 章 自然科学分析

第 1 節　古代土師器甕の胎土分析と年代測定

（1）目的と方法

分析の対象と目的　加原遺跡の谷地形や竪穴状遺構などからは、平安時代中～後期の灰釉陶器や山茶碗に共伴して多数の土師器甕が出土している。これらは奈良時代から平安時代前期に三河国域を中心に分布する器壁の薄い長胴甕（以下、三河型甕）とは異なり、寸胴で口縁を中心に厚みのある形状が特徴的である。また器面の最終調整も粗雑である。これには、清郷型鍋に分類される、羽釜の影響を受けたと考えられる一群を含んでいる。同甕は三河国域を中心とする東海地域に分布していることは 1990 年代から指摘されており、共通する黒褐色系の色調から特定の生産地から流通している可能性も考えられていた。

本節では、加原遺跡出土の当該甕および東三河地域の三河型甕を中心に、駿河・尾張・伊勢・美濃の三河国域外出土の清郷型鍋を対象とした胎土分析の成果を報告する。以上の対象に東三河地域の三河型甕を加えたのは、当該地域内における土師器胎土の時間的変化を観察するためであるとともに、本分析が、先に実施した西三河地域を中心とする同甕の胎土分析成果［愛知県埋蔵文化財センター、藤根 2005］の延長に位置づけているためでもある。先行分析では、西三河地域の三河型甕は、特定の珪藻化石を包含していることから限定された生産拠点もしくは粘土採取地点の可能性を指摘している。この成果が東三河地域にも相当するのか、そして清郷型甕への転換はどの段階にみられるのか、これらの課題に対して一定の指針を得ることも目的としている。　（永井邦仁）

はじめに　土器の胎土分析は、一般的には製作地の推定を目的として行われる場合が多い。しかしながら、例えば胎土中に含まれる岩石片の鉱物組成から、砂粒物の示す地域がいずれであるかを推定するのは容易でない。土器は、基本材料として粘土と砂粒などの混和材から構成されるが、粘土材料が比較的良質とも思える粘土層から採取されていたことが、粘土採掘坑の調査から推察される［藤根・今村，2001］。また、粘土自体に珪藻化石やプラント・オパール、放散虫化石が混在している場合があり、材料の粘土が生成された時の環境がわかる。

一方、混和材としての砂粒物は、粘土層から粘土を採取する際に、粘土層の上下層や周辺に分布する砂層などから採取されたと予想される。東海地域の弥生時代後期の赤彩を施したパレススタイル土器では、3 分の 1 程度の土器に、砂粒物として火山ガラスが多量に含まれている［藤根，1998］。これらの火山ガラスは、粘土採取場所の上下層や周辺に分布するテフラ層由来と考えられる。このように胎土分析においては、粘土や混和材について微化石類およびテフラなどの鉱物を含めて検討する必要がある。

試料と方法　本節では、薄片の偏光顕微鏡観察による胎土分析を行った。

試料は、新城市加原遺跡から出土した清郷型甕のほか、三河型甕、弥生後期～古墳前期の壺や高杯など 19 点、比較試料として県内 16 遺跡と県外 12 遺跡から出土した清郷型甕など合計 113 点である【表 4・5】。

分析方法は、土器薄片の偏光顕微鏡観察を行い、胎土中の粘土および砂粒の特徴について調べた。各土器片は、以下の方法で処理して土器薄片を作製した。

(1) 試料は、はじめに岩石カッターなどで整形し、恒温乾燥機により乾燥させた。全体にエポキシ系樹脂を含浸させ、固化処理を行った。これをスライドグラスに接着し、接着面と反対の面に平面を作製した後、同様にしてその平面の固化処理を行った。(2) さらに、研磨機およびガラス板を用いて研磨し、平面を作製した後、スライドグラスに接着した。(3) その後、精密岩石薄片作製機を用いて試料を切断

表4　胎土分析を行った試料とその詳細(1)

分析No.	試料番号	県	市町村	遺跡名	分類	地区	遺構・層位	報告書	頁	図版	番号	所蔵
1	MS012	愛知県	あま市	大淵遺跡	三河型 B		SD90	『大淵遺跡』		50-599	4	県埋文調査セ
2	IM001		一宮市	清郷遺跡	清郷型 く字	-	包含層	未掲載	-	-	-	一宮市博
3	OK001		稲沢市	尾張国府跡	清郷型 く字	Q地区	暗褐色層	尾張国府跡Ⅳ		8	29	稲沢市教委
4	OK002				清郷型 く字	Q地区	暗褐色層	尾張国府跡Ⅳ		8	35	
5	OK003				清郷型 く字	Q地区	暗褐色層	尾張国府跡Ⅳ		8	36	
6	OK004				清郷型 く字	Q地区	暗褐色層	尾張国府跡Ⅳ		8	39	
7	OK005				清郷型 L字	Q地区	暗褐色層	尾張国府跡Ⅳ		8	42	
8	MS007		岩倉市	御山寺遺跡	清郷型 く字	07D区	NR138	御山寺遺跡	P.17	図3-16	80	県埋文調査セ
9	MS008				清郷型 L字	07D区	NR138	御山寺遺跡	P.17	図3-16	82	
10	MS009				清郷型 く字	07E区	NR024	御山寺遺跡	P.18	図3-17	135	
11	MS010				清郷型 羽釜	07E区	NR024	御山寺遺跡	P.18	図3-17	138	
12	MS011				清郷型 く字	07E区	NR024	御山寺遺跡	P.18	図3-17	141	
13	MS001		清須市	朝日西遺跡	清郷型 L字	59E区	SK238	『朝日西遺跡』		48-72	1911	
14	MS002				清郷型 く～L字	59E区	SK238	『朝日西遺跡』		48-73	1912	
15	MS003				清郷型 く字	59E区	SK238	『朝日西遺跡』		48-75	1914	
16	MS004				清郷型 ハ字	58区	Ⅰ・Ⅱ層	『朝日西遺跡』		49-131	1970	
17	MS005				清郷型 く字	58区	Ⅰ・Ⅱ層	『朝日西遺跡』		49-134	1973	
18	MS006				清郷型 平縁	58区	Ⅰ・Ⅱ層	『朝日西遺跡』		49-135	1974	
19	MS016		幸田町	東光寺遺跡	三河型 B	90B区	SB07	『東光寺遺跡』		図版83	1053	
20	MS017				遠江型	90B区	SB07	『東光寺遺跡』		図版83	1057	
21	IG001		新城市	石岸遺跡	前三河型	08B区	包含層	未掲載	-	-	-	
22	IG002				前三河型	08B区	包含層	未掲載	-	-	-	
23	IG003				前三河型＋	08B区	(サブトレンチ)	未掲載	-	-	-	
24	IG004				三河型 A	08B区	包含層	未掲載	-	-	-	
25	IG005				前三河型 伊勢系？	08B区	包含層	未掲載	-	-	-	
26	IG006				三河型 A	08B区	包含層	未掲載	-	-	-	
27	IG007				三河型 A–	08B区	包含層	未掲載	-	-	-	
28	IG008				三河型 A–	08B区	包含層	未掲載	-	-	-	
29	IG009				三河型 A? ※小片	08B区	包含層	未掲載	-	-	仮-217	
30	IG010				三河型 A– 小型	08B区	包含層	未掲載	-	-	-	
31	IG011				三河型 B＋	08B区	包含層	未掲載	-	-	-	
32	IG012				三河型 B	08B区	包含層	未掲載	-	-	-	
33	IG013				三河型 B	08B区	包含層	未掲載	-	-	-	
34	IG014				三河型 B	08B区	包含層	未掲載	-	-	-	
35	IG015				三河型 B＋～C–	08B区	包含層	未掲載	-	-	-	
36	IG016				三河型 C＋	08B区	包含層	未掲載	-	-	-	
37	IG017				三河型 B～B＋	08B区	包含層	未掲載	-	-	-	
38	IG018				三河型 C	08B区	包含層	未掲載	-	-	-	
39	IG019				三河型 B＋	08B区	地表面	未掲載	-	-	-	
40	IG020				杯	08B区	包含層	未掲載	-	-	-	
41	IG021				カマド？	08B区	(サブトレンチ)	未掲載	-	-	-	
42	IG022				カマド？	08B区	(サブトレンチ)	未掲載	-	-	-	
43	KH001			加原遺跡	三河型 C	08B区	318SX（下層）	本書	50	図44	308	
44	KH002				清郷型 ハ字	08B区	318SX（下層）	本書	51	図45	320	
45	KH003				清郷型 ハ字	08B区	258SD	本書	47	図41	119	
46	KH004				清郷型 ハ字	08B区	170SK	本書	49	図43	238	
47	KH005				清郷型 ハ字	08B区	318SX（下層）	本書	51	図45	317	
48	KH006				清郷型 ハ字	08B区	084SX	本書	48	図42	196	
49	KH007				清郷型 平角	08B区	検3	本書	53	図47	400	
50	KH008				清郷型 羽釜	08B区	表土掘削	本書	53	図47	425	
51	KH009				清郷型 L字	08B区	318SX（下層下部）	本書	51	図45	337	
52	KH010				清郷型 く字	08B区	257SD	本書	47	図41	108	
53	KH011				清郷型 く字	08B区	318SX（下層）	本書	51	図45	310	
54	KH012				清郷型 平縁	08B区	検2	本書	52	図46	383	
55	KH013				清郷型 L字	08B区	318SX（下層）	本書	51	図45	315	
56	KH014				清郷型 平縁	08B区	170SK	本書	49	図43	236	
57	KH015				清郷型 平角	08B区	170SK	本書	49	図43	235	

表5　胎土分析を行った試料とその詳細(2)

分析No.	試料番号	県	市町村	遺跡名	分類	地区	遺構・層位	報告書	頁	図版	番号	所蔵
58	KH016		新城市	加原遺跡	清郷型 平縁	08B区	170SK	本書	49	図43	237	県埋文調査セ
59	KH017				清郷型 く字	08B区	170SK	本書	49	図43	231	
60	KH018				欠山期壺	08B区	表土掘削	本書	53	図47	438	
61	KH019				欠山期高杯	08B区	318SX（下層）	本書	51	図45	322	
62	MS014			諏訪遺跡	三河型 B			『諏訪遺跡』	55	第42図	8	
63	MS015				三河型 B			『諏訪遺跡』	50	第38図	11	
64	MS013		瀬戸市	凧山屋敷遺跡	三河型 B	B区	SB02	凧山屋敷遺跡	P.46	図版18	30	
65	TT002		豊田市	落合遺跡	三河型 B	-	-	落合遺跡	-	-	-	豊田市教委
66	TT001			万場垣内遺跡	三河型 C+	?	?	矢作ダム	23	第11図	121	
67	TY009		豊橋市	市道遺跡	清郷型 ハ字		SK281	『市道遺跡』 II		70	356	豊橋市教委
68	TY003				三河型 C+		SK229	『市道遺跡』 II		63	219	
69	TY004				清郷型 L〜羽釜		SK240	『市道遺跡』 II		65	247	
70	TY005				三河型 C+		SK259	『市道遺跡』 II		67	292	
71	TY006				三河型 C 鍋		SK278	『市道遺跡』 II		69	338	
72	TY007				三河型 C+		SK278	『市道遺跡』 II		70	339	
73	TY008				三河型 B 小型		SK278	『市道遺跡』 II		70	340	
74	TY010				三河型 B		SD-3	『市道遺跡』 II		87	772	
75	TY015			大沢A-2号窯	清郷型 く字		窯体内	『大沢A-2号窯』		70	574	
76	TY016				清郷型 く字		窯体内	『大沢A-2号窯』		70	575	
77	TY011			公文遺跡	伊勢型		AG-49 SK99	『公文遺跡』 III		53	451	
78	TY012				三河型 B+ 小型		AG-49 SK99	『公文遺跡』 III		53	453	
79	TY013				三河型 C		AG-49 SK99	『公文遺跡』 III		53	456	
80	TY014				三河型 C		AG-49 SK99	『公文遺跡』 III		53	457	
81	TY001			白山Ⅰ・Ⅱ遺跡	前三河型		SX-1	『白山Ⅰ・Ⅱ遺跡』		24	72	
82	TY002				三河型A		SX-1	『白山Ⅰ・Ⅱ遺跡』		24	75	
83	KB001		豊川市	国分寺北遺跡	三河型 A	98B	Pit107	『国分寺北遺跡』 I			1738	豊川市教委
84	KB002				三河型 A	99D	SH118貯蔵穴内	『国分寺北遺跡』 I			204	
85	KB003				三河型 B–	01C	SK039	『国分寺北遺跡』 I			511	
86	KB004				三河型 B	04F	SD049-9区-2層	『国分寺北遺跡』 I			1538	
87	KB005				三河型 B	98B	SK021	『国分寺北遺跡』 I			710	
88	KB006				三河型 C+	03H	SD049-4区-下層	『国分寺北遺跡』 I			1372	
89	KB007				三河型 B 鍋	04F	SD348-2区-PNo.49	『国分寺北遺跡』 I			1612	
90	KB008				三河型 C+	03H	SD049-6区-最下層	『国分寺北遺跡』 I			1376	
91	KB009				三河型 C	98C	SK045北東	『国分寺北遺跡』 I			655	
92	KB010				清郷型 く字	98C	SK045南西	『国分寺北遺跡』 I			656	
93	KB011				清郷型 く字	03H	SE504北西ベルト内	『国分寺北遺跡』 I			944	
94	KB012				清郷型 羽釜	03E	SK538下層	『国分寺北遺跡』 I			879	
95	KB013				清郷型 L〜平縁	98D	SX006	『国分寺北遺跡』 I			964	
96	KB014				清郷型 L字	03E	SK536	『国分寺北遺跡』 I			875	
97	OG001	岐阜県	大垣市	桧遺跡	清郷型 く〜羽釜	?	8gr	未掲載	-	-	-	大垣市教委
98	SI001	静岡県	静岡市	能島遺跡	清郷型 く字			『能島遺跡』	P.96	図63	32(10)	静岡県埋文セ
99	SI002				清郷型 く字			『能島遺跡』	P.101	図65	35(262)	
100	SI003			宮下遺跡	三河型 C			『宮下遺跡』	P.24	第13図	364	
101	SI004			川合遺跡八反田地区	清郷型 L字			『川合遺跡八反田地区』	P.89	第44図	22	
102	SI005				清郷型 く字			『川合遺跡八反田地区』	P.89	第44図	25	
103	FU001		富士市	破魔射場遺跡	清郷型 く字		SB6	富士川SA	P.209	第145図	3	富士市博物館
104	FU002				清郷型 く字		SB12	富士川SA	P.210	第146図	21	
105	FU003				清郷型 く字		SB21	富士川SA	P.212	第148図	7	
106	FU004				清郷型 ハ字		SB17	富士川SA	P.212	第148図	1	
107	MI001	三重県	北勢町	権現坂遺跡	清郷型 く字		包含層	第186集-4	P.54	第34図	357	三重県埋文セ
108	MI002		亀山市	正知浦遺跡	清郷型 く字		SK11	第100集-1	P.135	第63図	550	
109	MI003		津市	宮ノ前遺跡	清郷型 羽釜		包含層	第115集-4	P.193	第134図	149	
110	MI004		玉城町	波瀬B遺跡	清郷型 く字		SE28	第104集	P.18	第14図	58	
111	MI005		津市	神戸遺跡	清郷型 く字		A地区包含層	第223集	P.31	第18図	161	
112	MI006		北勢町	覚正垣内遺跡	清郷型 く字		Pit	第186集-6	P.52	第42図	524	
113	SU001		鈴鹿市	須賀遺跡	清郷型 羽釜	6次	SE0626-2層	未掲載				鈴鹿市考古博

し、ガラス板などを用いて研磨し、厚さ 0.02mm 前後の薄片を作製した。仕上げとして、研磨剤を含ませた布板上で琢磨し、コーティング剤を塗布した。

これら土器薄片は、偏光顕微鏡を用いて薄片全面にみられた微化石類（放散虫化石、珪藻化石、骨針化石など）と大型粒子の特徴およびその他の混和物について、観察と記載を行った。なお、ここで採用した各分類群の記載およびその特徴などは、以下の通りである。

［**放散虫化石**］ 放散虫は、放射仮足類に属する海生浮遊性原生動物で、その骨格は硫酸ストロンチウムまたは珪酸からなる。放散虫化石は、海生浮遊生珪藻化石とともに外洋性堆積物中に含まれる。

［**珪藻化石**］ 珪酸質の殻をもつ微小な藻類で、大きさは 10 ～数百μ m 程度である。珪藻は、海水域から淡水域に広く分布する。小杉［1988］や安藤［1990］は、現生珪藻に基づいて環境指標種群を設定し、具体的な環境復原を行っている。ここでは、種あるいは属が同定できる珪藻化石（海水種、淡水種）を分類した。

［**骨針化石**］ 海綿動物の骨格を形成する小さな珪質、石灰質の骨片で、細い管状や針状からなる。海綿動物の多くは海産であるが、淡水産としても 23 種ほどが知られ、湖や池あるいは川の底に横たわる木や貝殻などに付着して生育する。したがって、骨針化石は水成環境を指標する。

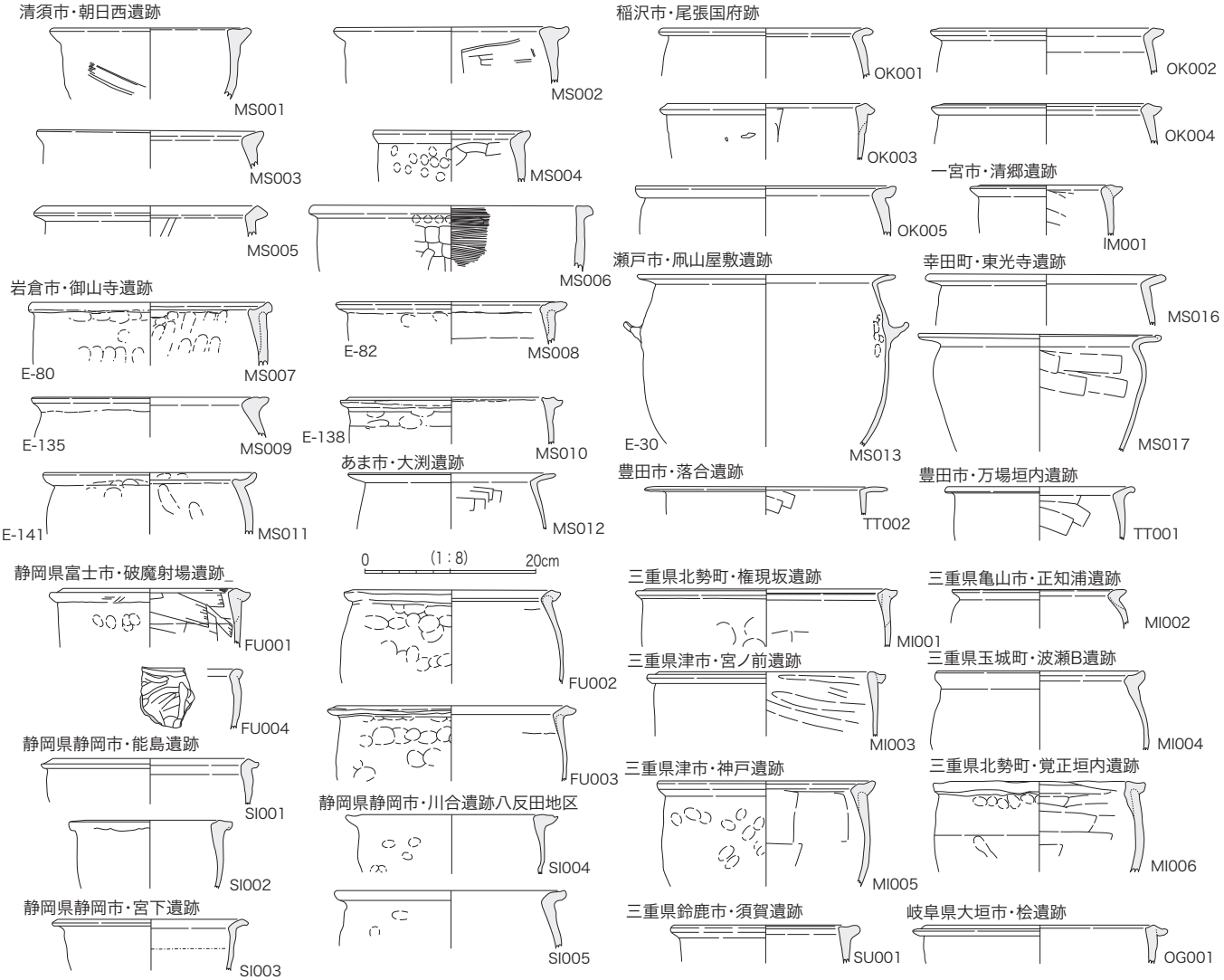


図 51　胎土分析土器の実測図 (1)

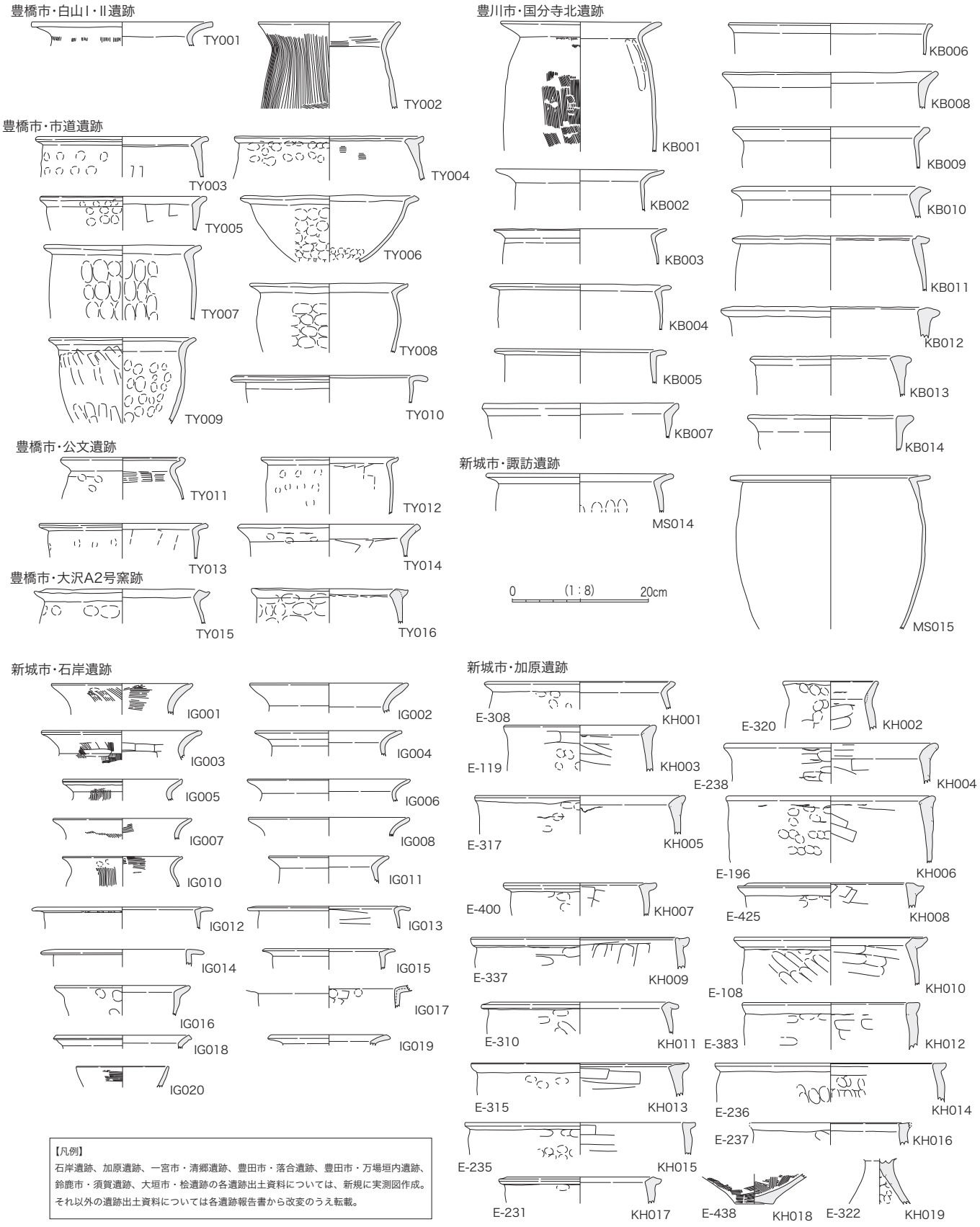


図 52　胎土分析土器の実測図 (2)

［**植物珪酸体化石**］ 主にイネ科植物の細胞組織を充填する非晶質含水珪酸体であり、長径約 10 ～ 50 μ m 前後である。一般にプラント・オパールとも呼ばれ、イネ科草本やスゲ、シダ、トクサ、コケ類などに存在する。

［**胞子化石**］ 胞子は、直径約 10 ～ 30 μ m 程度の珪酸質の球状粒子である。胞子は、水成堆積物中に多く見られるが、土壌中にも含まれる。

［**石英・長石類**］ 石英および長石類は、いずれも無色透明の鉱物である。長石類のうち、後述する双晶などのように、光学的な特徴をもたないものは石英と区別するのが困難である場合が多く、一括して扱う。

［**長石類**］ 長石は、大きく斜長石とカリ長石に分類される。斜長石は、双晶（主として平行な縞）を示すものと累帯構造（同心円状の縞）を示すものに細分される（これらの縞は組成の違いを反映している）。カリ長石は、細かい葉片状の結晶を含むもの（パーサイト構造）と格子状構造（微斜長石構造）を示すものに分類される。また、ミルメカイトは斜長石と虫食い状石英との連晶（微文象構造という）である。累帯構造を示す斜長石は、火山岩中の結晶（斑晶）に見られることが多い。パーサイト構造を示すカリ長石は、花崗岩などケイ酸分の多い深成岩などに産出する。

［**雲母類**］ 一般的には黒雲母が多く、黒色から暗褐色で、風化すると金色から白色になる。形は板状で、へき開（規則正しい割れ目）にそって板状に剥がれ易い。薄片上では長柱状や層状に見える場合が多い。花崗岩などのケイ酸分の多い火成岩に普遍的に産し、変成岩類や堆積岩類にも産出する。

［**輝石類**］ 主として斜方輝石と単斜輝石とがある。斜方輝石（主に紫蘇輝石）は、肉眼的にビール瓶のような淡褐色および淡緑色などの色を呈し、形は長柱状である。ケイ酸分の少ない深成岩類や火山岩類、ホルンフェルスなどのような高温で生じた変成岩類に産する。単斜輝石（主に普通輝石）は、肉眼的に緑色から淡緑色を呈し、柱状である。主としてケイ酸分の少ない火山岩類やケイ酸分の最も少ない火成岩類や変成岩類中にも産出する。

［**角閃石類**］ 主として普通角閃石であり、色は黒色から黒緑色で、薄片上では黄色から緑褐色などである。形は、細長く平たい長柱状である。閃緑岩のような、ケイ酸分が中間的な深成岩類や変成岩類あるいは火山岩類に産出する。

［**ガラス質**］ 透明の非結晶の物質で、電球のガラス破片のような薄く湾曲したガラス（バブル・ウォール型）や小さな泡をたくさんもつガラス（軽石型）などがある。主に火山噴火により噴出した噴出物（テフラ）である。

［**片理複合石英類**］ 石英、長石類、岩片類などの粒子が集合し、片理構造を示す岩石である。雲母片岩や結晶片岩、片麻岩や粘板岩などと考えられる。

［**砂岩質・泥岩質**］ 石英、長石類、岩片類などの粒子が集合し、基質部分をもつ。構成粒子の大きさが約 0.06mm 以上のものを砂岩質、約 0.06mm 未満のものを泥岩質とした。

［**複合石英類**］ 複合石英類は、石英の集合している粒子で、基質（マトリックス）の部分をもたないものである。個々の石英粒子の粒径は、粗粒から細粒までさまざまである。ここでは便宜的に、個々の石英粒子の粒径が 0.01mm 未満のものを微細、0.01 ～ 0.05mm のものを小型、0.05 ～ 0.10mm のものを中型、0.10mm 以上のものを大型と分類した。微細結晶の集合体である場合には、堆積岩類のチャートなどに見られる特徴がある。

［**斑晶質・完晶質**］ 斜長石や輝石・角閃石などの結晶からなる斑晶構造を示し、基質は微細な鉱物やガラス質物からなる岩石である。

［**流紋岩質**］ 石英や長石などの結晶からなる斑晶構造を示し、基質は微細な鉱物やガラス質物からなり、流理構造を示す岩石である。

［**凝灰岩質**］ ガラス質で斑晶質あるいは完晶質構造を持つ粒子のうち、結晶度が低く、直交ニコルで観察した際に全体的に暗い粒子である。

［**不明粒子**］ 下方ポーラーのみ、直交ポーラーのいずれにおいても不透明な粒子や、変質して鉱物あるいは岩石片として同定不可能な粒子を不明粒子とした。

（2）結果と考察

以下に、土器胎土薄片の顕微鏡観察結果について述べる。

胎土中の粒子組成については、微化石類や鉱物･岩石片を記載するために、プレパラート全面を精査･観察した。以下では、粒度組成や 0.1mm 前後以上の鉱物・岩石片の砂粒組成、計数も含めた微化石類などの記載を示す。なお、表【表 6 ～ 9】における不等号は、おおまかな量比を示す。

1．微化石類による粘土材料の分類　各土器の薄片全面の観察の結果、放散虫化石や珪藻化石あるいは骨針化石などの微化石類が検出された。微化石類の大きさは、放散虫化石が数 100 μ m、珪藻化石が 10 ～数 100 μ m、骨針化石が 10 ～ 100 μ m 前後である（植物珪酸体化石が 10 ～ 50 μ m 前後）。一方、砕屑性堆積物の粒度は、粘土が約 3.9 μ m 以下、シルトが約 3.9 ～ 62.5 μ m、砂が 62.5 μ m ～ 2mm である（地学団体研究会・地学事典編集委員会，1981）。主な堆積物の粒度分布と微化石類の大きさの関係から、微化石類は土器の粘土材料中に含まれると考えられ、粘土材料中に含まれている植物珪酸体化石以外の微化石類の特徴は、粘土の起源を知るのに有効な指標になると考える。なお、植物珪酸体化石は、堆積物中に含まれてはいるものの、土器製作の場では灰質が多く混入する可能性が高いなど、他の微化石類のように粘土の起源を指標する可能性は低いと思われる。

土器胎土は、粘土中に含まれていた微化石類により、a）海成粘土を用いた粘土、b）淡水成粘土を用いた粘土、c) 水成粘土、d) その他粘土、の 4 種類に分類された（表 3)。表 3 において、●は極端に多い、◎は非常に多い、○は多い、△は検出、空欄は未検出であることを示す。以下では、分類された粘土の特徴について述べる。なお、淡水成粘土は、海水種珪藻化石を含む。

(a) 海成粘土 (2 試料 ; 御山寺遺跡の清郷型 (No.12:MS011)、石岸遺跡の三河型 B 類 (No.34:IG014))

これら土器胎土中には、海水種珪藻化石が含まれていた。特に、御山寺遺跡の清郷型（No.12:MS011）中には、海水泥質干潟指標種群や海水種あるいは汽水種珪藻化石が特徴的に多く含まれ、利用した粘土の堆積環境としては干潟～汽水域で堆積した粘土と考えられる。

(b) 淡水成粘土（32 試料）

これらの土器胎土中には、淡水種珪藻化石が含まれていた。このうち、加原遺跡の欠山期壺（No.60:KH018）では、沼沢湿地付着生指標種群の Cymbella aspera などが特徴的に含まれ、利用した粘土が沼沢湿地成の粘土と考えられる。

(c) 水成粘土（15 試料）

これらの土器胎土中には、不明種珪藻化石あるいは骨針化石が含まれていた。

(d) 断層ガウジ（3 試料 ; 亀山市・正知浦遺跡の清郷型（No.108:MI002)、津市・神戸遺跡の清郷型 (No.:111:MI005)、鈴鹿市・須賀遺跡の清郷型（No.113:SU001))

これらの土器胎土中には、角閃石類や複合した角閃石類など斑れい岩起源の砂粒から構成され、尖った粒子が多く、砂粒物の占める割合が高いなど断層ガウジ（断層粘土）の特徴を示す。

近畿地方では、生駒西麓産土器あるいは河内の土器と呼ばれる暗褐色～茶褐色を呈する土器群が知られているが、これらの土器材料は、生駒斑れい岩を原岩として形成された断層内物質（断層ガウジ）を材料として作られた土器群であることが知られている（藤根･小坂 ,1997)。これら生駒西麓産土器は、断層破砕帯の砂粒を含む粘土をそのまま使用している。

表 6　土器胎土中の微化石類と砂粒組成の特徴 (1)

分析 No.	試料番号	市町村	遺跡名	分類	粒度	最大粒径	砂粒分	微化石類の特徴	砂粒物岩石・鉱物組成
1	MS012	あま市	大渕遺跡	三河型B	100～600μm	1.8mm	○	淡水種（湖沼浮遊生Aulacosira graulata、淡水種Eunotia biareofera、Eunotia属多い、Cymbella属）植物珪酸体化石、骨針化石(2)、胞子化石	石英・長石類〉複合石英類（大型）、斜長石（双晶）〉カリ長石（文像）、角閃石類、雲母類、ジルコン、ガラス質
2	IM001	一宮市	清郷遺跡	清郷型	130～750μm	2.2mm	○	植物珪酸体化石、胞子化石	石英・長石類〉複合石英類（大型）、雲母類〉カリ長石（パーサイト）、斜長石（双晶）、角閃石類、ジルコン、斜方輝石、ガラス質
3	OK001	稲沢市	尾張国府跡	清郷型	170～900μm	4.0mm	○	骨針化石、植物珪酸体化石	石英・長石類〉複合石英類（大型）〉カリ長石（パーサイト）、斜長石（双晶）、複合石英類（微細）、角閃石類、雲母類、ジルコン、ガラス質
4	OK002			清郷型	320μm～1.2mm	2.6mm	○	骨針化石、植物珪酸体化石	石英・長石類〉複合石英類（大型）〉カリ長石（パーサイト）、斜長石（双晶）、角閃石類、雲母類、ジルコン、斜方輝石
5	OK003			清郷型	180～800μm	2.4mm	○	植物珪酸体化石	石英・長石類〉複合石英類（大型）〉カリ長石（パーサイト）、斜長石（双晶）、角閃石類、雲母類、ジルコン、斜方輝石
6	OK004			清郷型	160～700μm	2.5mm	○	植物珪酸体化石	石英・長石類〉複合石英類（大型）〉カリ長石（パーサイト）、斜長石（双晶）、角閃石類、雲母類、ジルコン、斜方輝石、単斜輝石
7	OK005			清郷型	90μm～1.2mm	1.6mm	△	珪藻化石（海水種Coscinodiscus属/Thalassiosira属、淡水種Cymbella属、Eunotia属、Pinnularia属）、骨針化石(15)、植物珪酸体化石、胞子化石	複合石英類（微細）〉複合石英類（大型）砂岩質、カリ長石（パーサイト）、斜長石（双晶）、斑晶質、角閃石類、斜方輝石、ガラス質、ジルコン
8	MS007	岩倉市	御山寺遺跡	清郷型	350～700μm	2.6mm	◎	淡水種（淡水種Eunotia biareofera、Eunotia属、陸域指標種群Habtzschia amphioxys、隙間付着Navicula ignota、Navicula contenta密集）植物珪酸体化石（イネ籾珪酸体）、骨針化石(23)、胞子化石	石英・長石類》複合石英類（微細、チャート）〉斜長石（双晶）、角閃石類、複合石英類（中型）、カリ長石（パーサイト）、斜方輝石、ジルコン、ガラス質、再結晶岩石
9	MS008			清郷型	150～500μm	1.7mm	◎	珪藻化石（海水種Coscinodiscus属/Thalassiosira属、淡水種Eunotia属）、骨針化石(41)、植物珪酸体化石、胞子化石	石英・長石類、複合石英類（微細）》カリ長石（パーサイト）〉複合石英類（大型）、複合石英類（中型）、斜長石（双晶）、流紋岩質、ガラス質、斜方輝石、雲母類
10	MS009			清郷型	230～630μm	9.3mm	○	植物珪酸体化石（イネ籾珪酸体）	石英・長石類》複合石英類（大型）〉角閃石類、カリ長石（パーサイト）、斜長石（双晶）、複合石英類（微細）、雲母類、ジルコン、凝灰岩質
11	MS010			清郷型	250～630μm	1.4mm	△	珪藻化石（海水種Auliscus caelaetus、淡水種Eunotia属）、骨針化石(4)、植物珪酸体化石（イネ籾珪酸体）、植物細胞片	斑晶質、斜長石（双晶）、砂岩質、ガラス質、カリ長石、複合石英類（大型）、石英・長石類、複合石英類（微細）、片理複合石英類、凝灰岩質、斑晶質、斜方輝石
12	MS011			清郷型	70～500μm	1.5mm	●	珪藻化石（海水泥質干潟指標種群Nitzschia granulata多い、海水種Champlodiscus echeneis多い、Coscinodiscus属/Thalassiosira属、Biddulphia属、汽水種Navicula yarrensis多産、淡水種Rhopalodia gibberula）、骨針化石、胞子化石	角閃石類》石英・長石類〉斜長石（双晶）、複合石英類（大型）、雲母類、カリ長石（パーサイト）、ジルコン、単斜輝石、ガラス質
13	MS001	清須市	朝日西遺跡	清郷型	200～630μm	2.8mm	◎	植物珪酸体化石	石英・長石類》複合石英類（大型）〉斜長石（双晶）、角閃石類、カリ長石（パーサイト）、雲母類、ジルコン、単斜輝石
14	MS002			清郷型	200～600μm	2.3mm	◎	植物珪酸体化石、植物細胞片	石英・長石類》複合石英類（大型）、斜長石（双晶）〉角閃石類、雲母類、カリ長石（パーサイト）、複合石英類（中型）、ジルコン
15	MS003			清郷型	230～600μm	1.9mm	◎	植物珪酸体化石	石英・長石類》複合石英類（大型）〉斜長石（双晶）、角閃石類、ガラス質、雲母類、カリ長石（パーサイト）、ジルコン
16	MS004			清郷型	150～450μm	2.4mm	●	骨針化石、植物珪酸体化石（イネ籾珪酸体）	角閃石類》石英・長石類〉斜長石（双晶）、複合石英類（微細）、雲母類、カリ長石（パーサイト）、複合石英類（大型）、ガラス質、凝灰岩質、ジルコン、単斜輝石
17	MS005			清郷型	220～1.67μm	1.7mm	○	植物珪酸体化石	石英・長石類〉複合石英類（大型）、斜長石（双晶）〉カリ長石（パーサイト）、角閃石類、雲母類、ジルコン
18	MS006			清郷型	80～550μm	1.4mm	◎	放散虫化石(1)、珪藻化石（海水種Stephanoxis属、Actinosyslus属、Coscinodiscus属/Thalassiosira属(6)、淡水種Cymbella属、Eunotia属、陸域指標種群Hantzschia amphioxys）、骨針化石(25)、植物珪酸体化石（イネ籾珪酸体）、植物細胞片	石英・長石類、複合石英類（微細、チャート）》ガラス質〉カリ長石（パーサイト）、斜長石（双晶）、複合石英類（中型）、凝灰岩質、ジルコン、角閃石類、流紋岩質
19	MS016	幸田町	東光寺遺跡	三河型	120～800μm	1.2mm	○	植物珪酸体化石、胞子化石	石英・長石類〉複合石英類（大型）〉カリ長石（パーサイト）、斜長石（双晶）、斜方輝石、単斜輝石、角閃石類、雲母類、ジルコン、ガラス質、片理複合石英類
20	MS017			遠江型	190～800μm	1.6mm	◎	珪藻化石（陸域指標種群Pinnularia borealis）、植物珪酸体化石、胞子化石	石英・長石類〉複合石英類（大型）〉カリ長石（パーサイト）、斜長石（双晶）、斜方輝石、単斜輝石、角閃石類、雲母類、ジルコン、ガラス質
21	IG001	新城市	石岸遺跡	前三河型	80-350μm	1.2mm	○	植物珪酸体化石	石英・長石類、雲母類》角閃石類〉斜長石（双晶）、単斜輝石〉カリ長石（パーサイト）、ジルコン、複合石英類（大型）、複合石英類（微細）
22	IG002			前三河型	250～550μm	2.9mm	○	植物珪酸体化石、胞子化石	石英・長石類》雲母類〉複合石英類（大型）、角閃石類、斜長石（双晶）、斜方輝石、ジルコン、複合石英類（微細）、複合石英類（中型）
23	IG003			前三河+	220～440μm	1.7mm	○	骨針化石、植物珪酸体化石	石英・長石類》雲母類〉複合石英類（大型）、斜長石（双晶）、カリ長石（パーサイト）、ジルコン、斜方輝石、角閃石類
24	IG004			三河型A	90～320μm	1.3mm	△	植物珪酸体化石、植物細胞片	石英・長石類〉雲母類〉角閃石類、斜方輝石、カリ長石（パーサイト）、ジルコン、単斜輝石、植物遺体（痕）
25	IG005			前三河型伊勢系？	160～450μm	1.5mm	○	珪藻化石（陸域指標種群Navicula contenta、Pinnularia subcapitata、Nitzschia parvula、Hantzschia amphioxys付着）、植物珪酸体化石、胞子化石	石英・長石類〉複合石英類（微細）、カリ長石（パーサイト）〉雲母類、片理複合石英類、複合石英類（大型）、斜長石（双晶）、角閃石類、凝灰岩質、単斜輝石、ジルコン
26	IG006			三河型A	120～450μm	1.2mm	○	植物珪酸体化石	石英・長石類〉複合石英類（微細）、カリ長石（パーサイト）〉雲母類、片理複合石英類、複合石英類（大型）、斜長石（双晶）、斜方輝石、凝灰岩質、ジルコン、泥岩質

表 7　土器胎土中の微化石類と砂粒組成の特徴 (2)

分析 No.	試料番号	市町村	遺跡名	分類	粒度	最大粒径	砂粒分	微化石類の特徴	砂粒物岩石・鉱物組成
27	IG007			三河型A-	100～400μm	1.2mm	○	植物珪酸体化石	石英・長石類〉複合石英類（微細）〉片理複合石英類、砂岩質、雲母類、斜長石（双晶）、カリ長石（パーサイト）、角閃石類、ジルコン、凝灰岩質
28	IG008			三河型A-	130～450μm	1.1mm	○	珪藻化石(不明種)、植物珪酸体化石	石英・長石類〉複合石英類（微細）、複合石英類（大型）〉片理複合石英類、雲母類、カリ長石（パーサイト）、角閃石類、斜長石（双晶）、斜方輝石、ジルコン、複合輝石類
29	IG009			三河型A?	180～500μm	750μm	○	植物珪酸体化石△	石英・長石類〉複合石英類（微細）、カリ長石（パーサイト〉片理複合石英類、複合石英類（大型）、斜長石（双晶）、雲母類、砂岩質、斜方輝石、凝灰岩質、流紋岩質、複合輝石類
30	IG010			三河型A-	160～500μm	940μm	△	珪藻化石(不明種)、骨針化石（8）、植物珪酸体化石、胞子化石	石英・長石類〉複合石英類（微細）〉片理複合石英類、複合石英類（大型）、カリ長石（パーサイト）、角閃石類、斜方輝石、砂岩質、変質岩
31	IG011			三河型B+	150～600μm	1.4mm	○	骨針化石(1)、植物珪酸体化石多産（イネ穎珪酸体）、胞子化石	石英・長石類》雲母類〉複合石英類（大型）、ガラス質〉斜長石（双晶）、角閃石類、ジルコン、斜方輝石
32	IG012			三河型B	130～500μm	1.9mm	○	珪藻化石（淡水種Eunotia属）、骨針化石、植物珪酸体化石多産	石英・長石類》雲母類〉複合石英類（大型）、ガラス質〉斜長石（双晶）、複合石英類（微細）、角閃石類、ジルコン、斜方輝石
33	IG013			三河型B	80～350μm	1.6mm	○	珪藻化石（淡水種Diploneis elliptica、Cymbella属、不明種）、植物珪酸体化石多産、胞子化石	石英・長石類》雲母類〉複合石英類（大型）、ガラス質、斜長石（双晶）、ジルコン
34	IG014			三河型B	100～420μm	1.3mm	○	珪藻化石（海水種Coscinodiscus属/Thalassiosira属）、骨針化石、植物珪酸体化石（イネ穎珪酸体）	石英・長石類》雲母類、複合石英類（大型）〉角閃石類、ガラス質、凝灰岩質、斜方輝石、ジルコン
35	IG015			三河型B+～C-	120～420μm	1.4mm	○	植物珪酸体化石多産	石英・長石類》ガラス質、雲母類〉複合石英類（大型）〉角閃石類、カリ長石（パーサイト）、斜長石（双晶）、ジルコン、斜方輝石
36	IG016			三河型C+	180～680μm	1.2mm	○	珪藻化石（淡水種Eunotia biareofera、Eunotia属多い）、骨針化石、植物珪酸体化石多産	石英・長石類》ガラス質、雲母類〉複合石英類（大型）〉角閃石類、斜長石（双晶）、ジルコン、片理複合石英類、単斜輝石、斜方輝石
37	IG017			三河型B～B+	100～420μm	1.1mm	△	珪藻化石（淡水種Eunotia biareofera、Eunotia属）、植物珪酸体化石、胞子化石	石英・長石類〉ガラス質、雲母類〉複合石英類（大型）、角閃石類、片理複合石英類、斑晶質、斜方輝石、ジルコン
38	IG018			三河型C	250～750μm	4.1mm	○	植物珪酸体化石	石英・長石類〉角閃石類、雲母類、複合石英類（大型）〉斜長石（双晶）、カリ長石（パーサイト）、斜方輝石、ガラス質、ジルコン
39	IG019			三河型B+	80～380μm	1.2mm	△	珪藻化石（淡水種Eunotia属多い）、植物珪酸体化石多産	石英・長石類〉ガラス質〉カリ長石（パーサイト）、斜長石（双晶）、片理複合石英類、複合石英類（大型）、斜方輝石、ジルコン、複合石英類（小型）-片麻岩?
40	IG020			杯	70～250μm	930μm	○	珪藻化石（不明種Cymbella属?）、植物珪酸体化石	石英・長石類、雲母類〉斜方輝石、斜長石（双晶）〉複合石英類（大型）、角閃石類、カリ長石（パーサイト）、凝灰岩質、ジルコン、ガラス質、斜方輝石
41	IG021			カマド?	80～180μm	2.3mm	△	植物珪酸体化石	雲母類〉石英・長石類、角閃石類〉斜長石（双晶）、複合石英類（大型）、凝灰岩質、ガラス質、ジルコン
42	IG022			カマド?	150～700μm	2.9mm	○	植物珪酸体化石	雲母類〉石英・長石類〉角閃石類、複合石英類（大型）、凝灰岩質、カリ長石（パーサイト）、ジルコン
43	KH001	新城市	加原遺跡	三河型C	150～650μm	1.9mm	○	骨針化石、植物珪酸体化石、胞子化石	石英・長石類〉雲母類〉複合石英類（大型）、斜長石（双晶）、カリ長石（パーサイト）、角閃石類
44	KH002			清郷型	250～650μm	2.0mm	○	植物珪酸体化石、植物細胞片	石英・長石類、雲母類〉角閃石類、複合石英類（大型）〉カリ長石（パーサイト）、斜長石（双晶）、凝灰岩質、ジルコン
45	KH003			清郷型	150～420μm	2.2mm	○	珪藻化石（淡水種Cymbella属）、骨針化石、植物珪酸体化石	石英・長石類〉斜長石（双晶）、複合石英類（大型）〉角閃石類、雲母類、カリ長石（パーサイト）、ジルコン
46	KH004			清郷型	150～400μm	1.32mm	◎	骨針化石、植物珪酸体化石、胞子化石	石英・長石類》雲母類〉複合石英類（大型）、角閃石類、斜長石（双晶）、ガラス質、カリ長石（パーサイト）、ジルコン
47	KH005			清郷型	140～450μm	2.1mm	○	植物珪酸体化石	石英・長石類、雲母類〉角閃石類〉複合石英類（大型）、斜長石（双晶）、カリ長石（パーサイト）、複合石英類（微細）、ガラス質
48	KH006			清郷型	160～550μm	2.2mm	○	珪藻化石（陸域指標種群Hantzschia amphioxys、Navicula contenta密集）、植物珪酸体化石、胞子化石、植物細胞片	石英・長石類〉雲母類〉角閃石類〉複合石英類（大型）、カリ長石（パーサイト）、ジルコン、ガラス質
49	KH007			清郷型	220～550μm	1.6mm	◎	植物珪酸体化石	石英・長石類〉複合石英類（大型）〉角閃石類、斜長石（双晶）、カリ長石（パーサイト）、斜方輝石、ジルコン、赤褐色粒子多い、ガラス質
50	KH008			清郷型	160～520μm	1.5mm	○	植物珪酸体化石	石英・長石類〉複合石英類（大型）〉角閃石類、斜長石（双晶）、雲母類、カリ長石（パーサイト）、複合石英類（微細）、ジルコン
51	KH009			清郷型	200～470μm	1.6mm	○	珪藻化石（陸域指標種群Hantzschia amphioxys、Navicula contenta付着）、植物珪酸体化石	石英・長石類》複合石英類（大型）、角閃石類〉カリ長石（パーサイト）、斜長石（双晶）、雲母類、斜方輝石、ガラス質
52	KH010			清郷型	150～570μm	2.5mm	○	植物珪酸体化石	石英・長石類》複合石英類（大型）、斜長石（双晶）〉角閃石類、雲母類、カリ長石（パーサイト）、複合石英類（微細）、ジルコン、凝灰岩質
53	KH011			清郷型	160～480μm	2.6mm	○	珪藻化石（陸域指標種群Hantzschia amphioxys付着）、植物珪酸体化石、（未混和粘土塊）	石英・長石類〉複合石英類（大型）、斜長石（双晶）〉角閃石類、雲母類、カリ長石（パーサイト）、ガラス質、ジルコン
54	KH012			清郷型	130～450μm	3.1mm	○	植物珪酸体化石	石英・長石類〉角閃石類〉複合石英類（大型）、雲母類〉複合石英類（微細）、斜長石（双晶）、凝灰岩質、カリ長石（パーサイト）、砂岩質、再結晶岩石
55	KH013			清郷型	130～700μm	1.6mm	○	珪藻化石（土器表面付着珪藻化石Gomphonema parvulum、Navicula contenta）、植物珪酸体化石、胞子化石	石英・長石類》複合石英類（大型）、角閃石類〉雲母類〉斜長石（双晶）、ガラス質、凝灰岩質、ジルコン、複合石英類（微細）
56	KH014			清郷型	180～550μm	5.1mm	○	植物珪酸体化石、（隙間内にPinnularia subcapitata、Navicula contenta、Pinnularia属、Neidium bisculatum、角閃石類、珪酸体化石が含まれる）	石英・長石類〉角閃石類、複合石英類（大型）〉斜長石（双晶）、雲母類、凝灰岩質、カリ長石（パーサイト）
57	KH015			清郷型	180～650μm	2.9mm	○	植物珪酸体化石	石英・長石類〉雲母類、角閃石類〉複合石英類（大型）、斜長石（双晶）、カリ長石（パーサイト）、斜方輝石、ジルコン、凝灰岩質

表 8　土器胎土中の微化石類と砂粒組成の特徴 (3)

分析 No.	試料番号	市町村	遺跡名	分類	粒度	最大粒径	砂粒分	微化石類の特徴	砂粒物岩石・鉱物組成
58	KH016	新城市	加原遺跡	清郷型	350～650μm	1.7mm	○	植物珪酸体化石	雲母類）石英・長石類、角閃石）複合石英類（大型）、カリ長石（パーサイト）、斜長石（双晶）、凝灰岩質、複合石英類（中型）
59	KH017			清郷型	180～430μm	1.6mm	○	珪藻化石（淡水種Cymbella属、Pinnularia属;不混和粘土塊?中）、植物珪酸体化石	石英・長石類）複合石英類（大型）、雲母類）角閃石類、斜長石（双晶）、ジルコン、単斜輝石
60	KH018			欠山期壺	140～420μm	1.2mm	○	珪藻化石（沼沢湿地付着生Cymbella aspera、淡水種Stauroneis acuta、Pinnularia属、Cymbella属、Gpmphonema属、Eunotia属）、骨針化石、植物珪酸体化石、胞子化石、植物細胞片	石英・長石類、複合石英類（微細）〉複合石英類（大型）、斜長石（双晶）、角閃石類、ガラス質、カリ長石（パーサイト）、ジルコン、複合石英類（微細）、片理複合石英類
61	KH019			欠山期高杯	180～580μm	2.6mm	○	植物珪酸体化石	石英・長石類〉複合石英類（大型）〉雲母類、複合石英類（微細）、角閃石類、凝灰岩質
62	MS014		諏訪遺跡	三河型B	80～750μm	1.2mm	○	珪藻化石（淡水種Eunotia biareofera、Eunotia属、Pinnularia属）、骨針化石、植物珪酸体化石、胞子化石	石英・長石類〉複合石英類（大型）〉カリ長石（パーサイト）、片理複合石英類、斜方輝石、角閃石類、雲母類、ジルコン、ガラス質
63	MS015			三河型B	120～800μm	1.6mm	○	珪藻化石（淡水種Eunotia属）、植物珪酸体化石	石英・長石類〉複合石英類（大型）〉カリ長石（パーサイト）、斜長石（双晶）、斜方輝石、角閃石類、雲母類、ジルコン、ガラス質
64	MS013	瀬戸市	鳩山屋敷遺跡	三河型B	80～600μm	1.2mm	○	植物珪酸体化石、胞子化石	石英・長石類〉複合石英類（大型）〉カリ長石（パーサイト）、斜方輝石、角閃石類、雲母類、ジルコン、ガラス質
65	TT002	豊田市	落合遺跡	三河型B	170～900μm	2.0mm	○	珪藻化石（淡水種Eunotia biareofera多い、Eunotia属多い、Cymbella属、Pinnularia属）、骨針化石、植物珪酸体化石、胞子化石	石英・長石類〉複合石英類（大型）〉カリ長石（パーサイト）、ジルコン、斜方輝石、ガラス質、斜方輝石、雲母類、角閃石類
66	TT001		万場垣内遺跡	三河型C+	130～800μm	2.4mm	○	珪藻化石（淡水種Eunotia biareofera多い、Eunotia属多産）、植物珪酸体化石（イネ穎珪酸体）、胞子化石	石英・長石類〉複合石英類（大型）〉カリ長石（パーサイト）、ジルコン、斜方輝石、ガラス質、雲母類
67	TY009	豊橋市	市道遺跡	清郷型	90～800μm	1.7mm	○	植物珪酸体化石、胞子化石	石英・長石類、複合石英類（微細）〉片理複合石英類、単斜輝石、斜方輝石、角閃石類、ガラス質、雲母類、燐灰石
68	TY003			三河型C+	70～500μm	800μm	◎	植物珪酸体化石	石英・長石類〉複合石英類（大型）〉カリ長石（パーサイト）、ジルコン、斜方輝石、雲母類、角閃石類
69	TY004			清郷型	130μm～1.1mm	3.6mm	○	植物珪酸体化石、植物遺体	石英・長石類〉複合石英類（大型）〉カリ長石（パーサイト）、斜長石（双晶）、雲母類、角閃石類、ジルコン、単斜輝石、斜方輝石
70	TY005			三河型C+	120～500μm	800μm	△	珪藻化石（淡水種Eunotia属）、骨針化石、植物珪酸体化石	石英・長石類〉複合石英類（大型）〉カリ長石（パーサイト）、斜長石（双晶）、ジルコン、ガラス質、斜方輝石、角閃石類
71	TY006			三河型C	110～900μm	2.9mm	◎	植物珪酸体化石	石英・長石類、複合石英類（微細）〉片理複合石英類、砂岩質、単斜輝石、斜方輝石、角閃石類、ガラス質、雲母類、燐灰石
72	TY007			三河型C+	150～600μm	900μm	○	珪藻化石（淡水種Eunotia属、Cymbella属、Diploneis属）、植物珪酸体化石、胞子化石	石英・長石類〉複合石英類（大型）〉カリ長石（パーサイト）、斜長石（双晶）、ジルコン、ガラス質、斜方輝石、角閃石類、雲母類、単斜輝石
73	TY008			三河型B	80～500μm	1.2mm	○	珪藻化石（沼沢湿地付着生指標種群Pinnularia acrosphaeria）、植物珪酸体化石	石英・長石類〉複合石英類（大型）〉カリ長石（パーサイト）、ジルコン、ガラス質、斜方輝石、角閃石類、雲母類、単斜輝石
74	TY010			三河型B	120～900μm	1.2mm	○	植物珪酸体化石	石英・長石類〉複合石英類（大型）〉カリ長石（パーサイト）、ジルコン、角閃石類、雲母類、単斜輝石
75	TY015		大沢A-2号窯	清郷型	130～700μm	1.6mm	○	植物珪酸体化石	石英・長石類〉複合石英類（大型）〉カリ長石（パーサイト）、斜長石（双晶）、ジルコン、斜方輝石、単斜輝石、角閃石類、雲母類
76	TY016			清郷型	110～750μm	2.3mm	○	珪藻化石（淡水種Eunotia属、不明種）、植物珪酸体化石、胞子化石	石英・長石類〉複合石英類（大型）〉カリ長石（パーサイト）、斜長石（双晶）、ジルコン、ガラス質、単斜輝石、角閃石類、雲母類
77	TY011		公文遺跡	伊勢型	80～700μm	1.3mm	△	珪藻化石（淡水種Eunotia属、不明種）、骨針化石、植物珪酸体化石、胞子化石	石英・長石類〉複合石英類（大型）〉カリ長石（パーサイト）、斜長石（双晶）、角閃石類、雲母類、斜方輝石、ガラス質、ジルコン
78	TY012			三河型B+	170～700μm	1.3mm	○	珪藻化石（淡水種Eunotia属、Pinnularia属）、骨針化石、植物珪酸体化石、胞子化石	石英・長石類〉複合石英類（大型）〉カリ長石（パーサイト）、斜長石（双晶）、角閃石類、雲母類、斜方輝石、ガラス質、ジルコン
79	TY013			三河型C	120～600μm	1.6mm	○	珪藻化石（淡水種Eunotia biareofera多い、Eunotia属多産、Cymbella属、Pinnilaria属）、骨針化石、植物珪酸体化石、胞子化石	石英・長石類〉複合石英類（大型）〉カリ長石（パーサイト）、斜方輝石、角閃石類、雲母類、ガラス質
80	TY014			三河型C	140～800μm	2.2mm	○	珪藻化石（沼沢湿地付着生指標種群Eunotia praerupta var.bidens、淡水種Pinnularia属、不明種）、骨針化石、植物珪酸体化石、胞子化石	石英・長石類〉複合石英類（大型）〉カリ長石（パーサイト）、斜長石（双晶）、凝灰岩質、ガラス質、ジルコン、斜方輝石、雲母類、角閃石類
81	TY001		白山Ⅰ・Ⅱ遺跡	前三河型	900μm～1.1mm	2.1mm	○	植物珪酸体化石	石英・長石類〉複合石英類（大型）〉カリ長石（パーサイト）、ジルコン、斜方輝石、雲母類、角閃石類、ガラス質
82	TY002			三河型A	120～800μm	1.3mm	○	骨針化石、植物珪酸体化石、胞子化石	石英・長石類、複合石英類（微細）〉片理複合石英類、砂岩質、ガラス質、単斜輝石、角閃石類、斜長石（双晶）、雲母類、斑晶質
83	KB001	豊川市	国分寺北遺跡	三河型A	200～750μm	3.0mm	△	珪藻化石（淡水種Eunotia属、不明種）、骨針化石、植物珪酸体化石多産	石英・長石類）雲母類、複合石英類（大型）〉カリ長石（パーサイト）、斜長石（双晶）、ガラス質、複合石英類（微細）、ジルコン、片理複合石英類、単斜輝石、斜方輝石
84	KB002			三河型A	140～700μm	2.2mm	○	珪藻化石（淡水種Pinnularia属、Eunotia属）、植物珪酸体化石	石英・長石類）雲母類）複合石英類（大型）、ガラス質）斜長石（双晶）、ガラス質、斜方輝石、角閃石類
85	KB003			三河型B-	80～480μm	1.2mm	○	珪藻化石（淡水種Eunotia biareofera、Cymbella属、Pinnularia属、Eunotia属多産、不明種）、骨針化石、植物珪酸体化石（イネ穎珪酸体）多産、胞子化石	石英・長石類）雲母類）複合石英類（大型）、斜長石（双晶）、ガラス質、ジルコン、斜方輝石
86	KB004			三河型B	220～720μm	1.8mm	○	珪藻化石（淡水種Eunotia biareofera、Cymbella属、Eunotia属多産、不明種）、植物珪酸体化石多産、胞子化石	石英・長石類、ガラス質）雲母類、複合石英類（大型）、斜長石（双晶）、カリ長石（パーサイト）、角閃石類、複合石英類（中型）、単斜輝石、斜方輝石

表９　土器胎土中の微化石類と砂粒組成の特徴 (4)

分析No.	試料番号	市町村	遺跡名	分類	粒度	最大粒径	砂粒分	微化石類の特徴	砂粒物岩石・鉱物組成
90	KB008	豊川市	国分寺北遺跡	三河型C+	200～650μm	1.5mm	○	珪藻化石（淡水種Pinnularia属、Cymbella属、Eunotia属多産、不明種）、植物珪酸体化石多産、胞子化石	石英・長石類〉ガラス質〉雲母類〉複合石英類（大型）、角閃石類、複合石英類（中型）、ジルコン、斜方輝石
91	KB009			三河型C	60～420μm	1.2mm	○	骨針化石、植物珪酸体化石、胞子化石、植物細胞片	石英・長石類〉雲母類、斜長石（双晶）〉複合石英類（大型）、角閃石類、カリ長石（パーサイト）、複合石英類（微細）、ジルコン、単斜輝石
92	KB010			清郷型	130～580μm	4.0mm	○	植物珪酸体化石	石英・長石類、複合石英類（大型）》斜長石（双晶）〉カリ長石（パーサイト）、角閃石類、雲母類、ジルコン、ガラス質
93	KB011			清郷型	130～720μm	6.3mm	○	植物珪酸体化石	石英・長石類、雲母類〉斜長石（双晶）〉複合石英類（大型）、カリ長石（パーサイト）、複合石英類（中型）、角閃石類、複合石英類（微細）、雲母類、ジルコン、凝灰岩質、ガラス質
94	KB012			清郷型	220～620μm	1.8mm	○	植物珪酸体化石	石英・長石類〉複合石英類（大型）、斜長石（双晶）〉角閃石類、雲母類、ジルコン、ガラス質、斜方輝石
95	KB013			清郷型	200～580μm	2.1mm	○	植物珪酸体化石、胞子化石、植物細胞片	石英・長石類、雲母類》複合石英類（大型）、斜長石（双晶）〉角閃石類、ガラス質、複合石英類（微細）、ジルコン
96	KB014			清郷型	220～650μm	3.1mm	○	植物珪酸体化石、胞子化石	石英・長石類》複合石英類（大型）、角閃石類〉斜長石（双晶）、カリ長石（パーサイト）、雲母類、複合石英類（微細）、ジルコン
97	OG001	大垣市	桧遺跡	清郷型	400μm～1.6mm	5.0mm	○	骨針化石、植物珪酸体化石	石英・長石類〉複合石英類（大型）〉カリ長石（パーサイト）、斜長石（双晶）、単斜輝石、角閃石類、雲母類、ジルコン
98	SI001	静岡市	能島遺跡	清郷型	180μm～1.3mm	1.8mm	◎	植物珪酸体化石	石英・長石類〉複合石英類（大型）、雲母類〉カリ長石（パーサイト）、斜長石（双晶）、ジルコン、単斜輝石、角閃石類、雲母類
99	SI002			清郷型	130μm～1mm	2.2mm	◎	植物珪酸体化石	石英・長石類〉複合石英類（大型）、雲母類、斜長石（双晶）〉カリ長石（パーサイト）、ジルコン、斜方輝石、単斜輝石、角閃石類
100	SI003		宮下遺跡	三河型C	160～800μm	2.7mm	○	骨針化石、植物珪酸体化石	石英・長石類〉複合石英類（大型）、斜長石（双晶）〉カリ長石（パーサイト）、ジルコン、斜方輝石、角閃石類、雲母類、ガラス質、燐灰石
101	SI004		川合遺跡八反田地区	清郷型	110～800μm	2.0mm	○	植物珪酸体化石、胞子化石	石英・長石類〉複合石英類（大型）、斜長石（双晶）〉カリ長石（パーサイト）、ジルコン、単斜輝石、斜方輝石、角閃石類、雲母類、複合石英類（微細）、ガラス質
102	SI005			清郷型	1.7μm～1.1mm	2.9mm	○	植物珪酸体化石	石英・長石類〉複合石英類（大型）、斜長石（双晶）〉カリ長石（パーサイト）、ジルコン、単斜輝石、斜方輝石、角閃石類、雲母類、燐灰石
103	FU001	富士市	破魔射場遺跡	清郷型	120～900μm	2.4mm	○	珪藻化石（淡水種Cymbella属、不明種）植物珪酸体化石、胞子化石	石英・長石類〉複合石英類（大型）、斜長石（双晶）〉カリ長石（パーサイト）、ジルコン、単斜輝石、斜方輝石、角閃石類、雲母類
104	FU002			清郷型	1.2～800μm	1.6mm	○	植物珪酸体化石	石英・長石類〉複合石英類（大型）、斜長石（双晶）〉カリ長石（パーサイト）、ジルコン、単斜輝石、斜方輝石、角閃石類、雲母類
105	FU003			清郷型	120～700μm	1.9mm	◎	植物珪酸体化石	石英・長石類〉複合石英類（大型）、斜長石（双晶）〉カリ長石（パーサイト）、ジルコン、単斜輝石、斜方輝石、角閃石類、雲母類
106	FU004			清郷型	130～500μm	1.3mm	◎	植物珪酸体化石	凝灰岩質（斑晶質）、複合雲母類、黒色粒子》石英・長石類、角閃石類、単斜輝石、斜方輝石
107	MI001	北勢町	権現坂遺跡	清郷型	100～900μm	3.7mm	○	植物珪酸体化石	石英・長石類〉複合石英類（大型）〉カリ長石（パーサイト）、斜長石（双晶）、複合石英類（微細）、ジルコン、角閃石類、雲母類、単斜輝石、燐灰石
108	MI002	亀山市	正知浦遺跡	清郷型	70～800μm	2.4mm	●	植物珪酸体化石	角閃石類》石英・長石類〉斜長石（双晶）、複合石英類（大型）、雲母類、カリ長石（パーサイト）、単斜輝石
109	MI003	津市	宮ノ前遺跡	清郷型	130～750μm	3.4mm	○	植物珪酸体化石	石英・長石類〉複合石英類（大型）、雲母類〉カリ長石（パーサイト）、斜長石（双晶）、ジルコン、斜方輝石、単斜輝石、角閃石類、燐灰石
110	MI004	玉城町	波瀬B遺跡	清郷型	230～900μm	2.8mm	○	植物珪酸体化石（イネ頴珪酸体）	石英・長石類〉複合石英類（大型）、雲母類〉カリ長石（パーサイト）、斜長石（双晶）、ジルコン、斜方輝石、単斜輝石、角閃石類、燐灰石
111	MI005	津市	神戸遺跡	清郷型	140μm～1.4mm	5.5mm	●	植物珪酸体化石	角閃石類》石英・長石類〉斜長石（双晶）、複合石英類（大型）、雲母類、カリ長石（パーサイト）、単斜輝石
112	MI006	北勢町	覚正垣内遺跡	清郷型	120～600μm	1.8mm	○	植物珪酸体化石	石英・長石類〉複合石英類（大型）、雲母類〉カリ長石（パーサイト）、斜長石（双晶）、ジルコン、斜方輝石、角閃石類、雲母類
113	SU001	鈴鹿市	須賀遺跡	清郷型	150～750μm	2.2mm	●	植物珪酸体化石、胞子化石	角閃石類》石英・長石類〉斜長石（双晶）、複合石英類（大型）、雲母類、カリ長石（パーサイト）、複合石英類（微細）、単斜輝石、黒色粒子

表 10　土器胎土中の粘土および砂粒の特徴一覧 (1)

分析 No.	試料番号	市町村	遺跡名	分類	粘土の特徴								砂粒の特徴								鉱物の特徴					備考
					種類	放散虫化石	海水種珪藻化石	淡水種珪藻化石	不明種珪藻化石	骨針化石	植物珪酸体化石	胞子化石	分類	片岩類	深成岩類	堆積岩類	火山岩類	凝灰岩類	流紋岩類	テフラ	ジルコン	角閃石類	輝石類	雲母類	砂粒分	
1	MS012	あま市	大藺遺跡	三河型 B	淡水成			○		△	◎	○	B		○					△	△	△		△	○	
2	IM001	一宮市	清郷遺跡	清郷型 く字	その他						△	△	B		○					△	△	○	△	◎	○	
3	OK001			清郷型 く字	水　成					△	△		B		○	△				△	△	◎		◎	○	
4	OK002			清郷型 く字	水　成					△	△		B		○						○	○	△	◎	○	
5	OK003	稲沢市	尾張国府跡	清郷型 く字	その他						△		B		○						○	○	△	△	○	
6	OK004			清郷型 く字	その他						△		B		◎						○	○	△	○	○	
7	OK005			清郷型 L字	淡水成		△	△		○	○		C		△	○	△			△	△	△	△		△	海成層に隣接
8	MS007			清郷型 く字	淡水成			△		○	△	△	C		△	○				△	○	△	△	○	◎	
9	MS008			清郷型 L字	淡水成		△	△		○	△	△	C		△	○			△		○	△	△	○	◎	海成層に隣接
10	MS009	岩倉市	御山寺遺跡	清郷型 く字	その他						△		B		◎			△			○	△	△	○	○	
11	MS010			清郷型 羽釜	淡水成		△	△		△	△		C	△	△	○	△	△		△	△	△	△	△	△	海成層に隣接
12	MS011			清郷型 く字	海　成		●	○	○	○		△	B		◎					△	△	●	△	△	●	斑れい岩質砂粒、海水～汽水成粘土
13	MS001			清郷型 L字	その他						△		B		◎						○	○	△	△	◎	
14	MS002			清郷型 く～L字	その他						△		B		◎						○	○	△	◎	◎	
15	MS003			清郷型 く字	その他						△		B		◎					△	△	△	△	◎	◎	
16	MS004	清須市	朝日西遺跡	清郷型 ハ字	水　成					△	△		B		◎	△		△		△	△	●	○	○	●	斑れい岩質砂粒
17	MS005			清郷型 く字	その他						△		B		◎						○	○	△	○	○	
18	MS006			清郷型 平縁	淡水成	△	△	△		○	△		C		△	○		△	△	△	△	△	△	○	◎	海成層に隣接
19	MS016	幸田町	東光寺遺跡	三河型 B	その他						◎	△	B	△	○					△	○	△	△	△	○	不混和粘土塊中に植物珪酸体多い
20	MS017			遠江型？	その他						△		B		○					△	○	△	△	○	◎	
21	IG001			前三河型	その他						△		B		○	△					△	◎	○	○	○	
22	IG002			前三河型	その他						○		B		◎	△					△	○	△	◎	○	大型砂粒多い
23	IG003			前三河型+	水　成					△	○		B		◎						○	△	△	◎	○	大型砂粒多い
24	IG004			三河型 A	その他						△		B		○						△	○	△	○	△	砂粒少ない、植物遺体痕多い
25	IG005			前三河型 伊勢系	その他						△	△	Ca	○	△	○		△			△	△	△	△	○	
26	IG006			三河型 A	その他						△		Ca	○	△	○		△			△	△	△	○	○	
27	IG007			三河型 A–	その他						△		Ca	○	△	○		△			△		△	○	○	
28	IG008			三河型 A–	水　成				△		△		Ca	○	△	◎					○	△	△	○	○	
29	IG009			三河型 A?	その他						△		Ca	○	△	○		△	△		△	△	△	◎	○	
30	IG010			三河型 A? 小型	水　成				△	○	△	△	Bc	△	○	○					△	△	△	△	△	粘土部分の木目が細かい
31	IG011			三河型 B+	水　成					△	◎	△	B		◎					△	○	△	○	○	○	イネ頴珪酸体、珪酸体化石多産
32	IG012			三河型 B	水　成			△		△	◎		B		◎	△				△	○	△	○	○	○	主にウシクサ属の珪酸体化石多産
33	IG013			三河型 B	淡水成			△	△	△	◎	△	B		○					△	○		△	○	○	主にウシクサ属の珪酸体化石多産
34	IG014			三河型 B	海　成		△			△	○		B		◎			△		△	△	△	△	◎	○	イネ頴珪酸体、海成層に隣接
35	IG015			三河型 B+～C-	その他						◎		B		◎					△	○	△	△	◎	○	主にウシクサ属の珪酸体化石多産
36	IG016			三河型 C+	淡水成			○	△	△	◎		B	△	◎					△	△	△	△	△	○	主にウシクサ属の珪酸体化石多産
37	IG017			三河型 B～B+	淡水成			△			○	△	B	△	◎		△			△	△	△	△	○	△	
38	IG018			三河型 C	その他						○		B		◎					△	○	○	△	◎	○	
39	IG019			三河型 B+	淡水成			○			◎		B	△	○	△				△	△	△	△	△	△	主にウシクサ属の珪酸体化石多産
40	IG020			杯	水　成				△		○		B		○			△		△	△	○	△	◎	○	
41	IG021			カマド？	その他						○		B		◎			△		△	○	○	△	◎	△	
42	IG022	新城市		カマド？	その他						△		B		◎						△	○	△	◎	○	
43	KH001			三河型 C	水　成					△	○	△	B		◎						○	◎		◎	○	
44	KH002			清郷型 ハ字	その他						△		B		◎			△			○	◎		◎	○	
45	KH003			清郷型 ハ字	淡水成			△		△	●		B		◎						○	◎		◎	○	珪酸体化石著しく多産(ウシクサ族(ススキやチガヤなど))
46	KH004			清郷型 ハ字	水　成					△	○	△	B		◎					△	○	○	△	◎	◎	
47	KH005			清郷型 ハ字	その他						●		B		◎					△	○	○		◎	○	珪酸体化石著しく多産(ウシクサ族(ススキやチガヤなど))
48	KH006			清郷型 ハ字	その他						●		B		◎					△	○	◎		○	○	珪酸体化石著しく多産(ウシクサ族(ススキやチガヤなど))
49	KH007			清郷型 平縁角	その他						△		B		◎					△	○	○	△	○	◎	
50	KH008			清郷型 羽釜	その他						△		B		◎	△					○	△		○	○	
51	KH009			清郷型 L字	その他						△		B		◎					△	○	◎	△	○	○	
52	KH010			清郷型 く字	その他						△		B		◎			△			△	○		○	○	
53	KH011			清郷型 く字	その他						△		B		◎					△	○	○	△	◎	○	
54	KH012			清郷型 平縁	その他						△		B		◎	△		△			○	◎		○	○	
55	KH013			清郷型 L字	その他						△		B		◎			△		△		○		◎	○	
56	KH014			清郷型 平縁	その他						△		B		◎			△			○	○		◎	○	
57	KH015			清郷型 平縁角	その他						△		B		◎			△			○	◎	△	◎	○	
58	KH016			清郷型 平縁	その他						△		B		○			△			○	◎	△	●	○	大型雲母類多産
59	KH017			清郷型 く字	淡水成				△		○		B		○						○	◎	△	○	○	
60	KH018			欠山期壺	淡水成				●	○	△	○	B	△	○	△					○	△	△	○	○	沼沢湿地成粘土
61	KH019			欠山期高杯	その他						△		B		○			△			○	○		○	○	
62	MS014		諏訪遺跡	三河型 B	淡水成				△		△	○	B	△	○					△	○	△	△	△	○	
63	MS015			三河型 B	淡水成				△			○	B		○					△	△	△	△	△	○	

表 11　土器胎土中の粘土および砂粒の特徴一覧 (2)

分析 No.	試料番号	市町村	遺跡名	分類	粘土の特徴								砂粒の特徴								鉱物の特徴					備考
					種類	放散虫化石	海水種珪藻化石	淡水種珪藻化石	不明種珪藻化石	骨針化石	植物珪酸体化石	胞子化石	分類	片岩類	深成岩類	堆積岩類	火山岩類	凝灰岩類	流紋岩類	テフラ	ジルコン	角閃石類	輝石類	雲母類	砂粒分	
64	MS013	瀬戸市	風山屋敷遺跡	三河型 B	その他						○	△	B		○					△	○	△	△	○	○	
65	TT002	豊田市	落合遺跡	三河型 B	淡水成			○		△	○	△	B		○					△	○	△	△	△	○	
66	TT001		万場垣内遺跡	三河型 C+	淡水成			◎	△		○	△	B		○					△	○		△	△	○	
67	TY009	豊橋市	市道遺跡	清郷型 ハ字	その他						△	△	Ca	○		◎					△	△	△	△	○	
68	TY003			三河型 C+	その他						△		B		○						○	△	○	○	◎	
69	TY004			清郷型 L字～羽釜	その他						△		B		○						○	△	△	○	○	
70	TY005			三河型 C+	淡水成			○		△	◎		B		○					△	○	△	△	△	△	
71	TY006			三河型 C 鍋	その他						△		Ca	○	△	◎				△		△	△	○	◎	
72	TY007			三河型 C+	淡水成			△			◎	△	B		○						○	○	△	○	○	
73	TY008			三河型 B 小型	淡水成			△			○		B		○					△	○	△	△	○	○	
74	TY010			三河型 B	その他						△		B		○						○	△	△	○	○	
75	TY015		大沢A-2号窯	清郷型 く字	その他						△		B		○						△	△	△	○	○	
76	TY016			清郷型 く字	淡水成			△			△	△	B		○					△	△	△	△	○	○	
77	TY011		公文遺跡	伊勢型	淡水成			△		○	○	△	B		○					△	○	○	△	△	△	
78	TY012			三河型 B+ 小型	淡水成			△		△	◎	△	B		○					△	○	○		△	○	
79	TY013			三河型 C	淡水成			●		△	◎	△	Bg		○					○	○	△	△	△	○	
80	TY014			三河型 C	淡水成			△			○	△	B		○			△		△	△	△	△	○	○	
81	TY001		白山Ⅰ・Ⅱ遺跡	前三河型	その他						○		B		○					△	○	△	△	△	○	
82	TY002			三河型 A	水　成					△	○		Ca	○		◎	△			△		△	○	○	○	
83	KB001	豊川市	国分寺北遺跡	三河型 A	淡水成			△		△	◎		B	△	◎					△	○	△	△	○	△	珪酸体化石多産
84	KB002			三河型 A	淡水成			△			○		B		◎					△	○	△	△	△	○	
85	KB003			三河型 B–	淡水成			◎	○	△	◎	○	B		◎					△	○		△	○	○	珪酸体化石多産
86	KB004			三河型 B	淡水成			◎	△	△	◎	○	B		◎					△	○	△	△	△	○	珪酸体化石多産
87	KB005			三河型 B	淡水成			△	△	△	◎	△	B		○					△	○	△	△	△	△	珪酸体化石多産
88	KB006			三河型 C+	その他						○		B		◎						○	○	△	◎	○	砂粒多い
89	KB007			三河型 B 鍋	その他						○		B		◎					△	○	○	△	◎	○	
90	KB008			三河型 C+	淡水成			○		△	◎	△	B		◎					△	○	△	△	△	○	珪酸体化石多産
91	KB009			三河型 C	水　成					△	○	△	B		◎					△	○	○	△	◎	○	
92	KB010			清郷型 く字	その他						○		B		◎					△	○	○	△	◎	○	
93	KB011			清郷型 く字	その他						△		B		◎	△				△	○	○		◎	○	
94	KB012			清郷型 羽釜	その他						△		B		◎					△	○	○	△	○	○	
95	KB013			清郷型 L字～平縁	その他						○		B		◎	△				△	○	○	△	◎	○	
96	KB014			清郷型 L字	その他						△	△	B		◎	△					○	◎	△	○	○	
97	OG001	大垣市	松遺跡	清郷型 く字～羽釜	水　成					△	△		B		◎						○	○	△	◎	○	
98	SI001	静岡市	能島遺跡	清郷型 く字	その他						△		B		◎						△	△	△	◎	◎	
99	SI002			清郷型 く字	その他						○		B		○						○	○	△	◎	◎	
100	SI003		宮下遺跡	三河型 C	水　成					△	○		B		○					△	○	○	△	○	○	
101	SI004		川合遺跡 八反田地区	清郷型 L字	その他						△	△	B		○	△				△	○	△	△	○	○	
102	SI005			清郷型 く字	その他						△		B		○						○	○	△	○	○	
103	FU001	富士市	破魔射場遺跡	清郷型 く字	淡水成			△	△		○	△	B		○						○	○	△	◎	○	
104	FU002			清郷型 く字	その他						○		B		○						○	○	△	○	○	
105	FU003			清郷型 く字	その他						△		B		○						○	△	△	◎	◎	
106	FU004			清郷型 ハ字	その他						△		E					●				◎	△	●	◎	凝灰岩質砂粒
107	MI001	北勢町	権現坂遺跡	清郷型 く字	その他						△		B		○						○	○	△	△	○	
108	MI002	亀山市	正知浦遺跡	清郷型 く字	断層ガウジ						△		B		○							●	△	△	●	斑れい岩質砂粒
109	MI003	津市	宮ノ前遺跡	清郷型 羽釜	その他						△		B		○						○	○	△	◎	○	
110	MI004	玉城町	波瀬B遺跡	清郷型 く字	その他						△		B		○						○	○	△	◎	○	
111	MI005	津市	神戸遺跡	清郷型 く字	断層ガウジ						△		B		○						△	●	△	△	●	斑れい岩質砂粒
112	MI006	北勢町	覚正垣内遺跡	清郷型 く字	その他						△		B		○	△					△	△	△	◎	○	
113	SU001	鈴鹿市	須賀遺跡	清郷型 羽釜	断層ガウジ						△	△	B		○	△						●	△	○	●	斑れい岩質砂粒

なお、御山寺遺跡の清郷型（No.12:MS011）や朝日西遺跡の清郷型（No.16:MS004）は、類似した砂粒組成を示す。ただし、粘土は海成～干潟～淡水成粘土および水成粘土である。

（e）その他粘土（61 試料）

これらの土器胎土中には、堆積環境を指標するような珪藻化石または骨針化石は含まれていなかった。

2. 土器胎土中の砂粒組成による分類　本稿で設定した分類群は、構成する鉱物種や構造的特徴から設定した分類群であるが、地域を特徴づける源岩とは直接対比できない。そのため、各胎土中の鉱物と岩石粒子の岩石学的特徴は、地質学的状況に一義的に対応しない。特に、深成岩類の可能性のある複合石英類の場合、構成する鉱物の粒度が大きく、細粒質の砂粒からなる土器胎土の場合には深成岩類と推定するのが困難となる。

ここでは、比較的大型の砂粒について起源岩石の推定を行った【表 12】。岩石の推定は、片岩質が片岩類（A/a）、複合石英類（大型）が深成岩類（B/b）、複合石英類（微細）や砂岩質が堆積岩類（C/c）、斑晶質・完晶質が火山岩類（D/d）、凝灰岩質が凝灰岩類（E/e）、流紋岩質が流紋岩類（F/f）、ガラス質または軽石質がテフラ（G/g）である。ただし、結晶度の低い斑晶質・完晶質は、凝灰岩類と考えられる。推定した起源岩石は、表 4 の組み合わせに従って分類した。以下に、胎土中の砂粒物の岩石組み合わせについて述べる。

（1）主に深成岩類からなる B 群（97 試料）

これらの胎土中の砂粒は、大型結晶で構成される複合石英類からなり、その他の起源岩石は少ない。この岩石組成では、主に花崗岩が分布する地域と考えられ、東海地域では東濃地域～瀬戸猿投山地域、豊田市～岡崎市の東側地域に広く分布する領家花崗岩類など起源と考えられる。なお、多くは花崗岩質の砂粒からなる組成を示すが、角閃石類を特徴的に含む斑れい岩質の砂粒からなる土器（御山寺遺跡の清郷型（No.12:MS011）、清州市朝日西遺跡の清郷型（No.16:MS004）、亀山市・正知浦遺跡の清郷型（No.108:MI002）、津市清郷型（No.111:MI005）、鈴鹿市清郷型（No.113:SU001））も含まれる。

（2）主に深成岩類と堆積岩類からなる Bc 群（1 試料）

この胎土中の砂粒は、主に深成岩類が多く、堆積岩類も多く含まれている。

（3）主に深成岩類とテフラからなる Bg 群（1 試料）

この胎土中の砂粒は、主に深成岩類が多く、ガラス質のテフラも多く含まれている。

（4）主に堆積岩類からなる C 群（5 試料）

この胎土中の砂粒は、主に堆積岩類からなる。

（5）主に堆積岩類と片岩類からなる Ca 群（8 試料）

この胎土中の砂粒は、主に堆積岩類が多く、片岩類も多く含まれている。このうち片岩類は、中央構造線の北側に分布する領家変成岩類の縞状片麻岩や片状ホルンフェルス、また中央構造線の南側に分

表 12　岩石片の起源と組み合わせ

			第1出現群						
			A	B	C	D	E	F	G
			片岩類	深成岩類	堆積岩類	火山岩類	凝灰岩類	流紋岩類	テフラ
第2出現群	a	片岩類		Ba	Ca	Da	Ea	Fa	Ga
	b	深成岩類	Ab		Cb	Db	Eb	Fb	Gb
	c	堆積岩類	Ac	Bc		Dc	Ec	Fc	Gc
	d	火山岩類	Ad	Bd	Cd		Ed	Fd	Gd
	e	凝灰岩類	Ae	Be	Ce	De		Fe	Ge
	f	流紋岩類	Af	Bf	Cf	Df	Ef		Gf
	g	テフラ	Ag	Bg	Cg	Dg	Eg	Fg	

布する三波川変成岩類の黒色片岩や緑色片岩が起源と考えられる。

（6）主に凝灰岩類からなる E 群（E 群）

この胎土中の砂粒は、主に凝灰岩類からなる。

3. 各遺跡土器の材料に関する特徴　土器薄片の偏光顕微鏡観察を行った結果、粘土中に含まれていた微化石類により、粘土は、a）海成粘土（2 試料）、b）淡水成粘土（32 試料）、c）水成粘土（15 試料）、d）断層ガウジ（3 試料）、e) その他粘土（61 試料）の 5 種類に分類された。一方、岩石種の推定とその組み合わせから、1）主に深成岩類からなる B 群（97 試料）、2）主に深成岩類と堆積岩類からなる Bc 群（1 試料）、3）主に深成岩類とテフラからなる Bg 群（1 試料）、4) 主に堆積岩類からなる C 群（5 試料）、5) 主に堆積岩類と片岩類からなる Ca 群（8 試料）の 5 種類に分類された。

以下では、各遺跡における土器材料の特徴について述べる。

［**新城市・加原遺跡（KH001 ～ 19）**］　土器は、三河型 C（1 点）、清郷型（16 点）、欠山期壺および高杯（各 1 点）である。いずれも砂粒は花崗岩質の砂粒（B 群）である。材料は、淡水成粘土からなる土器 2 点（清郷型ハの字形（No.45:KH003）と清郷型くの字形（No.59:KH017））、水成粘土からなる土器 2 点（清郷型ハの字形（No.44:KH002 と No.46:KH004））、その他粘土からなる土器 14 点、淡水種珪藻化石を多く含む淡水成粘土からなる土器 1 点（欠山期高杯（No.61:KH019））である。このうち清郷型ハの字形（No.45:KH003、No.47:KH005）、清郷型つまみ上げ口縁（No.48:KH006）の胎土中には、ウシクサ族（ススキやチガヤなど）と考えられる植物珪酸体化石が多量に含まれていた（写真図版 28-10）。これらの植物珪酸体化石は、利用された粘土自体に入っていた可能性や灰質として混入した可能性が考えられる。

［**あま市；大淵遺跡**］　三河型 B 類の 1 点である。材料は、淡水種珪藻化石を多く含む淡水成粘土で主に花崗岩質の砂粒（B 群）からなる。

［**一宮市；清郷遺跡**］　清郷型の 1 点のみである。粘土は微化石類を含まないその他粘土、砂粒は主に花崗岩質の砂粒（B 群）からなる。

［**稲沢市；尾張国府跡**］　清郷型 5 点である。水成粘土またはその他粘土で主に花崗岩質の砂粒（B 群）からなる土器 4 点、淡水成粘土で主に堆積岩類の砂粒（C 群）からなる土器 1 点である。

［**岩倉市；御山寺遺跡**］　清郷型 5 点である。材料は、淡水成粘土で主に堆積岩類の砂粒（C 群）を含む土器 3 点、その他粘土で主に花崗岩質の砂粒（B 群）からなる土器 1 点（No.10:MS009）、海水～干潟～淡水環境を示す珪藻化石を特徴的に含む粘土で角閃石類を特徴的に含む斑れい岩質の砂粒（B 群）からなる土器 1 点（No.12:MS011）である。

［**清須市；朝日西遺跡**］　清郷型 5 点である。材料は、その他粘土で主に花崗岩質の砂粒（B 群）からなる土器 4 点、放散虫化石や海水種珪藻化石あるいは淡水種珪藻化石を僅かに含む淡水成粘土で主に堆積岩類の砂粒（C 群）からなる土器 1 点（No.18:MS006）、水成粘土で角閃石類を特徴的に含む斑れい岩質の砂粒（B 群）からなる土器 1 点（No.16:MS004）である。

［**幸田町；東光寺遺跡**］　三河型 B 類と遠江型の各 1 点である。材料は、いずれも微化石類を含まないその他粘土で主に花崗岩質の砂粒（B 群）からなる。

［**新城市；石岸遺跡**］　前三河型が 3 点、三河型 A 類が 7 点、三河型 B+ 類が 1 点、三河型 B が 4 点、三河型 C が 4 点、杯が 1 点、カマド？が 2 点である。前三河型は、いずれも微化石類を含まないその他粘土で主に花崗岩質の砂粒（B 群）からなる。前三河型 + は、骨針化石を僅かに含む水成粘土で主に花崗岩質の砂粒（B 群）からなる。三河型 A 類は、その他粘土で主に花崗岩質の砂粒（B 群）からなる土器 1 点（No.24:IG004）、水成粘土または微化石類を含まないその他粘土で主に堆積岩類と片岩類からなる砂粒（Ca 群）からなる土器 5 点、水成粘土で主に花崗岩質と堆積岩類の砂粒からなる土器

1 点（No.30:IG010）である。三河型 A は、水成粘土で花崗岩質の砂粒（B 群）からなる。三河型 B は、海成粘土や淡水成粘土あるいは微化石類を含まないその他粘土で主に花崗岩質の砂粒（B 群）からなる。なお、No.32:IG012 と No.33:IG013 および No.35:IG015 の胎土中には、主にウシクサ属の珪酸体化石が多産する。三河型 B ～ C 類は、いずれも砂粒組成は花崗岩質の砂粒（B 群）からなる。粘土は淡水成粘土およびその他粘土である。なお、No.36:IG016 と No.39:IG019 の胎土中には、淡水種珪藻化石が多く含まれると同時に主にウシクサ属の珪酸体化石が多産する。杯は、微化石類を含まないその他粘土で主に花崗岩質の砂粒（B 群）からなる。カマド？は、微化石類を含まないその他粘土で主に花崗岩質の砂粒（B 群）からなる。

［**新城市；諏訪遺跡**］三河型 B 類が 2 点である。いずれも微化石類を含まないその他粘土で主に花崗岩質の砂粒（B 群）からなる。

［**瀬戸市；凪山屋敷遺跡**］三河型 B 類の 1 点である。微化石類を含まないその他粘土で主に花崗岩質の砂粒（B 群）からなる。

［**豊田市；落合遺跡**］ 三河型 B 類が 1 点である。材料は、淡水種珪藻化石を多く含む淡水成粘土で主に花崗岩質の砂粒（B 群）からなる。

［**豊田市；万場垣内遺跡**］ 三河型 C+ が 1 点である。材料は、淡水種珪藻化石を特に多く含む淡水成粘土で主に花崗岩質の砂粒（B 群）からなる。

［**豊橋市；市道遺跡**］ 清郷型が 2 点、三河型が 6 点である。清郷型（TY004）は、微化石類を含まないその他粘土で主に花崗岩質の砂粒（B 群）からなる。清郷型（TY009）は、微化石類を含まないその他粘土で主に堆積岩類と片岩類の砂粒（Ca 群）からなる。三河型は、淡水成粘土やその他粘土で主に花崗岩質の砂粒（B 群）からなる土器 4 点、微化石類を含まないその他粘土で主に堆積岩類と片岩類の砂粒（Ca 群）からなる土器 1 点（No.71:TY006）である。

［**豊橋市；大沢 A-2 号窯**］ 清郷型が 2 点である。材料は、淡水成粘土およびその他粘土で主に花崗岩質の砂粒（B 群）からなる。

［**豊橋市；公文遺跡**］ 伊勢型が 1 点と三河型 B ～ C 類が 3 点である。材料は、淡水成粘土で主に花崗岩質の砂粒（B 群）からなる。なお、三河型（No.80:TY014）の胎土中には、淡水種珪藻化石が特徴的に多く含まれている。

［**豊橋市；白山Ⅰ・Ⅱ遺跡**］ 前三河型と三河型 A 類が 1 点ずつである。材料は、その他粘土で主に花崗岩質の砂粒（B 群）と水成粘土で主に堆積岩類と片岩類の砂粒（Ca 群）からなる。

［**豊川市；国分寺北遺跡**］ 清郷型が 5 点、三河型が 9 点である。清郷型は、いずれもその他粘土で主に花崗岩質の砂粒（B 群）である。三河型は、淡水成粘土や水成粘土あるいはその他粘土で主に花崗岩質の砂粒（B 群）である。なお、No.85:KB003、No.86:KB004、No.90:KB008 では、ほぼ同種または同属の淡水種珪藻化石が特徴的に多く検出され、また同時に植物珪酸体化石が多く含まれていた。ハケのある三河型 A 類（KB001）は、淡水成粘土で主に花崗岩質の砂粒（B 群）である。

［**岐阜県大垣市;桧遺跡**］ 清郷型（羽釜形口縁）が 1 点である。材料は、水成粘土で主に花崗岩質の砂粒（B 群）からなる。

［**静岡県静岡市;能島遺跡**］ 清郷型が 2 点である。材料は、いずれもその他粘土で主に花崗岩質の砂粒（B 群）からなる。

［**静岡県静岡市;宮下遺跡**］ 三河型 C 類が 1 点である。材料は、水成粘土で主に花崗岩質の砂粒（B 群）からなる。

［**静岡県静岡市；川合遺跡八反田地区**］清郷型が 2 点である。材料は、いずれもその他粘土で主に花崗岩質の砂粒（B 群）からなる。

［**静岡県富士市；破魔射場遺跡**］清郷型が 3 点、清郷型（ハの字形）が 1 点である。清郷型は、淡水成およびその他粘土で主に花崗岩質の砂粒（B 群）からなる。清郷型（ハの字形）は、その他粘土で凝灰岩質の砂粒（E 群）からなる。当該遺跡では甲斐型に分類される土師器類が一定数出土しており、富士川を通じて搬入されたとみられているが、富士川上流部では新第三紀中期中新世の凝灰岩類や火砕岩などが広く分布することと矛盾しない（尾崎ほか，2002）。

［**三重県いなべ市（旧・北勢町）；権現坂遺跡**］清郷型が 1 点である。材料は、その他粘土で主に花崗岩質の砂粒（B 群）からなる。

［**三重県亀山市；正知浦遺跡**］清郷型が 1 点である。材料は、粘土が断層ガウジで主に斑れい岩質の砂粒（B 群）からなる。

［**津市；宮ノ前遺跡**］ 清郷型が 1 点である。材料は、その他粘土で主に花崗岩質の砂粒（B 群）からなる。

［**三重県度会郡玉城町；波瀬Ｂ遺跡**］ 清郷型が 1 点である。材料は、その他粘土で主に花崗岩質の砂粒（B 群）からなる。

［**三重県津市；神戸遺跡**］ 清郷型が 1 点である。材料は、粘土が断層ガウジで主に斑れい岩質の砂粒（B 群）からなる。

［**三重県いなべ市（旧・北勢町）；覚正垣内遺跡**］ 清郷型が 1 点である。材料は、その他粘土で主に花崗岩質の砂粒（B 群）からなる。

［**三重県鈴鹿市；須賀遺跡**］ 清郷型が 1 点である。材料は、粘土が断層ガウジで主に斑れい岩質の砂粒（B 群）からなる。

4.　清郷型および三河型の土器材料　清郷型では、花崗岩質の砂粒（B 群）が圧倒的に多い。粘土ではその他粘土が特に多く、淡水成粘土や水成粘土が僅かに含まれている。また、淡水成粘土で堆積岩類の砂粒（C 群）からなる胎土も見られ、岩倉市御山寺遺跡で多く、稲沢市尾張国府跡や清州市朝日西遺跡にも見られた。

この清郷型の特徴として、その他粘土で花崗岩質の砂粒（B 群）からなる土器が圧倒的に多く、58 点中 51 点に及ぶ。これらの胎土は、花崗岩以外の砂粒を含まないか少ないこと、生駒西麓産土器（藤根・小坂 , 前出）ほどではないが砂粒分が多いこと（よって粘土分が少ない）、水成粘土を示す微化石類を含まないこと（よってその他粘土に分類）、尖った形状を示す砂粒が目立つこと、斜長石（双晶）の双晶面の微小なズレやたわみが見られることから、断層破砕帯の断層ガウジあるいは周辺に堆積した粘土を利用した可能性が考えられる。なお、豊橋市大沢 A-2 号窯においても同様の特徴がみられた。

また、清州市朝日西遺跡の清郷型は、水成粘土あるいは海成干潟粘土で角閃石類を多く含む斑れい岩質の砂粒（B 群）からなる胎土が見られた。東海地方において、斑れい岩あるいは類似する塩基性岩類が分布する地域は、北設楽郡豊根村一帯、豊田市の旧稲武町や新城市の旧作手村などに分布する。さらに、岩倉市御山寺遺跡の清郷型（No.12:MS011）は、海水種珪藻化石を含む粘土層に隣接した斑れい岩類と考えられることから、西尾市旧吉良町の斑れい岩類分布域の可能性が極めて高い。なお、旧吉良町寄名山遺跡の三河型甕では、珪藻化石を含まない断層ガウジが利用されている（吉良町教育委員会，2008）。

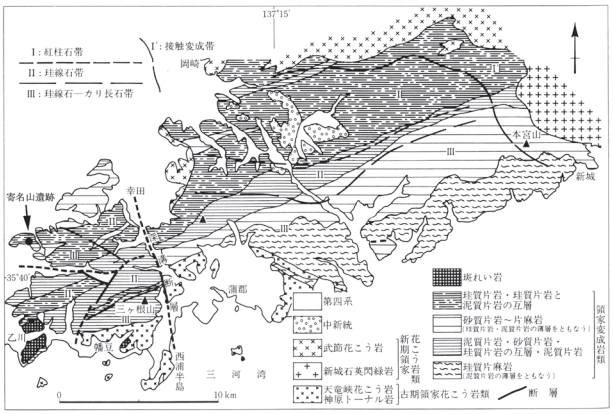


図53　幡豆－本宮山地域の地質図（日本の地質『中部地方Ⅱ』編集委員会編,1988のp56の図2.39より）

富士市破魔射場遺跡のハの字形口縁の清郷型（FU004）は、その他粘土で凝灰岩質の砂粒（E 群）が見られたが、伊勢湾周辺の遺跡では見られない材料である。

断層ガウジを用いた胎土は、三重県内の亀山市正知浦遺跡、津市神戸遺跡、鈴鹿市須賀遺跡に限られて出土し、畿内と地理的に近いこともあり、生駒西麓の土器が持ち込まれた可能性もある。

今回分析した三河型 B ～ C 類では、花崗岩質の砂粒（B 群）からなる胎土が多く、そのうち淡水成粘土が多く、水成粘土やその他粘土あるいは海成粘土も見られる。なお、淡水成粘土は、淡水種珪藻化石が少ないものが多い。その他では、淡水成粘土で花崗岩質とテフラの砂粒（Bg 群）からなる胎土、その他粘土で堆積岩と片岩類の砂粒（Ca 群）からなる胎土も見られた。

なお、水入遺跡と西三河地域の三河型甕の胎土分析では、粘土が淡水成または水成粘土が利用され、砂粒は深成岩類（花崗岩質）とテフラからなる砂粒（Bg 群）が多く、深成岩類（花崗岩質）からなる砂粒（B 群）も見られた（藤根・今村，2005）。

三河型 A 類では、新城市石岸遺跡の試料においてその他粘土や水成粘土で堆積岩と片岩類の砂粒（Ca 群）からなる胎土が特徴的に見られた。その他では、そのた粘土で花崗岩質の砂粒（B 群）からなる胎土、水成粘土で花崗岩質と堆積岩類の砂粒（Bc 群）からなる胎土も見られた。

なお、堆積岩と片岩類の砂粒組成（Ca 群）は、中央構造線沿いの地域の特徴であることから、豊川流域の砂粒組成と考えられる。

5. おわりに　土器薄片の偏光顕微鏡観察を行った結果、粘土中に含まれていた微化石類により、粘土が 5 種類、砂粒が 5 種類に分類された。清郷型の特徴は、微化石類を含まないその他粘土で花崗岩質の砂粒からなる胎土が圧倒的に多い。一方、三河型は、淡水成粘土で花崗岩質の砂粒からなる胎土が多かった。

（藤根　久・米田恭子）

【参考・引用文献】

安藤一男（1990）淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用．東北地理，42（2），73-88.

藤根　久・小坂和夫（1997）生駒西麓（東大阪市）産の縄文土器の胎土材料―断層内物質の可能性―．第四紀研究,36(1),55-62.

表 13　各土師器の砂粒粗製と粘土の種類

砂粒組成	粘土の種類	型式																		総計	備考
		欠山期高杯	欠山期壺	前三河型	前三河型＋	前三河型（伊勢系）	三河型A類	三河型B類	三河型B＋類	三河型C類	三河型C＋類	伊勢型	遠江型	杯	カマド？	清郷型	清郷型（FU004）	清郷型（TY009）		
深成岩類（B）	海　成							1								1			2	清郷型(1):斑れい岩質砂粒
	淡水成		1				2	10	2	1	5	1				4			26	
	水　成				1			1	1	1	2			1		5			12	清郷型(1):斑れい岩質砂粒
	断層ガウジ															3			3	清郷型(3):斑れい岩質砂粒
	その他	1		3			1	4	1	2	1		1		2	38			54	
深成岩・堆積岩類（Bc）	水　成						1												1	
深成岩・テフラ（Bg）	淡水成									1									1	
堆積岩類（C）	淡水成															5			5	
堆積岩・片岩類（Ca）	水　成						1												1	
	その他					1	4			1								1	7	
凝灰岩類（E）	その他																1		1	
総計		1	1	3	1	1	9	16	4	6	8	1	1	1	2	56	1	1	113	

藤根　久（1998）東海地域（伊勢－三河湾周辺）の弥生および古墳土器の材料．第 6 回東海考古学フォーラム岐阜大会，土器・墓が語る，108 － 117.

藤根　久・今村美智子（2001）第 3 節　土器の胎土材料と粘土採掘坑対象堆積物の特徴．波志江中宿遺跡，日本道路公団・伊勢崎市・（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団，262-277.

藤根　久・今村美智子（2001）第 6 節　矢作川流域古代遺跡出土土師器甕の胎土分析．水入遺跡　第 2 分冊　中近世・科学分析・考察編，財団法人愛知県教育サービスセンター・愛知県埋蔵文化財センター，206-226.

活断層研究会（1991）［新編］日本の活断層―分布図と資料―．東京大学出版会，437.

小杉正人（1988）珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用．第四紀研究，27，1-20.

日本の地質『中部地方Ⅱ』編集委員会編（1988）日本の地質 5　中部地方Ⅱ．共立出版，310p.

尾崎正紀・牧本　博・杉山雄一・三村弘二・酒井　彰・久保和也・加藤碵一（2002）20 万分の 1 地質図幅「甲府」．独立行政法人産業技術総合研究所　地質調査総合センター.

山田直利・片山正人・坂本　亨 (1972)20 万分の 1 地質図幅「豊橋」．地質調査所.

吉良町教育委員会（2008）吉良町埋蔵文化財発掘調査報告書 第 4 集「寄名山遺跡 」210p.

【付載】土師器鍋の放射性炭素年代測定

試料と処理　三重県波瀬 B 遺跡と須賀遺跡 6 次調査で出土した清郷型鍋の付着炭化物について、加速器質量分析法（AMS 法）による放射性炭素年代測定を行った。

試料は、波瀬 B 遺跡で出土した清郷型鍋（報告書 No.58）の口縁部外面付着炭化物（PLD-24650）と、須賀遺跡6次調査で出土した清郷型鍋（遺物No.257）の胴部外面付着炭化物（PLD-25212）の2点である。測定試料の情報、調製データは表 14 のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクト AMS：NEC 製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、^{14}C 年代、暦年代を算出した。

表 14　測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-24650	遺跡名：波瀬B遺跡(三重県埋文) 報告書No.58	種類：土器付着炭化物 器種：清郷型甕 部位：口縁部外面 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N,水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：1.2N）
PLD-25212	遺跡名：須賀遺跡6次調査（鈴鹿市） 遺構：SE0626 調査区：M10 遺物No.257 層位：60-80cm	種類：土器付着炭化物 器種：清郷型甕 部位：胴部外面 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N,水酸化ナトリウム：0.1N,塩酸：1.2N）

結果　表 15 に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（$\delta^{13}C$）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代を、図 54 に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下 1 桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。^{14}C 年代（yrBP）の算出には、^{14}C の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差（±1 σ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が 68.2%であることを示す。

表 15　放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}C$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP±1σ)	^{14}C 年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
PLD-24650 波瀬B遺跡 報告書No.58	-25.14±0.37	1209±20	1210±20	773AD(5.1%)778AD 790AD(36.2%)830AD 837AD(26.9%)867AD	727AD(3.2%)737AD 768AD(92.2%)885AD
PLD-25212 須賀遺跡6次調査 遺物No.257	-20.05±0.12	1077±20	1075±20	903AD(15.8%)919AD 965AD(47.7%)998AD 1005AD(4.7%)1012AD	898AD(21.3%)924AD 945AD(74.1%)1017AD

暦年較正の詳細は以下のとおりである。暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、および半減期の違い（^{14}C の半減期 5730±40 年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年較正には OxCal4.1（較正曲線データ：IntCal13）を使用した。なお、1 σ暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する 68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2 σ暦年代範囲は 95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

考察　各試料の暦年較正結果のうち、2 σ暦年代範囲（確率 95.4%）に着目して結果を整理する。

波瀬 B 遺跡で出土した報告書 No.58（PLD-24650）は、727-737 cal AD（3.2%）および 768-885 cal AD(92.2%)を示し、8 世紀前半～ 9 世紀後半となった。これは、奈良～平安時代を示す。この試料は、土器編年では 11 ～ 12 世紀と考えられており、土器編年と測定結果に齟齬が生じた。なお参考値扱いとなるが、$\delta^{13}C$ の値からは、PLD-24650 では海洋リザーバー効果は確認されていない。

須賀遺跡 6 次調査で出土した遺物 No.257（PLD-25212）は、898-924 cal AD（21.3%）および 945-1017 cal AD（74.1%）を示し、9 世紀末～ 11 世紀前半となった。これは、平安時代に相当する。この試料は、土器編年では 10 ～ 11 世紀頃であると考えられており、年代測定結果と矛盾しない。なお PLD-25212 の $\delta^{13}C$ の値は、PLD-24650 と比較するとやや高い値を示すが、海洋リザーバー効果は確認されていない。

（パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ 伊藤　茂・安昭炫・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・小林紘一・Zaur Lomtatidze・Ineza Jorjoliani・藤根　久・小林克也）

【参考文献】

Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.

中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎．日本先史時代の ^{14}C 年代編集委員会編「日本先史時代の ^{14}C 年代」：3-20，日本第四紀学会．

Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Haflidason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J.(2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0–50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55(4), 1869-1887.

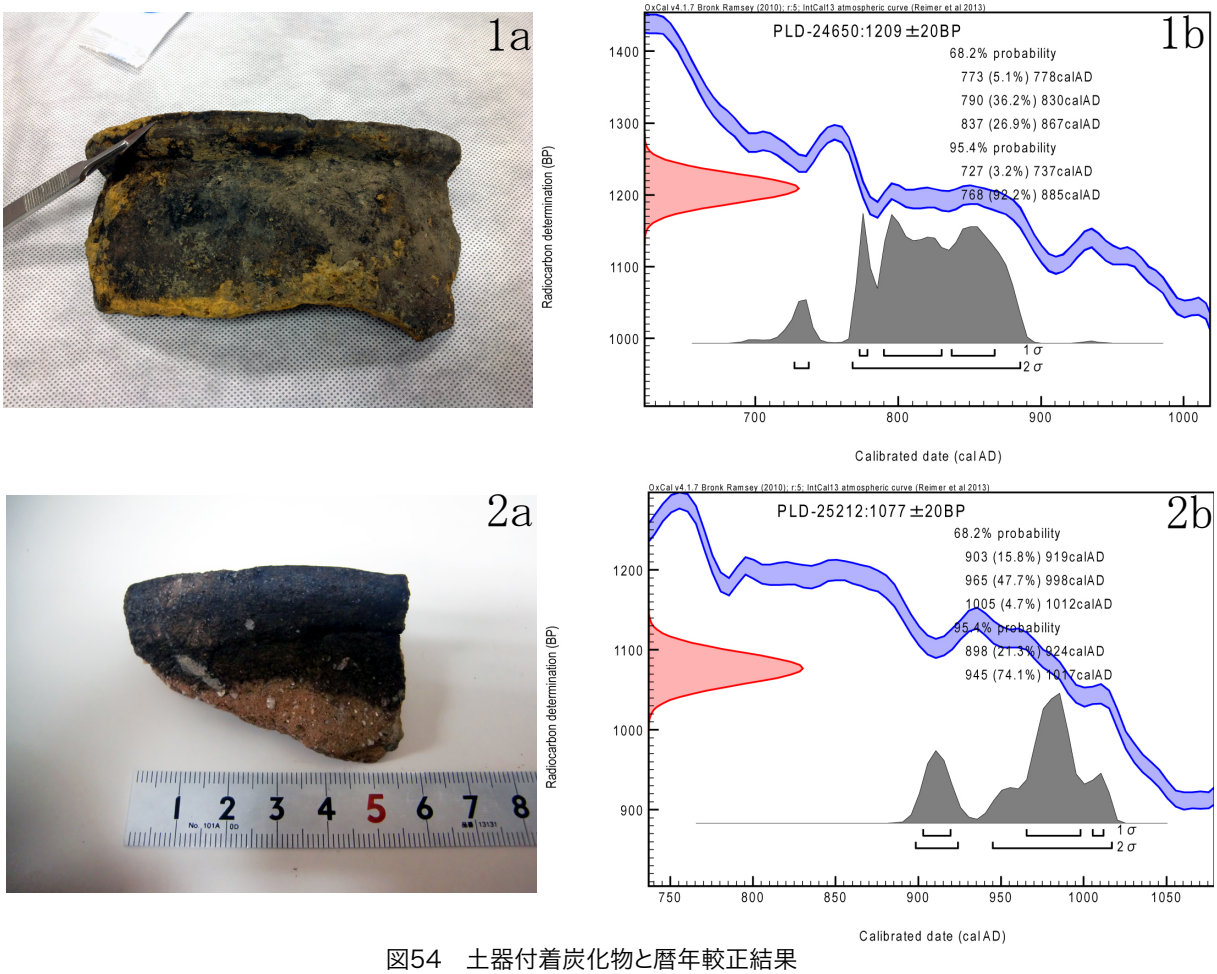


図54　土器付着炭化物と暦年較正結果
1a･1b.波瀬B遺跡　報告書No.58　口縁部外面と暦年較正結果(PLD-24650)
2a･2b.須賀遺跡6次調査　遺物No.257　胴部外面と暦年較正結果(PLD-25212)

第 2 節　山茶碗等付着物の赤外分光分析

はじめに　加原遺跡の調査では、内面や断面に黒色物等が付着した山茶碗や沈線に黒色物が付着した縄文時代晩期の浅鉢が出土した。ここでは、これらの付着物について赤外分光分析を行い、材質について調べた。

試料と方法　試料は、中世の山茶碗に付着した黒色物等の付着物 4 点と縄文時代晩期の浅鉢の沈線内付着物 1 点である【表 16】。いずれも赤外分光分析を行った。

表16　赤外分光分析を行った付着物とその詳細

分析No.	登録No.	遺物	付着部位	遺構	時期	グリッド	特徴	その他
1	E-145	山茶碗	内面付着	083SX	中世	10F12P	赤色、光沢有	軟質
2	E-351	縄文土器浅鉢	外面沈線内	376SU	縄文時代晩期	10F12r	黒色、やや光沢有、赤色物含む	軟質
3	E-180	山茶碗	内面付着	084SX	中世	10F12g	褐色、やや光沢有	やや硬質
4	E-135	山茶碗	内面付着	071SK	中世	10F11s	黒色、光沢無	軟質
5	E-353	山茶碗	断面付着	002SX	中世	10F9s	黒色、厚い、光沢やや有	やや硬質

赤外分光分析は、付着物から手術用メスを用いて少量削り取り、厚さ 1mm 程度に裁断した臭化カリウム（KBr）結晶板に押しつぶして、油圧プレス器を用いて約 7 トンで加圧整形した。

測定は、フーリエ変換型顕微赤外分光光度計（日本分光（株）製 FT/IR-410、IRT-30-16）を用いて、透過法で赤外吸収スペクトルを測定し、生漆やアスファルトなどの吸収スペクトルと比較・検討した。

結果および考察　以下に、各付着物の赤外分光分析結果について述べる。なお、赤外吸収スペクトル図は、縦軸が透過率（%R）、横軸が波数（Wavenumber (cm^{-1})；カイザー）を示す。また、各スペクトル図はノーマライズしてあり、吸収スペクトルに示した数字は生漆の主な赤外吸収位置【表 17】を示す。

［**分析 No.1（山茶碗、内面付着赤色物）**］　付着物は、山茶碗の内面全面にわたって薄く付着する光沢のある赤色物である（写真 1-1）。赤外分光分析では、漆などの有機物に見られる炭化水素の吸収（吸収 No.1 および No.2）が明瞭に見られ、生漆を特徴づけるウルシオールの吸収（吸収 No.6 と No.7）が認められた（図 55-1）。赤外分光分析の結果から、漆と同定された。

［**分析 No.2（縄文時代晩期浅鉢、沈線内黒色付着物）**］　付着物は、縄文時代晩期の浅鉢の口縁部外面に施された沈線内の赤色を含むやや光沢のある黒色物である（写真 1-2a,2b）。赤外分光分析では、漆などの有機物に見られる炭化水素の吸収（吸収 No.1 および No.2）は僅かである。生漆を特徴づけるウルシオールの吸収（吸収 No.6 ～ No.8）は認められなかった（図 55-2）。赤外分光分析の結果から、炭化した無機物と判断された。

表17　生漆の赤外吸収位置とその強度

吸収No.	生漆		
	位置	強度	ウルシ成分
1	2925.48	28.5337	
2	2854.13	36.2174	
3	1710.55	42.0346	
4	1633.41	48.8327	
5	1454.06	47.1946	
6	1351.86	50.8030	ウルシオール
7	1270.86	46.3336	ウルシオール
8	1218.79	47.5362	ウルシオール
9	1087.66	53.8428	
10	727.03	75.3890	

［**分析 No.3（山茶碗、内面付着褐色物）**］　付着物は、山茶碗の内面全面に広く付着するやや光沢のある褐色物である（写真 1-3）。赤外分光分析では、漆などの有機物に見られる炭化水素の吸収（吸収 No.1 および No.2）が明瞭に見られ、生漆を特徴づけるウルシオールの吸収（吸収 No.6 ～ No.7）が認められた（図 55-3）。赤外分光分析の結果から、漆と同定された。

［**分析 No.4（山茶碗、黒色付着物）**］　付着物は、山茶碗の内面に部分的に厚く付着する光沢のない黒色物である（写真 1-4）。赤外分光分析では、漆などの有機物に見られる炭化水素の吸収（吸収 No.1 および

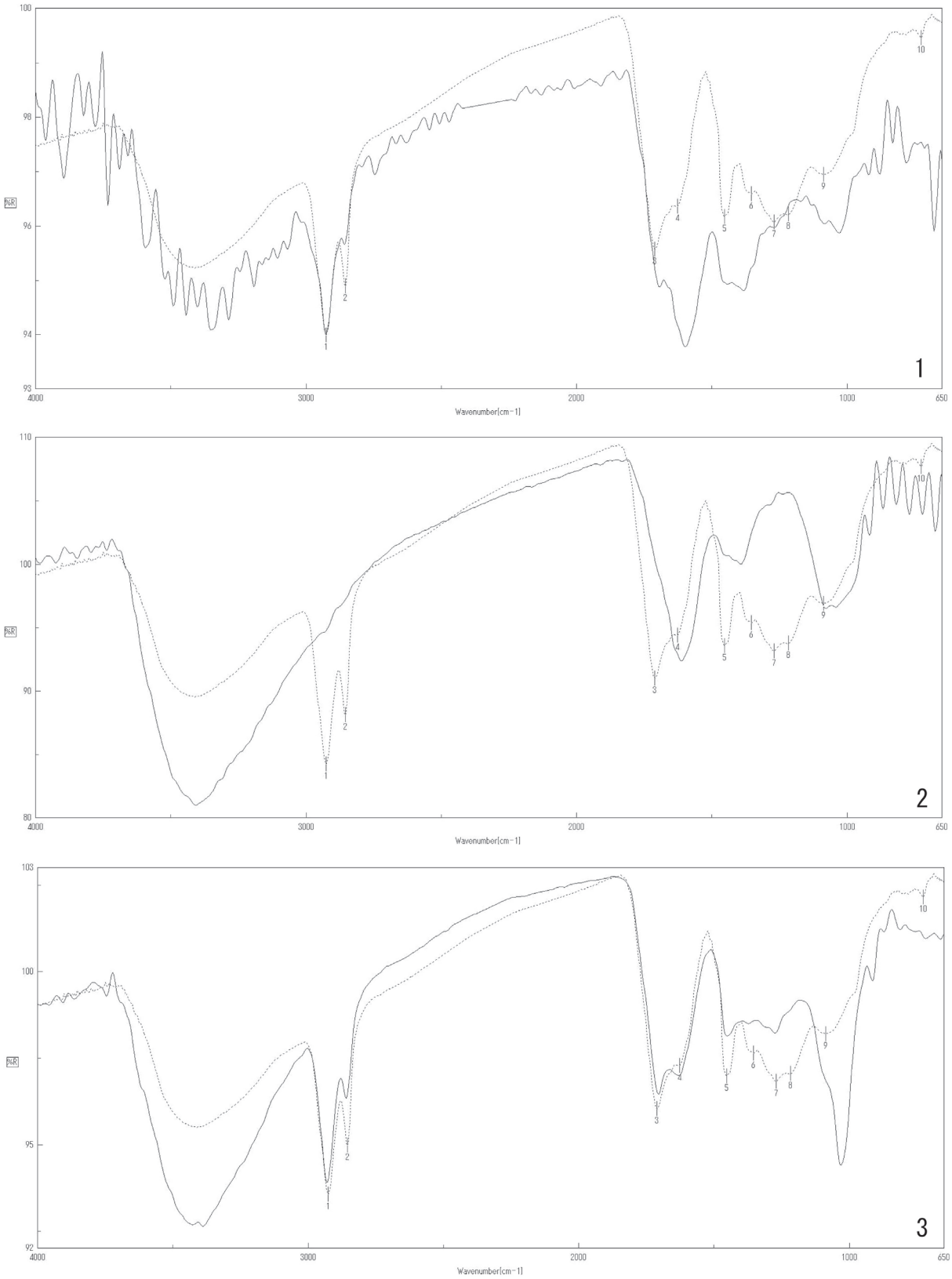


図 55 付着物の赤外分光スペクトル図（実線：付着物、点線：生漆、数字：生漆の赤外吸収位置）

1.分析 No.1 （山茶碗 、内面赤色付着物 ）　2.分析 No.2 （浅鉢 、沈線内黒色付着物 ）　3.分析 No.3 （山茶碗 、内面褐色付着物 ）

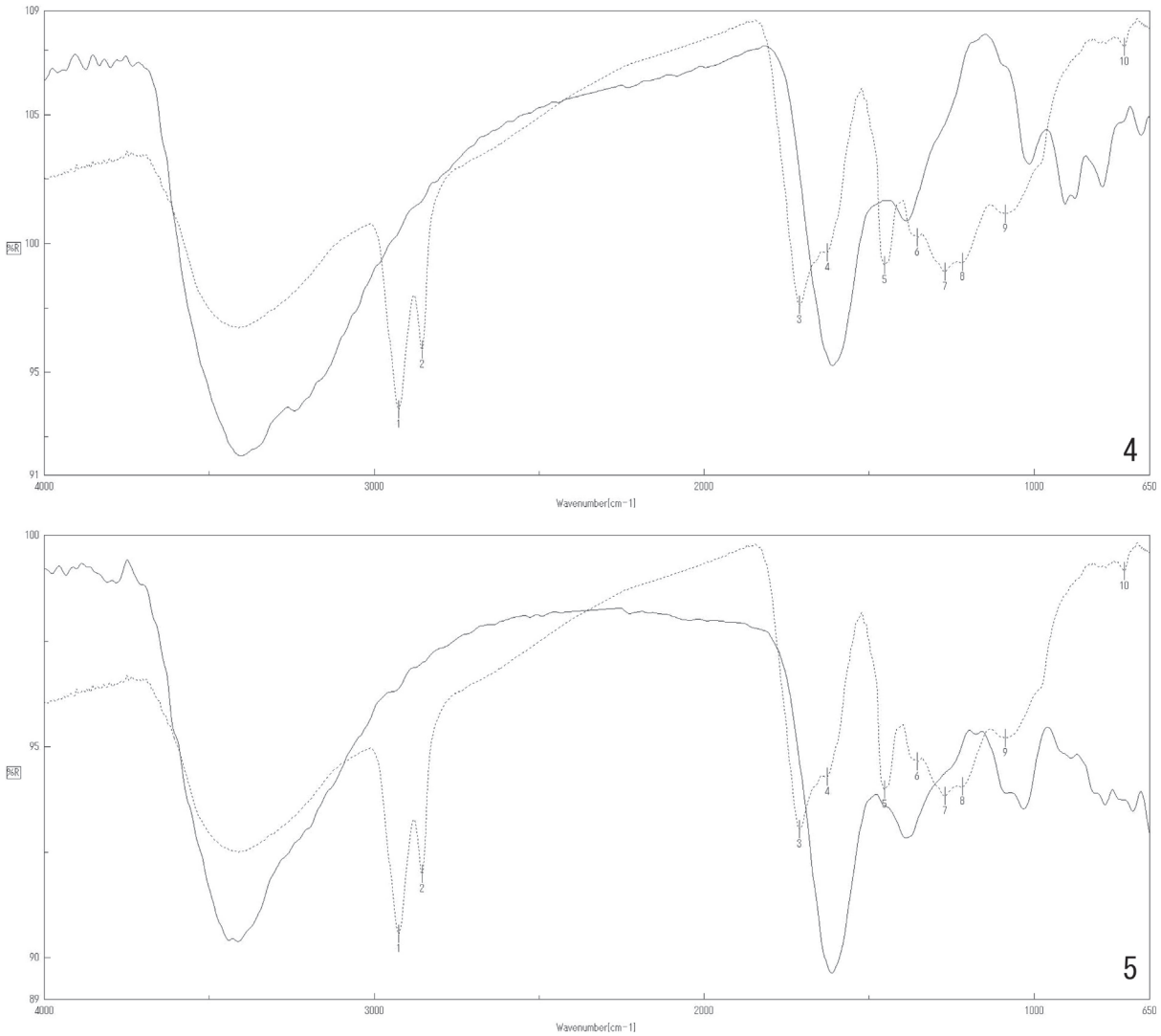


図 56 付着物の赤外分光スペクトル図（実線：付着物、点線：生漆、数字：生漆の赤外吸収位置）
4.分析 No.4 （山茶碗 、黒色付着物 ）　5.分析 No.5 （山茶碗 、断面黒色付着物 ）

No.2）は全く認められなかった。また、生漆を特徴づけるウルシオールの吸収（吸収 No.6 ～ No.8）も認められなかった（図 56-4）。赤外分光分析の結果から、炭化した無機物と判断された。

［**分析 No.5（山茶碗、断面黒色付着物）**］ 付着物は、山茶碗の断面全体に付着するやや光沢のある黒色物である（写真 1-5）。赤外分光分析では、漆などの有機物に見られる炭化水素の吸収（吸収 No.1 および No.2）が僅かに認められた。しかし、生漆を特徴づけるウルシオールの吸収（吸収 No.6 ～ No.8）やアスファルトなどの吸収も認められなかった（図 56-5）。赤外分光分析の結果から、炭化した無機物と判断された。

表18　付着物の同定結果

分析No.	登録No.	遺物	付着部位	遺構	時期	グリッド	特徴	付着物
1	E-145	山茶碗	内面付着	083SX	中世	10F12P	赤色、光沢有	漆
2	E-351	縄文土器浅鉢	外面沈線内	376SU	縄文時代晩期	10F12r	黒色、やや光沢有、赤色物含む	炭質物
3	E-180	山茶碗	内面付着	084SX	中世	10F12g	褐色、やや光沢有	漆
4	E-135	山茶碗	内面付着	071SK	中世	10F11s	黒色、光沢無	炭質物
5	E-353	山茶碗	断面付着	002SX	中世	10F9s	黒色、厚い、光沢やや有	炭質物

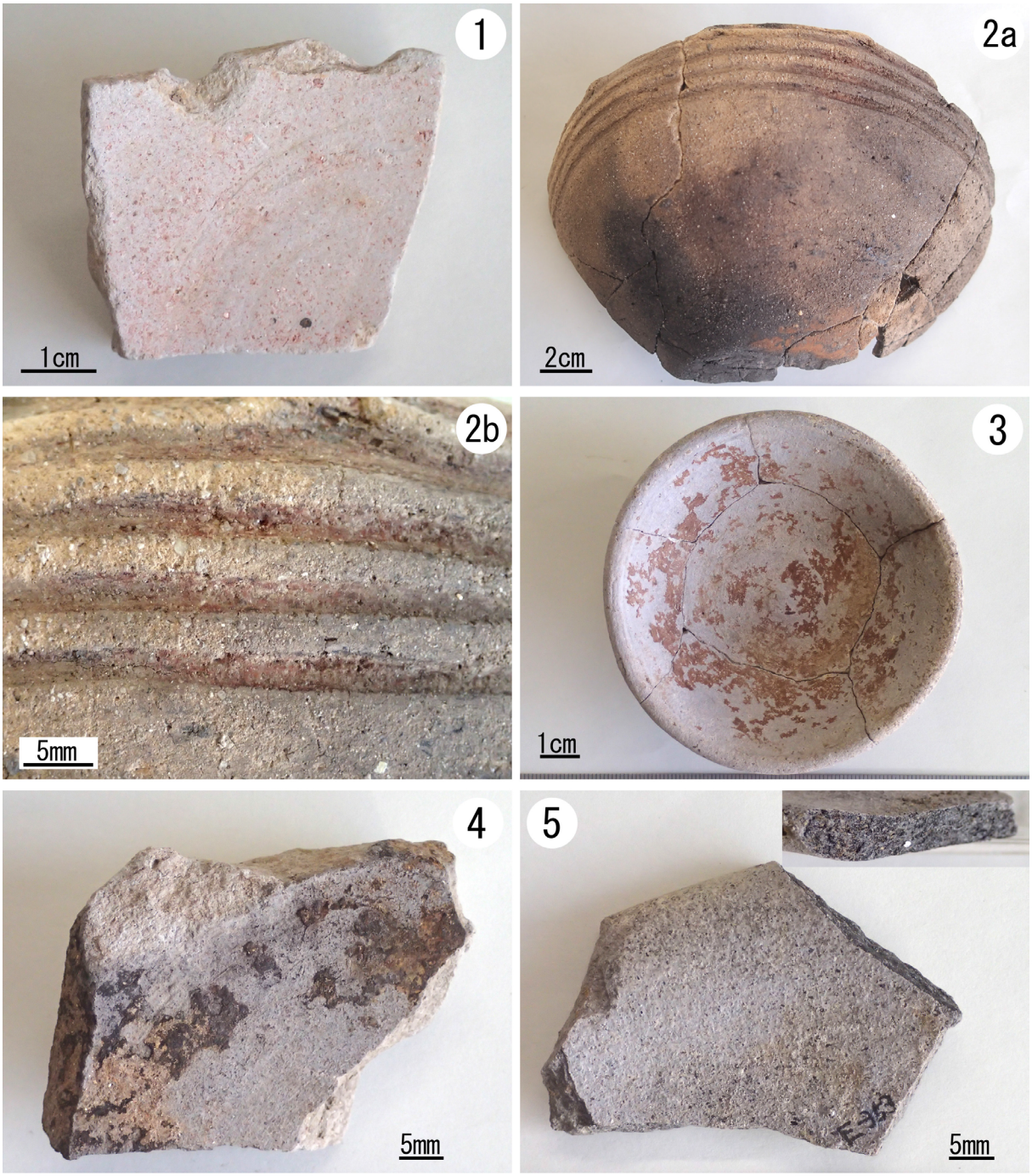


写真1　材質分析を行った土器とその付着物
1.分析No.1（山茶碗、内面付着赤色物）　2a・2b.分析No.2（浅鉢、沈線内黒色付着物）
3.分析No.3（山茶碗、内面付着褐色物）　4.分析No.4（山茶碗、黒色付着物）
5.分析No.5（山茶碗、断面黒色付着物）

第３節　赤色顔料と黒色物質の蛍光 X 線分析

試料および分析方法　分析を行った試料は、E-145 と E-351 に付着する赤色顔料と、E-305 に付着した黒色物質である。いずれの物質もセロハンテープを用いて、土器試料より剥離し、測定試料とした。

測定方法は、1 測定試料につき､3 箇所を測定した。測定機器は（株）堀場製作所製 XGT-5000 を用い、測定条件は、X 線管電圧 30kV、測定時間 500 秒、照射径 100 μ m、雰囲気は大気である。

測定結果　測定の結果を図 57 ～ 59 に示す。赤色顔料（E-145,E-351）で認められた元素は､S（ケイ素）、S（硫黄）、K（カリウム）、Ti（チタン）、Fe（鉄）である。これらのことから、２つの試料に塗布されていたものは、鉄を主成分とするベンガラであると判断できる。近年の鉄に関する研究において、タタラの復元実験などから、ベンガラの材料について濃尾平野北西部に位置する岐阜県大垣市の金生山を産地とする見解が示されている（金生山赤鉄鉱研究会 ,2003)。しかし、今回の分析からは、金生山の赤鉄鉱に含まれるとされる As（ヒ素）も Cu（銅）も検出されていないことから、産地を推定するには至らなかった。

黒色物質（E-305) では S、K、Ti、Mn（マンガン）、Fe であった。３カ所の測定点のいずれにおいても Si が確認されないことから、燃料材の灰などによる物質ではないと考えられる。加原遺跡では、鉄滓が出土しており、金属加工がなされていたことが推測される。そこで、今回の黒色物質も鉄の加工作業に伴うものと考える。　（堀木真美子）

【 参考文献】

金生山赤鉄鉱研究会 (2003) 金生山の赤鉄鉱と日本古代史 .56-84.

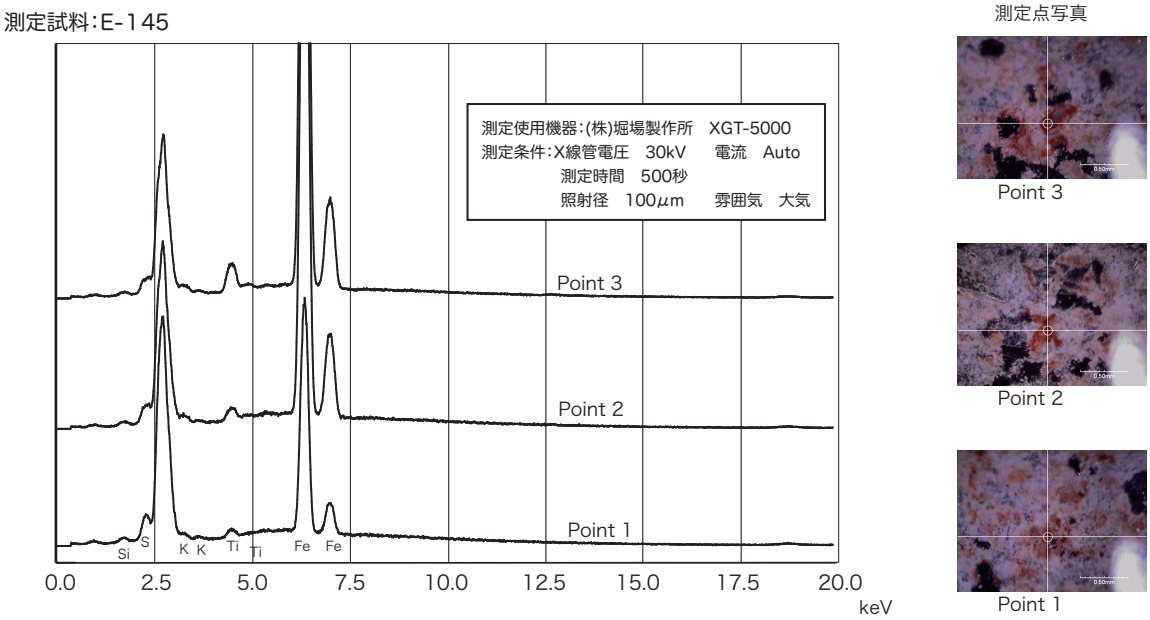
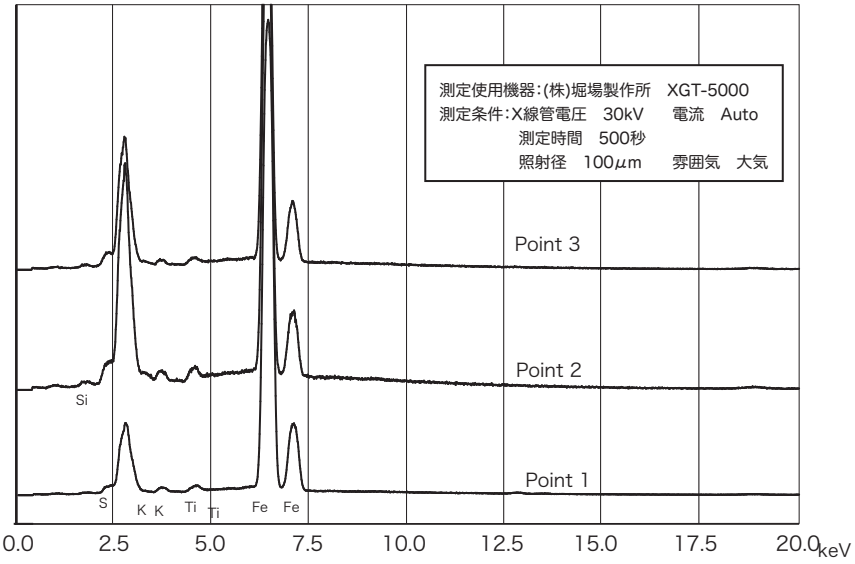


図57　赤色顔料のスペクトル図

測定試料：E-351



測定点写真

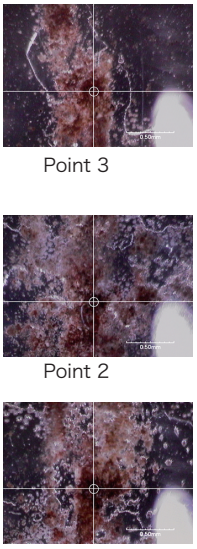
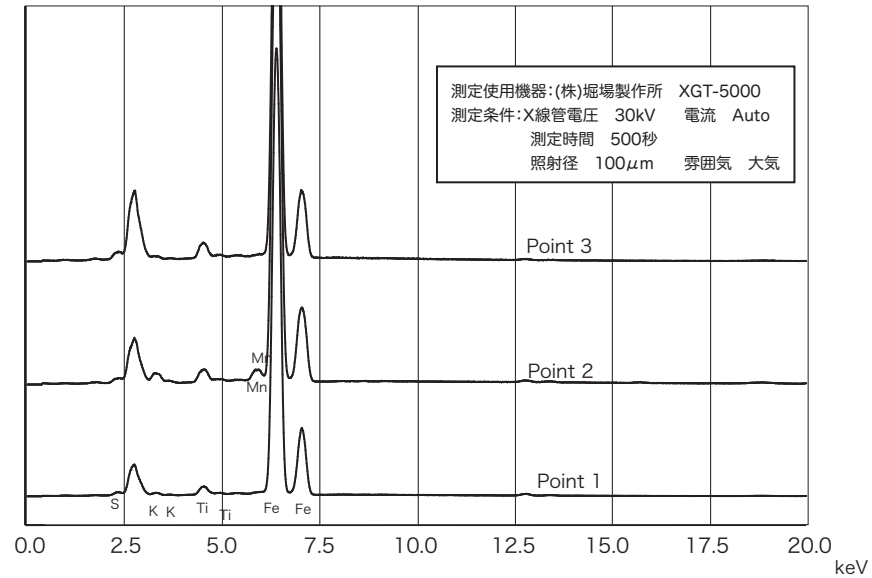


図58　赤色顔料のスペクトル図

測定試料：E-305



測定点写真

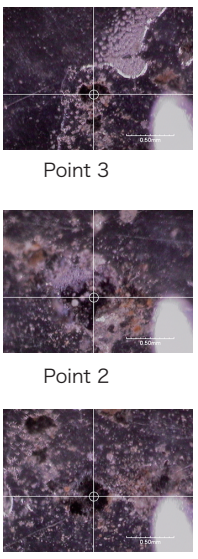


図59　黒色物質のスペクトル図

第５章 考察と総括

本章では、今次発掘調査で検出された遺構と遺物について、前章までの記述を受けて考察を進め、それらの評価を提示することで遺跡報告の総括とする。

第１節　加原遺跡における集落景観の変遷

川の分岐点　加原遺跡は連吾川のつくる段丘間の谷地形に立地していることは先述の通り【第１章第２節】であるが、当該地点は豊川方向つまり南方から臨んだ場合２つの特徴がある。１つは谷の奥部にあること、２つ目は谷が分岐してさらに北東と北西に延びていることである。すなわち加原遺跡の立地は連吾川奥部と分岐する谷の入口という地形の特異点である。このことから川あるいは川沿いが交通路になることを前提に、人と物資の集約と分散がこの場所で行われたと想定することができよう。

狭い集落可営地　ところが連吾川は、現況においてもさほど大きな河川ではないが、その氾濫時の破壊は凄まじく、08A 区の西半部は調査開始時点では河道よりも高所ではあったが、その堆積は粗粒砂と礫が充填されたような状況で、それ以前にあった弥生土器や古墳時代前期の土師器を包含する黒色土層を大きく抉りとっている【第２章第１節】。しかもこのような氾濫は古墳時代以降に限ったことではなく、黒色土層下粗粒砂層の放射性炭素年代測定による暦年代も縄文時代以降と比較的新しい［愛知埋文セ 2015b］。このように集落可営地ではあるものの、安定的な場所はさほど広くない。

このような環境においては、時期によっては集落域の拡大がより高位の段丘側へ向くこともあったであろう。08B 区では平安時代～鎌倉時代の遺構遺物以外にも、古墳時代初頭の竪穴建物（303SIa）や土器群（376SU）、古墳時代後期～奈良時代の遺物も散発的に出土している。西隣高位段丘上の石座神社遺跡は、弥生時代後期～古墳時代前期の大規模集落であるとともに、段丘端部でのみ奈良時代前半の集落が検出されている。したがって弥生・古墳時代の加原遺跡は石座神社遺跡側からみて縁辺という位置づけになるが、逆に奈良時代前半には、崖面の利用は不可能だとしても低地側（加原遺跡）から進んだ集落の拡大がより高位に及んだものとして理解できよう。

谷地形の推移　今次発掘調査の中心は、08B 区の大部分を占める谷地形の検出である。遺構【第２章】で記述したように、検３面 318SX から検２面 084SX へと造成による改変を経ている。繰り返しになるがその変遷をまとめると、元々存在した自然の谷地形（318SX 底段階以前）に対して、上位の丘陵地斜面を切り出しながら埋め立て造成し（318SX 下層下部）、谷地形の下まで集落が進出し、上位の集

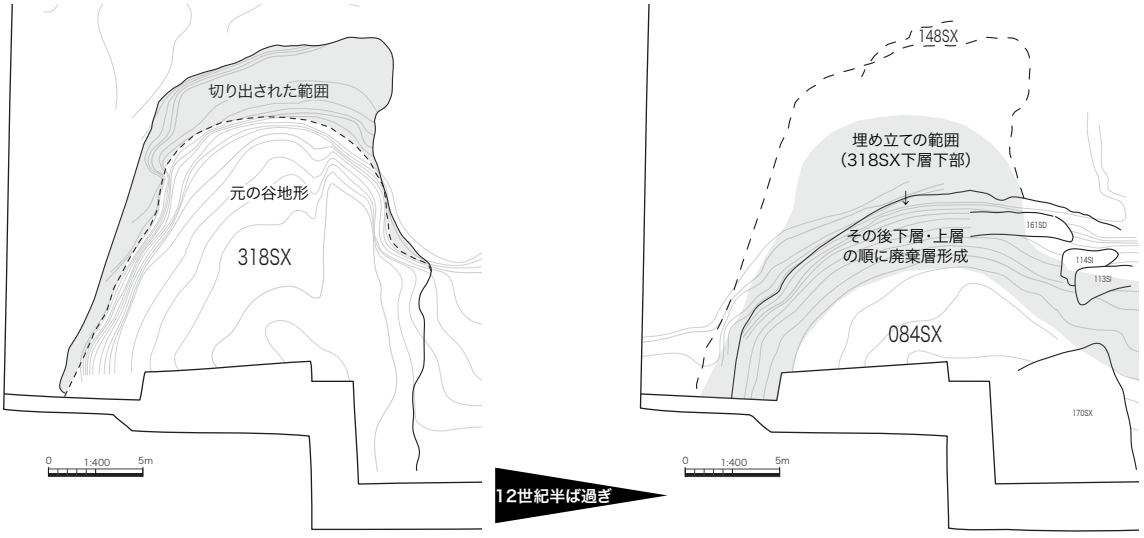


図60　加原遺跡08B区谷地形の造成過程

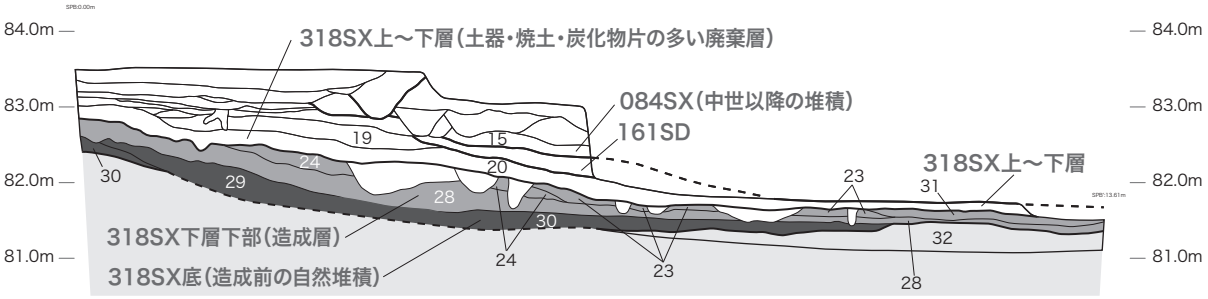
落とともに残滓などの廃棄を続けてさらに埋め立てが進行した（318SX 上〜下層）というものである。その過程で谷地形は南北に細長いものから東方向へ大きく開口するものへと変貌し、最終的に 084SX の形状に落ち着くことになる。

谷地形の造成時期　そこで重要になるのが造成の時期である。318SX 下層下部からは渥美窯編年で 1b 期に相当する山茶碗類（E-131）が出土しており、それが時期の上限を示している。次いで 318SX 上〜下層では同編年 1a 期の破片もみられるが、1b 期相当の口径のものも含まれるので、実質 1b 期に堆積したと考えられる。また直接的な 318SX との重複関係は確認できないものの、竪穴状遺構 113SI からも 1b 期の山茶碗が出土している。したがって、谷地形の改変から新たな集落域の形成はほぼ渥美窯編年 1b 期の中に収まることになる。これは暦年代では 12 世紀半ば過ぎに比定されている［愛知県史編さん委員会 2012］。

谷地形と溝・建物の関係　前項にみた谷地形の変遷は、大規模な人為が含まれている分、景観的画期となることは疑いようがない。それでは、谷より上位の遺構群はこの画期にどのように対応しているのであろうか。遺構群を溝・掘立柱建物・竪穴状遺構に分けてみてみよう。

溝は、北東から南西方向へ平行して延びる 2 条の溝 004SD と 005SD がある。これらは同方位であることから同時存在もしくは造り替えによる連続が想定され、通常その全長はほぼ同一になるはずである。しかしながら 004SD と 005SD の南西端は約 14m もずれており、上記の想定どおりにはならない。ところがそれぞれの南西端は造成前後の谷地形それぞれの上端に対応している。すなわち 004SD が 318SX、005SD が 084SX の上端でちょうど終結しているのである。まず 005SD は、318SX 上〜下層の上から掘り込まれており明らかに造成後にかなり埋没が進んだ段階と考えられる。一方 004SD は検 2 面において 148SX を切り込んでいる。148SX は 318SX と同一遺構で深さが最大で 20cm 以内と浅く、もと高所であった範囲が造成時に切り出されて凹地化したものとみられるので、それが埋没するのは造成からある程度経過した段階ということになる。まだ 318SX の上〜下層の堆積がさほど進まずに凹地であったが故に 004SD がここで南西端になったものと思われる。このように、004SD と 005SD の先後関係は、谷地形の造成とその後の堆積に対応していると考えることができる。

次に掘立柱建物をみる。谷地形の堆積と直接先後関係にあるものは確認されていないが、1007SB には注目できよう。当該遺構の柱穴は 004SD の底面で検出されており、時期は 004SD の前ということになる。他遺構の方位軸との関係から時期を類推すると、1007SB は 004SD・005SD と方位が近い点



084SX　　：15 褐色シルト（中粒砂混じる）
318SX上〜下層：19 黒褐色粘性シルト（角礫を含み、炭化物・土器片少量含む）
20 黒褐色粘性シルト（細粒砂・角礫少量・土器片混じる）
318SX下層下部：23 灰褐色粘性シルト（土器片含む、細粒砂）
24 黒褐色粘性シルト（土器片含む、細粒砂）＋褐色シルトブロック（1〜3cm）混じる
28 極暗褐色粘性シルト（径2mm〜5mmの小礫混じる）＋褐色シルトブロック（1〜3cm）混じる
31 黒褐色粘性シルト
318SX底　　：29 黒褐色粘性シルト（径2mm〜5mmの小礫混じる）
30 オリーブ黒色シルト
32 黒褐色粘性シルト

図61　谷地形堆積と造成の各段階区分図

が重要になる。さらに 1007SB の北東側には同方位の 1005SB が存在しており、一連のものであった可能性がある。ちなみに間接的ではあるが 1005SB と柱穴が重複し後となる 1006SB の 012SK からは清郷型鍋が出土しているので、これらの掘立柱建物がおよそ 11・12 世紀代で 318SX 造成と 004SD 開削までの範囲に捉えることができる。

最後に竪穴状遺構との関係をみる。このうち検 3 面で検出されたものが最も先行することになるが、特に 318SX が上から重複している 316SI・317SI・319SI・322SI・335SI からは H-72 号窯期に相当する灰釉陶器が出土している。これらは造成前谷地形の縁に立地していることは 318SX 内外の等高線からも明らかで、この段階になってそれまで展開していた集落が手狭になり、谷地形を埋めてより下位に立地を求める動きになったと考えられる。

ところで竪穴建物・竪穴状遺構では、他に灰釉陶器が出土した 303SIb や竈が付属する 125SI の存在も見逃せない。125SI については出土遺物に不安定な点が残るが、303SIb は 10 世紀前半代で良いと思われる。他にも灰釉陶器・緑釉陶器には K-90 号窯期までさかのぼるものもあるので、9 世紀後半代の竪穴建物などの遺構が周辺などに存在する可能性が高いが、明確にできたのは 10 世紀前半以降ということになる。

古代集落の変遷　以上のように、竪穴建物・竪穴状遺構と一部掘立柱建物で構成される古代集落が谷地形造成に先行して経営されていた様子が見えてきたが、それは可能性として 9 世紀後半にまでさかの



図62　加原遺跡08B区の主要遺構図

ぼる。一方、若干ながら出土した須恵器は 7 世紀末～ 8 世紀中葉のもので、8 世紀後葉～ 9 世紀前半の空白期があることは否定できない。土師器甕も同様で、典型的な L 字形の屈曲をみせる三河型の長胴甕は確認できず、先行するハケ調整甕や、直線的な口縁が斜めに立ち上がる K-90 号窯期にみられるタイプのものが清郷型に混じって散見される。

このことから、加原遺跡の古代集落は前後 2 期に区分され、一部が石座神社遺跡東端にまで及ぶ前者と平安時代中期の後者が不連続に存在することが示される。

第 2 節　古代末期～中世初頭の土師器鍋

加原遺跡の土師器鍋　遺物【第 3 章】で提示したように、加原遺跡の 12 世紀代にかかる遺構を中心に清郷型と呼ぶ多数の土師器鍋が出土しており、その量並びに内容から当該遺跡を特徴づける遺物である。本節ではこの清郷型鍋を中心に、胎土分析【第 4 章第 1 節】の成果も交えて古代の土師器煮炊具について考察し、遺跡の評価につなげていきたい。

三河型甕と清郷型鍋　尾張・三河地域において、竈を付設した竪穴建物で構成される奈良時代から平安時代前期の集落遺跡では、供膳具たる須恵器・灰釉陶器と並んで土師器煮炊具が土器の主体となる。煮炊具は竈に固定されるための器壁の薄い長胴甕と移動可能な小型甕の 2 態が基本形である。その類型は尾張地域では濃尾型、三河地域では三河型と旧国域を分布域とする特徴も備えている。特に三河型甕は最終器面調整に徹底したナデを行うことと、横方向に明瞭に屈曲する口縁部を指標とする。加原遺跡は三河国域にあるので三河型甕が卓越している地域に該当するが、先述【前節】したように加原遺跡の古代集落は平安時代中期以降に主体があるため、三河型甕はわずかしか出土していない。

三河型甕については、豊田市・水入遺跡の報告において若干の考察を行い、その生成過程について見通しをたてた［愛知県埋文セ 2005］。それは、器壁の薄さを最優先指標とするならば、その登場は西三河地域で先行し、東西両三河地域で定型化をみるのは 8 世紀半ばというものである。またその際に実施した西三河地域出土資料の胎土分析成果では、器形の共通性もさることながら、特定の淡水性珪藻の化石が材料粘土中にあることを多くの試料で確認することもでき、沼沢地周辺という環境で集中的に生産がなされた可能性を指摘するに至った。そしてその生産地はおそらく先行した西三河地域の中に存在する可能性を提示した。一方、清郷型鍋（水入遺跡報告時には「後期三河型甕」と呼称）は、これと異なる胎土組成を示し、それ独特の共通性を有していることが考えられた。

その見通しから 10 年を経た今回、東三河地域の遺跡出土三河型甕と伊勢湾岸地域出土の清郷型鍋からそれぞれ試料を得て同じ視点で胎土分析を実施した。先述【第 4 章第 1 節】したように、(1) 三河型甕の東西両地域間での差異および東三河地域内での時期的変化と、(2) 各地域出土清郷型鍋の形態的共通性と胎土組成との関連、の 2 点を主眼とすることで先の見通しを検証する基礎データを得ることを目的とした。

三河型甕の分類　三河型甕については北村和宏の分類［北村 2000］と西尾市･寄名山遺跡での分類［三田 2008］、豊川市・国分寺北遺跡での分類［平松 2012］がある。北村は、清郷型鍋が三河型甕の系譜を引くという理解のもとこれらをまとめた「三河型甕」を設定し、口縁形状から A ～ G 類に分類した。この分類はそのまま時間軸上に組列され編年の位置づけとなった。また寄名山遺跡・国分寺北遺跡の分類はともに各遺跡内出土資料を口縁形状によって分類したもので、より詳細な分類をおこなっている。ただし基本的な形態変化の方向については北村の分類を踏襲したものといえる。

本節では、三河～尾張国域を中心とした地域を時期別に通覧する立場から、定型化以前も含めて 4 つに分類する【図 63】。三河型甕として最も知られた形状は B 類の段階であるが、器壁が薄く、口縁

部の屈曲が明瞭になる段階を三河型甕の登場と位置づける。その前段階は口縁形状や厚さもさまざまな状態がある（前三河型）。東三河地域では前三河型の段階から三河型 A 類の間は最終器面調整がハケでとどまっていることが多い。次いで B 類では口縁部の鋭角的ともいえる屈曲と指ナデ仕上げおよび白色系の色調となり、西三河地域のものと見分けがつかなくなる。そして C 類では口縁部屈曲が斜め上に変化し、端部の面取りが顕著になる。口縁屈曲部を中心に器壁が厚くなる傾向もみえてくる。これは、A・B 類段階では土を固めた造り付け竈構築時に固定していたものが、C 類段階でそのような竈に限定されなくなったことも関係していると考えられる。同時に胴部長が短くなり鍋に近い形へと変化している。しかし C 類では明らかに浅めの鍋形も存在しており、これは竈固定用の甕に対して別の形態を用意したものと考えられよう。

三河型甕口縁分類

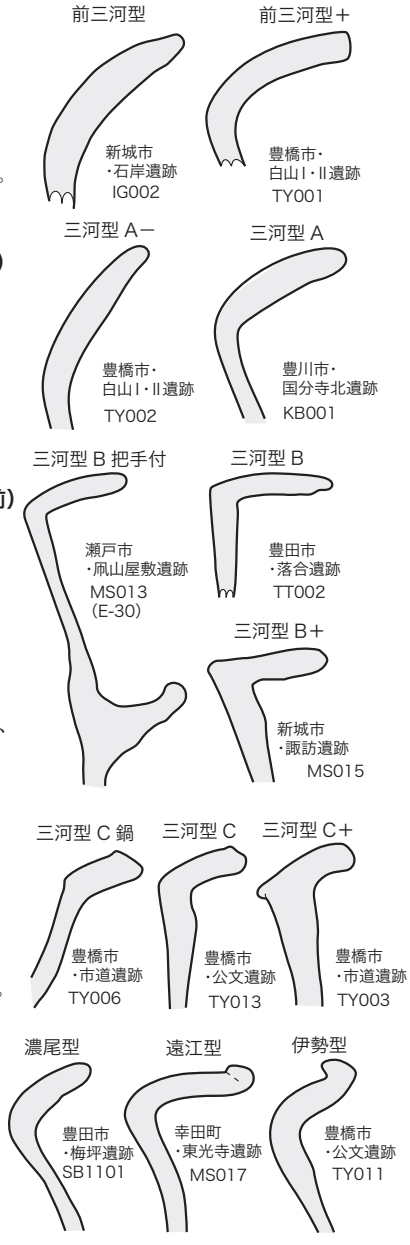
前三河型（〜7c 後半）
器壁が厚く、東三河地域を中心にハケ調整が顕著。口縁は大きく外反し丸みがある他、若干つまみ上げ傾向。

三河型 A 類（8c 前〜中葉）
器壁が薄く、口縁の屈曲が顕著になりその断面が草刈鎌形になる。ナデ仕上げが増加、東三河地域ではハケ仕上げ残る。

三河型 B 類（8c 後〜9c 前）
器壁・口縁ともに薄く、明確な屈曲で直角になるものあり。口縁端部の面取りも開始。調整にハケ含むが、指ナデ仕上げを徹底、共通する灰白色も特徴。長胴甕と小型丸甕を基本とするが、把手付や、大口径の鍋も存在する。

三河型 C 類（9c 中〜後葉）
器壁は胴部上端を中心にやや厚くなる。口縁の屈曲は直線的に斜め上方となる。口縁部端面の面取りも顕著。指ナデ仕上げは継続。

その他
三河型の周辺地域から入った濃尾型・遠江型・伊勢型があり、それらの在地模倣もあったと考えられる。



加原遺跡出土の清郷型鍋口縁分類

くの字形
口縁部内面を斜めに面取りする。端部は横方向へつまみ出され羽釜状となる。その貼付へは胴部上端にまで粘土が付加される。

羽釜形
くの字形に似るが、口縁部の貼付けは胴部上端外面に貼付ける。端部は上端よりやや下方につまみ出す。

L 字形
羽釜形同様に、胴部上端外面に口縁部を貼付ける。ただしその端部を真横からやや上方につまみ出す。

平縁形
口縁部成形に特段粘土を付加せずに胴部上端の厚みを増加させたもの。指ナデを多用するため平面が生じる。

平縁（角）形
口縁部の粘土を付加し真横に延ばしたものを指ナデ等で面取りし方形に仕上げる。

ハの字形
口縁部を逆ハの字形に外反させる。口縁部内面の面取りのみでくの字形の端部を省略させたようなものから、丸みのある端部まである。

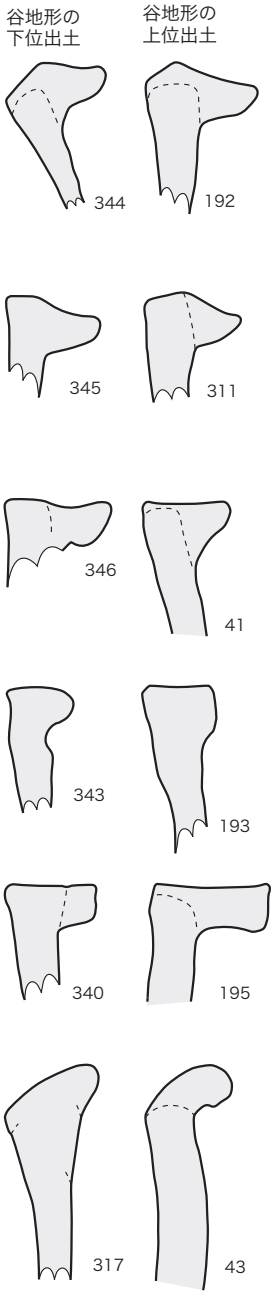


図 63　三河型甕と清郷型鍋の口縁分類図

清郷型鍋の分類　一方、清郷型鍋（甕）は、岩野見司が愛知県一宮市・清郷遺跡の出土資料を基準にして、灰釉陶器と共伴する特徴的なくの字形口縁部の土師器甕の型式を設定したことに始まる［岩野 1974］。同型甕は、既に新城市・馬場遺跡の竪穴建物遺構（後述）でも出土したことで、尾張・三河両地域に存在することが確かめられていた［岩野 1967］。その後、佐野五十三［佐野 1990］による静岡県内での事例集成によって遠江・駿河国域にも分布が確かめられた他、伊勢国域北部を中心に出土例が知られるようになった。永井宏幸［永井 1996］は岩野の分類を再整理・追加してＡ～Ｇ類まで区分し、三河型甕の系譜を引く一群と西日本の羽釜に影響された一群の存在を指摘し、造り付け竈と長胴甕の終焉を結び付けながら当該煮炊具を鍋形として位置づけたのである。近年では、三河湾沿岸の幡豆郡に所在する寄名山遺跡で大量に同型鍋の出土が確認されており［吉良町 2008］、清郷型鍋分布の中心が三河国域にある可能性が高まっている。

以上の先行研究を受けて加原遺跡出土の清郷型鍋を分類する。しかしながら、三河型甕に比べて規格性の高さではばらつきの大きい点が指摘される。しかし口縁部成形方法の特徴により６つに分類し、このいずれかにあてはめていくことが可能である。清郷型の最も特徴的な口縁は全形がくの字形になるもので、胴部上端の上から外側へ口縁部粘土を貼付け、最大の特徴は内面に斜めの面取りを施していることである。これは口縁端部のつまみ出し位置が上下しようとも変わらず、一貫したものとして捉えられる。このタイプはこれまでの指摘どおり三河型甕、特にＣ類の器壁が厚くなったものと解釈できよう。

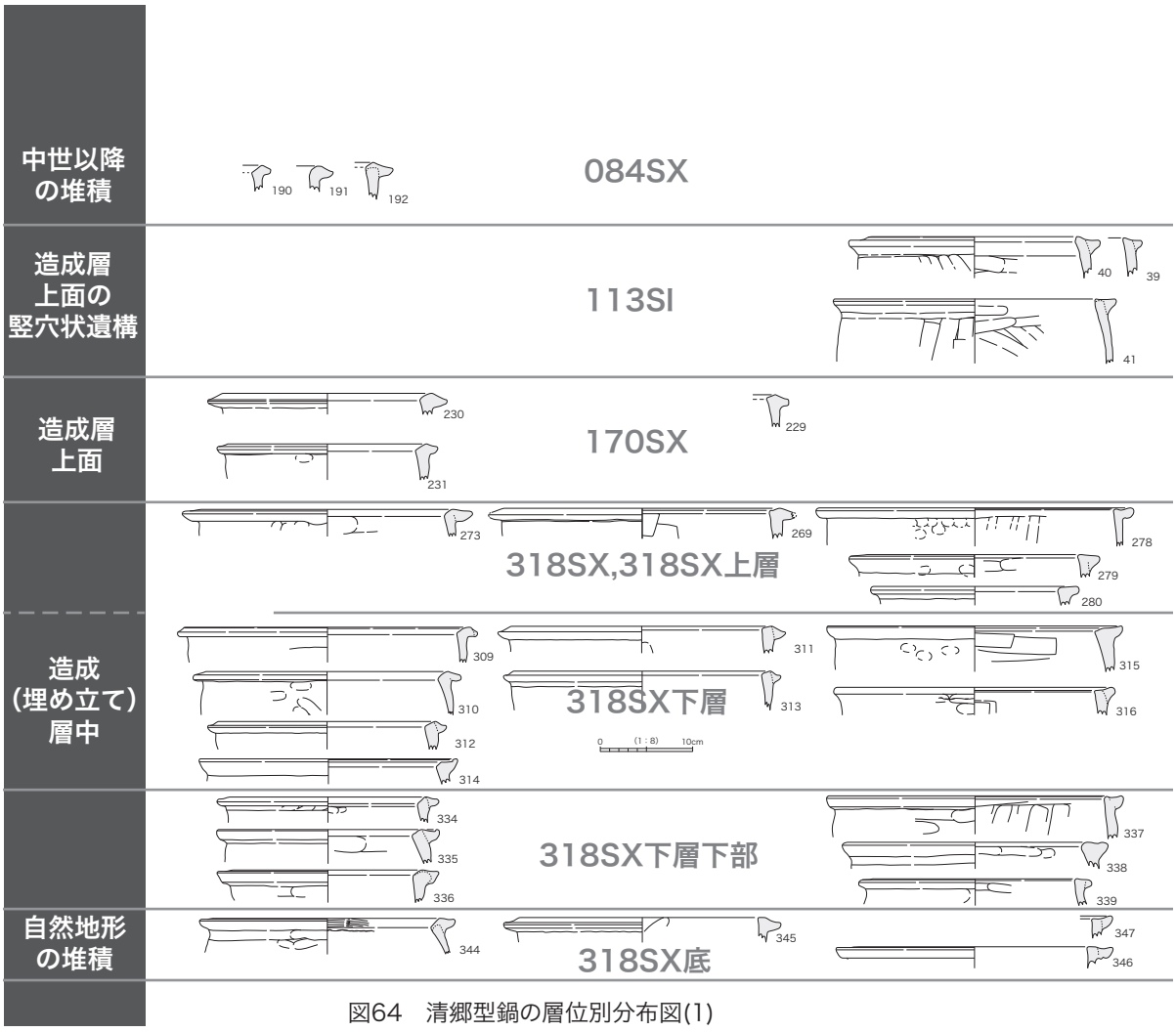


図64　清郷型鍋の層位別分布図(1)

くの字形以外では、上端内面の面取りのない羽釜形がある。外面に口縁部を貼付けるもので、横方向へつばが張り出したような形状となることからこの名を付した。また、口縁部上面を平らにする傾向のものとしてＬ字形・平縁形・平縁角形がある。Ｌ字形は羽釜形と角度によっては違いが少ない。一方平縁・平縁角形は口縁部を方形につくり、口縁部上面が真横に展開する点が特徴となる。最後に今次発掘調査でいくつかの形態がみられたハの字形は、ほとんどくびれのない口縁部となっており、特にこのタイプに限ったことではないが、胴部の粘土帯接合痕が明瞭にみられる程度の粗雑な指ナデ仕上げがあるので、調理用ではなく、何らかの作業用具の一種ではないかとも考えられる。

清郷型鍋の層位別分布　そして上記の分類で、清郷型鍋が最も出土している谷地形での状況を層位別にみてみよう。ただし谷地形の堆積は最大でみても 12 世紀中葉から後葉にかけてのもので、それほど長期間にわたるものではない。また、その堆積も人為的な切り出と埋め立てが関係していると考えらえるので、必ずしも層位学的に時間軸を反映しているものとは言いがたい面もある。しかしながら指摘しうる点として、ハの字形口縁の鍋は比較的上層に多くみられることに注意したい。このタイプの鍋は、器面調整の粗雑さから作業用具の可能性を考えているが、谷地形周辺での各種作業工房が発達してく中で使用と廃棄量が増加したものであったとすれば、自ずとそれは下地となる造成の後になる。これに対して、くの字形のタイプが上層では小片に限られる点は、当該鍋の用途と変遷を整理する上で鍵になる事項であるといえよう。

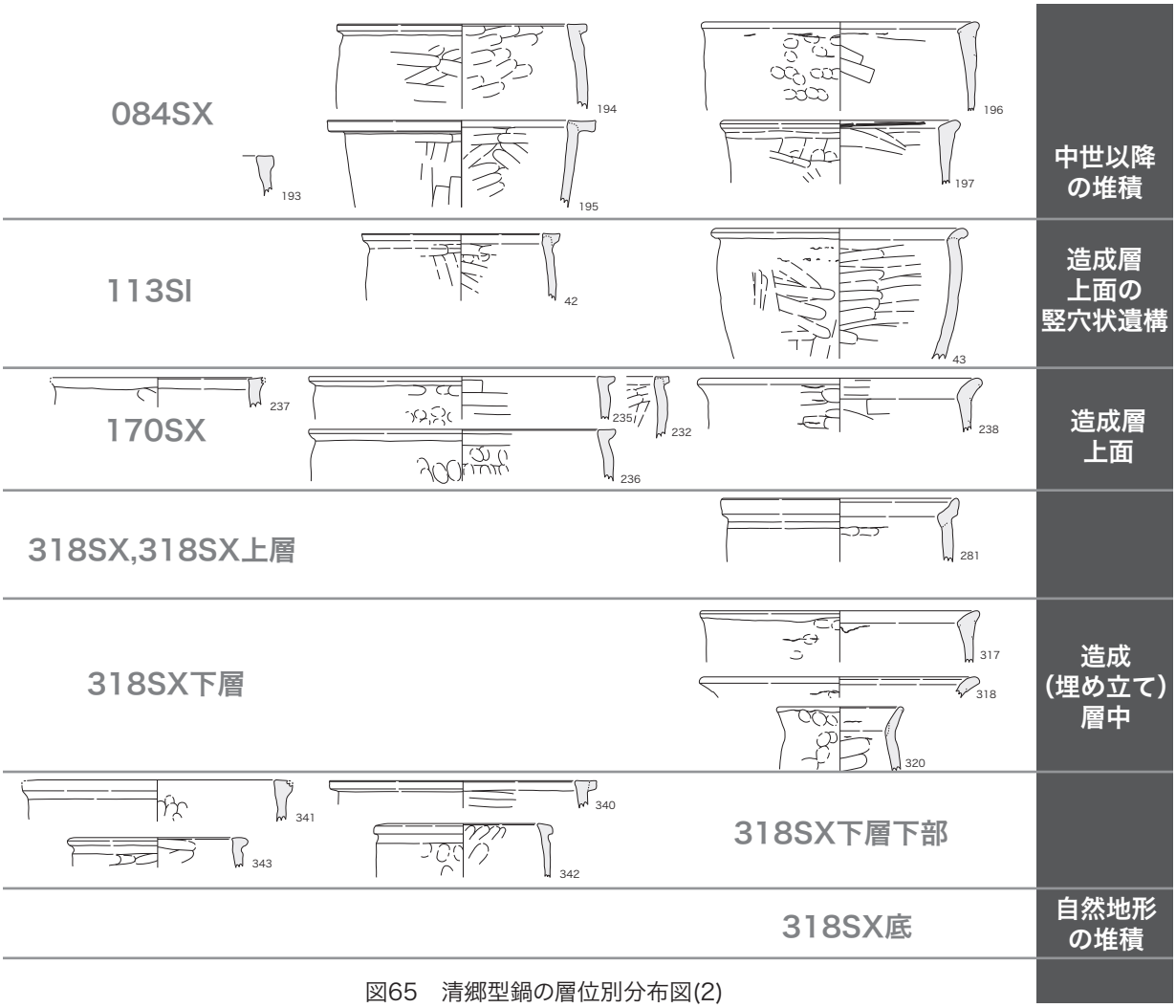


図65　清郷型鍋の層位別分布図(2)

胎土分析成果から　胎土分析の成果は、新たに興味深い事実を示すこととなった。

第 1 点は、清郷型鍋の胎土について、58 点中 51 点という高率で花崗岩質の砂粒（B 群）を含む共通性を示したことである。また、淡水成粘土に堆積岩類（C 群）という組成で 5 点がまとまっていることも注意される。このことは、後述する三河型甕が時期によってはばらつきを示しているのを参照すれば、いかに材料粘土が限定的であるかを物語っている。ことに断層ガウジに分類される粘土、あるいは斑れい岩質砂粒を含む海成粘土を材料とする御山寺遺跡出土資料（MS011）の存在は、その出自が幡豆郡域に限定可能な見通しを与えてくれる。

第 2 点は、東三河地域の三河型甕の材料粘土を通時的にみた場合、三河型 A 類とした 8 世紀前～中葉の段階ではばらつきが大きく、器形の規格性が高くなったものの粘土がさまざまな環境から入手されていたことが示されたことである。これは単純化すれば、多様な製作場があったことを推察させるものである。これに対して典型的な三河型である B 類の段階では、清郷型と同様に花崗岩質の砂粒（B 群）を含むものに限定される。しかし粘土は判明した範囲において圧倒的に淡水成が主体であり、これは西三河地域の三河型甕を分析した先行成果に近い。ただしこのような淡水成粘土は西三河地域に限定されるものではないことから、東三河地域にも拠点的な製作場があった可能性がある。

第 3 点は、三河型から清郷型への移行期に、再び材料粘土のばらつきがみえることである。具体的には C 類・C 類＋が相当する。少なくとも B 類段階の淡水成粘土への集中は看取されない。しかしながら明らかに C 類段階で断層に関わる粘土を使用は今回の分析で検出できなかったことから、清郷型鍋の製作が開始されてから粘土採取地（あるいは製作場そのもの）が移動したという見通しを立てておきたい。すなわち清郷型の成立は、三河型製作者とその環境の中から始まったものと仮定される。

第 3 節　古代設楽郡の設置と荘園時代の開始

山間部の古代集落　以上 2 節にわたって加原遺跡をめぐって、集落と土器の 2 方向から考察を深めてきた。要点としては、8 世紀中葉に一旦途絶した集落が 9 世紀後半より再開し、12 世紀代になって大規模な造成工事を伴って最盛期を迎えることが指摘される。尾張・三河国域における古代集落の動態については、西三河地域や尾張東部（瀬戸）地域では 8 世紀後葉以降に山間部への進出が顕著になる［永井 2013］。これらは、従前の平野部集落からの延長ともいえる変化であり、これに対して、例えば三河国額田郡域にある豊田市・下山地区では、それまで須恵器がほとんど出土しない地域において、9 世紀後半の灰釉陶器や三河型土師器甕が出土する竪穴建物（竪穴状遺構）に限定される集落遺跡が近年の発掘調査であきらかになってきている［鈴木 2014・武部 2014］。その具体的評価については今後成果が整理・公表されていく過程で行っていく必要があるが、縄文時代晩期以来ほぼ集落が経営されていなかった地域に、突如として多数の集落があらわれる様子はきわめて特異な現象であるといえよう。

設楽郡の古代集落　それでは加原遺跡の属する設楽郡域ではどのような変動があるのだろうか。こちらはさらに不明な点が多く、旧街道に沿って横穴式石室古墳のある地域や 8 世紀代の須恵器が出土して古代集落と目される遺跡がいくつもあることは事実である。しかしそれに対して縄文土器に次いで灰釉陶器が採集される遺跡が多数あることも事実で［永井 2013］、豊田市・下山地区のような展開をみせる可能性も充分考えられる。加原遺跡は平野部との関係でいえば連続性のある立地であることから、単純にこれらと同列に扱えないものの、第 1 節で指摘したように河川に沿った交通路の分岐点にあってより谷奥（山間部）との物資交流にふさわしい立地でもあり、山間部集落の消長と連動している可能性は高い。

しかもこの集落消長は、『延喜式』近世写本の頭注にあるように、宝飫郡から設楽郡を割いて置いた

とする延喜３年（903）に若干先行する時期であることも見逃せない。山間部に新たな郡を置く必要があったとするならば、居住者数の増加と、場所によっては額田郡のような集団移住の様相が背景にあったと考慮する必要がある。

新城市・馬場遺跡　先述した清郷型鍋の出土遺跡の１つに新城市・馬場遺跡がある。当該遺跡は加原遺跡から連吾川を下った地点にあり【第１章第２節】、まさに連吾川両脇の高位段丘に挟まれた谷の入口に位置している。豊川用水工事に伴う発掘調査では竪穴建物が検出され、一辺約 2m の隅丸正方形の南隅に竈が敷設されたものであった。当該遺跡からは灰釉陶器と土師器清郷型鍋が多数出土したが、一部は三河型甕Ｃ類＋から厚手の清郷型鍋へ移行過程にあるものと考えられる。灰釉陶器の年代から９世紀後葉から 10 世紀代を中心とする時期と考えられる。加原遺跡では 303SIb 程度でしか明確には遺存していなかったが、これと同時期に展開していた集落の１つであろう。当該遺跡で重要な点は、遺物の中に灰釉陶器耳皿や管状土錘を含む豊富な器種構成がうかがえることである。確かに小規模な竪穴建物自体は作業場ないしは厨房的な施設かもしれないが、付近にこれら食器や道具を使う階層や平野部の生活様式に慣れた人々がいた可能性があろう。

中世初頭の発展　加原遺跡では 10 世紀以降の灰釉陶器そして山茶碗の搬入があるので、集落経営が継続していた。それが 12 世紀半ばを中心とする時期に造成が加わり一時的ではあるが盛んな物質文化をみせてくれる。それではこの 12 世紀とは設楽郡域にとってどのような時代だったのだろうか。それは歴史的環境【第１章第２節】でも述べたように 12 世紀末までに成立した設楽荘の時代でもある。馬場遺跡の周辺では八剣神社で 12 世紀末～ 13 世紀初頭の中世瓦が出土しており、荘園に付属あるいは管理する立場の寺院があったことを想像させる。また、その直下にある楠遺跡では大量の土師器小皿が出土しているし、既に報告した柿下遺跡［愛知県埋文セ 2012］では、丘陵部斜面の平場から山茶碗の出土する竪穴状遺構群が検出されている。このように 12 世紀代の大宮川・連吾川流域の一帯では盛んな開発行為があったことが裏付けることができ、加原遺跡はその一翼を担う位置にあったものと考えることができよう。　（永井邦仁）

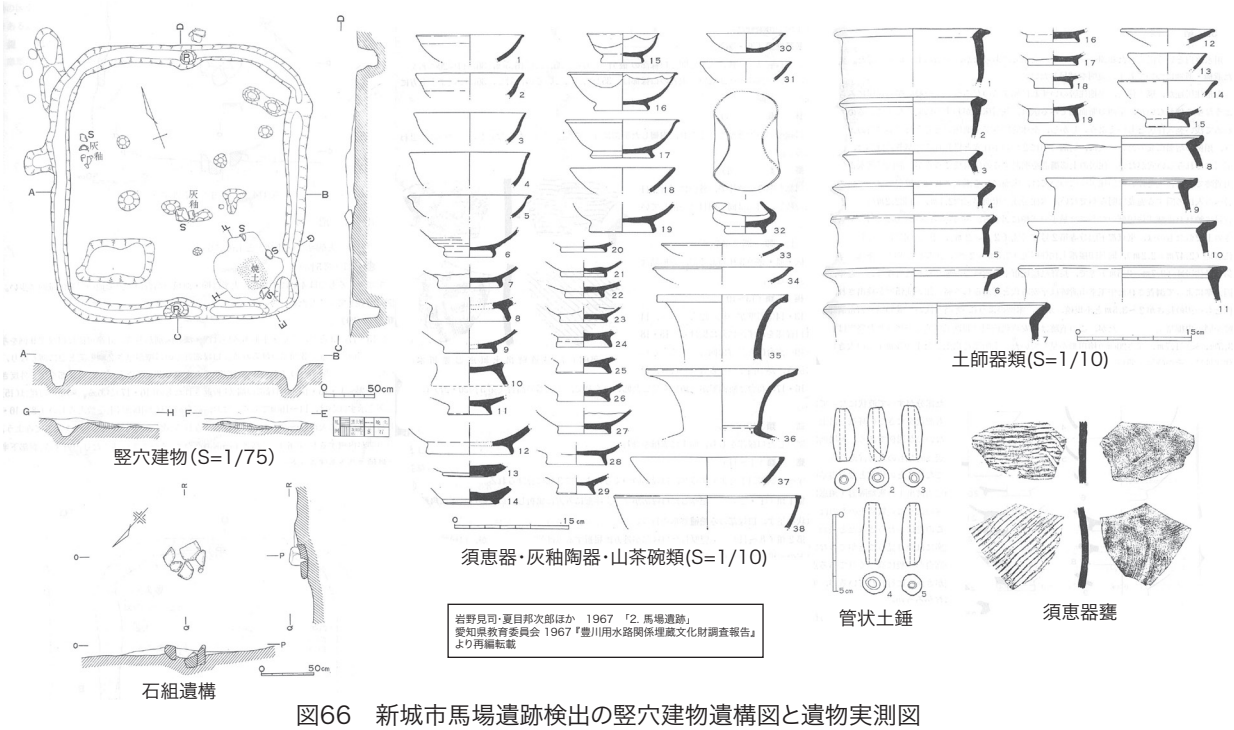


図66　新城市馬場遺跡検出の竪穴建物遺構図と遺物実測図

【文献一覧】

愛知県史編さん委員会　2010 『愛知県史 資料編考古 4 飛鳥～平安』愛知県
愛知県史編さん委員会　2012 『愛知県史 別編 窯業 常滑』愛知県
愛知県埋蔵文化財センター　2005 『水入遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 108 集
愛知県埋蔵文化財センター　2012 『柿下遺跡』 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 176 集
愛知県埋蔵文化財センター　2014 『須長 10 号墳』 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 184 集
愛知県埋蔵文化財センター　2015a 『石座神社遺跡』 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 189 集
愛知県埋蔵文化財センター　2015b 『吉竹遺跡』 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 194 集
愛知県埋蔵文化財センター　2015c 『石岸遺跡』 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 195 集
愛知県埋蔵文化財センター　2015d 『モリ下遺跡』 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 196 集
岩野見司ほか　1967 「馬場遺跡」『豊川用水路関係埋蔵文化財発掘調査報告書』愛知県教育委員会
岩野見司　1974 「第 3 節 浅井町 清郷遺跡」『新編一宮市史 資料編 4』一宮市
北村和宏　2000 「古代『三河型甕』考」『研究紀要』第 2 号 愛知県埋蔵文化財センター
吉良町教育委員会　2008 『寄名山遺跡』吉良町埋蔵文化財発掘調査報告書第 4 集
佐野五十三　1990 「清郷型甕の研究」『研究紀要』第 1 号 財団法人静岡県埋蔵文化財研究所
三田敦司　2008 「第 4 章 総括 2 寄名山遺跡出土の平安時代の土師器甕・鍋について」『寄名山遺跡』吉良町教育委員会
設楽原を守る会　1992 『設楽原写真集』
新城市教区委員会　1974 『長篠合戦』
新城市教育委員会　1996 『楠遺跡』
新城市教育委員会　1997 『北下遺跡』
鈴木正貴　2014 「孫石遺跡」『年報』平成 25 年度　愛知県埋蔵文化財センター
武部真木　2014 「栗狭間遺跡」『年報』平成 25 年度　愛知県埋蔵文化財センター
永井邦仁　2013 「西三河 - 平野と山間古代集落の動態と相関」『東海地方における古代の地域社会』 考古学研究会
永井宏幸　1996 「清郷型鍋再考」『年報』平成 7 年度　愛知県埋蔵文化財センター
平松弘孝　2011 「第 4 章 小結 2 古代以降の土器と時期区分」『国分寺北遺跡Ⅰ』 豊川市教育委員会
藤根久ほか　2005 「水入遺跡出土の古代土師器甕胎土分析」『水入遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 108 集

加原遺跡

遺構写真 写真図版 01 ～ 12
遺物写真 写真図版 13 ～ 18
胎土分析顕微鏡写真　19 ～ 28



加原遺跡西側の丘陵上（石座神社遺跡）側からみた 08B 区第 1 面の全景。南北道路奥の一段低いフェンス内が 08A 区（調査終了）で、周辺の水田は連吾川の氾濫原である。この付近では連吾川は小さく目立たず、すぐ対岸の段丘が迫っている。この谷を挟んだ景観がまさに長篠・設楽原合戦における織田・徳川方北部の陣からの視界である。



08A 区、検 1 面全景。北から。連吾川の氾濫にかかわる粗粒砂・礫層の撹乱を除去した状態。写真右の道路を挟んだ一段高位の耕作地が 08B 区である。洪水によって黒色土層の大半も流出していたが、調査区東端付近でわずかに残存していた。調査ではこれをベルト状に遺している。



同、全景。北東から。中央の畦畔状高まりの両脇は粗粒砂が埋土となる。土層断面では溝状の落ち込みになっていた（下）。



同、全景。東から。黒色土層の残存部。手前は耕地整理の切り出しで滅失していた。奥の草地が調査前の 08B 区。



08A 区、調査区西壁の土層断面（部分）。南東から。右側の高まりが畦畔状高まりの断面、手前の水性堆積層は畦畔状遺構の後である。



同、畦畔状高まり部分、東から。これ自体も粗粒砂層の上にある。



08A 区調査区南壁における土層断面。東からみる。粗粒砂層の上に黒色土層があり、それに西端の溝が切り込んでいる。



08A 区調査区北壁における土層断面。畦状に残った粗粒砂層の東側に溝状堆積がみえる。



08A 区、黒色土層残存部の土層断面。西からみる。中央に、前頁の畦畔状高まりと似た断面構造の高まりとその南側に砂礫の混じった溝状の堆積がみえる。一方北側は黒色土と灰褐色の粗粒砂が交互に堆積している。当該層からは顕著な遺物が出土せず、これらの上面で検出された遺構（下写真）で古墳時代初頭の土器が出土していることから、それ以前の可能性もある。

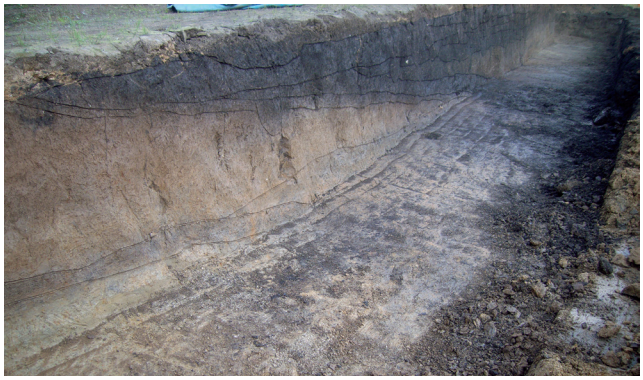


08A 区、黒色土層残存部にて検 2 面遺構完掘状況。南東から。黒色土残存部の端部は土手状に立ち上がり、それに伴うような形状の周溝がある。周溝の範囲内では土坑が検出され、柱列の可能性が想定された。当該遺構群からは古墳時代初頭の土器のみが出土している。しかしながら、遺構の形状から、耕地整理前の小区画の耕作地である可能性も考えられる。






08 区、調査区南壁における土層断面。(左上) 調査区南壁全景。北東から。(右上) 同断面西端。西から。下層の灰白色粘土は山側の基盤層。(左下) 同断面西端。東から。黒色土層の上位は耕作土層、s らに上は現代の造成層に覆われている。(右下) 同断面東端。北西から。黒色土層などが平行に堆積しているが、手前 (断面中央部) に向かって若干の傾斜があり、南側へ開く谷地形であることがわかる。

(左) 08B 区、調査区北壁における土層断面。南西からみる。正面の森の下を連吾川が南流する。(右) 北壁土層断面西端の状況。黄褐色の粘土は基盤層である。その上位に黒色土層の堆積があり、それ自体も分層される。



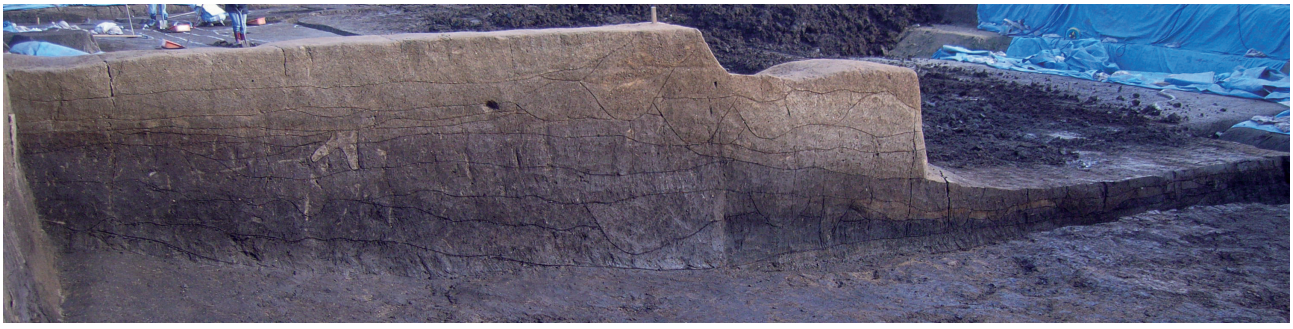

(左) 08B 区トレンチ 01 中央ベルト土層断面全景。南東からみる。当該トレンチとベルトは谷地形 (084SX・318SX) の横断面を記録するために設定した。
(右) 同断面西端。南東からみる。奥の明黄褐色粘土が基盤層。黒色土層とその上位の砂層は谷地形の自然堆積。さらに上位は埋め立てによる造成層。




08B 区、中央ベルト土層断面の一部。（左）土師器碗 (E-266) 出土状況。（右）は 005SD の土層断面。




08B 区、トレンチ 01 南北ベルト土層断面。（左）谷地形造成層上面 (084SX) 検出時。（右）同造成層 (318SX) 完掘時。ともに南西からみる。



08B 区、トレンチ 01 南北ベルト土層断面全景。西から。谷地形造成層 (318SX) 完掘時の状況。黒色粘土層の上位に埋め立て造成の暗褐色粘土層が堆積する。





（左上）08B 区谷地形 084SX の完掘状況。西から。
（右上）同遺構の東半部。斜面に竪穴状遺構 113SI・114SI などが造られている。
（左）08B 区谷地形 318SX の完掘状況。南東から。084SX の段階に比べて南北に細長い形状である。また、東西ベルトより北側では極端に浅くなっており、同南側の深い地形を埋め立てるために土砂を切り出したためと考えられる。



08B 区、検 1 面完掘状況と背後の石座神社遺跡。東から。同遺構面は黄褐色粘土で造成された平坦面で、黄褐色粘土中からは近世以降の染付が出土しており、比較的近事のことと考えられる。石座神社遺跡と加原遺跡の間はは段丘崖の急斜面となっている。その縁では 8 世紀代の竪穴建物跡や掘立柱建物跡が検出されている。





（上）08B 区、調査区西半部の検 2 面完掘状況。東から。谷地形の低位にも遺構が展開している。（下）同調査区北半部の状況。南東から。



08B 区竪穴状遺構 113SI・114SI 検出状況。南から。113SI の埋土からは山茶碗の底部がみえている。これらの遺構は谷地形 084SX のやや低位にあり、同地形の埋め立て後に構築されたもの。



08B 区、トレンチ 05 土層断面。南東から。左端付近の落ち込みが溝 005SD でその下位に谷地形 318SX の北端である 148SX が薄く検出された。



08B 区、検 2 面北部の遺構検出状況。北西から。黒色土層に対し黄褐色埋土の溝（004SD など）や竪穴状遺構がみられる。



08B 区、検 2 面北東部の遺構検出状況。南から。中央に竪穴状遺構 037SI・038SI やその西側に 056SI がある。



08B 区、検 2 面東部の遺構検出状況。北から。右端の竪穴状遺構 039SI 等の脇では下面（検 3 面）の溝 153SD が見える。



同区、竪穴建物 303SI・347SI の完掘状況。北西から。主柱穴と想定されるピットと、床面下の幅広周溝状掘り方の範囲を完掘した状態である。当該遺構は加原遺跡で唯一古墳時代初頭に遡るものであるが、埋没した遺構を平安時代中期に再利用している。



08B 区、検 2 面竪穴状遺構 037SI・038SI の完掘状況。東から。浅い皿状の遺構で、内部に柱穴などの痕跡はみられない。



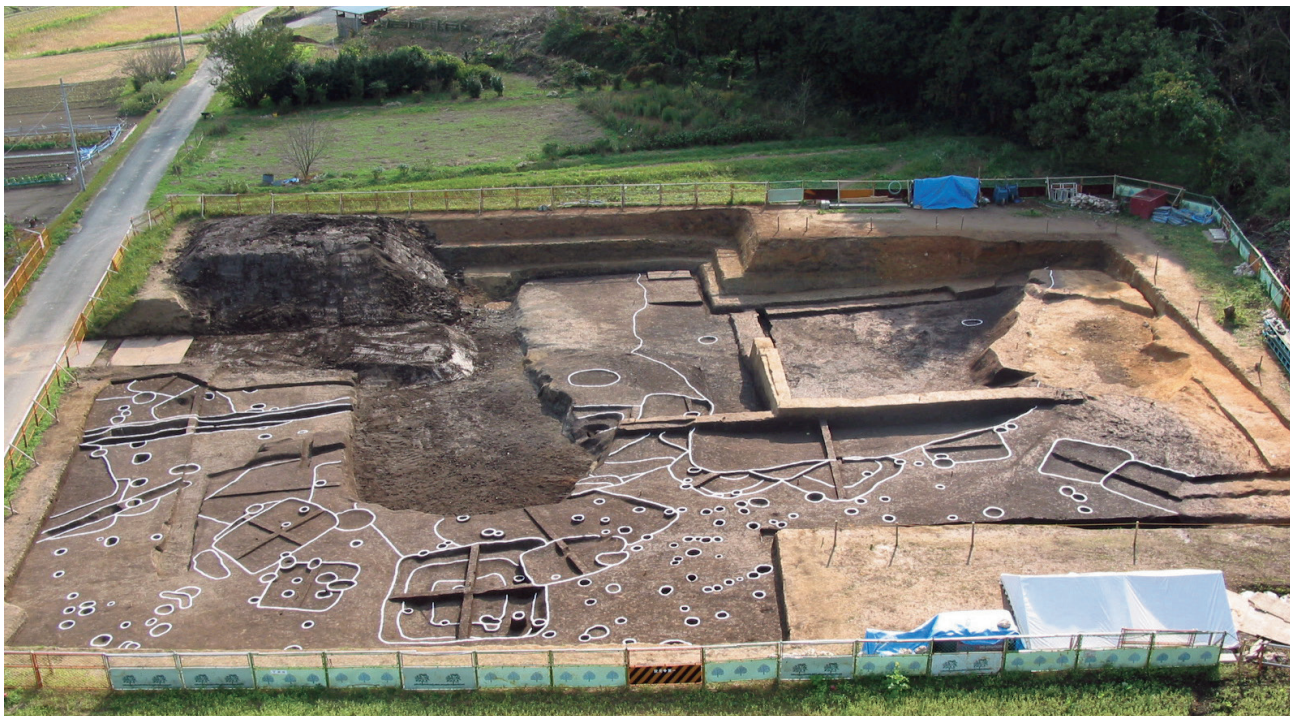
同区、検 2 面の竪穴建物 125SI 北壁の造り付け竈の検出状況。北西から。煙道相当部分には焼土や破砕された竈片が集中的に混じる。





(上)08B 区、検 2 面竪穴状遺構 059SI 土層断面。南西から。右半部で、同遺構下の 147SI の土層がみえる。

(左)08B 区、検 2 面竪穴状遺構 057SI 完掘状況。北東から。この遺構の下位で多数の竪穴状遺構が重複していた。



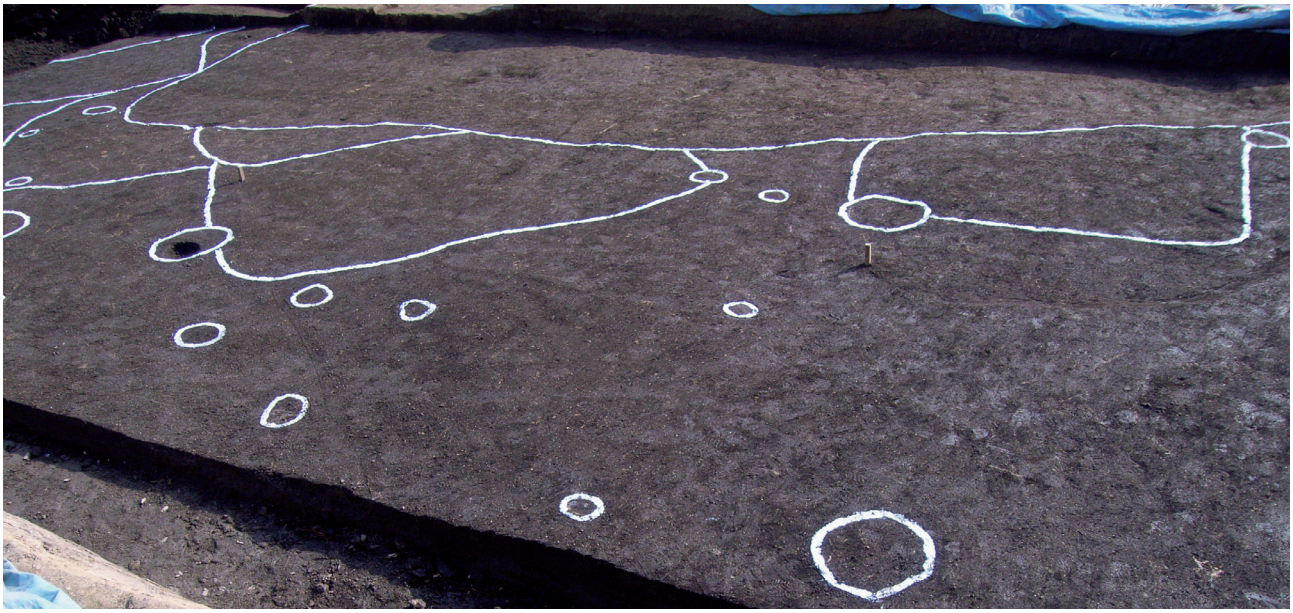
（下）08B 区、検 3 面遺構完掘状況。北から。調査地点ならびにその周辺は近年の耕地整理による盛土に埋没しているが、谷地形 318SX の南側は木立ちのある段丘裾が南東方向へ延びており、これが同地形の反映とみられる。





（上）08B 区、検 3 面遺構完掘状況。西から。手前の黄褐色の部分は削平された基盤層であるため、元は斜面地がったと思われる。したがって集落の中心は写真のやや北側になるとみられる。

（左）08B 区、検 3 面遺構完掘状況。南東から。左の谷地形に切り込まれる竪穴状遺構群は 10 世紀後半～ 11 世紀前半。そこから東側に目を移すと遺構は急速に希薄になる。





（上）08B 区、検 3 面北西部の遺構検出状況。北西から。谷地形 318SX の土層が竪穴状遺構群を覆っている。318SX の端部は直線的な部分もあり、削平行為によるものと考えられる。

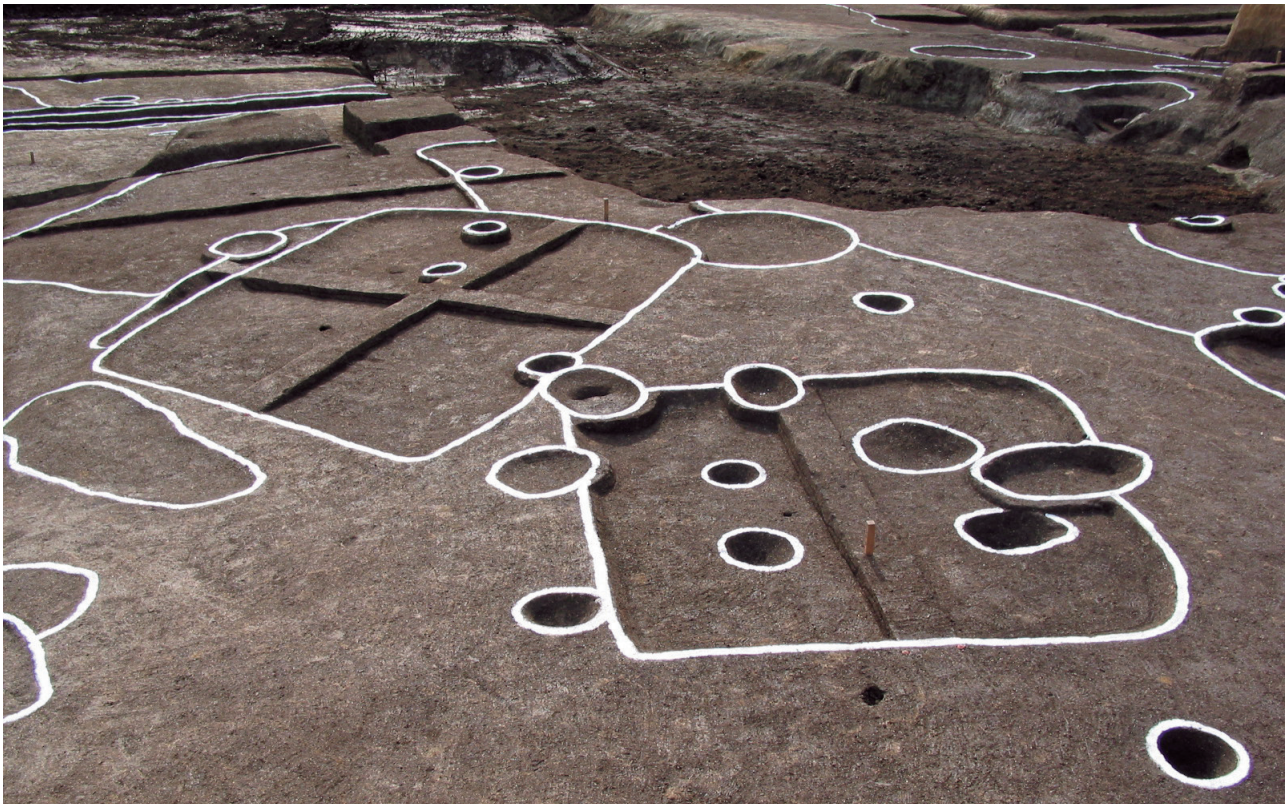
（左）同検出状況を南東側からみる。谷地形の堆積は地山由来の黄褐色粘土ブロックが多く混じっており、明るい色調となる。ここからさらに上位の斜面までを切り崩して出た土を流し込んだのであろう。



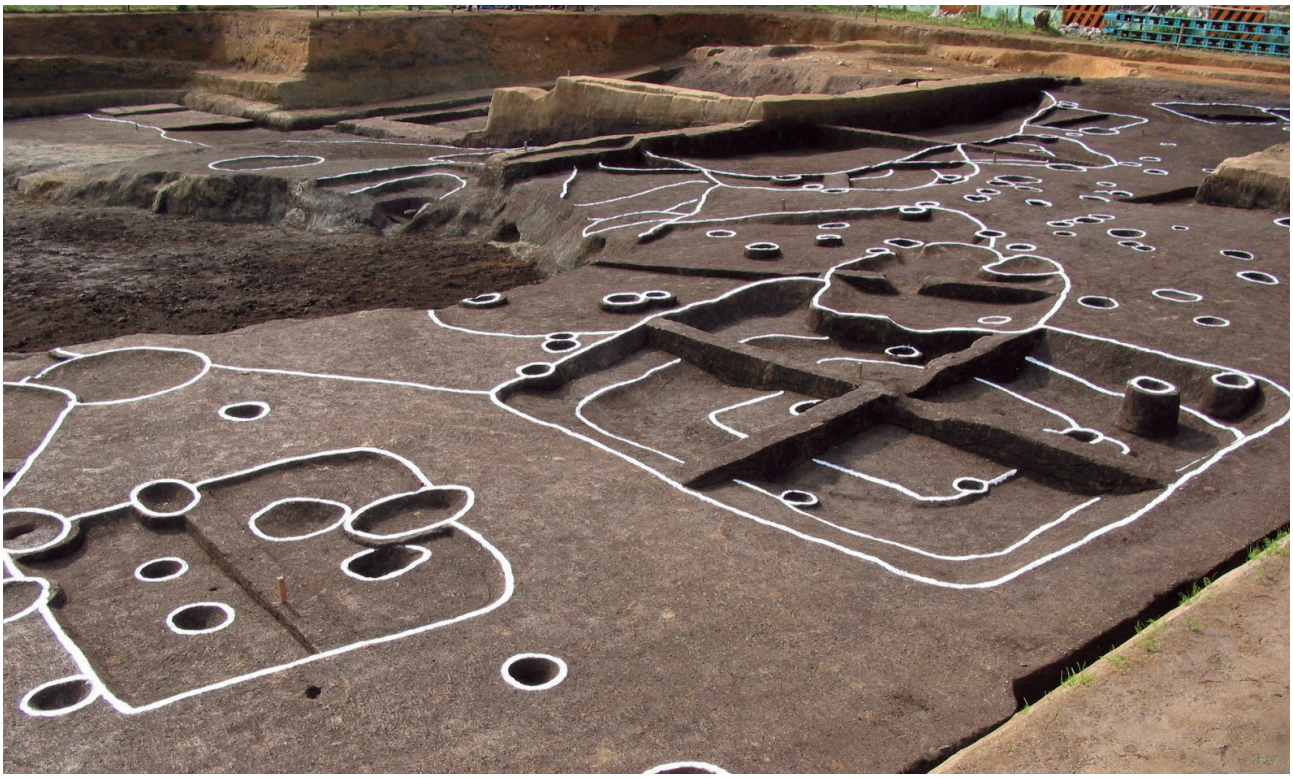
08B 区、検 3 面北部の遺構検出状況。北西から。検 2 面に比べて竪穴状遺構の数は少ないが、比較的明瞭である。中央の大きな遺構が竪穴建物 303SI。その奥に小型の 347SI が並列している。



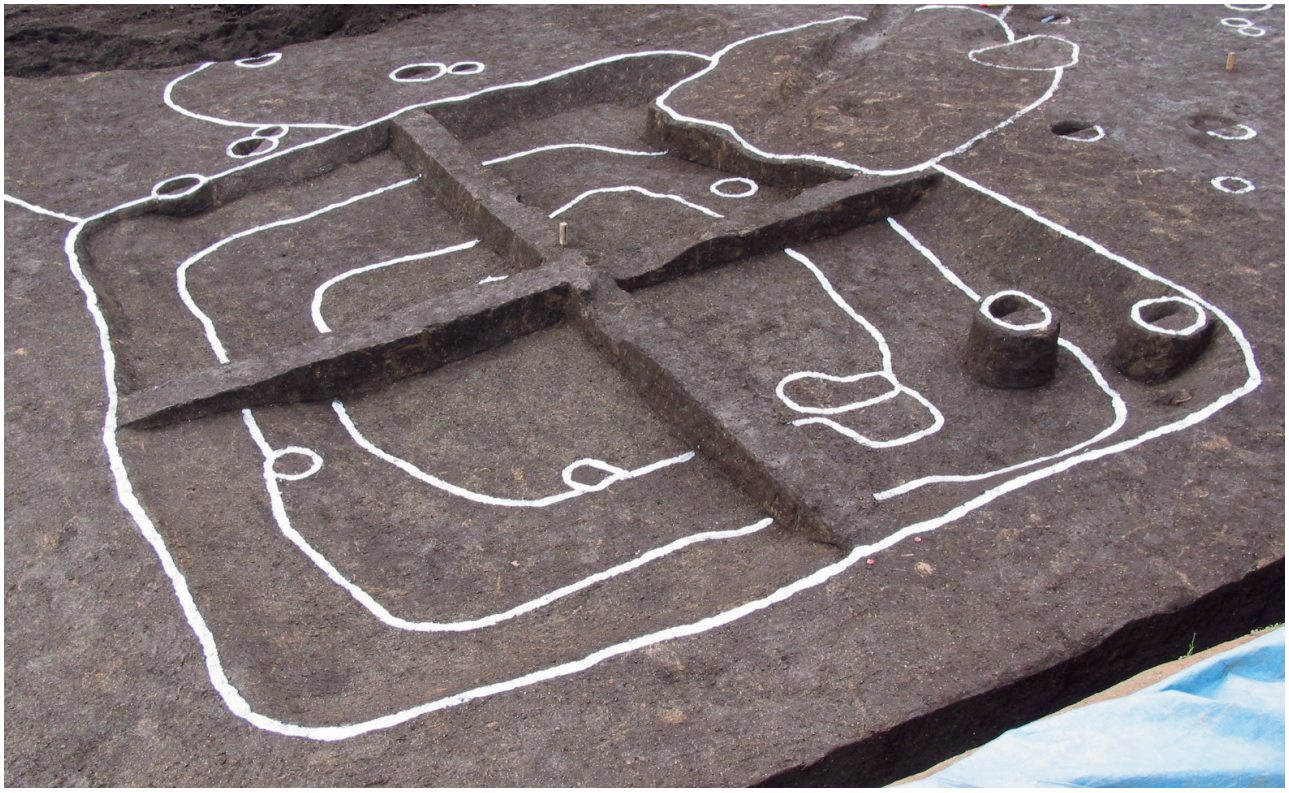
同区、竪穴建物 303SI・347SI の完掘状況。北西から。主柱穴と想定されるピットと、床面下の幅広周溝状掘り方の範囲を完掘した状態である。当該遺構は加原遺跡で唯一古墳時代初頭に遡るものであるが、埋没した遺構を平安時代中期に再利用している。



08B 区、検 3 面遺構完掘状況。北から。手前は竪穴状遺構 347SI、関連するピットが 4 基みられる。その奥は 276SI である。



08B 区、検 3 面遺構完掘状況。北東から。347SI の西隣に 303SI、そして谷地形 318SX がある。東西の土層ベルトがちょうど元の自然地形の端部に相当する。



08B 区、検 3 面 303SI の床面検出状況。北東から。埋土の状況を確認するための土層ベルトを十字に設定している。床面にみえる周溝状の遺構は竪穴建物開削時の掘り方である。それを埋めた状態で床面となる。本来この掘り方と壁面は平行関係にあるはずなのだが、当該遺構では向きが異なっていた。その後土層の検討を行ったところ、2 時期の竪穴建物の重複であったことが判明した。2 時期目（303SIb）は平安時代中期である。



08B 区、同遺構土層断面の状況。北東から。掘り方も掘削した状態である。当初の床面に対応する分層線の他に再掘削後に黒色度が強い埋土が堆積しているのがみえる。これが再利用に伴うもので、同層からは 10 世紀代の灰釉陶器が出土している。



08B 区、検 3 面 256 ～ 258SD の完掘状況。西から。同一地点で幾度も掘り返されたもので、不整形な状況や方位から耕作地にかかわるものと考えられる。



08B 区、検 3 面 256 ～ 258SD の土層断面。調査区東壁にて西から。当該遺構は出土遺物は中世までの遺物に限定されるが、地表面直下に位置し、比較的新しい時期のものであろう。





（左上）08B 区 376SU 出土状況。南から。下方に縄文晩期の浅鉢がみえる。
（上）同、大型壺の出土状況。土層ベルト除去後の状況。
（左下）同、土層断面の拡大。南から。土器片は多数みられるが大型壺と手前の小型壺の 2 個体分でしかない。土器は上層（やや明るい色黒褐色土層）に含まれる。
（下）同、376SU 下方の縄文土器出土状況。南から。出土位置は近いが、この土器を包含する土層は下層（黒色土層）である。






2
3
4
5
6


8


9


13


23


35


36


36
37
38
39
40
41
42
43


40


53


59


61


61 内面


58


62


64

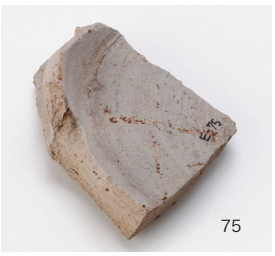

65


68


69


E-70
70


73


75


80


81


85


87


94


100


103


104


115




116


119


122


121


133


138


147


148


150


151


153


154


164


182


194
195
196
197


180


181


185


187


207


208


225


231
234
232
233
237
235
238
236


242


212
213
214


245


247


258


266


250
251
252
253


258 底部


266 底部


268
271
276
282
278
281


287 墨書


291


297


290


306


314
308
310
315
317


335
338
345
346
341
342
337
340
344


320

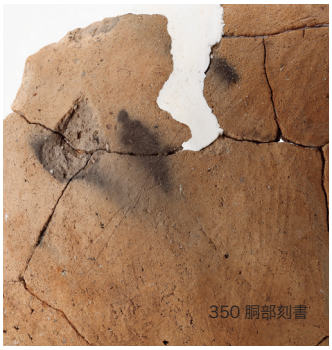

324


325
326


327


349


350


350 胴部刻書


371


351


359


365


388


389


391


381
378
379
380
384
382
385
383


394


395


399
400
401


403


404


408


409


410


411


412


413


417


419


422
423
426
424
429
427
425
428
430
431


437


437 底部


432
433
435
436
434


438




M-1




M-4 ～ 11


M-12 ～ 27


S1


S2


S3 S4 S5 S6 S7


S8 S9 S10

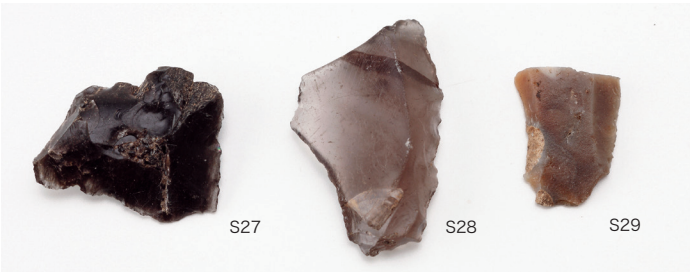

S11

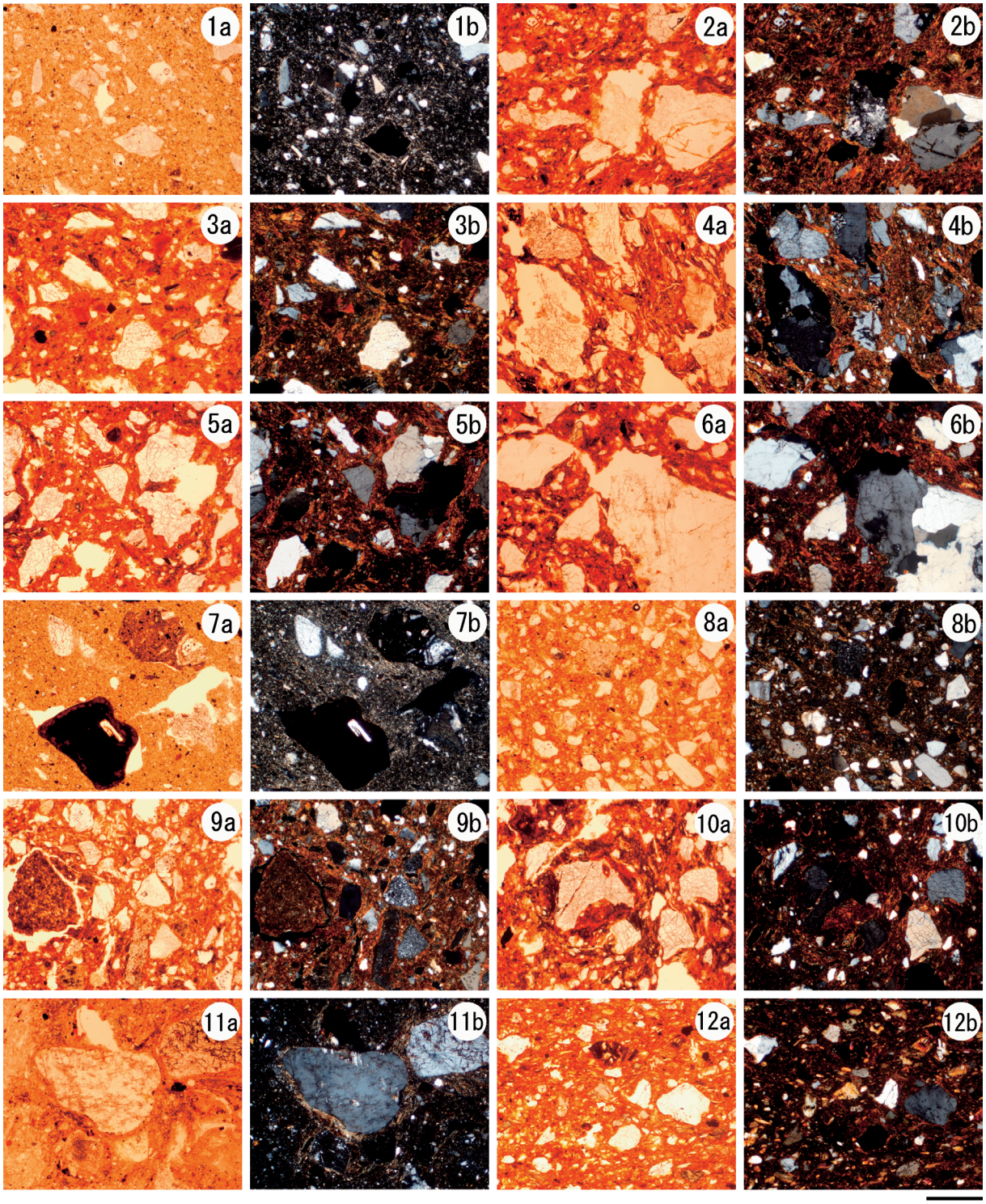

S18 S19


S12 S13 S14 S15 S16 S17


S22 S23 S24 S25 S26

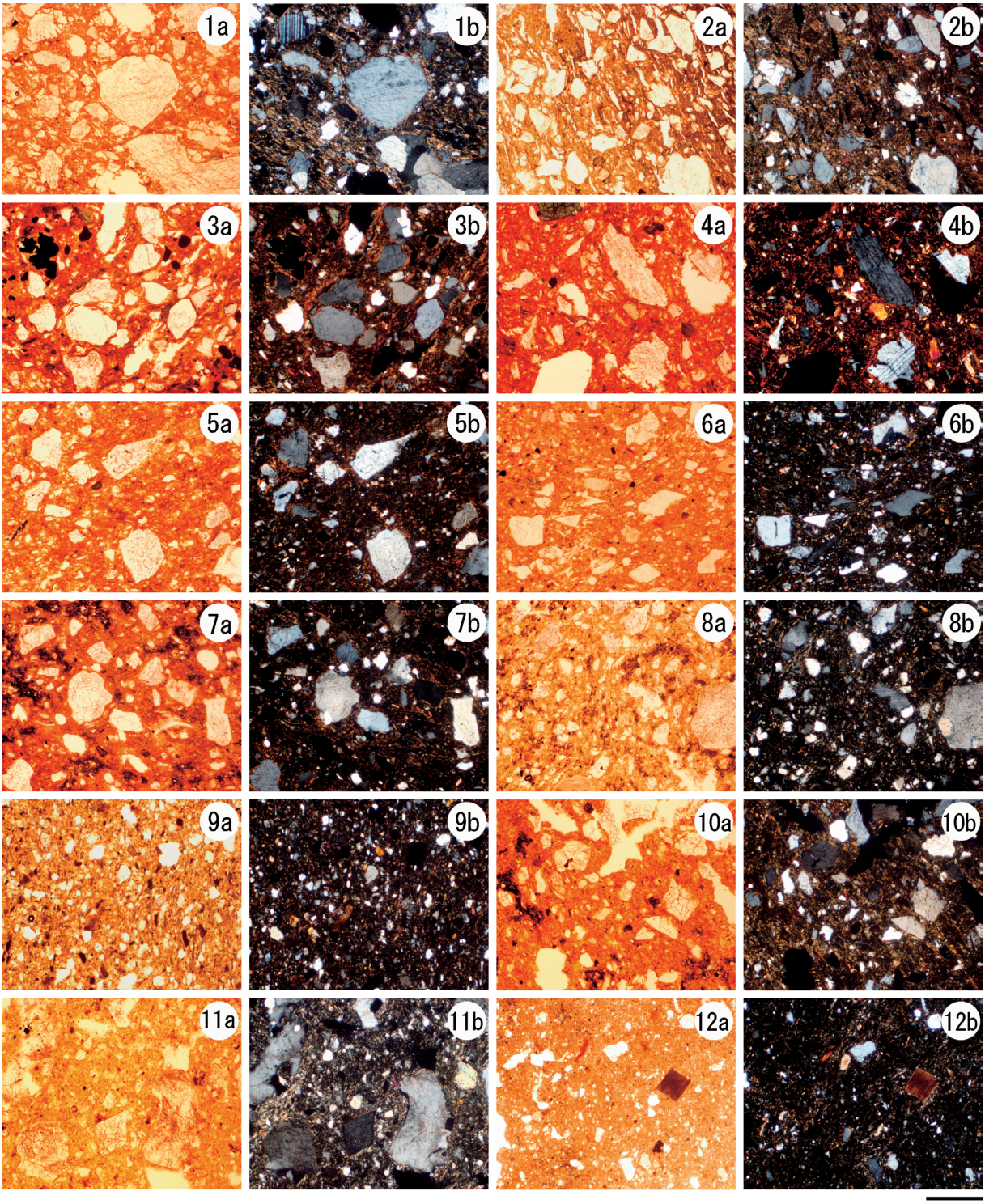

S20 S21


S27 S28 S29



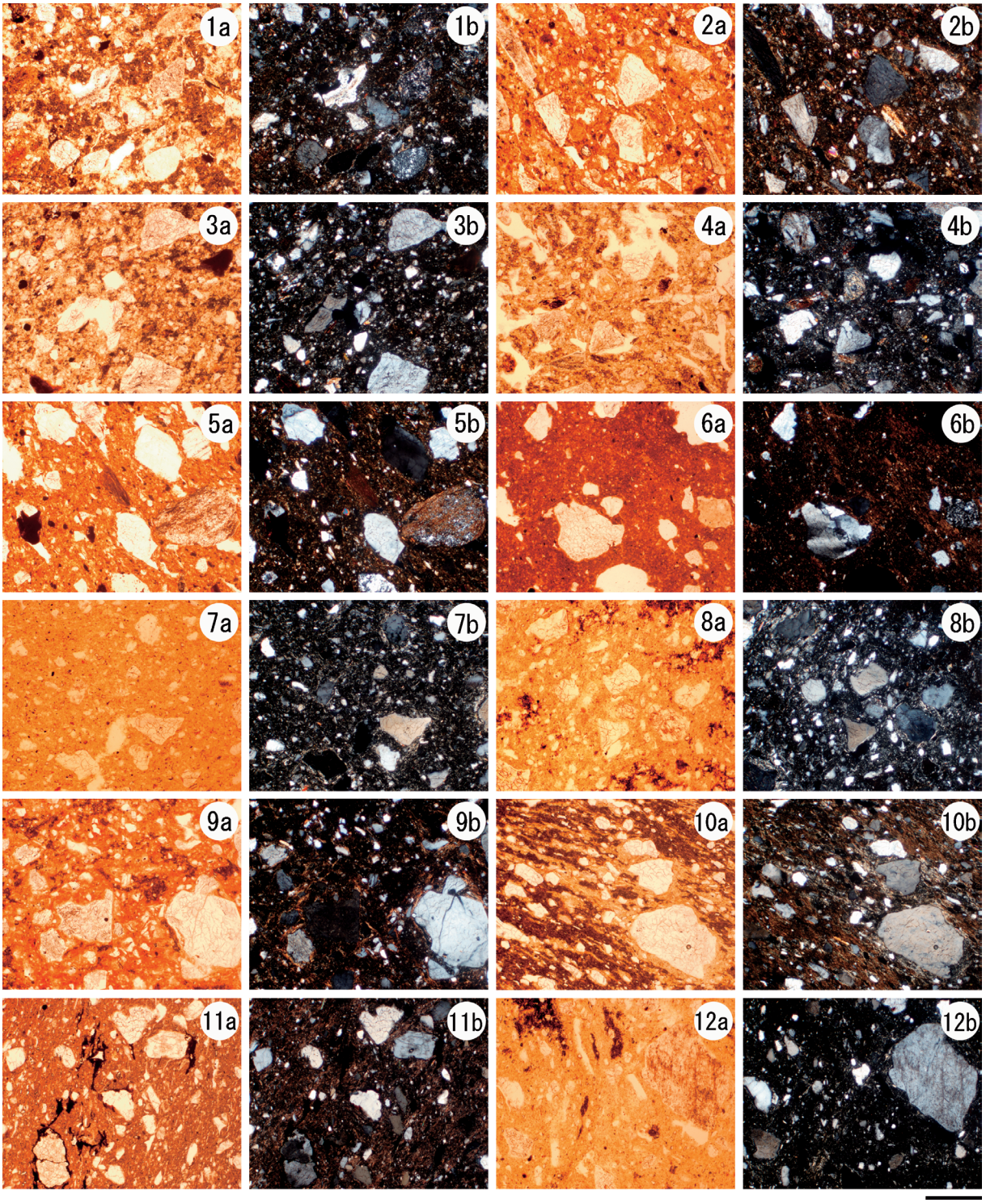
図版1　土器胎土の偏光顕微鏡写真（スケール；500 μ m）

1a. 試料No.1（解放ニコル）　1b. 試料No.1（直交ニコル）　2a. 試料No.2（解放ニコル）　2b. 試料No.2（直交ニコル）
3a. 試料No.3（解放ニコル）　3b. 試料No.3（直交ニコル）　4a. 試料No.4（解放ニコル）　4b. 試料No.4（直交ニコル）
5a. 試料No.5（解放ニコル）　5b. 試料No.5（直交ニコル）　6a. 試料No.6（解放ニコル）　6b. 試料No.6（直交ニコル）
7a. 試料No.7（解放ニコル）　7b. 試料No.7（直交ニコル）　8a. 試料No.8（解放ニコル）　8b. 試料No.8（直交ニコル）
9a. 試料No.9（解放ニコル）　9b. 試料No.9（直交ニコル）　10a. 試料No.10（解放ニコル）　10b. 試料No.10（直交ニコル）
11a. 試料No.11（解放ニコル）　11b. 試料No.11（直交ニコル）　12a. 試料No.12（解放ニコル）　12b. 試料No.12（直交ニコル）



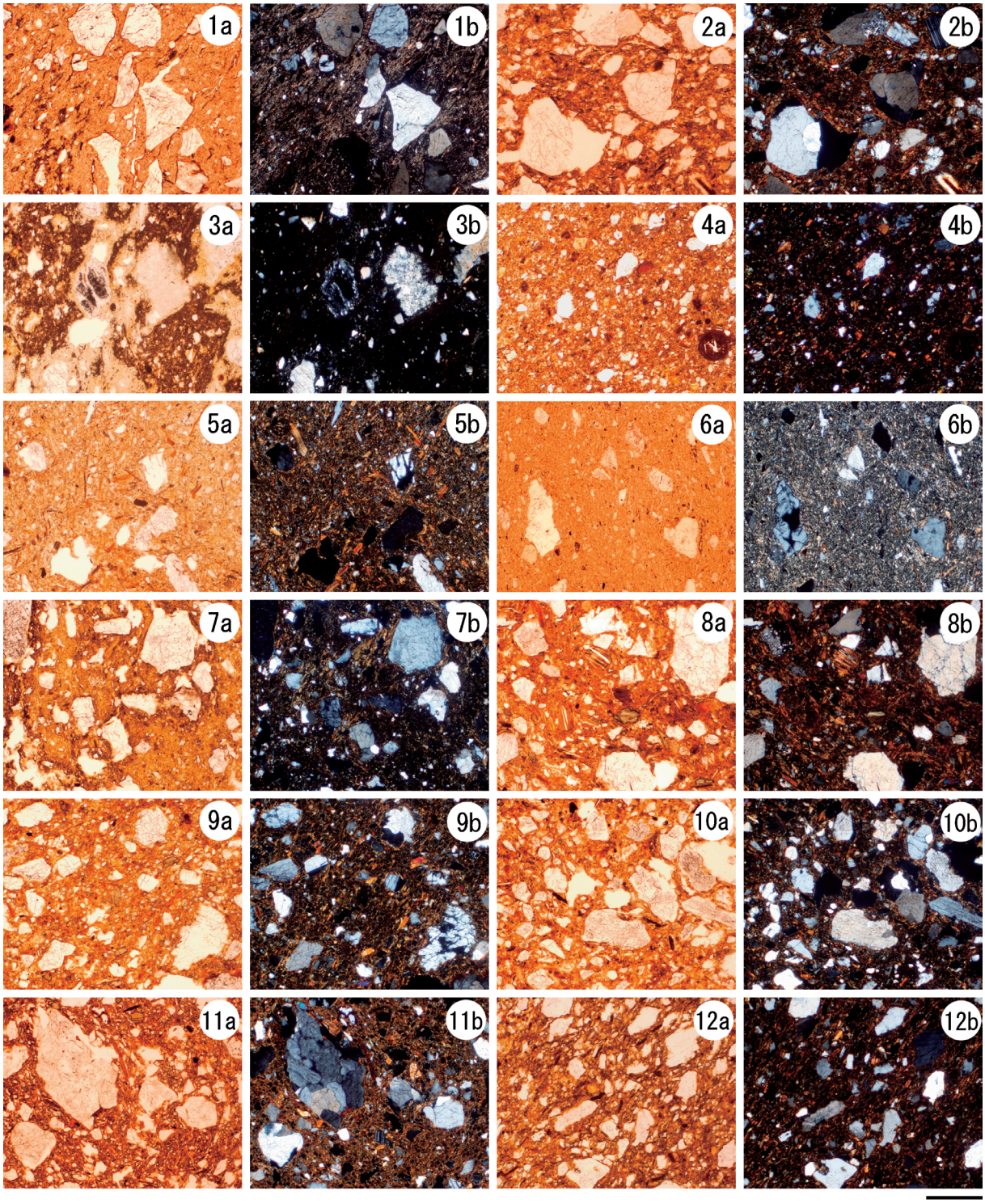
図版2　土器胎土の偏光顕微鏡写真（スケール；500 μ m）

1a. 試料No.13（解放ニコル）　1b. 試料No.13（直交ニコル）　2a. 試料No.14（解放ニコル）　2b. 試料No.14（直交ニコル）
3a. 試料No.15（解放ニコル）　3b. 試料No.15（直交ニコル）　4a. 試料No.16（解放ニコル）　4b. 試料No.16（直交ニコル）
5a. 試料No.17（解放ニコル）　5b. 試料No.17（直交ニコル）　6a. 試料No.18（解放ニコル）　6b. 試料No.18（直交ニコル）
7a. 試料No.19（解放ニコル）　7b. 試料No.19（直交ニコル）　8a. 試料No.20（解放ニコル）　8b. 試料No.20（直交ニコル）
9a. 試料No.21（解放ニコル）　9b. 試料No.21（直交ニコル）　10a. 試料No.22（解放ニコル）　10b. 試料No.22（直交ニコル）
11a. 試料No.23（解放ニコル）　11b. 試料No.23（直交ニコル）　12a. 試料No.24（解放ニコル）　12b. 試料No.24（直交ニコル）



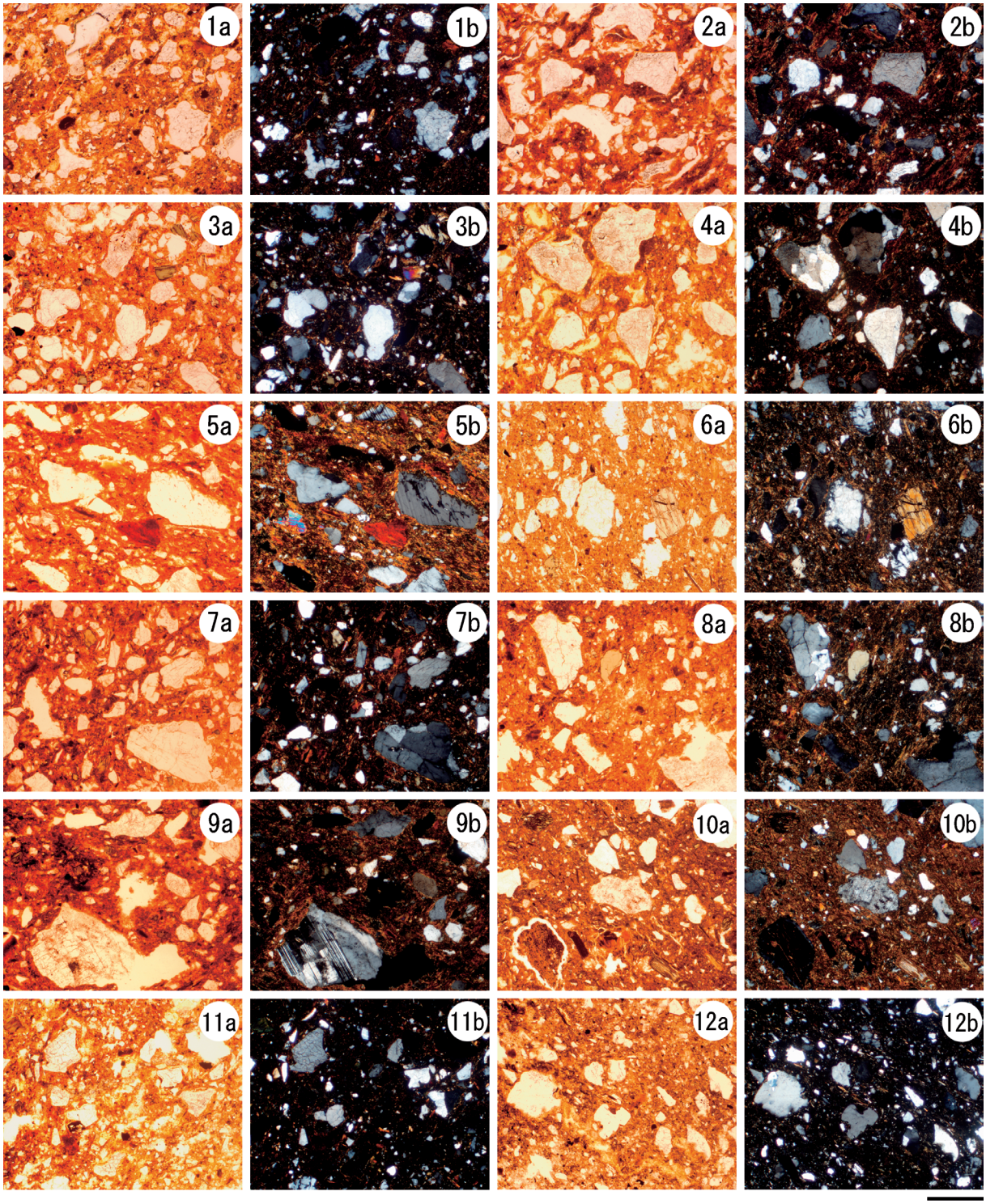
図版3　土器胎土の偏光顕微鏡写真（スケール；500 μ m）

1a. 試料No.25（解放ニコル）　1b. 試料No.25（直交ニコル）　2a. 試料No.26（解放ニコル）　2b. 試料No.26（直交ニコル）
3a. 試料No.27（解放ニコル）　3b. 試料No.27（直交ニコル）　4a. 試料No.28（解放ニコル）　4b. 試料No.28（直交ニコル）
5a. 試料No.29（解放ニコル）　5b. 試料No.29（直交ニコル）　6a. 試料No.30（解放ニコル）　6b. 試料No.30（直交ニコル）
7a. 試料No.31（解放ニコル）　7b. 試料No.31（直交ニコル）　8a. 試料No.32（解放ニコル）　8b. 試料No.32（直交ニコル）
9a. 試料No.33（解放ニコル）　9b. 試料No.33（直交ニコル）　10a. 試料No.34（解放ニコル）　10b. 試料No.34（直交ニコル）
11a. 試料No.35（解放ニコル）　11b. 試料No.35（直交ニコル）　12a. 試料No.36（解放ニコル）　12b. 試料No.36（直交ニコル）



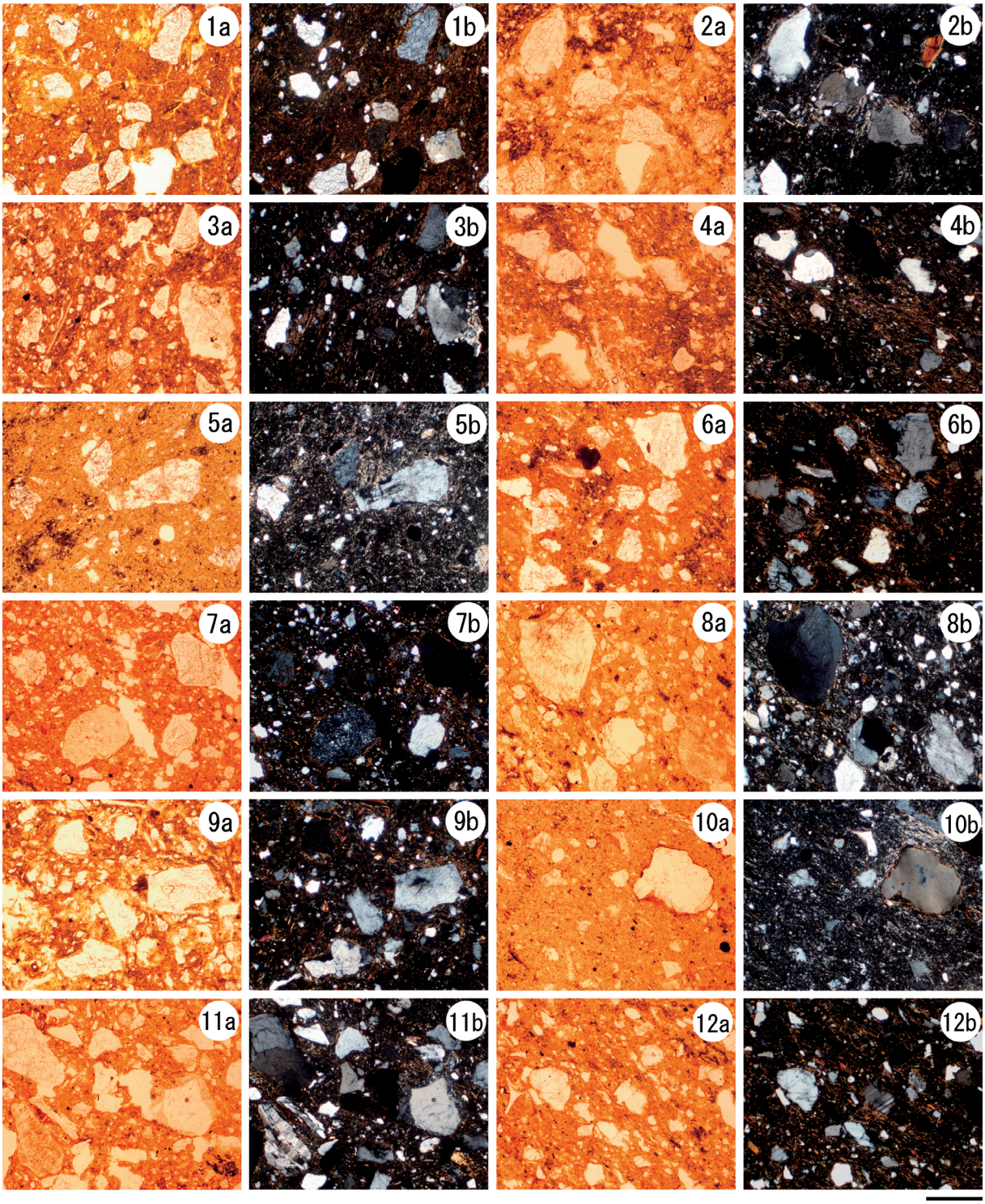
図版4　土器胎土の偏光顕微鏡写真（スケール；500μm）

1a. 試料No.37（解放ニコル）　1b. 試料No.37（直交ニコル）　2a. 試料No.38（解放ニコル）　2b. 試料No.38（直交ニコル）
3a. 試料No.39（解放ニコル）　3b. 試料No.39（直交ニコル）　4a. 試料No.40（解放ニコル）　4b. 試料No.40（直交ニコル）
5a. 試料No.41（解放ニコル）　5b. 試料No.41（直交ニコル）　6a. 試料No.42（解放ニコル）　6b. 試料No.42（直交ニコル）
7a. 試料No.43（解放ニコル）　7b. 試料No.43（直交ニコル）　8a. 試料No.44（解放ニコル）　8b. 試料No.44（直交ニコル）
9a. 試料No.45（解放ニコル）　9b. 試料No.45（直交ニコル）　10a. 試料No.46（解放ニコル）　10b. 試料No.46（直交ニコル）
11a. 試料No.47（解放ニコル）　11b. 試料No.47（直交ニコル）　12a. 試料No.48（解放ニコル）　12b. 試料No.48（直交ニコル）



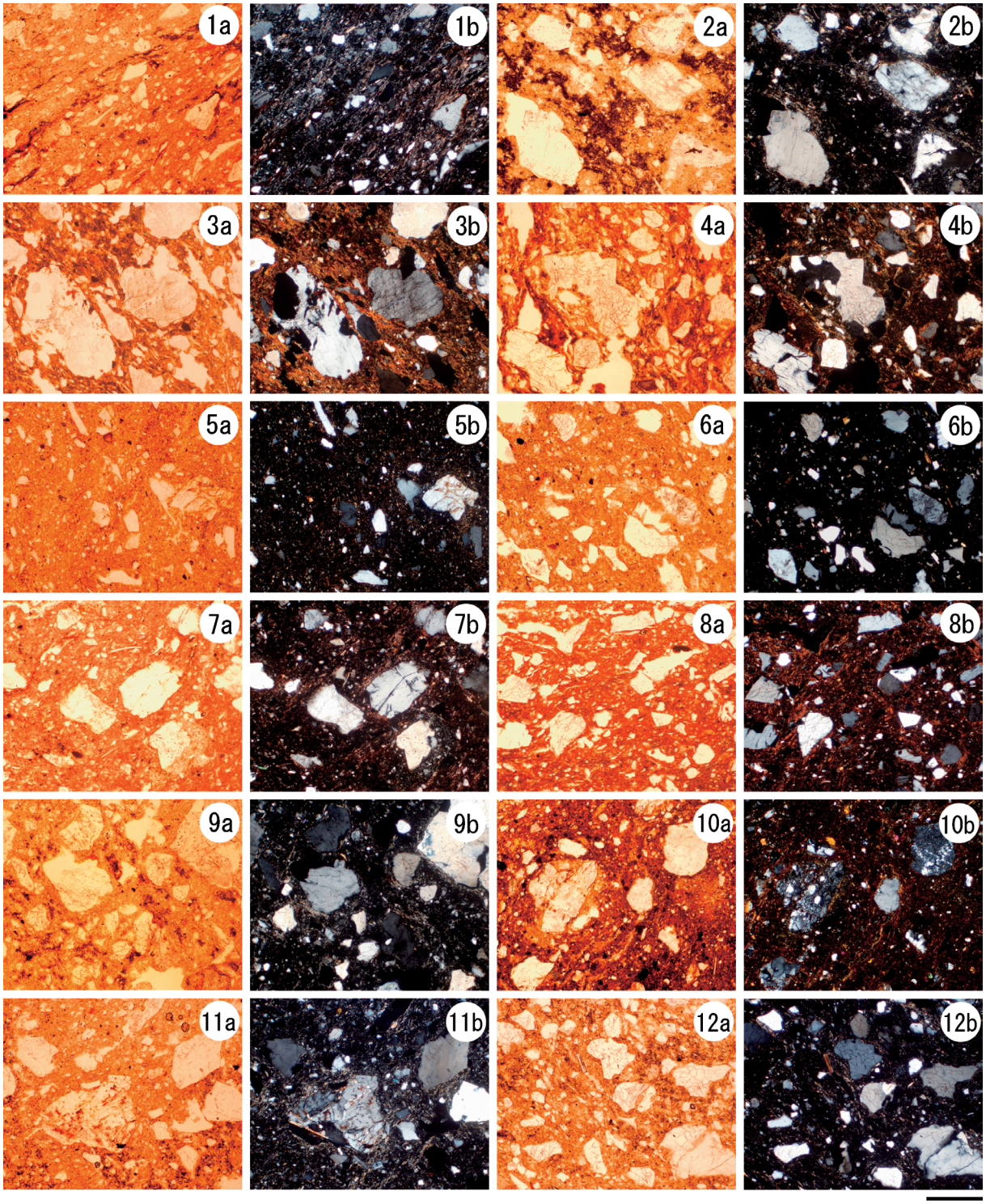
図版5　土器胎土の偏光顕微鏡写真（スケール；500μm）

1a. 試料No.49（解放ニコル）　1b. 試料No.49（直交ニコル）　2a. 試料No.50（解放ニコル）　2b. 試料No.50（直交ニコル）
3a. 試料No.51（解放ニコル）　3b. 試料No.51（直交ニコル）　4a. 試料No.52（解放ニコル）　4b. 試料No.52（直交ニコル）
5a. 試料No.53（解放ニコル）　5b. 試料No.53（直交ニコル）　6a. 試料No.54（解放ニコル）　6b. 試料No.54（直交ニコル）
7a. 試料No.55（解放ニコル）　7b. 試料No.55（直交ニコル）　8a. 試料No.56（解放ニコル）　8b. 試料No.56（直交ニコル）
9a. 試料No.57（解放ニコル）　9b. 試料No.57（直交ニコル）　10a. 試料No.58（解放ニコル）　10b. 試料No.58（直交ニコル）
11a. 試料No.59（解放ニコル）　11b. 試料No.59（直交ニコル）　12a. 試料No.60（解放ニコル）　12b. 試料No.60（直交ニコル）



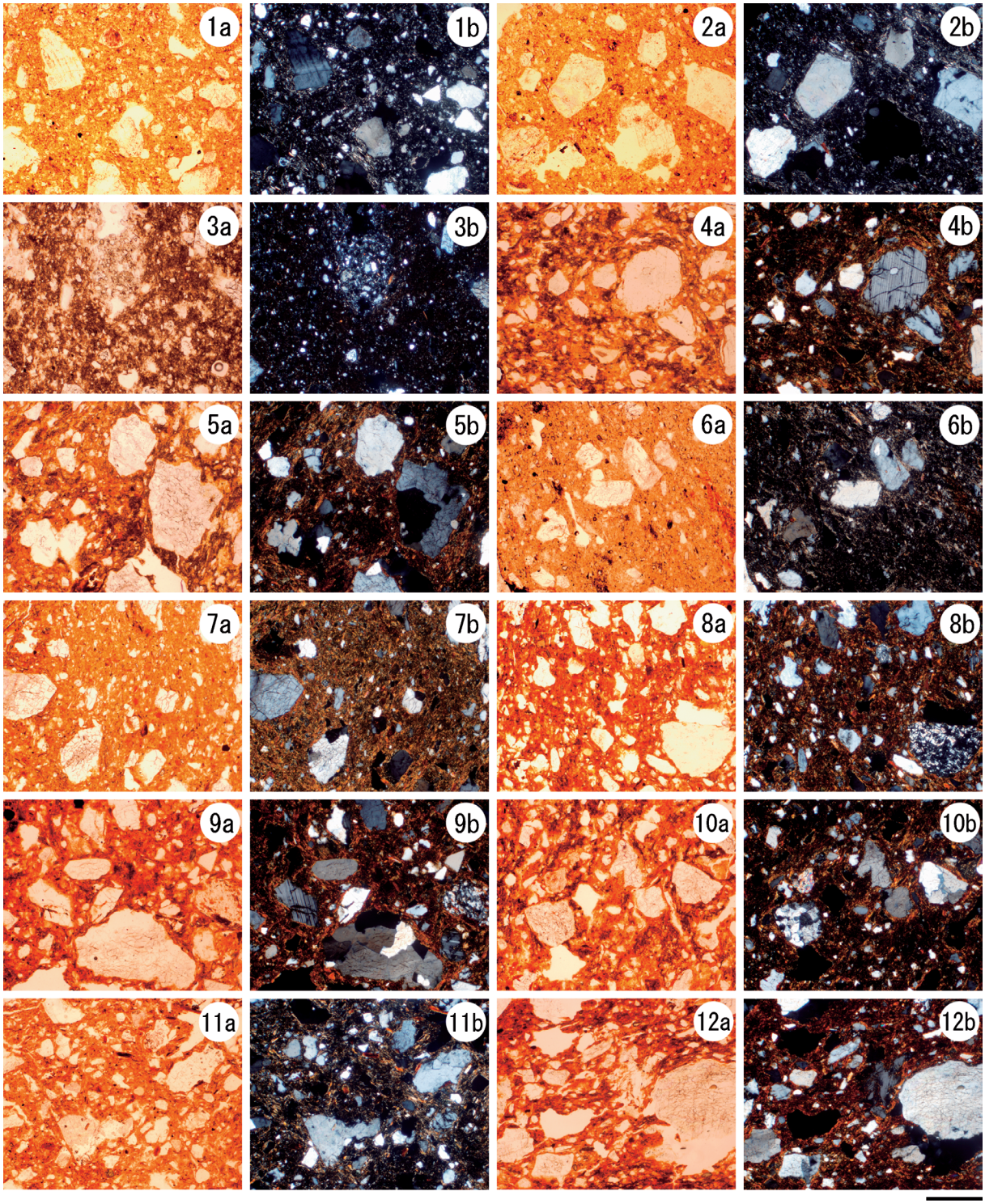
図版6　土器胎土の偏光顕微鏡写真（スケール；500μm）

1a. 試料No.61（解放ニコル）　1b. 試料No.61（直交ニコル）　2a. 試料No.62（解放ニコル）　2b. 試料No.62（直交ニコル）
3a. 試料No.63（解放ニコル）　3b. 試料No.63（直交ニコル）　4a. 試料No.64（解放ニコル）　4b. 試料No.64（直交ニコル）
5a. 試料No.65（解放ニコル）　5b. 試料No.65（直交ニコル）　6a. 試料No.66（解放ニコル）　6b. 試料No.66（直交ニコル）
7a. 試料No.67（解放ニコル）　7b. 試料No.67（直交ニコル）　8a. 試料No.68（解放ニコル）　8b. 試料No.68（直交ニコル）
9a. 試料No.69（解放ニコル）　9b. 試料No.69（直交ニコル）　10a. 試料No.70（解放ニコル）　10b. 試料No.70（直交ニコル）
11a. 試料No.71（解放ニコル）　11b. 試料No.71（直交ニコル）　12a. 試料No.72（解放ニコル）　12b. 試料No.72（直交ニコル）



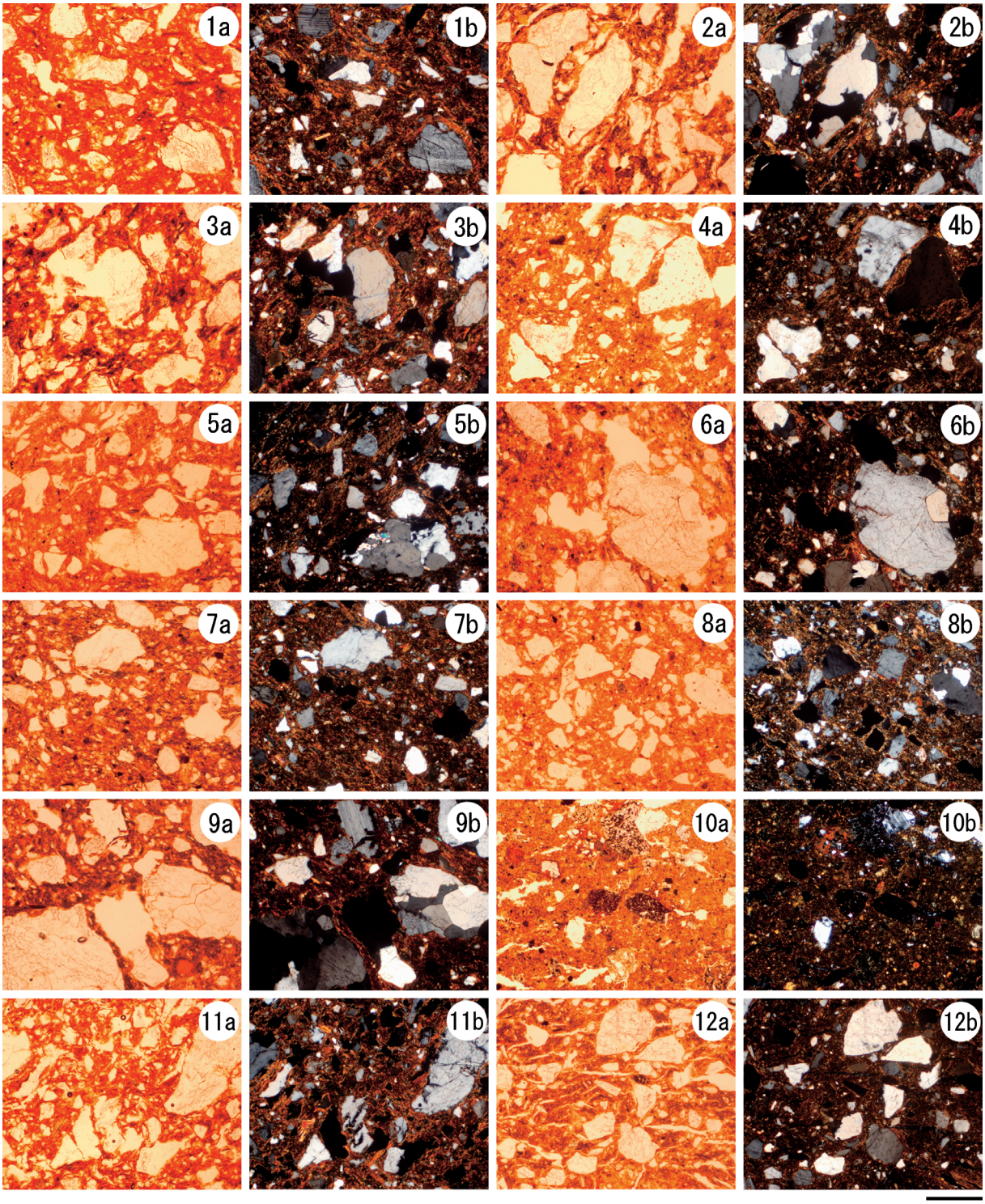
図版7　土器胎土の偏光顕微鏡写真（スケール；500 μ m）

1a. 試料No.73（解放ニコル）　1b. 試料No.73（直交ニコル）　2a. 試料No.74（解放ニコル）　2b. 試料No.74（直交ニコル）
3a. 試料No.75（解放ニコル）　3b. 試料No.75（直交ニコル）　4a. 試料No.76（解放ニコル）　4b. 試料No.76（直交ニコル）
5a. 試料No.77（解放ニコル）　5b. 試料No.77（直交ニコル）　6a. 試料No.78（解放ニコル）　6b. 試料No.78（直交ニコル）
7a. 試料No.79（解放ニコル）　7b. 試料No.79（直交ニコル）　8a. 試料No.80（解放ニコル）　8b. 試料No.80（直交ニコル）
9a. 試料No.81（解放ニコル）　9b. 試料No.81（直交ニコル）　10a. 試料No.82（解放ニコル）　10b. 試料No.82（直交ニコル）
11a. 試料No.83（解放ニコル）　11b. 試料No.83（直交ニコル）　12a. 試料No.84（解放ニコル）　12b. 試料No.84（直交ニコル）



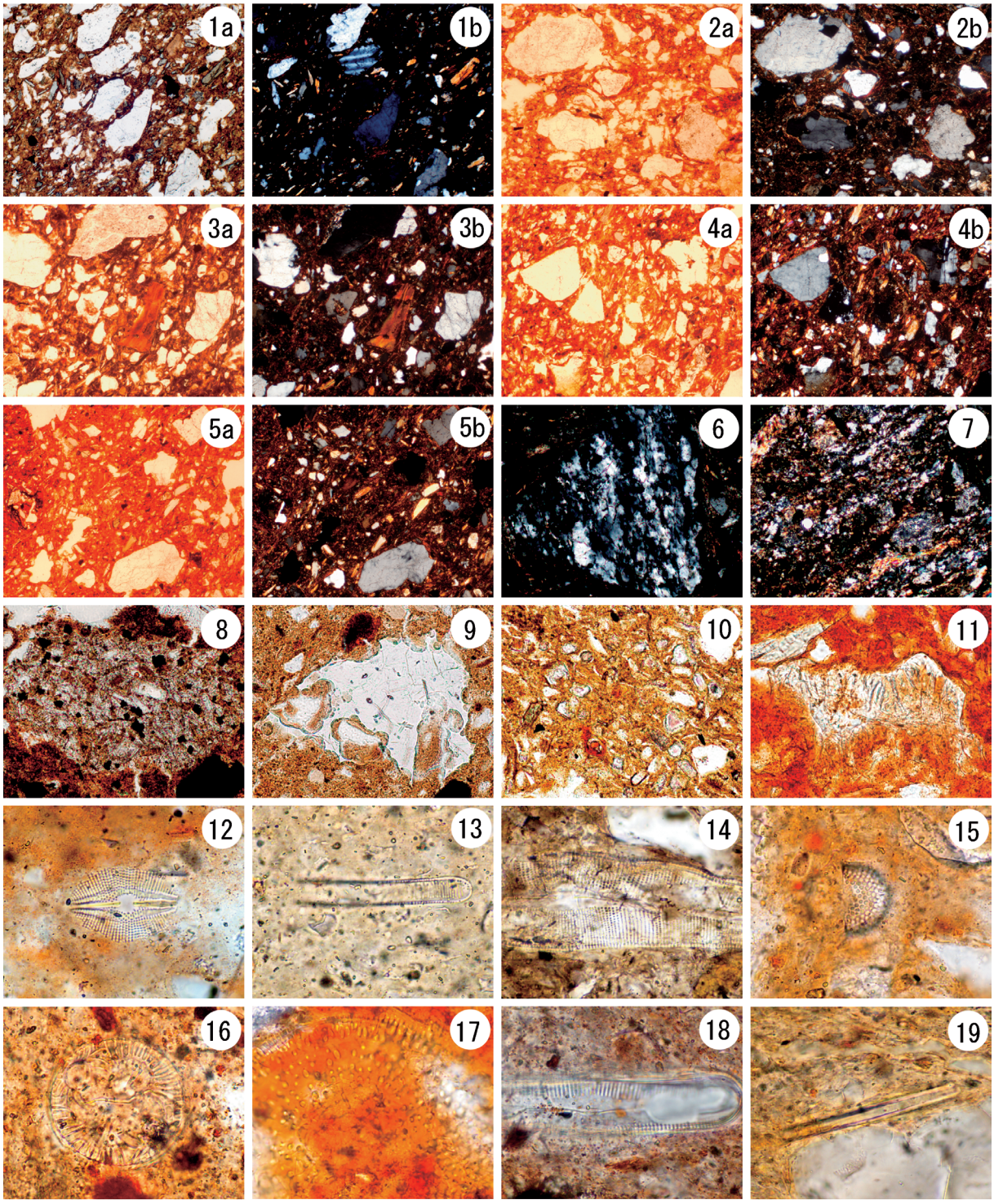
図版8　土器胎土の偏光顕微鏡写真（スケール；500 μ m）

1a. 試料No.85（解放ニコル）　1b. 試料No.85（直交ニコル）　2a. 試料No.86（解放ニコル）　2b. 試料No.86（直交ニコル）
3a. 試料No.87（解放ニコル）　3b. 試料No.87（直交ニコル）　4a. 試料No.88（解放ニコル）　4b. 試料No.88（直交ニコル）
5a. 試料No.89（解放ニコル）　5b. 試料No.89（直交ニコル）　6a. 試料No.90（解放ニコル）　6b. 試料No.90（直交ニコル）
7a. 試料No.91（解放ニコル）　7b. 試料No.91（直交ニコル）　8a. 試料No.92（解放ニコル）　8b. 試料No.92（直交ニコル）
9a. 試料No.93（解放ニコル）　9b. 試料No.93（直交ニコル）　10a. 試料No.94（解放ニコル）　10b. 試料No.94（直交ニコル）
11a. 試料No.95（解放ニコル）　11b. 試料No.95（直交ニコル）　12a. 試料No.96（解放ニコル）　12b. 試料No.96（直交ニコル）



図版9　土器胎土の偏光顕微鏡写真（スケール；500μm）

1a. 試料No.97（解放ニコル）　1b. 試料No.97（直交ニコル）　2a. 試料No.98（解放ニコル）　2b. 試料No.98（直交ニコル）
3a. 試料No.99（解放ニコル）　3b. 試料No.99（直交ニコル）　4a. 試料No.100（解放ニコル）　4b. 試料No.100（直交ニコル）
5a. 試料No.101（解放ニコル）　5b. 試料No.101（直交ニコル）　6a. 試料No.102（解放ニコル）　6b. 試料No.102（直交ニコル）
7a. 試料No.103（解放ニコル）　7b. 試料No.103（直交ニコル）　8a. 試料No.104（解放ニコル）　8b. 試料No.104（直交ニコル）
9a. 試料No.105（解放ニコル）　9b. 試料No.105（直交ニコル）　10a. 試料No.106（解放ニコル）　10b. 試料No.106（直交ニコル）
11a. 試料No.107（解放ニコル）　11b. 試料No.107（直交ニコル）　12a. 試料No.108（解放ニコル）　12b. 試料No.108（直交ニコル）



図版10　土器胎土の偏光顕微鏡写真（スケール、1a～5b；500μm、6～10;100μm、11;50μm、12～19;20μm）
1a. 試料№109（解放ニコル）　1b. 試料№109（直交ニコル）　2a. 試料№110（解放ニコル）　2b. 試料№110（直交ニコル）
3a. 試料№111（解放ニコル）　3b. 試料№111（直交ニコル）　4a. 試料№112（解放ニコル）　4b. 試料№112（直交ニコル）
5a. 試料№113（解放ニコル）　5b. 試料№113（直交ニコル）　6. 片理複合石英類（試料№25）　7. 片理複合石英類（試料№27）
8. 凝灰岩質（試料№30）　9. ガラス質（試料№18）　10. 植物珪酸体化石密集（試料№47）　11. イネ類珪酸体化石（試料№59）
12. 淡水種珪藻化石*Diploneis elliptica*（試料№33）　13. 淡水種珪藻化石*Eunotia biareofera*（試料№36）
14. 淡水種珪藻化石*Cymbella aspera*（試料№60）　15. 海水種珪藻化石*Stephanoxis*属（試料№18）
16. 海水種珪藻化石*Auliscus caelaetus*（試料№11）　17. 海水種珪藻化石*Champlodiscus echeneis*（試料№12）
18. 淡水種珪藻化石*Pinnularia acrosphaeria*（試料№73）　19. 骨針化石（試料№34）

ふりがな	かはらいせき
書　　名	加原遺跡
副 書 名	
巻　　次	
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第194集
編著者名	永井邦仁、鬼頭剛、堀木真美子、藤根久、米田恭子、(株)パレオ・ラボ年代測定分析チーム
編集機関	公益財団法人　愛知県教育・スポーツ振興財団　愛知県埋蔵文化財センター
所在地	〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方802-24　TEL0567(67)4161
発行年月日	西暦 2015年 3月 31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
かはらいせき 加原遺跡	あいちけん しんしろし 愛知県新城市 おおみやあざかはら 大宮字加原	23207	760282	34度 55分 37秒	137度 31分 24秒	2008.6.20～ 2008.11.30	2,000㎡	第二東海 自動車道 建設工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
加原遺跡	集落	縄文時代 ～ 鎌倉時代	掘立柱建物跡、 竪穴建物、 土坑等、 谷地形	縄文土器、石器、 土師器(高杯・甕・壺)、 須恵器(蓋・杯・甕)、 灰釉陶器(椀・皿)、 緑釉陶器、白磁、山茶碗、 土師器(椀・皿・甕)、 鉄滓、銅滓、	平安時代から 鎌倉時代を中心 とする集落遺跡

文書番号	発掘届出(20埋セ第20号・2008.5.26)　通知(20教生第631号・2008.6.6) 終了届・保管証・発見届(20埋セ第90号・2008.12.16) 鑑定通知(20教生第3250号・2009.3.30)

要約

当該遺跡は、豊川支流の連吾川右岸丘陵端に立地する。弥生時代末期から古墳時代初頭と、平安時代から鎌倉時代の遺構・遺物が出土する集落遺跡である。特に後者の時代が遺跡の主体であり、灰釉陶器・山茶碗だけでなく緑釉陶器や白磁が出土しており、若干ながら金属滓もみられることから、交易で器物を入手しつつ生産工房を内包していた可能性が想定される。時期は10世紀初頭の設楽郡分置から設楽荘の成立と重なり、その関連が注目される。また多数出土した当該期の土師器甕について、東海地域に分布する同一器種資料の胎土分析を実施し、その高い近似性を検出することができた。いくつかのタイプごとに特定の産地から供給されていた様相がうかがえる。

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書　第 194 集

加原遺跡

2015 年 3 月 31 日

編集・発行　公益財団法人　愛知県教育・
スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター

印刷　西濃印刷株式会社